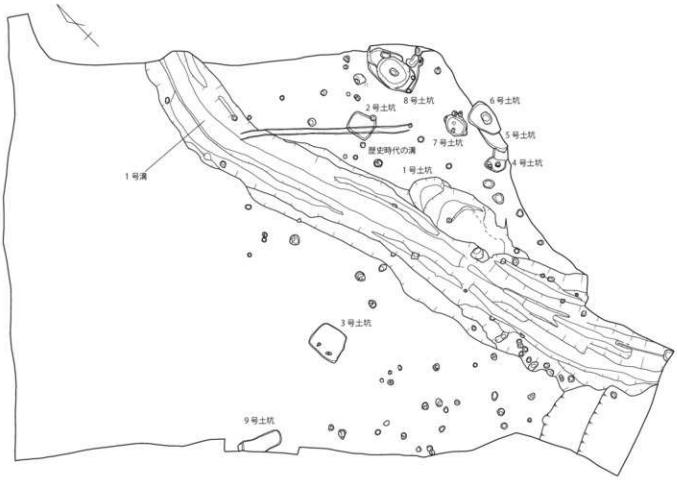
第９節　第８次調査

（１）調査の概要

台地の南西端にあたり、旧地形が残されていた約530㎡を調査した。調査では土器を大量に含む溝一条と土坑９基を検出した。



第 341 図　８次調査区遺構配置図

0　10m

（2）遺構と遺物

溝

1号溝（第343図）

北方向から南東方向に向けて弧状をなして伸びる溝である。最大上端幅5.0m、深さは1.4mである。断面形状は北側で底面幅約1.0mの箱堀となり、南側に行くほど底面が狭まりV字状となる。底面の高さは北側が高くて、南側に向けて徐々に低くなっている。土層断面図からわかるように、少なくとも2回の掘り直しがあり、大量の完形土器が出土したのは2回目（最後）の掘り直しの後、少し土壌が堆積した後である。

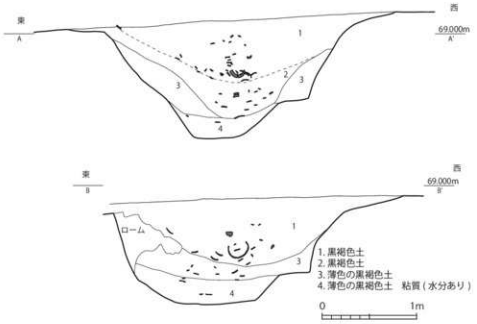
堆積状況であるが、大きくは3層に分けることができる。1層は黒褐色土、2層はやや明るい黒褐色土、3層は粘質が強く、やや明るい黒褐色土である。1層は部分的に上層（1a層）と下層（1b層）に分層できる。当初の掘削による堀に堆積したものが3層、1回目の掘り直しの堀に堆積した土壌が2層だとすれば、1回目の掘り直しは、当初の堀をかなり拡幅するものであったことがわかる。2回目の掘り直しは、埋まってしまった土壌を除去する程度で、幅や深度の拡張は伴っていないと考えられる。

図示できる出土遺物は44点である。第344図1608から第345図1618は安国寺式土器壺である。口縁部形態に注目してみると、口縁部上半部を上方に拡張しない1608から、頸部の伸びと同じ長さで内傾する口縁部を伸ばす1609や1610まである。1617や1618はその中間といえる。口縁部上半の伸びは時期判定に有力な要素ではあるが、いずれも底部が丸底になるなど、同一時期であることを示している。しかしながら、1611の口縁部上面に円形浮文を持つものは同一時期のものではないだろう。1619は単口縁の壺で、口唇部を小さく外側に摘み上げる。第346図1620から第347図1634は甕である。形態的には長胴で、胴部最大径の違いによりプロポーションが異なるが、基本的に同一型式の土器である。外面にはハケ調整をするものとナデ調整のものがあり、内面はヘラ削り痕をのこすもの（1623）以外はナデ調整や一部ハケ調整を施す。顕著な形態的違いは底部の形状で、平底のもの（1620）、僅かに上げ底状の小さな平底のもの（1621から1625）、丸底のもの（1627から1631）などがある。

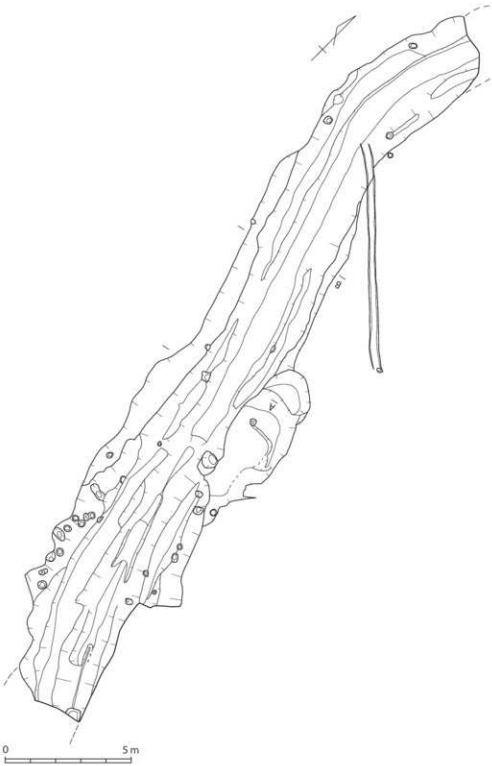
第348図1635は底部に穿孔のある甑、1636は口縁部が外反して開く球形胴の丸底壺、1637は同じく丸底の壺であるが、口縁部は短く直立する。1639と1640は扁平な球形胴に大きく開く口縁部の付く鉢、1641もやや器高の高い鉢、1642から1645は脚台の付く鉢で、1644と1645には脚に小さな円形の孔があけられている。1646は小さな平底を持つ鉢、1647は低い脚台を持つ鉢、1638は高坏で、口縁部はあまり大きくは開かない。

第349図1649は姫島産黒曜石製の打製石鏃、1650は玄武岩製の磨製石斧、1651は安山岩製の台石である。

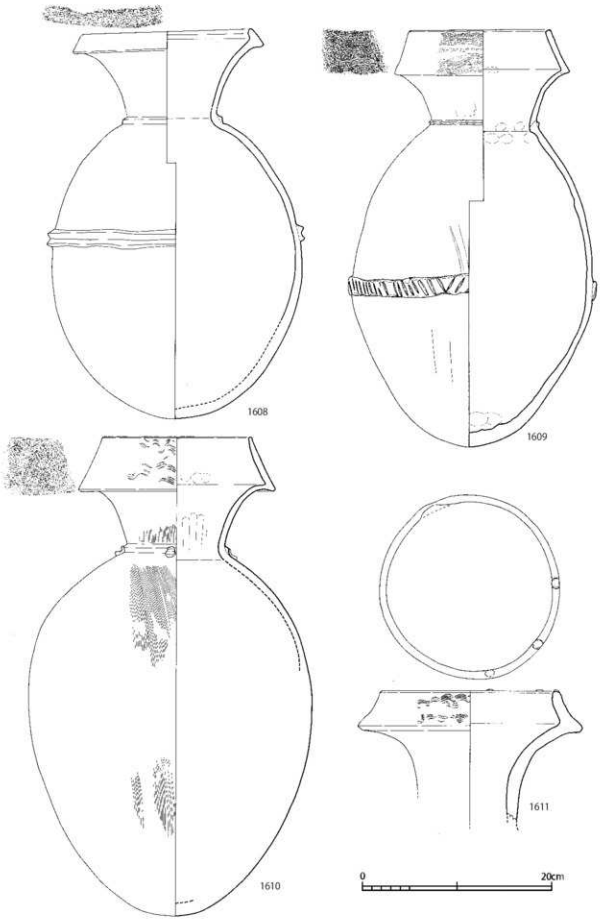
この溝の時期は、安国寺式土器や甕などが大半丸底であること、明確な外来土器が含まれないことなどからⅧ期の遺物を含むもの、Ⅸ期（弥生時代終末）とすることができる。



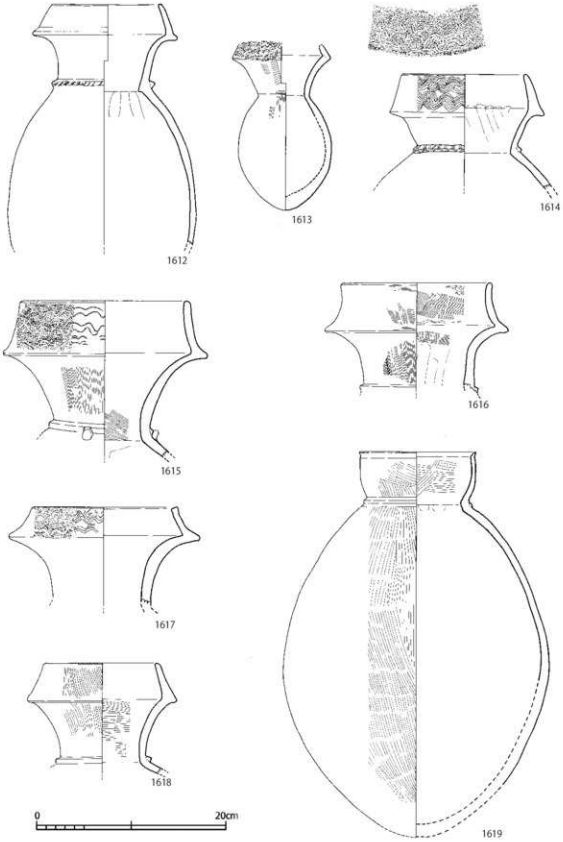
第342図　8次溝土層図



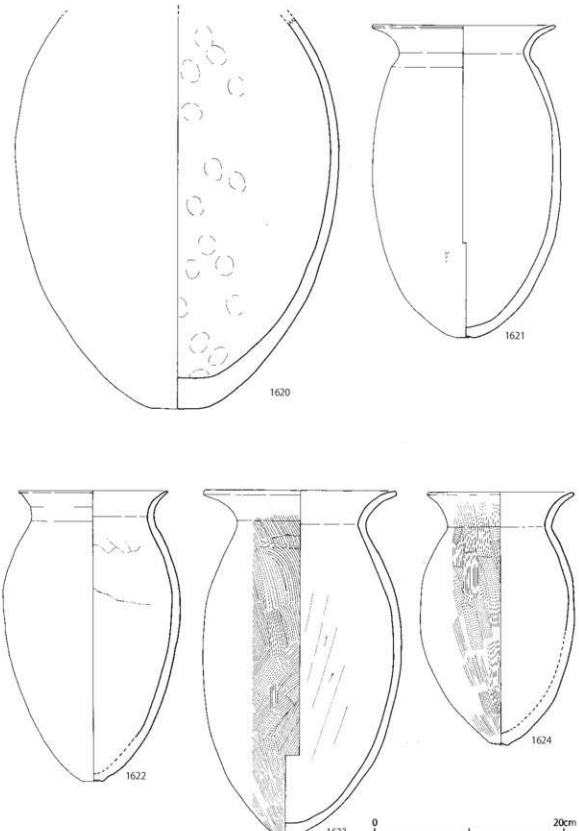
第 343 図　８次溝



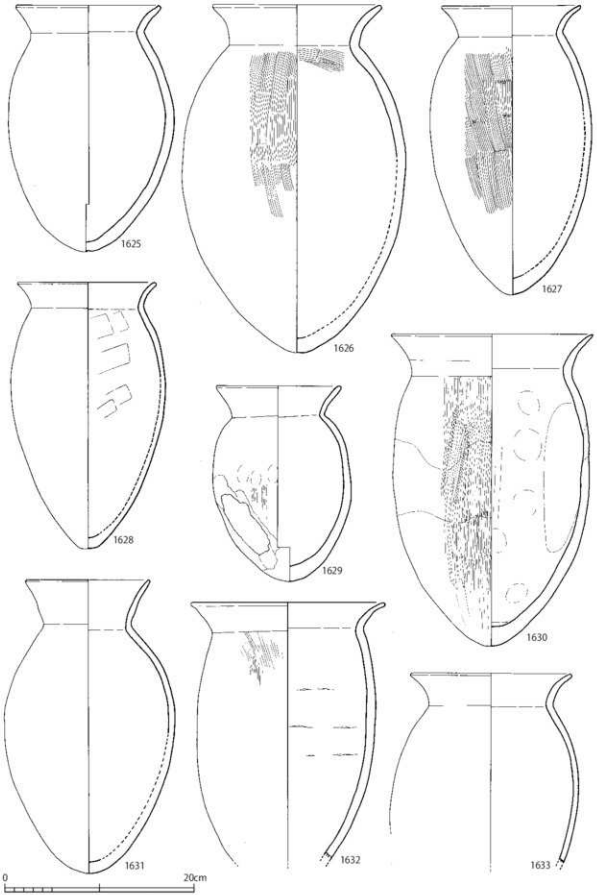
第344図　8次溝出土遺物①



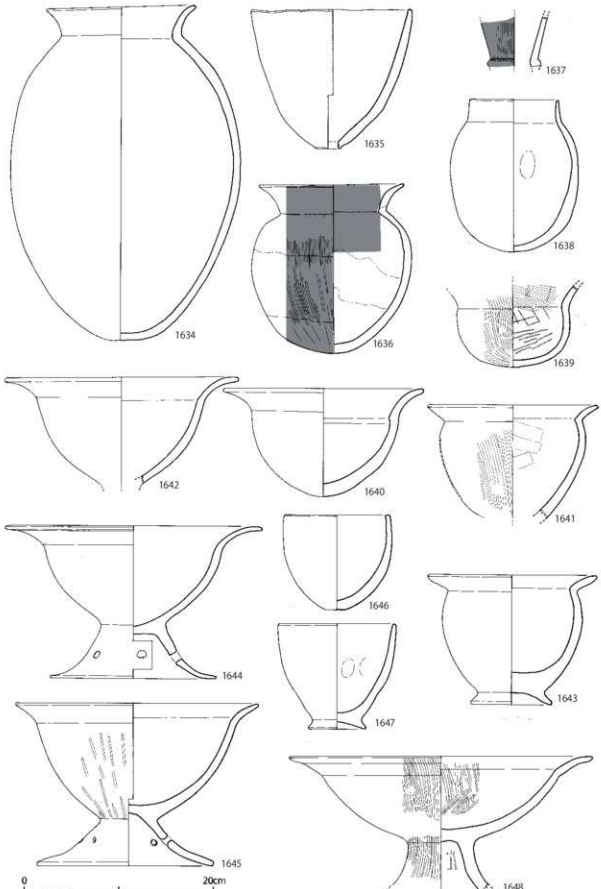
第 345 図　8次溝出土遺物②



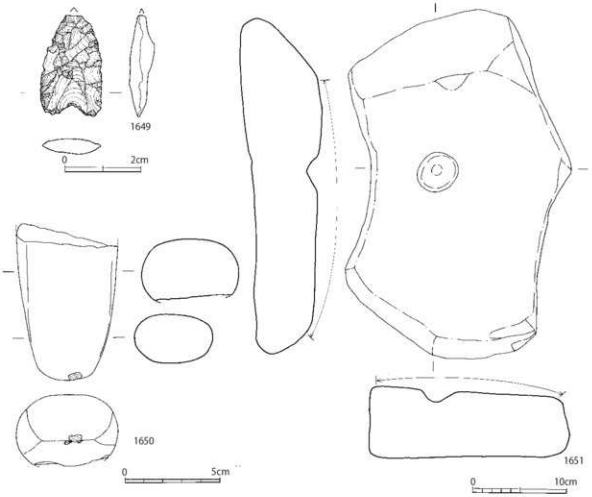
第346図　8次溝出土遺物③



第347図　8次溝出土遺物④



第348図　8次溝出土遺物⑤



第 349 図　８次溝出土遺物⑥

土坑

1）1号土坑（第350図）

溝と切り合うが、先後関係は不明である。幾つかの土坑が重なっている可能性もあるが、長さ6.0m以上、幅は2.25m以上で、床は三段になっている。一段目の深さは0.53m、二段目は一段目から約0.13m下がり、三段目はさらに0.10m下がる。

遺物の出土はない。

2）2号土坑（第351図）

8号土坑と溝の間で確認された土坑である。長軸1.33m、短軸1.20m、深さ0.35mで、長方形を呈す。

遺物の出土はない。

3）3号土坑（第352図）

調査区の中央やや西寄りで検出した土坑で、南北1.78m、東西1.58mのやや長方形である。深さは0.09mである。

遺物の出土はない。

4）4号土坑（第353図）

調査区の北東部で確認された土坑で、東側は削平を受けている。南北は1.07m、東西は0.85mで、深さは0.02mから0.09mである。床面にはピットがある。

図示できる出土遺物は1点である。第354図1652は茎を有する鉄鏃である。茎には樹皮を巻いた痕が残る。

5）5号土坑（第353図）

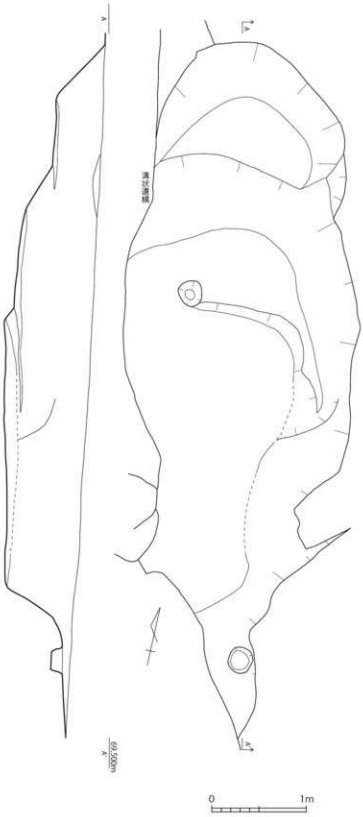
4号土坑のすぐ北側で確認された土坑で、6号土坑に切られ、一部は調査区外に延びる。そのため、形状や規模は分からない。深さは0.32mである。

遺物の出土はない。

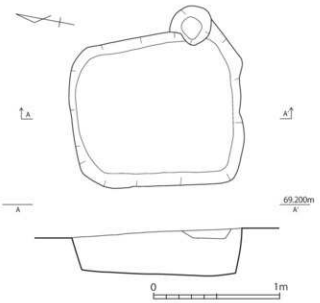
6）6号土坑（第353図）

5号土坑に連なるように確認された土坑で、5号土坑を切っている。北側の一辺で1.25m、東西は1.40mの長方形を呈する。

遺物の出土はない。

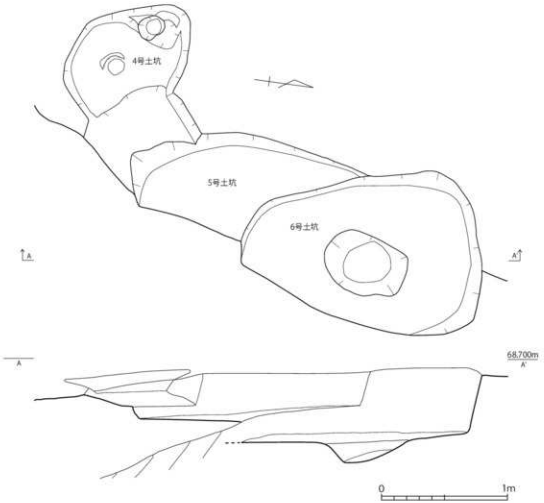


第350図　8次1号土坑



第351図　8次2号土坑

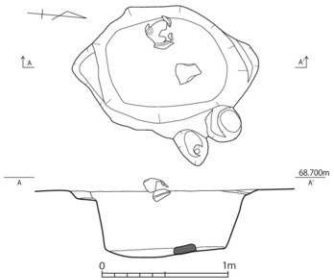
第352図　8次3号土坑



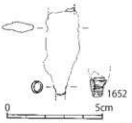
第353図　8次4、5、6号土坑

７）７号土坑（第 355 図）

６号土坑の西側で確認された土坑である。長軸 1.15m、短軸 0.90m、深さ 0.53m で、楕円形を呈する。遺物は図化していないが、下城式土器甕である。



第 355 図　８次７号土坑

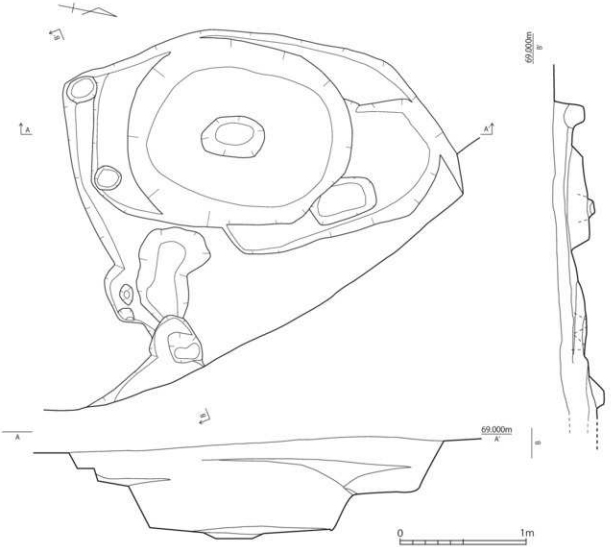


第 354 図　８次４号土坑出土遺物

８）８号土坑（第 356 図）

調査区北端で確認された土坑である。床は二段になっており、一段目は長軸 3.15m、短軸 1.73m、深さ 0.25m で不整の長方形を呈し、二段目は長軸 1.77m、短軸 1.43m、深さ 0.37m の長楕円形を呈する。土層断面図が残されていないので、複数の土坑が切り合っているのかは確認できなかった。

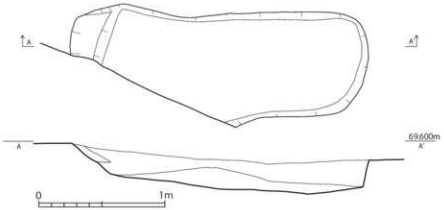
遺物の出土はない。



第 356 図　８次８号土坑

９）９号土坑（第357図）

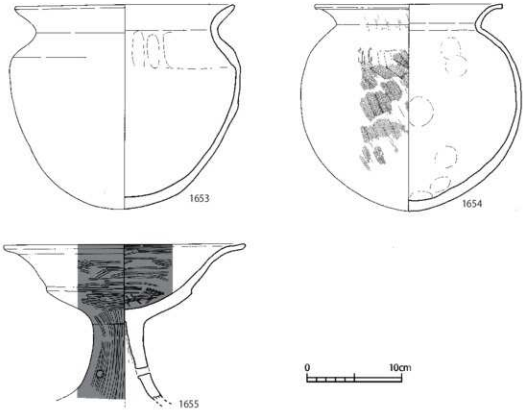
調査区の南西辺中央付近で確認された土坑である。長軸2.33m、短軸0.90m、深さ0.24mで、長方形を呈する。遺物の出土はない。



第357図　８次９号土坑

（３）その他の出土遺物

ここでは３点の帰属不明の土器を扱う。第358図1653と1654は甕であるが、胴部が短くなって、球形胴に近くなっている。いずれも内面はナデ調製である。1655は内外面ともベンガラが塗布され、ミガキの施された高坏で、1648に比べて口縁部の伸びが大きくなっている。



第358図　８次一括遺物

（４）まとめ

８次調査区は、これまでの調査区から離れて、台地の南西部に設定されたものである。そのため、これまでとは異なる性格の遺構が出土している。

本調査区の中心をなすのは溝１である。雄城台の台地が南西部に向けて三角形の頂点のように突出する部分に、その突出部を切り離すように弧状の溝（堀）を掘削している。この溝が果たして台地全体を取り巻くのかどうかについては、台地際の調査が８次調査以外にないので不明とせざるをえない。ここでは、その可能性（１案）とともに、もう一つの考え（２案）として、台地中央の調査区である７次調査で検出された溝２とつながる、というものである。二つの溝は時期や規模はほとんど同じであり、台地の南側半分に円形の環濠が廻ることになる。

第 10 節　第９次調査

（1）調査の概要

この調査区は雄城台遺跡の中では東部に位置していた。立地は台地上ではなく、浅い谷を望む地形に沿って形成された細長い平坦面に集落が営まれていた。遺構が分布する平坦面は東部から西部に向かって徐々狭くなっていた。東部1/3の約20ｍが広く、東端部は15ｍ、西側で11ｍ幅をもっていた。竪穴建物はこの範囲に集中していた。西部2/3は５ｍ以下となっており、土坑が分布していた。遺構は竪穴建物８基、土坑12基、落込み３基、ピット４０ほどであった。また、東九州初の発見となった巴形銅器が出土した。

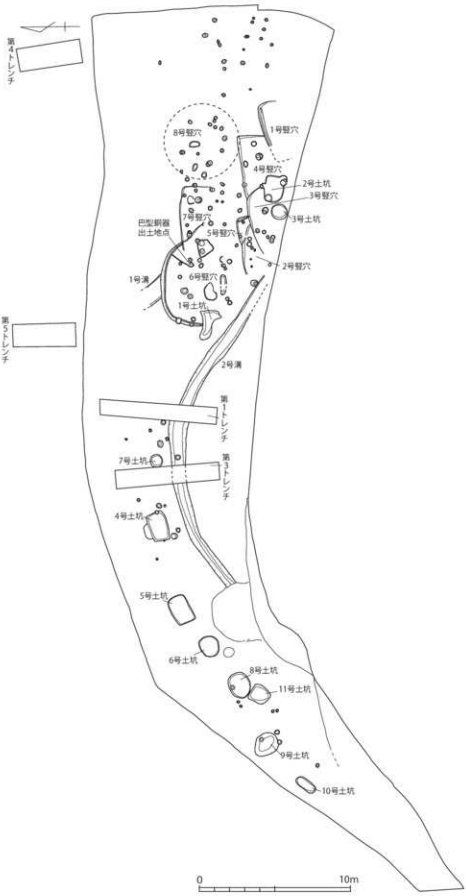
（2）基本層序（第360図）

土層堆積状態を中央部のトレンチ１（Ａ－Ａ゛）とトレンチ３（Ｃ－Ｃ゛）で観察した。

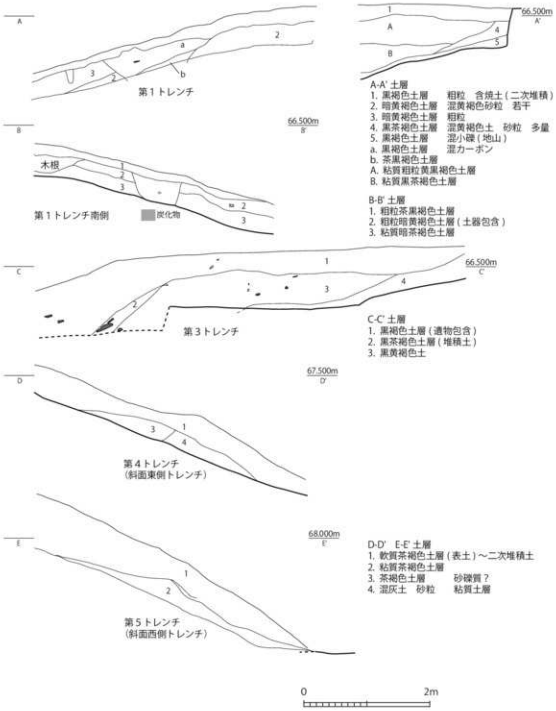
土層（Ａ－Ａ゛）は上層から１層：混焼土粗粒黒褐色土層（二次堆積土）、２層：混黄褐色砂粒若干暗黄褐色土層、３層：粗粒暗黄褐色土層、４層：粘質粗粒茶黒褐色土層、５層粘質黒褐色土層、
６層:混小礫黄褐色土層（地山）であった。トレンチ下辺の土坑覆土は、ａ層：混カーボン・遺物黒褐色土層、ｂ層：茶黒褐色土層であった。

土層（Ｃ－Ｃ゛）は上層から１層:黒褐色土層(遺物包含)、２層：黒茶褐色土層、３層:黒黄褐色土層、４層：地山であった。

地形的には、北の斜面か



第 359 図　９次調査区遺構配置図



第 360 図　９次調査区土層図

ら緩やかに南へ傾斜していた。遺構はほぼ平坦面に形成されていた。

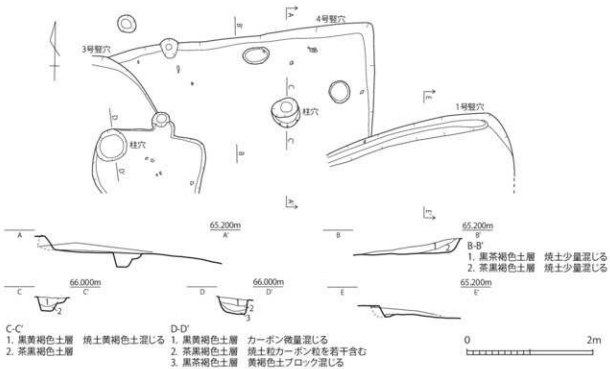
遺構の分布状態は、調査区南東部に竪穴建物１～５がお互いに近接して位置し、切り合っていた。この範囲は削平が著しく遺構の残りはよくなかった。

（３）遺構と遺物

竪穴建物

１号竪穴建物（第 361 図）

調査区の南東に位置した。遺構は４号竪穴建物の西壁を切っていた。削平を受け東北隅から北壁の一部が残る程度で規模などは不明であったが壁高は 0.1 m を確認した。なお、床面に深さ 0.05 m 程度の周溝が設けられていた。東北隅の形状から方形の平面形をもつことが想定できた。床面に炉跡や柱穴は確認できなかった。



第 361 図　９次１、４号竪穴建物

２号竪穴建物（第 362 図）

竪穴建物集中範囲では最も西側に位置していた。遺構は５号竪穴建物に西壁、３号竪穴建物に東壁を切られていた。床面に炉跡はなかった。柱穴は 1･2 がこの竪穴建物に伴うと想定できた。また、北壁東端の床面に土器が残っていた。

図示できる出土遺物は２点である。第 379 図 1656 は鋤先状口縁を持つ壺で、上面に円形浮文を付す。1657 は平底の甕の底部である。

この竪穴建物の時期は、図示できた土器からは中期であるが、竪穴プランが方形であることを考えると後期に下らせるべきであろう。

３号竪穴建物（第 362 図）

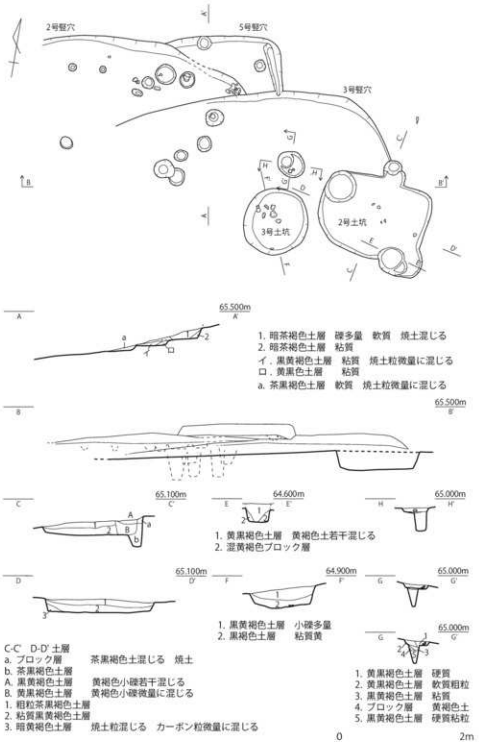
この範囲ではほぼ中央に位置していた。遺構は２号、５号竪穴建物の東壁を大きく切っていた。遺構は遺存状況が悪く東北隅から北壁が残る程度で規模などは不明であった。壁高は 0.12 m ほどであった。東北隅は丸みを帯びるが方形の平面形を想定したい。床面に炉跡は確認できなかった。柱穴は１・２が有為な配置を示していた。

図示できる出土遺物は２点である。第 379 図 1658 は刻目突帯を廻らせる下城式土器甕である。1659 は竪穴建物床面に位置するがこの遺構に伴うものではなく、中世の掘立柱建物の柱穴と思われるピットから出土した土師器である。口径は 6.7cm で、底部は回転糸切り。

この竪穴建物の時期は、方形プランであるので弥生時代後期と考えられるが、良好な遺物がない。

４号竪穴建物（第 361 図）

１号、３号竪穴建物の間に位置し、この２基に東壁・北～西壁を切られていた。東北隅はほぼ直角に屈曲しており方形の平面形と考えられた。壁高は約 0.2 m であった。柱穴１・２がこの竪穴建物の主柱穴と考えられた。



第 362 図　９次２、３、５号竪穴建物、２、３号土坑

図示できる出土遺物は2点のみである。第379図1660は口縁端部を小さく摘み上げる東北部九州系の甕と思われる。1661は錆化が進んでいるが、刀子と考えられる。

この竪穴建物の時期は、プランが方形のため、弥生時代後期と考えられる。

5号竪穴建物（第362図）

竪穴建物集中範囲では最も西側に位置していた。遺構は東北隅付近が残る程度で遺存状態は悪かった。したがって、床面などの状況は不明であった。壁高は0.2 m程度残っていた。また、残存する東壁下に周溝が設けられていた。深さは床面から0.05 mほどと浅かった。平面形は東北隅がほぼ直角の形状を示していることから、方形と想定した。

図示できる出土遺物がなく、時期はわからないが、竪穴プランが方形とすれば弥生時代後期であろう。

6号竪穴建物（第363図）

竪穴建物集中範囲では最も西側に位置していた。東壁を竪穴建物7に切られており、南半部は著しく削平されていた。また、複数の土坑や攪乱などがみられた。遺構の規模は残存する壁から復元すると直径約6 m、壁高は北壁で0.25 mであったが、南に向かって浅くなっていた。壁下には幅0.1 m～0.15 m、深さ0.06 mの周溝が設けられていた。なお、東壁の延長の一部が7号竪穴建物の床面下に残っていた。柱穴は壁に沿って配置されており、柱穴1・2・3・4を確認できた。床面に炉跡は残存しなかった。出土遺物は壁が残る北半部の床面に広がっていた。

なお、巴形銅器が納められた埋納孔は平面的には柱穴2に隣接する位置にあった。埋納孔は6号竪穴建物が廃絶、床面が埋没した後に掘られた状況であった。

図示できる出土遺物は11点である。第379図1662は肩部に三条の突帯を廻らせる壺、1663と1664は一条の刻目突帯を廻らせる下城式土器甕である。1665は外反しながら開く口縁部の壺、1666は口縁端部を小さく摘み上げる東北部九州系の甕、1667と1668は平底の甕底部である。1669と1670は姫島産黒曜石製の打製石鏃、1671はチャート製の石匙、1672は緑泥片岩製の扁平打製石斧である。

この竪穴建物の時期は、プランが円形であること、図示できた土器が中期の所産（1662が後期でなければ）であることから、Ⅳ期（中期後葉～末）と考えられる。

7号竪穴建物（第364図）

北壁は西側で6号竪穴建物を切っているが、西北隅、西壁を削平され消失していた。規模は残存する北東隅から西壁が4.2 m残っていた。東壁は北東隅から南に向かって一部残るが大半を削平されていた。わずかに床のラインを1.6 m程度確認できた。平面形は北東隅が直角をなしており、方形の平面形と考えた。壁高は北壁で0.1 m程度と浅かった。このため、床面下に竪穴建物6の床面の一部が残っていた。柱穴は壁に沿って配置されており、柱穴1・2・3を確認できた。北壁寄りに東西1.25 m、南北0.9 m、深さ0.05 mの楕円形の掘込みが設けられていた。壁が若干被熱し、焼土ブロックが堆積していた。炉状の施設と想定された。出土遺物は残存する床の北西部に散在していた。

図示できる出土遺物は5点である。第379図1673は肩部に半裁竹管で直線文を描く下城式土器壺、1674は内傾する頸部から肩部の破片で、壺である。1675は平底の甕底部である。1676と1677は中世土師器の混入で、1676は口径13.0cmの坏、1677は口径7.2cmの小皿である。1677は糸切りが確認できるが、1676は摩耗して判別できない。これらは後世、混入したものと思われる。

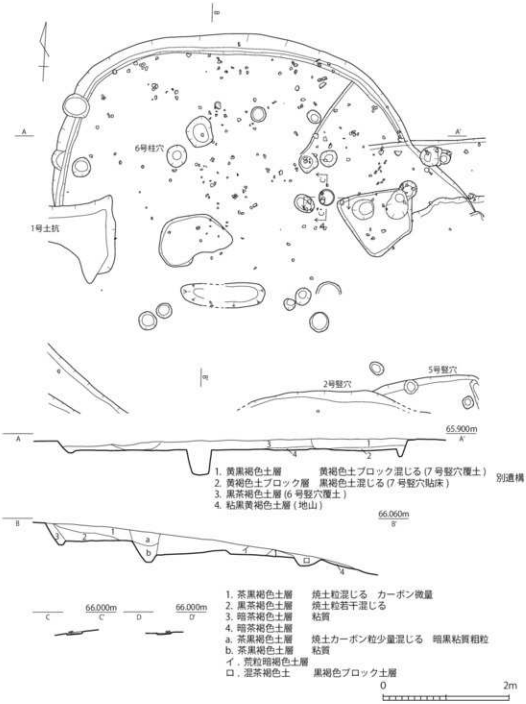
この竪穴建物の時期は、図示した遺物は中期のものであるが、竪穴プランが方形であることから弥生時代後期と考えられる。

8号竪穴建物（第365図）

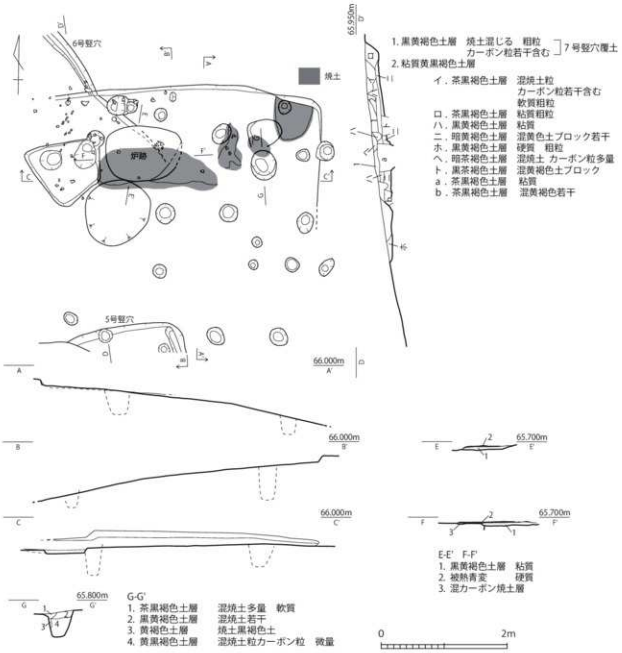
7号竪穴建物の東に隣接していた。壁が削平され全く残っていなかったため、ピットの配列から柱穴を想定して建物を復元した。この結果、柱穴は直径3 mの弧線上に7個を確認し、直径5 mの円形の竪穴建物を想定した。

図示できる出土遺物は11点である。第379図1678は口縁部を屈曲させながら開く壺、1679と1680は頸部に断面三角形の突帯を廻らせる壺で、安国寺式土器壺であろう。1681は直線的に外形して開く口縁部の壺で、頸部に一条の突帯を廻らせる。1682から1686と1688は刻目突帯を廻らせる下城式土器甕、1687は口縁端部を外側に張り出す壺か。1689は平底の甕底部、1690は縦方向の長方形透かしを持つ高坏（鉢）の脚部、1691はサヌカイト製の打製石鏃である。

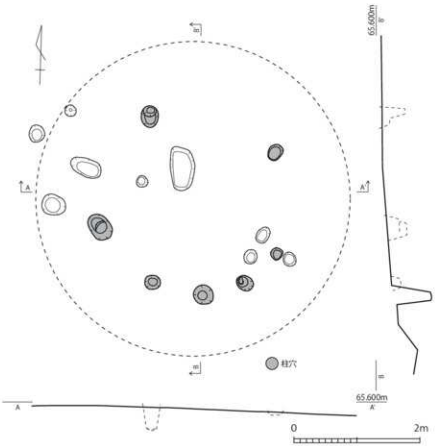
この竪穴建物は、プランが分からないので時期決定が難しいが、出土土器の中で新しい要素を探れば、1679や1680が後期に下る可能性を指摘できるだろう。



第 363 図　９次６号竪穴建物



第 364 図　９次７号竪穴建物

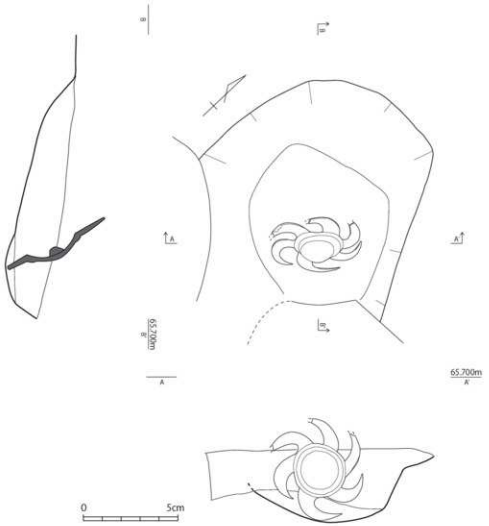


第 365 図　９次８号竪穴建物

巴形銅器埋納坑（第 366 図）

巴形銅器が埋納されていた小土坑は、６号竪穴建物内の北東部の覆土中（３層）に掘り込まれていたと考えた。小土坑は６号竪穴建物に設定していた東西方向の土層ベルト除去中に確認したものであるが、掘下げ作業中偶然に発見したため土坑南半の壁と南東部の床面を欠失した。このため正確な規模を把握できないが、残存する部分から復元長 0.16 m、幅 0.13 m、深さは 0.06m 以上で平面形は楕円形を呈するものと思われた。底面は一部を欠くがほぼ形状を確認できた。長さ 0.09 m、幅 0.07 m の規模をもち、不整円形を呈した。土坑の立ち上がりはほぼ緩やかであるが東壁は 55 度～ 65 度と急な立上りを示していた。巴形銅器は土坑底面の最も深い位置に表面を南東に向け、直立に近いがやや北西側に傾いた状態で置かれていた。

第 390 図 1817 が青銅製の巴形銅器である。脚先端部が一部欠けるがほぼ完形で、全長は 5.5㎝、座径は 2.9㎝、高さ 0.9㎝である。座は半球形を呈し、縁には段が付いている。内面には瘤状鈕が付き、紐を通したと考えられる孔があく。脚は６本で、左向き（反時計回り）に強く捩じり、裏面には有軸綾杉文を鋳出している。一部、鋳上がりが不良な箇所がある。



第 366 図　９次巴形銅器出土状態

土坑

１号土坑（第 367 図）

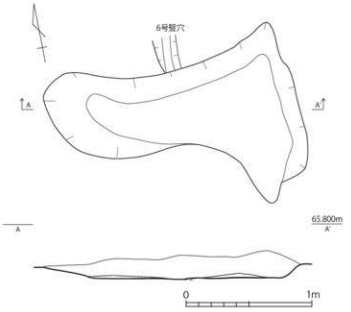
竪穴建物６の西壁を切っていた。東西に長い不整形を呈し、東西２m、南北最大幅 1.5 m、深さ 0.2 m程度であった。

２号土坑

東西に長い不整形を呈し、東西２m、南北最大幅 1.5 m、深さ 0.2 m程度であった。遺物の出土はなかった。

３号土坑

土坑２の西側に近接して位置していた。直径１m前後の円形を呈し、深さ 0.3 m程度であった。遺物は土器類が若干出土したが図示できる出土遺物はない。



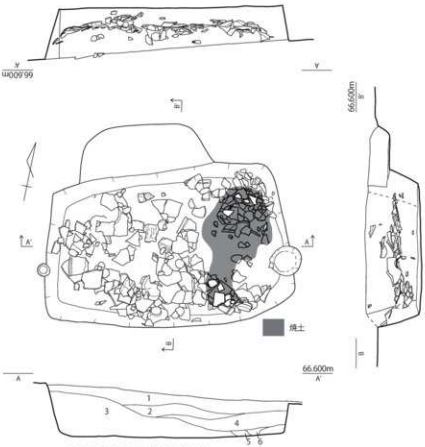
第 367 図　９次１号土坑

4号土坑（第368図）

調査区西半部やや東側に位置していた。東西に長い方形を呈し、東西1.9 m、南北1.25 m、深さ0.4 m程度であった。遺物は土器類が覆土中層にややまとまって堆積していた。

図示できる出土遺物は29点である。第380図1692は上面に暗文を施す鋤先状口縁、1693から1698は下城式土器壺で、半裁竹管で直線文や重弧文を描く。1693は縦方向に繋ぐ直線文の横に連続山形文を描く。1696は無文である。口縁部形態は、単口縁のもの（1696、1697）と外方向に折れて伸びるもの（1695）がある。底部は若干不安定な平底である。第381図1699は円盤状を呈する平底の壺で、胴部下半に二条の断面三角形の突帯を廻らせる。1700はやや下膨れの体部を持つ壺、1701は胴部に二条の断面三角形の突帯を廻らせる壺、1702は平底の壺底部である。1703から第382図1707は刻目突帯を一条廻らせる下城式土器甕、1708は内傾する頸部から小さく折れ曲がる口縁部を持つ壺で、屈曲部に一条の突帯を廻らせる。1709から1714は平底の甕底部、第383図1715から1720は高坏である。1715、1716、1720は長方形の透かしを持つ。口縁部は鋤先状を呈する。1721は粘板岩製の磨製石鏃、1722は凝灰岩製の台石である。

この土坑の時期は、古い要素を持つものも多いが、下城式土器壺の口縁部が外側に折れ曲がるものがあること、高坏の鋤先状口縁部の状況などから、Ⅱ期（中期初頭～前葉）でも新しい時期のものと考えておきたい。そうすると、1721の磨製石鏃は混入かもしれない。



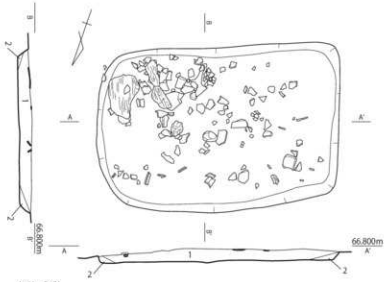
1. 暗茶褐色土層　焼土若干混じる
2. 暗茶褐色土層　炭化物ブロックやや多量　粘質
3. 茶褐色土層　焼土粒多量　軟質
4. 黄白色燃焼粘土層
5. 赤褐色土層　茶褐色土層（カーボン含む）
6. 赤褐色土層

0　1m

第368図　９次４号土坑

5号土坑（第369図）

調査区西半部中央に位置していた。東西に長い方形を呈し、東西1.94 m、



A-A'　B-B'
1. 黒黄褐色土層　焼土混じる　カーボン若干含む
2. 黒黄褐色土層

0　1m

第369図　９次５号土坑

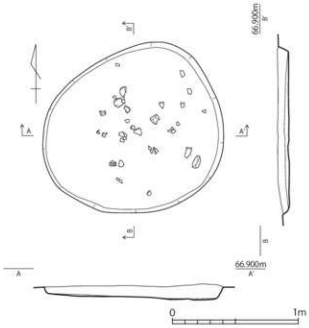
南北 1.3 m、深さ 0.3 m 程度であった。遺物は上層に炭化材堆積し、土器類が覆土中から出土した。

図示できる出土遺物は 6 点である。1723 は半裁竹管で直線文と重弧文を描く下城式土器壺で、口縁部は緩やかに外反して開く。1724 は体部に刻目突帯文を巡らせる壺、1725 は平底の甕、1726 は一条の突帯を廻らせる下城式土器甕、1727 は口縁端部を肥厚させる東北部九州系の甕である。1728 は粘板岩製の磨製石鏃である。

この土坑の時期は、Ⅱ期（中期初頭～前葉）と考えられる。

6 号土坑（第 370 図）

調査区西半部中央の土坑 5 の西側に位置していた。東西に長い方形を呈し、東西 1.45 m、南北 1.3 m、深さ 0.1 m 程度であった。遺物は土器類がややまとまって出土した。



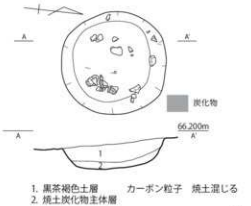
第 370 図　9 次 6 号土坑

7 号土坑（第 371 図）

調査区西半部東端に位置していた。直径 0.85 m の円形し、深さ 0.1 m 程度であった。遺物は土器類が覆土中から出土した。

図示できる出土遺物は 2 点である。第 384 図 1729 は半裁竹管で直線文と重弧文を描く下城式土器壺、1730 は一条の突帯を廻らせる下城式土器甕である。

この土坑の時期は、Ⅱ期（中期初頭～前葉）からⅢ期（中期中頃）である。



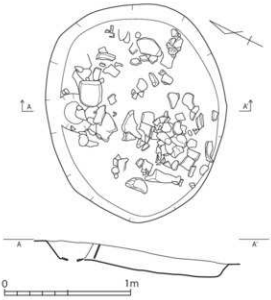
第 371 図　9 次 7 号土坑

8 号土坑（第 372 図）

6 号土坑の南西の至近地に位置していた。東西に長い楕円形を呈し、長径 1.7 m、南北 1.45 m、深さ 0.15 m 程度であった。遺物は土器類や礫が覆土中から出土した。

図示できる出土遺物は 18 点である。第 384 図 1731 は口縁部が鋤先状になり、体部が算盤形に張る壺で、体部に一条の刻目突帯を廻らせる。脚台が付くと思われる。1732 から 1734 は半裁竹管で直線文を描く下城式土器壺で、1732 は口縁部内側に突帯を廻らせる。1735 と 1736 は平底の壺底部である。第 385 図 1737 から 1739 は一条の刻目突帯文を廻らせる下城式土器甕、1740 は下城式土器甕と東北部九州系の甕の折衷的な甕である。1741 は口縁端部を肥厚させる東北部九州系の甕、1742 から 1744 は平底の甕底部である。1745 から 1748 は高坏（脚台付き鉢）で、坏部の口縁は緩やかに外反する。脚部は 1747 が長方形の透かし、1748 が曲線を持った透かしを入れ、ともに円盤充填技法である。

この土坑の時期は、Ⅱ期（中期初頭～前葉）と考えられる。



第 372 図　9 次 8 号土坑

9 号土坑（第 373 図）

8 号土坑の南西に位置していた。歪な楕円形を呈していた。北西方向に主軸をもち長径 1.75 m、短径 1.45 m、深さ 0.3 m程度であった。遺物は土器類が覆土中から出土した。

図示できる出土遺物は 5 点である。第 386 図 1749 は口縁部が緩やかに外反しながら開き、体部には半裁竹管で重弧文を描く下域式土器壺、1750 は平底の壺底部、1751 は平底の甕底部、1752 と 1753 は一条の突帯を廻らせる下域式土器甕である。1754 は姫島産黒曜石製の打製石鏃である。

この土坑の時期は、Ⅱ期（中期初頭～前葉）と考えられる。

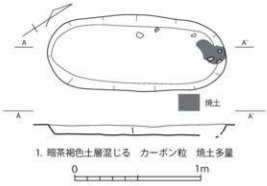
第 373 図　９次９号土坑

10 号土坑（第 374 図）

調査区西部に位置していた。北東に長い楕円形を呈し、長径 1.4 m、短径 0.6 m、深さ 0.1 m程度であった。遺物は土器類が覆土中から若干出土した。

図示できる出土遺物は 1 点である。第 386 図 1755 は平底の甕底部である。

土坑の時期は、遺物が少なく確定的ではないが、中期と考えられる。



第 374 図　９次１０号土坑

11 号土坑（第 375 図）

調査区西半部中央の 8 号土坑の南側に接していた。不整方形を呈し、東西 1.15 m、南北 1.25 m、深さ 0.2 m～ 0.3 mであった。遺物は土器類が覆土中から出土した。

図示できる出土遺物は 1 点で、第 386 図 1756 は一条の突帯を廻らせる下域式土器甕である。

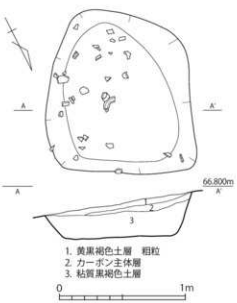
土坑の時期は、遺物が少なく確定的ではないが、中期と考えられる。

12 号土坑（第 376 図）

調査区では最も西部に位置していた。不整円形を呈し、南側を削平されているが東西 2.2 m、南北 1 m、深さ 0.6 mであった。

図示できる出土遺物は 6 点である。第 386 図 1757 は口縁部が逆「L」字形に開く壺、1758 は頸部に一条の突帯を廻らせ、その下位に勾玉状浮文を付す安国寺式土器壺、1759 は口縁部上半に櫛描波状文を描く安国寺式土器壺、1760 は裾広がりの高坏脚部、1761 は丸底になると思われる鉢、1762 は結晶片岩製の磨製石鏃である。

土坑の時期は、良好な資料はないが、後期でも後半に位置づけられるであろう。



第 375 図　９次１１号土坑

落ち込み

落込み１（第 359 図）

土坑１の西側、６号竪穴建物の南側床面に位置していた。不整形を呈し、東西 1.2 m、南北 0.75 m、深さ 0.05 m程度であった。遺物はなく、後世掘り込まれた可能性が考えられた。

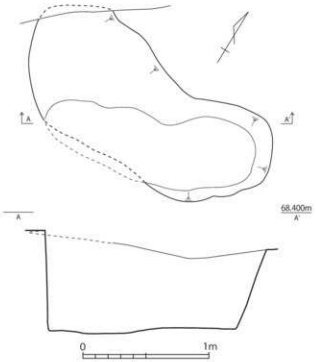
落込み２（第 359 図）

落込み１の南側に位置していた。長方形を呈し、東西 1.35 m、南北 0.4 m、深さ 0.1 m程度であった。遺物はなく、後世掘り込まれた可能性が考えられた。

落込み３（第 359 図）

溝２の西端部を切っていた。崩落した谷縁辺に土砂が堆積したものと考えられた。

図示できる出土遺物は６点である第 386 図 1763 は口縁端部を肥厚させる東北部九州系の甕、1764 は口縁部上半があまり伸びない安国寺式土器壺、1765 は楕円形の押型文を持つ縄文時代早期の深鉢である。1766 は粘板岩製の磨製石鏃、1767 は砂岩製の敲石（磨石）、1768 は安山岩製の台石である。



第 376 図　９次１２号土坑

また、この落ち込み周辺の土器も一緒に混明する。第 387 図 1769 は鋤先状口縁の壺で、外側に縦方向の刻みを入れる。1770 は口縁部が鋤先状になる壺である。1771 は平底の壺底部、1772 から 1775 は口縁端部を肥厚させる東北部九州系の甕、1776 から 1779 は平底の甕底部、1780 は脚台の付く鉢か。

この落ち込みの時期は、1765 の安国寺式土器壺からⅦ期（後期中葉）を前後する時期と考えられる。

溝

１号溝（第 377 図）

この溝は南端を竪穴建物６で切られ、北の斜面に向かって延びていた。北端は削平されているため確認できなかった。確認長４m、幅 1.3 m～ 1.5 m、深さは 0.2 m程度であった。

図示できる出土遺物は９点である。第 388 図 1781 は頸部が直立気味に立ち上がる壺、1782 と 1783 は壺の底部で、1782 は上げ底状を呈する。1784 から 1786 は一条の刻目突帯が廻る下城式土器甕で、1785 と 1786 は内湾する口縁部である。1787 は平底の甕底部、1788 は高坏（鉢）の脚部で、曲線的な透かしがある。1789 は縄文時代早期の押型文土器である。

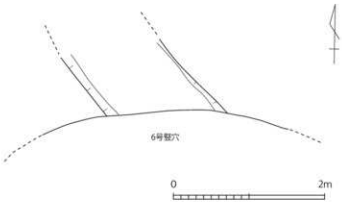
この溝の時期は図示した遺物からはⅡ期（中期初頭～前葉）と考えられる。

２号溝（第 378 図）

南側の谷の縁辺に沿って構築されていた。東端は竪穴建物２付近で削平され、西端は落込み３に切られていた。長さ 23 m、幅 0.6 m～ 1.1 m、深さは東端部で 0.05 m、西端部で 0.3 mであった。

溝床面の比高差が東西両端部で 1.2 mあり、東から西へ傾斜していたことがわかった。溝の形状から集落を囲む機能が想定された。

図示できる出土遺物は６点で、いずれも打製石鏃である。第 388 図 1790 はサヌカイト、1791 は牟田黒曜石、1792 はチャートと考えられる。1793 は姫島産黒曜石製の打製石鏃、1794 は砂岩製の砥石、1795 は石材不明の剥片である。



第 377 図　９次１号溝

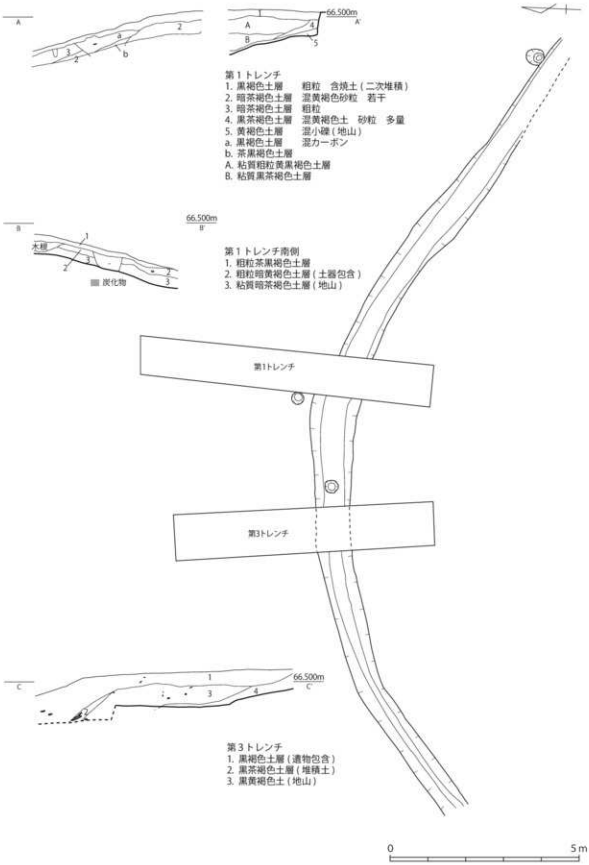
ピット

調査区全体で約５０個のピットを確認した。調査区東部では柱穴の配列から円形の竪穴建物８を復元した。東端部のピット配列は小屋掛け風の簡易な掘立柱建物の可能性があった。調査区中央部や西部ではピットが散在するものの柱穴として有為な配列、建物の復元は難しかった。

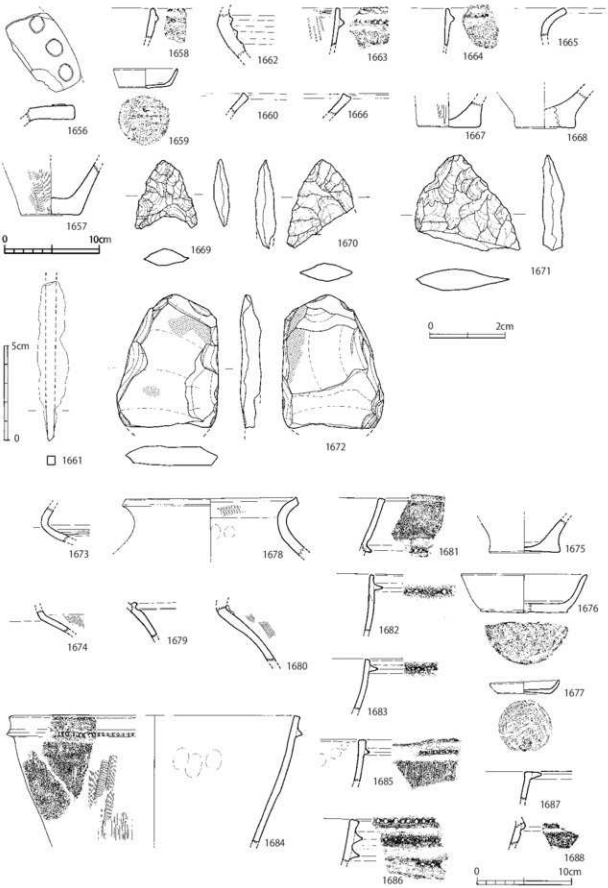
（４）その他の出土遺物

ここでは、遺構に伴わずに出土した遺物を説明する。第 389 図 1796 は口縁部が鋤先状になる壺で、上面に円形浮文を付す。1797 は口縁部が直立気味に短く立ち上がる壺、1798 は頸部に一条の突帯を廻らせ、円形または勾玉状の浮文を付す。1799 は円盤状の平底底部の壺、1800 は半裁竹管で直線文を描く下城式土器壺、1801 は内外面ともベンガラが塗布された壺、1802 は内面に２本のヘラ描き平行線を入れる壺の口縁部か、1803 は一条の刻目突帯が廻る下城式土器甕、1804 は厚手の平底の甕底部、1805 は脚裾部で、沈線を廻らせ、その上位に刺突文を入れる。1806 は脚部で、一条の突帯を廻らせる。1807 は甕の平底底部である。

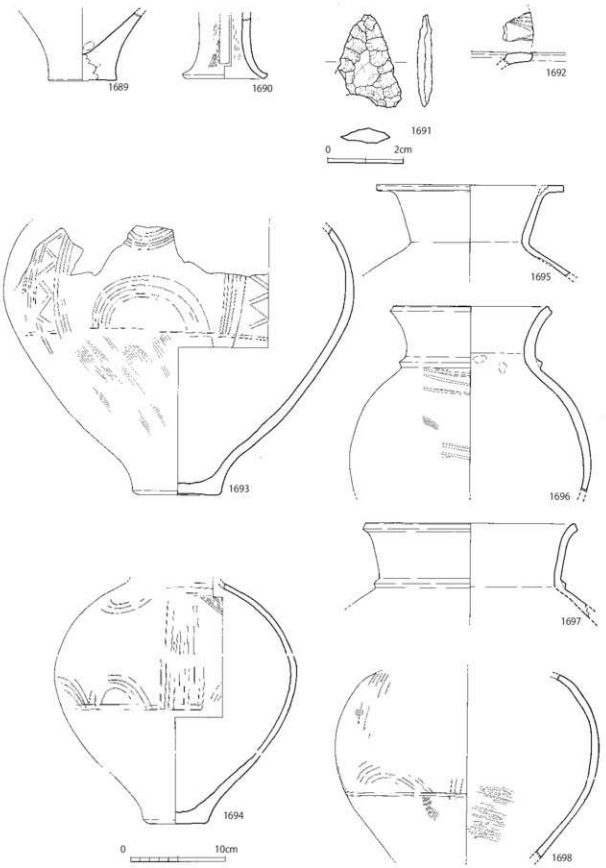
1808 は粘板岩製の磨製石鏃、1809 は姫島産黒曜石製の打製石鏃未成品、1810 と 1811 は姫島産黒曜石製の打製石鏃、1812 はサヌカイト製の打製石鏃、1813 は砂岩製の敲石（磨石）である。第 390 図 1814 は安山岩製の敲石、1815 は安山岩製の台石である。1816 は碧玉製の管玉である。


A
2
3
2
b
66.500m
1
A
4
A'
B
5
第１トレンチ
1. 黒褐色土層　粗粒　含焼土（二次堆積）
2. 暗茶褐色土層　湿黄褐色砂粒　若干
3. 暗茶褐色土層　粗粒
4. 黒茶褐色土層　湿黄褐色土　砂粒　多量
5. 黄褐色土層　湿小礫（地山）
a. 黒褐色土層　湿カーボン
b. 茶黒褐色土層
A. 粘質粗粒黄黒褐色土層
B. 粘質黒茶褐色土層
B
66.500m
B'
木根
1
2
3
3
2
炭化物
第１トレンチ南側
1. 粗粒茶黒褐色土層
2. 粗粒暗黄褐色土層（土器包含）
3. 粘質暗茶褐色土層（地山）
第1トレンチ
第3トレンチ
C
1
66.500m
C'
3
4
2
第３トレンチ
1. 黒褐色土層（遺物包含）
2. 黒茶褐色土層（堆積土）
3. 黒黄褐色土（地山）
0
5m

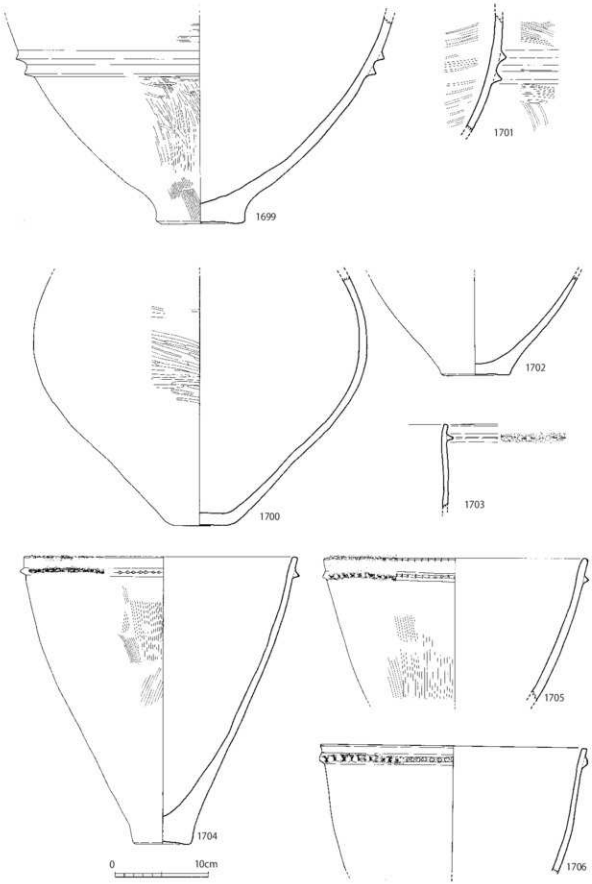
第 378 図　９次２号溝



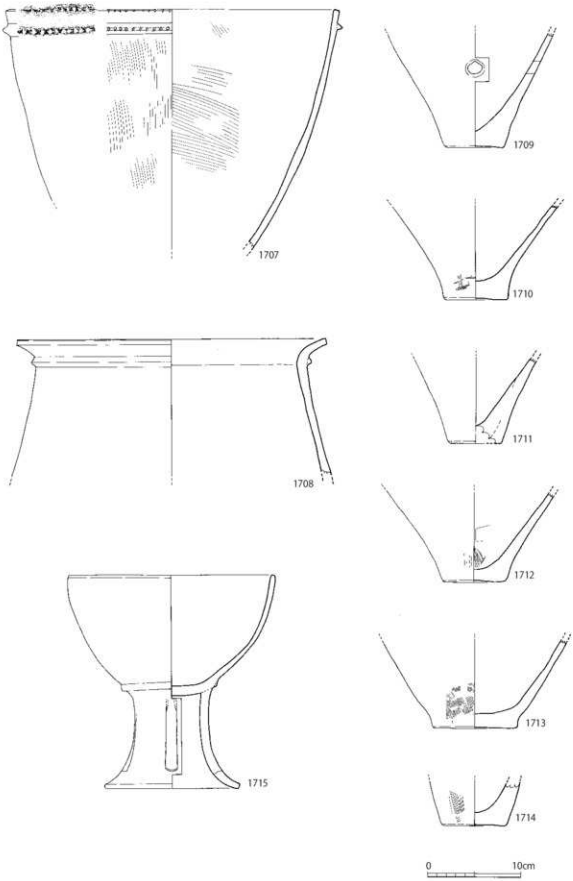
第379図　9次出土遺物①



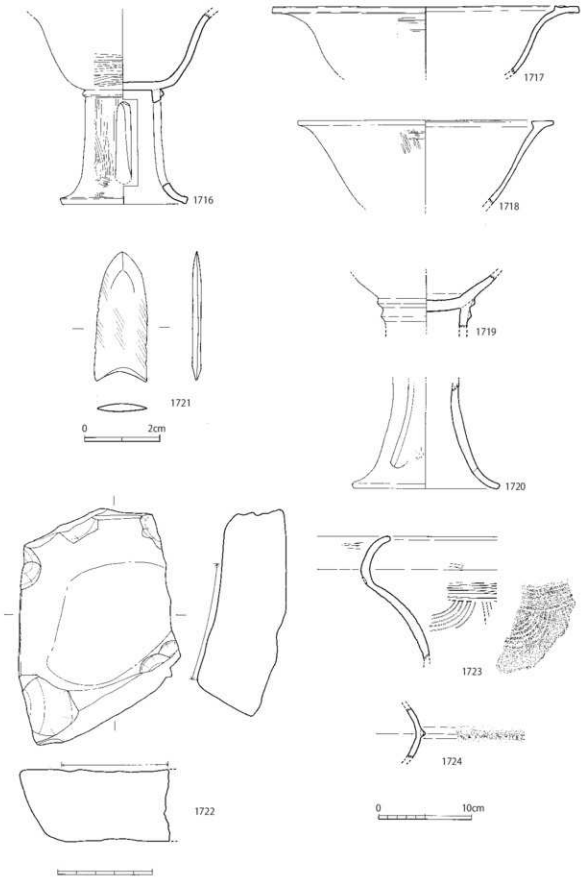
第380図　9次出土遺物②



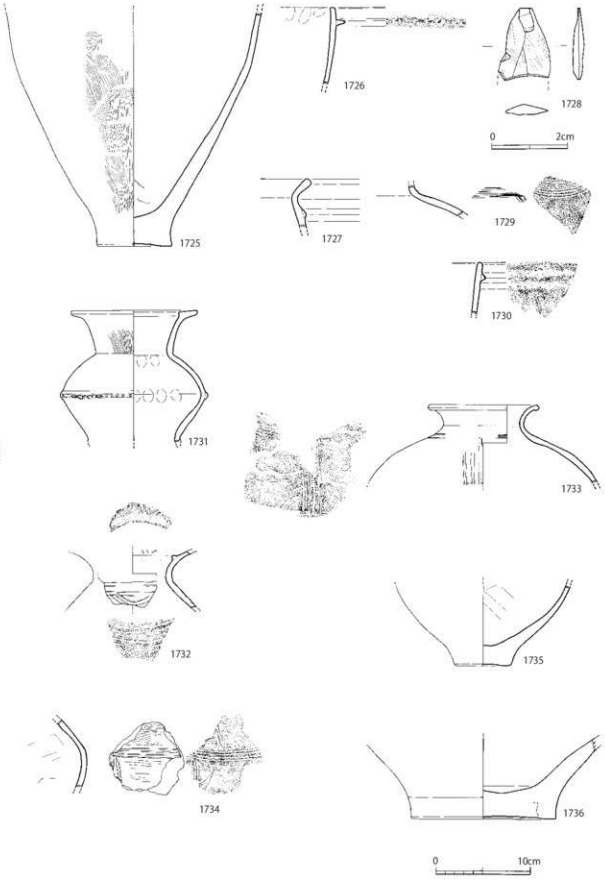
第 381 図　９次出土遺物③



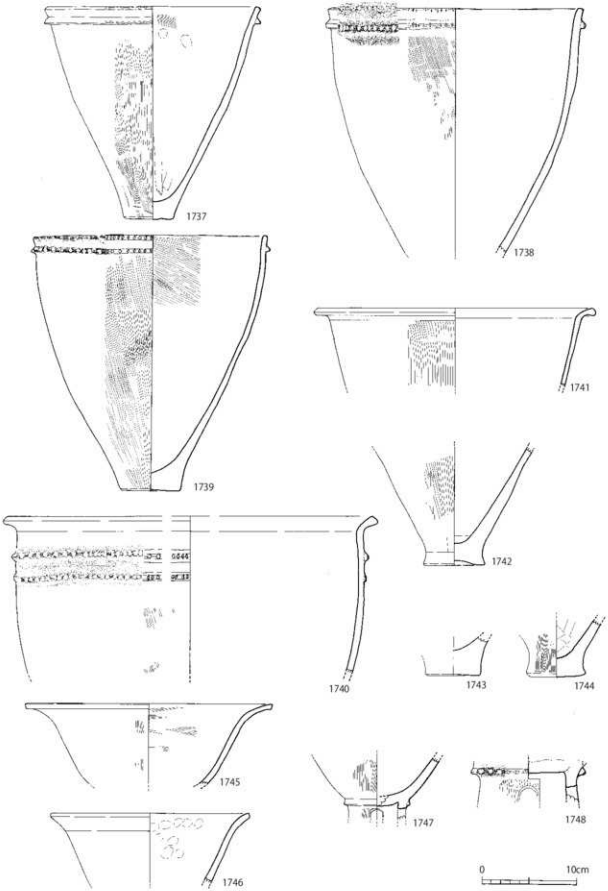
第382図　9次出土遺物④



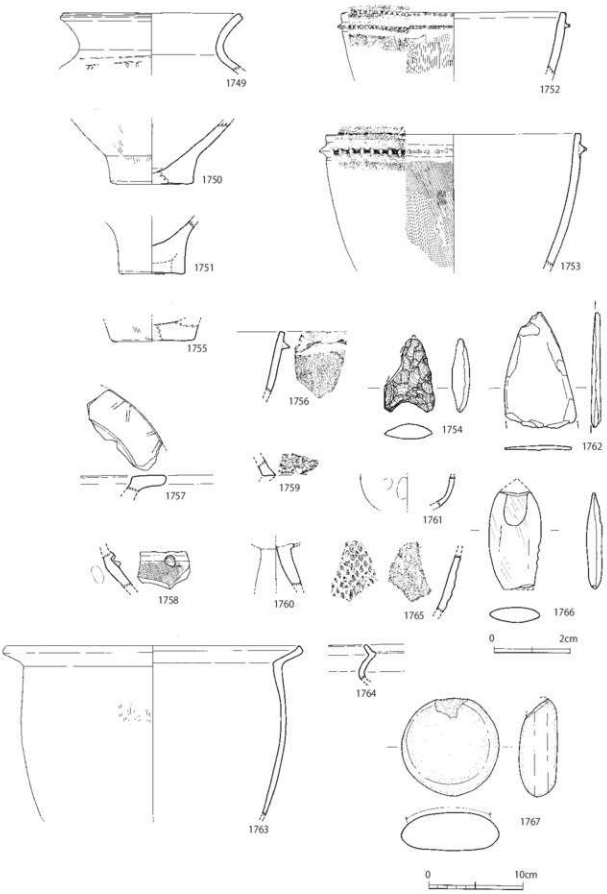
第 383 図　９次出土遺物⑤



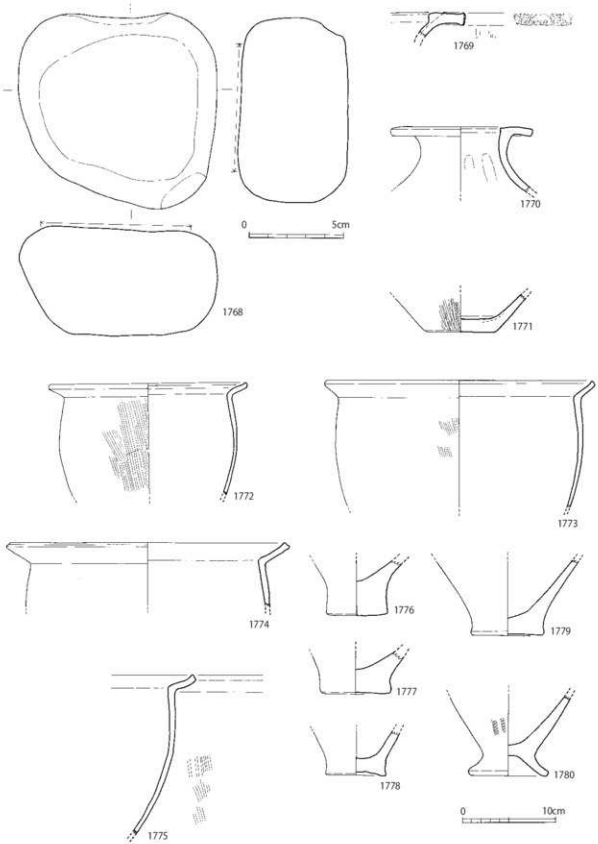
第384図　9次出土遺物⑥



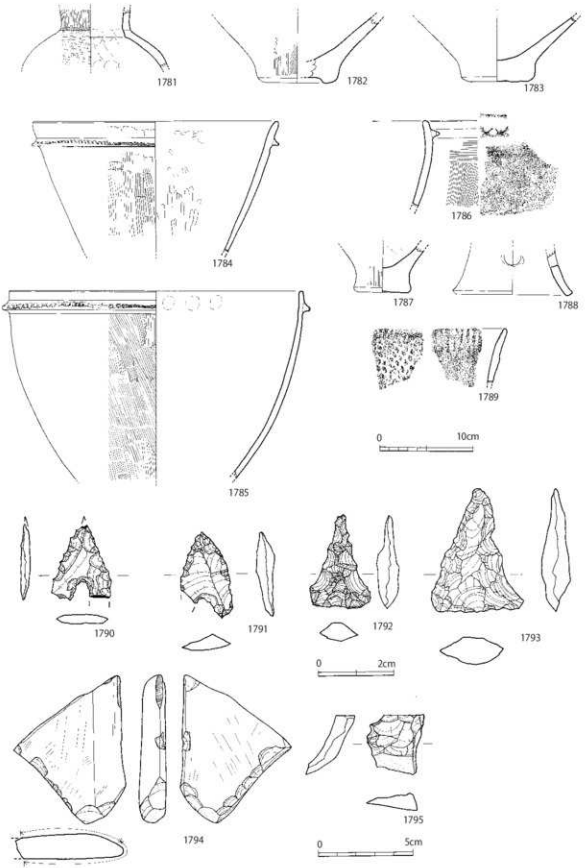
第 385 図　９次出土遺物⑦



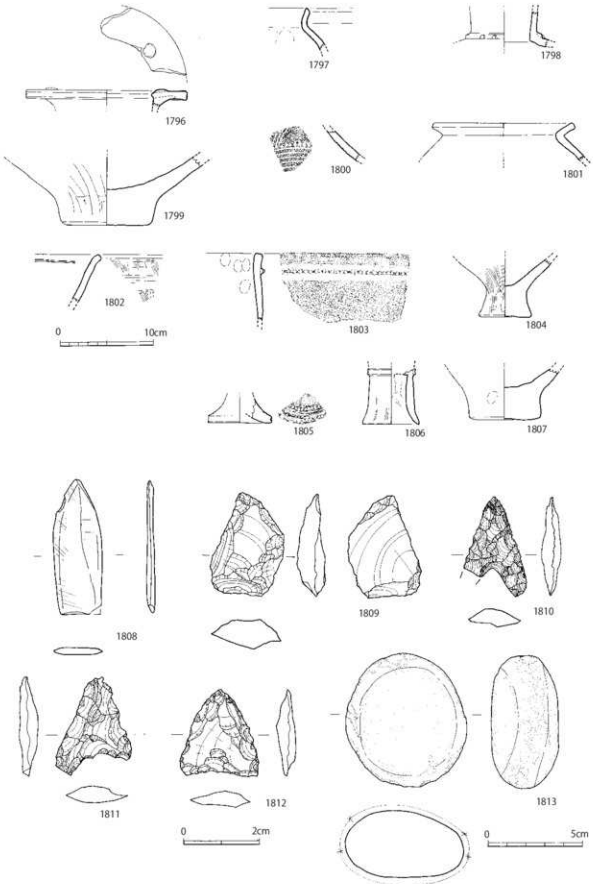
第 386 図　９次出土遺物⑧



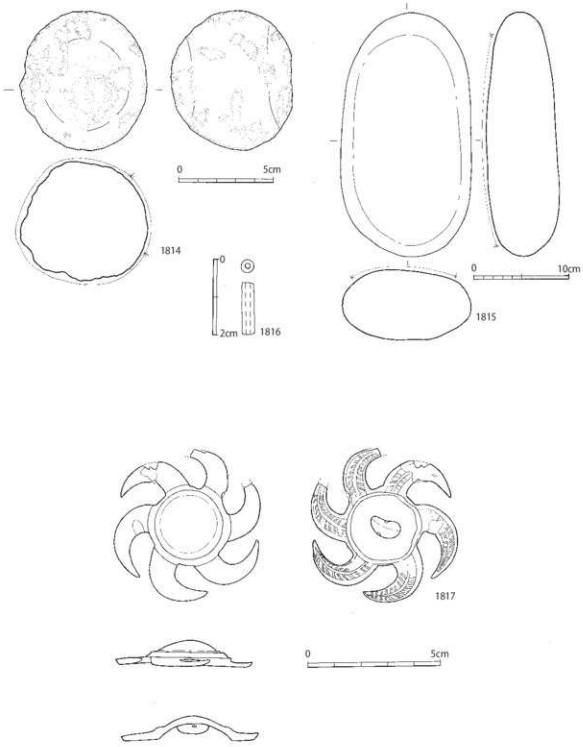
第 387 図　９次出土遺物⑨



第 388 図　９次出土遺物⑩



第 389 図　９次出土遺物⑪



第390図　9次出土遺物⑫

（5）まとめ

これまでの１次から８次調査が雄城台台地の平坦面（台地上）であったのに対し、９次調査は台地に小さく切れ込んだ谷に面した傾斜地での調査となった。台地上とは5m 程の比高差がある。遺構の残りは傾斜地ということもあって悪かった。特に弥生時代後期と考えられる竪穴建物群は、全形が確認できたものはない。一方、弥生時代中期の貯蔵穴と考えられる土坑群は、本来の遺構の掘り込みが深かったことがあって、床面が残存していた。そのためもあってか、良好な形で出土した土器の多くは中期に属するものであった。

さて、今回の出土遺物で最も注目されるのは、大分県で初めて出土した巴形銅器である。ほぼ完形でピットから出土したものである。残念ながら、共伴土器がなく時期の比定はできないが、状況から弥生時代後期のものであるのは間違いない。形態上の特徴から、最古式（弥生時代後期前葉）とされる長崎県ソウダイ遺跡例に近く、雄城台遺跡例の製作年代もこのあたりに位置づけられるものであろう。

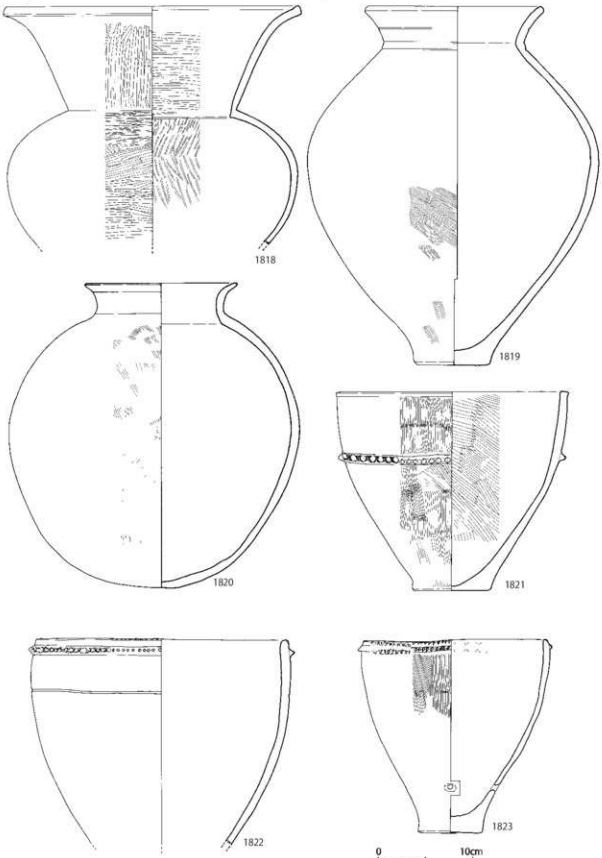
総括でも記すように、雄城台遺跡で集落が明確に拡大化し始めるのは弥生時代後期中葉と考えられる。そういう集落の形成と、この巴形銅器が持ち込まれた経緯とは何らかの関係があるのだろうか。一方で、その雄城台遺跡の集落には、少なくとも２つの後漢鏡片が弥生時代終末前後まで保持されていた。後漢鏡片は竪穴建物が廃絶した跡に廃棄され、一方の巴形銅器はピットの中に納められていた。その出土状況から、後漢鏡片が集落内の個人所有に近い形であったのに対し、巴形銅器は集落全体の祭祀に関わる祭器であった可能性を示すものであろう。

９次調査の地点が台地上の集落に登る道沿い、すなわち集落の内と外とを分かつ、観念的な境界であった可能性は高い。巴形銅器が境界祭祀に伴って「魔除け」などの目的で埋納された可能性を考えておきたい。

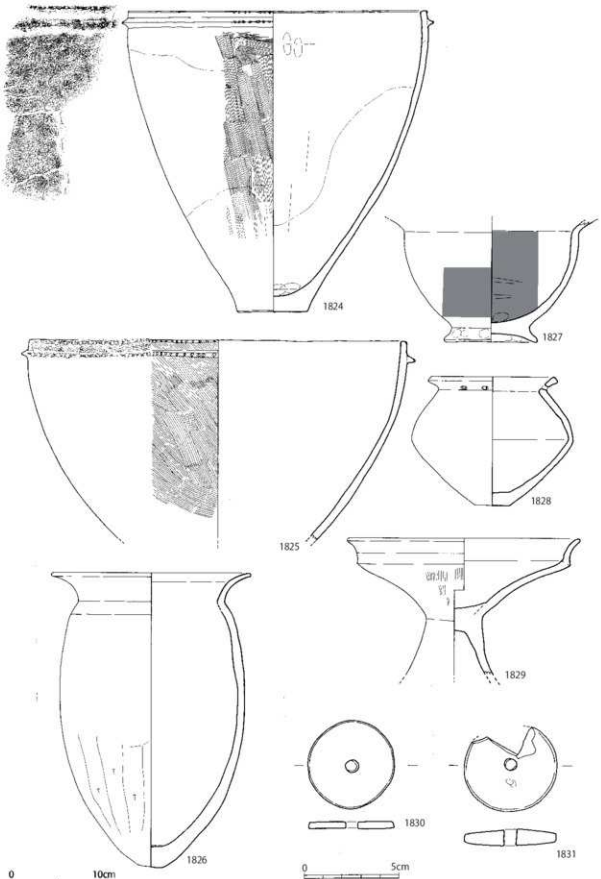
第 11 節　その他の出土遺物

ここでは、1 次調査から 9 次調査までで出土した遺物で、帰属不明なものを説明する。

第 391 図 1818 は口縁部が大きく開く広口壺で、内外面ともよく磨かれている。1819 は頸部に一条の沈線を廻らせる壺で、口縁部は「く」字形に折れて開く。胴部最大径は中位よりやや上に持ち、底部は平底である。1820 は球形胴、丸底の甕で、口縁部は緩やかに外反しながら開く。1821 から第 392 図 1825 は一条の刻目突帯が巡る下城式土器甕で、1821 は突帯の位置が低く、他は口縁部が内湾して開く古相を有する。1826 は長胴で小さな平底を持つ甕、1827 は小さな脚台の付く鉢、1828 は頸部に 2 か所の穿孔を持つ鉢、1829 は坏部上半があまり大きく開かない高坏、1830 と 1831 は凝灰岩製の紡錘車である。



第 391 図　全体一括遺物①



第 392 図　全体一括遺物②

第3章　自然科学的調査

雄城台遺跡出土巴形銅器の自然科学的研究

平尾良光（東京国立文化財研究所保存科学部[注1]）
鈴木浩子（東京芸術大学文化財科学部[注1]）

1　はじめに

大分県教育委員会から大分市大字玉沢にある雄城台遺跡から出土した巴形銅器に関して自然科学的な測定を依頼された。そこで、材料の化学組成の測定と鉛同位体比法による原材料の産地推定および保存、修復作業の一環として錆の状態を知るために錆の科学組成について測定した。

1－1)　巴形銅器について

巴形銅器は弥生時代から古墳時代に見られる青銅製品で、暖海の巻貝であるスイジガイの形を模したといわれ、我が国で固有に発達した造形物である。中央の円形部分が半球状をなす場合と、台形状をなす場合とがあって、前者には中央には鈎状の突起が出ていることもある。この銅器の用途は裏面中央に小さな環状の紐通しがついていることから、衣服に縫いつけたり、古墳時代の例に見られるように、楯や靫に着装する飾り金具と見てよいだろう。巻貝が持つ呪力にあやかり、敵を退散させるのに役立てたのかも知れない。のちには宝器として墓に副葬された。

現在、弥生時代の巴形銅器出土例は、13遺跡25点ほどある。このうち九州の出土例は6遺跡13点と多く、ほとんどが西日本に集中する傾向がある。これまで発見された巴形銅器の出土状態には次のような例がある。

a.　墓の副葬品　―　佐賀県桜馬場、東宮裾、福岡県井原
b.　一括埋納　―　香川県森弘
c.　貝塚、包含層―　広島県西山、熊本県新御堂
d.　土坑上　―　熊本県方保田東原

c、dについては共同祭祀に用いたあと集落内に廃棄した、とする見解もある。

1－2)　雄城台遺跡について

大分市大字玉沢に所在する。これまでの調査で弥生時代前期末（2200年前[注2]）から古墳時代初頭（1700年前[注2]）に造られた80軒以上の竪穴住居跡、溝、貯蔵穴が確認されており、当時この地域には拠点的な大規模集落があったと考えられる。このことは雄城台遺跡周辺は農耕に適した広い平野があり、また河川の氾濫に際しても直接の被害が避けられるなどの立地条件を備えていることからもうかがえる。巴形銅器が出土した第9次調査は、台地の東側の緩い斜面で行われた。遺構の残りは本来の地形が削平を受けておりあまり良くない。遺構は弥生時代中期から後期の竪穴住居跡8軒、土坑2、ピット50などである。

巴形銅器は小ピットの底に立った状態で発見された。ピットの深さ、堆積土などから見て7号住居跡に伴う可能性もあるが、はっきりとはいえない。この資料はほぼ完形で、大きさは全径5.5cm、座径2.9cm、高さ0.9cmと小ぶりである。中央は座と呼ばれる部分で、半球形となっており縁に段がついている。内面には瘤状鈕がつき、さらに鈕にはヒモを通したと思われる穴が見られる。脚は6本あって、左の方向に強くねじる形をしており、裏面は有軸稜杉文を鋳出している。座、脚、鈕など形態上の特徴（半球形状）および大きさから見て、佐賀県桜馬場遺跡、長崎県佐保ソウダイ遺跡出土の巴形銅器に類似し、特に最古式（後期前葉）とされるソウダイ遺跡の例は脚裏面の有軸稜杉文も共通している。

2　科学的測定法

産地推定には鉛同位体比法を利用した[*1]。鉛同位体比はVG社製全自動表面電離型質量分析計　Sector-Jで測定した。資料の錆の一部を採取し、溶解して含まれている鉛を電気分解法で精製分離した。この鉛の一定量を質量分析計に装着し、鉛の同位体比を測定した。値はNBS-SRM-981で規格化した。

化学組成の測定は非破壊蛍光X線分析法を利用した。蛍光X線法による化学組成の測定はフィリップス社製波長分散型蛍光X線分析装置PW1404LSで行った。機器の使用条件は概ね次のようである。

測定したい資料部分をX線照射孔（直径約1cmの円）の上に置き、一次X線を照射した。一次X線の発生にはスカンジウム管球を用い、60kV、50mAの出力を用いた。資料から発生する二次X線は元素毎に波長が異なる

ため、フッ化リチウムの結晶で二次X線を角度毎に分散させ、分散角度におけるX線強度を測定した。約25分かけて角度10度から60度までのX線強度を測定した。

表面に発生した白い錆の化学組成はX線回折法を利用して同定した。X線回折法による化学組成の同定は微小資料測定部が付属しているマックサイエンス社製のMXP18VA―MDAを使用した。機器の使用条件は概ね次のようである。

資料の錆を約1mg程度メノウの乳鉢で細かく粉砕し、試料台に1mm × 1mm程度の大きさに載せた。100μメートルのスリットを用い、40kV、200mAの出力で銅をターゲットとしてX線を発生させ、資料に照射し、微小部測定装置で1000秒測定した。ピークの解析は機器に依存した。

3 資 料

測定に共された巴形銅器は巻頭カラー2で表と裏が示される。鉛同位体比およびX線回折分析測定用の試料は写真1で示される腕の破損部分から採取した。また蛍光X線分析は写真2で示される資料の円形頂上部分で行った。その時の拡大図を写真3で示す。

4 測定と結果

4－1) 蛍光X線測定

巴形銅器の化学組成を蛍光X線分析法で測定した。

測定箇所およびその拡大図を写真2と3で示す。測定された結果の蛍光X線スペクトル図を図1と図2で示す。これらの図から各元素のX線強度を計算して表1で示した。図および表から判断すると、本資料は鉛入り青銅合金で、銅、スズおよび鉛を主成分として含む。少量の銀、鉄、アンチモンなどを含む。この測定においては金属部分を直接測定していないので、正確な元素濃度の測定とはならない。見かけ上スズの含有量が銅よりも高いのは表面の錆の影響であろう。X線回折分析の結果、巴形銅器は二酸化スズ（SnO2）の錆で覆われていることがわかった。それが蛍光X線分析の化学測定に現れたと考えられる。青銅製品に特徴的な緑色系統の色を呈せず、灰白色であるのはスズの錆が主体であるからと思われる。

4－2) X線回折分析

X線回折測定および解析の結果を図3－1～3－4で示す。これら解析の結果、錆の主成分は結晶度が非常に悪いけれども、二酸化スズであることがわかった。保存処置に関連して、この二酸化スズがあっても錆は進行することはないと推定され、通常の保存処理および保存方法で十分であろう。

4－3) 鉛同位体比の測定と結果

i) 鉛同位体比の測定

資料から採取した錆の微少量（1mg程度）を鉛同位体比の測定試料とした。資料を石英製のビーカーに入れ、硝酸を加えて加熱、溶解し、蒸留水で希釈した。この溶液を白金電極を用いて2Vで電気分解し、鉛を二酸化鉛として陽極に集めた。析出した鉛を硝酸と過酸化水素水で溶解し、希釈した。0.2μgの鉛をリン酸―シリカゲル法で、レニウムフィラメント上に載せ、VG社製の全自動表面電離型質量分析計Sector-Jに装着した。分析計の諸条件を整え、フィラメント温度を1200℃に設定して鉛同位体比を測定した。同一条件で測定した標準鉛NBS―SRM―981で規格化し、測定値とした。

ii) 鉛同位体比測定値

測定された鉛同位体比を表2で示した。この値を今までに得られている資料と比較するために鉛同位体比の図で示した。

図4は縦軸が^{208}Pb/^{206}Pbの値、横軸が^{207}Pb/^{206}Pbの値である。この図を仮にA式図と呼ぶことにする。この図で鉛同位体比に関して今までに得られている結果を模式的に表し、今回の結果をこのなかにプロットした*2~5)。東アジア地域においてAは中国前漢鏡が主として分布する領域で、後の結果からすると華北産の鉛である。Bは中国後漢鏡および三国時代の銅鏡が分布する領域で、華南産の鉛と推定される。Cは現代の日本産の大部分の主要鉛鉱石が入る領域．Dは朝鮮半島産の多鈕細文鏡と細形銅剣が分布するラインとして示されることが判っている。またaは弥生時代の後期銅鐸が示した特別な鉛を意味する領域である。この図の中で、巴形銅器を「●」で示した。

巴形銅器はAの領域に含まれた。すなわち華北産の鉛と見ることができる。その中でも華北産の特別に規格化

された鉛を示す a 領域に近く、材料は弥生時代後期に使われていた青銅と近い可能性がある。

このことを確かめるためにもう一つの鉛同位体比の図を調べた。これを図 5 で表わした。この図では縦軸が $^{207}Pb/^{204}Pb$ の値、横軸が $^{206}Pb/^{204}Pb$ の値である。この図を B 式図と呼ぶことにする。この図の中で、A' B' C' D' は中国華北、華南、日本、朝鮮半島産の鉛領域を表す。ここでも巴形銅器は「●」の印で表わされるが、やはり領域「A'」に含まれた。

5 考 察

巴形銅器の鉛同位体比は、A 式図において A 領域、しかも画一的な材料と見られる a 領域に近いところに位置した。このことから弥生時代後期の材料が使われている可能性が考えられる。また、中期の材料が使われたという可能性も捨てられない。巴形銅器については、これまで他の資料の測定結果がないので地域によって違いを示すのか、それとも差はないのかということがわからないので、中期の材料かそれとも後期かという断定はできない。巴形銅器は北九州を中心に出土しているが、それらとこの大分県出土の巴形銅器とがどういう関係にあるのか、そしてその他の地方で出土している巴形銅器と九州地方で出土しているものとでは違いがあるのかという何らかの手がかりが鉛同位体比で認められたならば、興味深いものである。今後の測定に依存する問題点である。他の巴形銅器および大分県出土の関連試料の測定が必要であろう。

6 引用文献

（1）平尾良光, 馬淵久夫：表面電離型固体質量分析計　VG-Sector の規格化について：保存科学 28,17-24(1989)

（2）馬淵久夫, 平尾良光：鉛同位体比法による漢式鏡の研究：MUSEUM：No.370,4-10(1982a)

（3）馬淵久夫, 平尾良光：鉛同位体比から見た銅鐸の原料：考古学雑誌 68,42-62(1982b)

（4）馬淵久夫, 平尾良光：鉛同位体比法による漢式鏡の研究（二）：MUSEUM：No.382,16-26(1983)

（5）馬淵久夫, 平尾良光：東アジア鉛鉱石の同位体比―青銅器との関連を中心に―：考古学雑誌 73,199-210(1987)

編者註

註 1　原書きは 1995 年当時のものである。

註 2　年代については、報告書を提出頂いた当時の一般的な年代観による。

表1　大分市雄城台遺跡から出土した巴形銅器が示す各元素の蛍光X線スペクトルの強度比

角度*2	アンチモン (13.5)	スズ (14.0)	銀 (16.0)	鉛 (28.3)	ヒ素 (34.0)	亜鉛 (41.8)	銅 (45.0)	ニッケル (48.7)	鉄 (57.5)	銅強度 (cpm)
巴形銅器 (FL340)	+	390	4.6	39	−	−	100	−	3.6	1600

*1) 数値は角度 45.0 度における銅の X 線強度を 100 としたときの各元素の強度比
*2) 2θ 角度で表わされた各元素の励起 X 線の位置

表2　大分県雄城台遺跡から出土した巴形銅器の鉛同位体比

	$^{206}Pb/^{204}Pb$	$^{207}Pb/^{204}Pb$	$^{208}Pb/^{204}Pb$	$^{207}Pb/^{206}Pb$	$^{208}Pb/^{206}Pb$
巴形銅器	17.758	15.550	38.427	0.8757	2.1640
誤差範囲	±0.010	±0.010	±0.030	±0.0003	±0.0006

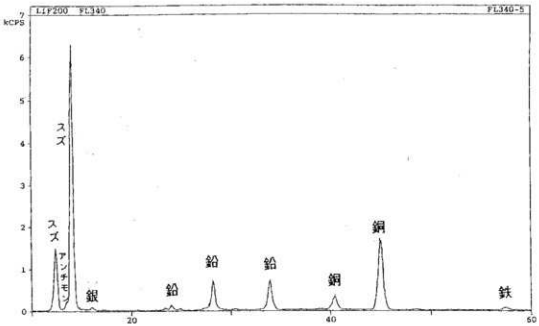


図1 雄城台遺跡から出土した巴形銅器が示す蛍光X線スペクトル図

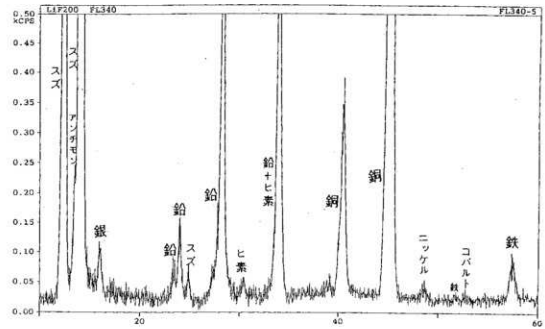
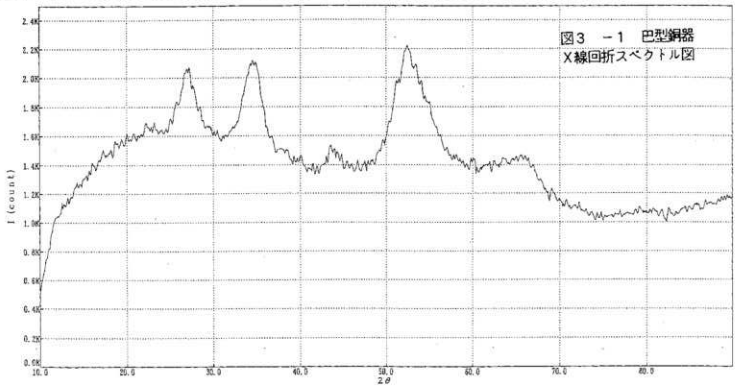


図2 雄城台遺跡から出土した巴形銅器が示す蛍光X線スペクトル図の拡大図

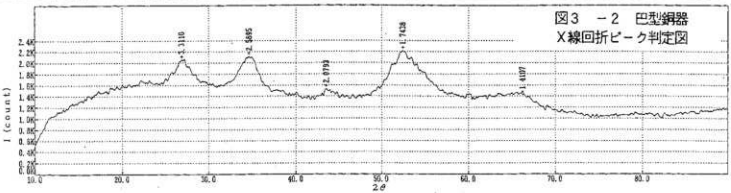
Powder Diffraction Pattern (MCA) Sample :HS-085 Date :95. 1. 17



Sample HS-085		File name tbounkmn/Jan0901 (13):Smooth Orig (12):Raw	
X-ray generator : 18KW		Smoothing	Peak Search
Target : 1.54056 A (Cu)		Data points : 3	Data points : 0
Monochromator : no use		Threshold : 1.00	Threshold : 0
KV : 40.0 KV	Attachment : no use	Background subtraction	Operator
mA : 200.0 mA		Data points : 0	Measuring Date : 95. 1. 6
Step Width : 0.0668 deg		Repeating times: 0	Operating Date : 95. 1.17 15:43:20
Sampling Time : 1000 sec		Comment :	

Sample : HS-085

Powder Diffraction Pattern (MCA) Sample :HS-085 Date :95. 1. 17



No.	2Theta	d	I(count)	I/Io	FWHM
1:	26.9056	3.3110	2042	827	0.3000
2:	34.6112	2.5896	2131	854	1.4448
3:	43.4564	2.0794	1535	590	0.9000
4:	52.4304	1.7438	2224	1000	0.7566
5:	88.1904	1.4108	1425	841	0.2752

Sample :HS-085

Sample HS-085		File name tokunken/Jan0801 [15]:Peak Orig [13]:Smooth	
X-ray generator : 18KW		Smoothing	Peak Search
Target : 1.54056 A (Cu)		Data points : 3	Data points : 15
Monochromator : no use		Threshold : 1.00	Threshold : 5
KV : 40.0 KV	Attachment : no use	Background subtraction	Operator
mA : 200.0 mA		Data points : 0	Measuring Date : 95. 1. 6
Step Width : 0.0688 deg		Repeating times: 0	Operating Date : 95. 1.17 15:43:10
Sampling Time : 1000 sec		Comment :	

Sample :HS-085

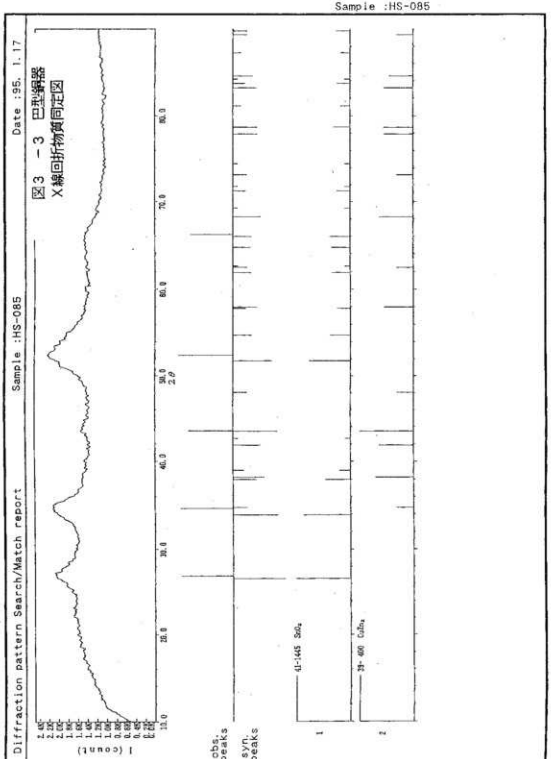


図3 －4 巴型銅器
X線回折物質同定表

<< DIFFRACTION PATTERN SEARCH/MATCH REPORT >>

File: tobunken/Jan0601 Sample: HS-085 Date: 95. 1.17 15:42:51
JCPDS File: Minerals Search mode: N+I
Shift: 0.00(deg) Error window: 0.50(deg)
Elements specified (positive)(negative)(major)(minor): (Cu Sn) (---) (---) (---)

List of possible phases

No.	E	I	m	Rp	Rd	Ri	Re	PDF No.	Chemical formula / Compound name	Vc
1:	9	(1	2	15	0	59	100)	41-1445	SnO_2	*
2:	7	(1	2	23	0	31	100)	39- 400	$CuZn_2$	*
3:	38	(2	6	88	0	43	100)	44-1436	Ag_2CuS	
4:	35	(3	5	54	0	66	100)	26-1117	Cu_7Te_5	
5:	30	(0	4	45	0	68	100)	41- 579	$Au_4Cu(TePb)$	
6:	25	(2	4	47	0	53	100)	22- 601	$Cu_2(SbTl)$	
7:	19	(1	5	41	0	47	100)	40- 501	$CuFe_2(PO_4)_2(OH)_2$	
8:	19	(2	4	33	0	57	100)	19- 406	$(AgCu)_2S$	
9:	17	(0	2	27	0	62	100)	6- 680	$Cu_{2-x}Se$	
10:	12	(2	4	31	0	40	100)	29- 555	$(NiFeCu)_{.75}Ir_{.25}S$	
11:	11	(1	2	16	0	71	100)	35- 544	Ag_2ZnSnS_4	
12:	9	(1	6	25	0	38	100)	27- 279	$PbTl(CuAg)As_2S_5$	
13:	9	(1	5	29	0	31	100)	25- 284	$CuPbTlAs_2S_6$	
14:	8	(1	5	26	0	32	100)	12- 512	$CaCuSi_4O_{10}$	
15:	8	(1	4	19	0	45	100)	25- 176	$CaSnSiO_4$	
16:	8	(1	3	27	0	31	100)	22- 362	$(SnFe)(SnTaNb)_2O_8$	
17:	8	(1	2	17	0	45	100)	40-1456	$Cu_4Fe_4(VO_4)_6$	
18:	8	(1	5	36	0	23	100)	42-1444	$PbCuAsO_4(OH)$	
19:	8	(0	9	43	0	19	100)	39-1358	$Cu_2(AsO_4)(OH)_{.5}H_2O$	
20:	8	(1	4	29	0	26	100)	40- 500	$(CuAg)_{.5}HgS_2$	
21:	7	(0	5	17	0	43	100)	21- 458	$Pb_2CuCl_2(OH)_4$	
22:	7	(0	4	30	0	25	100)	32- 348	CuS_2	
23:	7	(0	6	42	0	17	100)	15- 120	$(CuFe)SO_4.H_2O$	
24:	7	(0	3	27	0	25	100)	35- 523	$(CuFeAg)_4(SeS)_8$	
25:	7	(1	5	19	0	34	100)	33- 487	$CuSiO_4.H_2O$	
26:	6	(1	2	17	0	37	100)	29-1041	$KNaCuSi_4O_{10}$	
27:	5	(0	4	45	0	12	100)	39- 412	$TlCu_2SbS_2$	
28:	5	(1	4	25	0	20	100)	35- 593	$Pb_3Cu(MoO_4)(AsO_4)(OH)$	
29:	5	(0	6	14	0	35	100)	43-1476	$CuPb_{13}Sb_7S_{24}$	
30:	5	(0	3	19	0	24	100)	41-1458	Cu_4TlSe_3	
31:	4	(1	3	31	0	12	100)	39- 340	$PbCu_2(AsO_4)_{2.}2H_2O$	
32:	3	(1	5	20	0	18	100)	38- 384	$(CuZn)_4(AsO_4PO_4)_2(OH)_4$	
33:	3	(0	5	9	0	37	100)	37- 448	$CaCuAsO_4(OH)$	
34:	3	(0	9	43	0	7	100)	42- 617	$AgPb_2Cu_2Bi_{13}S_{22}$	
35:	2	(0	3	15	0	16	100)	44-1459	$BaCu_2(VO_4)_2(OH)_2$	
36:	2	(1	5	34	0	7	100)	29- 534	Cu_4AsS_3	
37:	2	(0	6	23	0	8	100)	33- 451	$CuCl_{2.}2H_2O$	
38:	1	(0	4	17	0	7	100)	42-1396	$Cu_3Co_2(UO_2)(CO_3)_4(OH)_{2.}$	
39:	1	(0	4	23	0	5	100)	35- 585	$Ca_2Cu_2SbCl(OH)_4(AsO_4)_{4.4}$	
40:	1	(0	4	7	0	15	100)	41-1394	$KCu_3OCl(SO_4)_2$	
41:	1	(0	7	24	0	5	100)	24- 218	$Ca_2SnAl_2Si_4O_{14}(OH)_{2.}2H_2O$	
42:	1	(0	5	9	0	6	100)	23- 946	$Ca_2Cu_2Si_4O_{10.}.2H_2O$	
43:	0	(0	4	17	0	3	100)	31- 838	$(TaMnNbSn)O_2$	
44:	0	(0	6	14	0	3	100)	30- 490	$CuPbBi_3S_6$	
45:	0	(0	5	15	0	2	100)	8- 136	$Cu_{13}Cl_4(NO_3)_2(OH)_{22.}2H_2O$	
46:	0	(0	5	14	0	3	100)	35- 527	$(CuFe)Pb_6Bi_{14}S_{24}$	
47:	0	(0	5	12	0	3	100)	44-1437	$PbSnS_2$	
48:	0	(0	6	16	0	2	100)	29- 576	$Cu_4(Si_4O_{11})_2(OH)_4.H_2O$	
49:	0	(0	4	15	0	1	100)	25- 292	$CuPbAsS_3$	
50:	0	(0	3	6	0	1	100)	25- 456	$Pb_2Cu(SO_4)(As_2O_4)(OH)$	

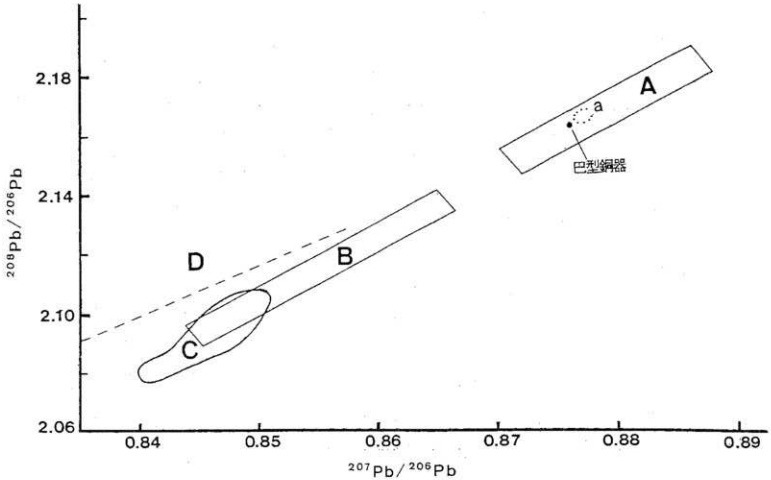


図4 雄城台遺跡から出土した巴形銅器が示す鉛同位体比図 A式図

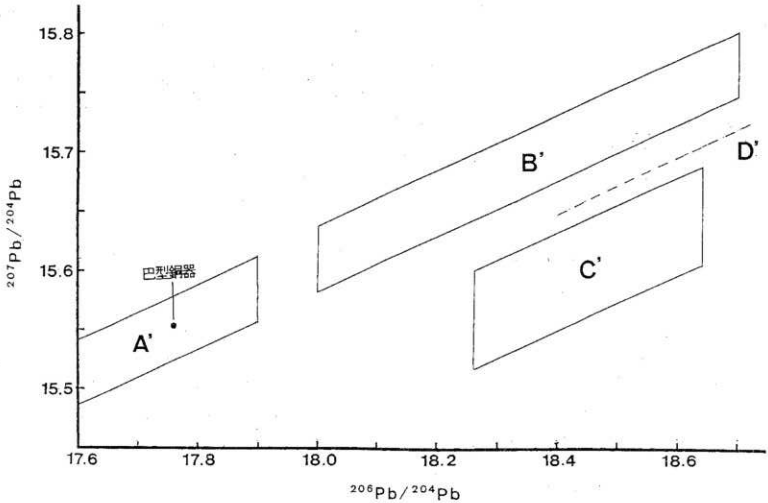


図5 雄城台遺跡から出土した巴形銅器が示す鉛同位体比図 B式図

写真 1　　巴型鍋器
試料採取箇所

写真 2
蛍光X線測定箇所

写真 3
拡大図

第4章　総　括

第1節　雄城台遺跡と東九州弥生社会の位置付け

（1）出土土器の年代的位置づけ

雄城台遺跡では、9次にわたる調査によって、弥生時代から古墳時代前期の竪穴建物104基、土坑105基、溝4条などが発掘され、遺物も大量に出土した。ここでは、雄城台遺跡の遺構の変遷を確認するため、出土した弥生土器の編年作業を行う。

大分県内（東九州）の弥生土器編年は、近年空白であった早期から前期前半の資料の蓄積があり、おおむね完成に近づいたといえるが、細かな地域性や地域相互の併行関係の確定などまだ不十分な点もある。ここではそれらに触れる余裕はないが、雄城台遺跡出土遺物の編年を示すことによって、それらの解明に少しは寄与できるのではないかと考える。

なお、今回の編年にあたっては高橋徹氏の編年案[文献199,200]に依拠したが、一部については画期の設定で異なる部分が生じた。

大分平野の弥生土器編年については、主に下郡遺跡群の出土土器により整理が進んでおり、今回の編年案についても参考にしている。また、研究史については高橋徹氏が整理している[文献199]ので、ここではあらためて触れないが、今回の編年案提示にあたり鍵となる事柄だけ簡単に触れておきたい。

大分県の弥生土器は、「安国寺式土器」や「下城式土器」が知られるが、「様式」概念ではない。あくまで前者は口縁部に波状文を施す後期の複合口縁壺であり、後者は口縁部下に刻目突帯を廻らせる前期から中期の甕である。これは、壺と甕の組み合わせが地域によって異なること、小型土器の在り方も地域性を有すること、などから「様式」として東九州の土器を捉えることが難しいことによる。ただし、以下では下城式土器に伴う半裁竹管によって重弧文を描く壺については、下城式土器壺と表記した。この壺と下城式土器との強いつながりが認められるからである。

以下、雄城台遺跡で出土した弥生時代から古墳時代前期にかけての土器を10期に分けて説明する。

Ⅰ期（前期後葉～末）

板付系の壺に、下城式土器甕がセットをなす時期である。高橋徹氏の編年（以下、高橋編年とする）のⅡ－3期に該当する。

この時期は典型的な下城式土器甕の成立がメルクマールとなる。今回の雄城台遺跡では出土していないが、前時期（高橋編年Ⅱ－1期からⅡ－2期）にもすでに下城式土器の要素を備えた土器がある。それらは、口縁部を小さく外反させ、口縁端部を摘み上げ気味にナデ処理するのが特徴で、突帯の下位に沈線を廻らせるものもある。それに対して、この時期には口縁部を内湾して終わるものが出現する。あるいは直立気味に開くものもある。これらは、後につながる典型的な下城式土器である。この時期の下城式土器甕は、口縁端部直下に刻目突帯文を廻らせる。後の時期のものより、明らかに口唇部に近い位置に廻らせている。

この段階では後に甕とセットになる下城式土器壺はまだ成立していない可能性が高い。しかし、下郡桑苗遺跡出土資料や下郡遺跡で出土する、ヘラ描きで直線文や重弧文を表現する、口縁部が短く直立する壺がこの時期に伴う可能性が高い[文献203]。今回報告した7次8号土坑出土の1184はヘラで重弧文を描く無頸壺で、Ⅰ期に位置づけられるだろう。一方で、口縁部を強く、小さく屈曲させ、体部に沈線文を描く壺もある。おそらく、下城式土器壺は、単一の祖型から出現したのではなく、プロポーションと文様を別々の系譜から受け継ぎ、次のⅡ期に成立したと考えたい。

この時期の主体となる壺は板付系の壺で、口縁部と頸部の間、頸部と胴部の間に沈線文を廻らすもの（820）や、頸部と胴部の間と胴部中位に刻目突帯文を廻らせるもの（1349）がある。これらは下志村3式[文献57]や下郡桑苗遺跡出土資料[文献24]にも見ることができる。

Ⅱ期（中期初頭～前葉）

高橋編年Ⅲ－1期、村上編年浜Ⅰ期[文献20]に該当する。半裁竹管を使用し、直線文や重弧文を描く下城式土器壺が成立する時期である。型式変化としては、口縁部の伸びが徐々に長くなり、体部の最大径が上位にあるものから、中位に移り、球形胴に近づくものが新しい。この変化がⅡ期の中で行われるのか、Ⅲ期になって変化するのかは、

雄城台遺跡では良好な資料がないため明らかではない。口縁部の鋤先状化は、北部九州系の壺がいち早く遂げるのに対して、今のところ、下城式土器壺の口縁部の鋤先状化はⅡ期の内には生じていないと考えられる。

下城式土器甕はこの時期にも口縁部がやや内湾気味に立ち上がるものが一定量存在する。一方で、突帯が口縁端部からやや下がる位置に施されるようになったり、口縁部が直線的に開くタイプのものも見られるようになる。

この時期の最大の特徴は、口縁部が「く」字形に折れて開く甕が出現することである。いわゆる東北部九州系と呼ばれる甕である。口縁端部を上方に小さく摘まみ上げる（跳ね上げる）のが特徴で、この時期のものは胴部の張りが大きくなく、胴部最大径が口径を下回るものがほとんどと思われる。

その他の資料では、円盤充填技法による脚台付き鉢（高坏）もこの時期には顕著になる。今回はⅠ期の資料は確認されなかったが、下郡遺跡などでは中期初頭から出現しているとされている。

北部九州の須玖式土器に系譜を持つものは、断面M字状の突帯を廻らせる広口壺などがあるが、甕に示されるように全般的には東北部九州系の影響が顕著である。

Ⅲ期（中期中頃）

高橋編年Ⅲ－２期、村上編年浜Ⅱ期に該当する。雄城台遺跡では良好な資料が欠落する時期である。高橋氏はこのⅢ－２期を古、新の２時期に分けている。高橋氏も述べているように、その差は判然としないものも多いが、口縁端部を摘み上げる東北部九州系の甕の型式変化（胴部の張りの増大、口縁部の「く」字状の度合い、口縁部下の突帯の上昇など）に根拠を置いている。

大分平野周辺の遺跡で見ると、この時期の下城式土器壺の口縁部は鋤先状をなすものが多いことがわかる[文献202]。坪根氏によると、さらに①施文の割り付け方向が縦から横（水平）を意識するものへ変化する、②器面調整と施文の順番が、追加型施文から順番型施文へと変化する、③勾玉状の浮文などの装飾の多用化傾向が認められる、④半裁竹管による沈線文系から多条の突帯文系へという変化がある、という。今回はそれらを検証できる良好な一括資料がなかったので、個別土器の形態からⅡ期およびⅢ期に区分けするしかなかった。その観点は高橋氏が指摘するように、「口縁部の伸び」をメルクマールとし、そこに口縁部形態、すなわち単口縁か鋤先状口縁かという点を加味し、雄城台遺跡出土の下城式土器壺を見てみると、明らかに下城式土器壺に分類される口縁部は10点近くあるが、すべて単口縁である。そして、口縁部の伸びをみると、短いもの（596、1723、1733など）、と長いもの（902、1433など）の２分類は可能のようである。前者をⅡ期、後者をⅢ期の古段階に位置づけておきたい。

Ⅳ期（中期後葉～末）

高橋編年Ⅲ－３期、坪根編年中期Ⅳ期から後期０期、村上編年浜Ⅲ期に該当する。この時期は、いわゆる小川原式土器[文献195]がメルクマールとなる。小川原式土器は、口縁部は鋤先状をなし、口縁部上面には円形浮文を付し、外面には連続する山形文を施文する。最大の特徴は突帯が、頸部、胴部上半、胴部中位の三か所に分かれて施されることで、それぞれ最大６本、４本、４本となる。次のⅤ期に成立する安国寺式土器壺は頸部と胴部中位に突帯が廻るが、古いものは頸部に８本、胴部に４本程度であり、小川原式土器の胴部上半の突帯が頸部に合体した形となる。安国寺式土器壺との最大の違いは、安国寺式土器壺の古いものは、最大径は中位より上にある倒卵形をしているのに対し、小川原式土器は体部最大径が中位より下に来る、すなわち下膨れの形態を呈していることである。

この段階では高橋編年では下城式土器壺の共伴は確認されない。しかしながら、坪根編年では口縁部が鋤先状になったものが存在するとしている。今回は良好な一括資料に恵まれないのでこれを検証することはできなかったが、小川原式土器が安国寺式土器壺へ変化する過程で、体部最大径の上昇という形態変化を与えたのは下城式土器壺の可能性が高いので、この段階まで使われ続けていた可能性も高い。

小川原式土器に伴う甕は、日出町の成田尾遺跡[文献16]で確認されたように下城式土器甕である。それに東北部九州系の甕が伴う。大分平野ではこの時期になると後者が前者を圧倒する、とされるが雄城台遺跡では当該時期の良好な資料がなく、確認できなかった。この時期の遺構が少ないことの表れであろう。

Ⅴ期（後期初頭）

高橋編年Ⅳ－１期、村上編年浜Ⅳ期に該当する。小川原式土器から変化して安国寺式土器壺が成立する。先述したように、古い安国寺式土器壺は頸部突帯が多条で、口縁部は僅かに肥厚して、外面に山形文や「ハ」字状文を施文し、櫛描波状文はまだ使われない。円形や勾玉状の浮文は多用される。これに伴う甕は今回良好な資料がないため高橋氏の示した資料を見ると、中期に盛行した東北部九州系の甕がわずかに残り、完全に「く」字形に折れて開く口縁部の甕が主体をなす。底部は底径の大きな平底である。今回の出土資料では768などが該当するだろう。下

城式土器の甕と壺は完全に姿を消す。
雄城台遺跡ではこの時期の遺構は少ないと考えられる。

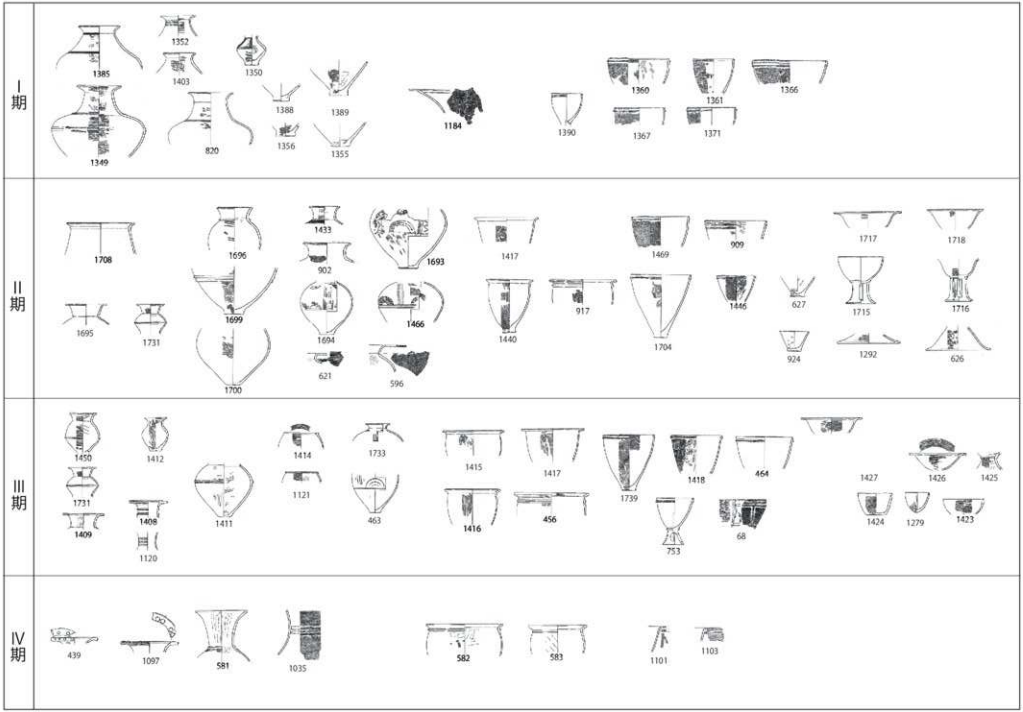
Ⅵ期（後期前葉）
高橋編年Ⅳ－２期、Ⅳ－3a期、坪根編年後期Ⅰ期に該当する。この段階の遺物も極めて少ない。安国寺式土器壺の口縁部外面は、上半部の伸びはなく、前時期に続いて外面には連続した「ハ」字文、または連続山形文がヘラ描き、または押圧される。甕は「く」字口縁で、底径の大きな上げ底状を呈すると考えられる。
雄城台遺跡では、この段階の遺物はほとんどない。

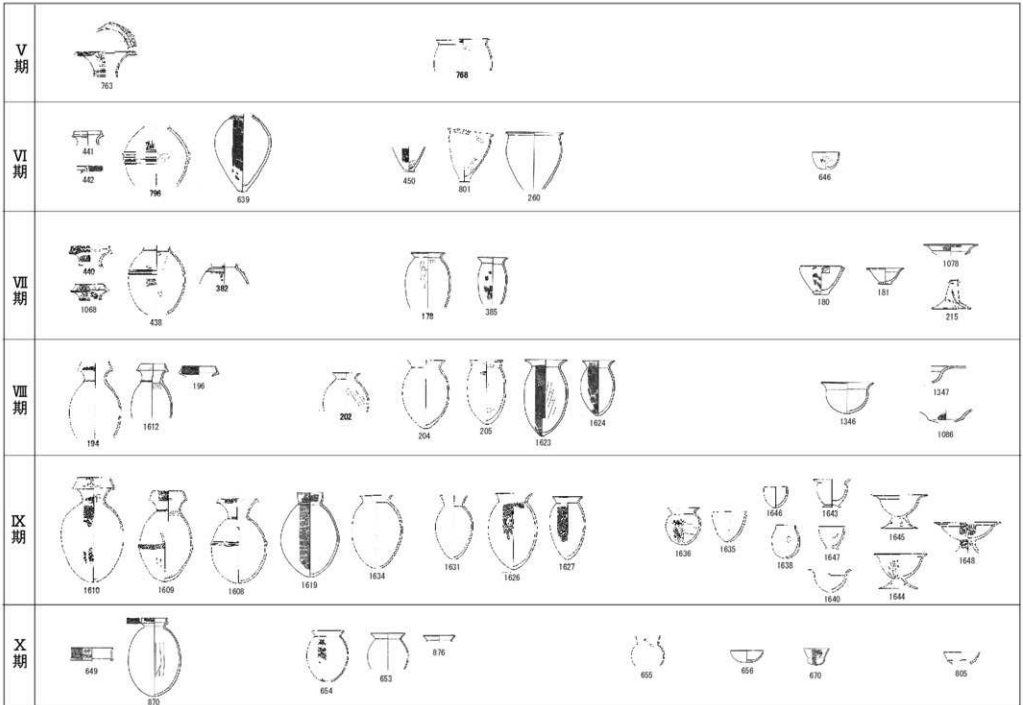
Ⅶ期（後期中葉）
高橋編年Ⅳ－3b、c期、坪根編年後期Ⅱ期に該当する。安国寺式土器壺の口縁部上半が拡張を始め、その外面に一条の櫛描波状文が描かれるようになる。甕は、前時期までの中期的なプロポーションから脱し、完全な「く」字口縁の甕になり、胴部は長胴化する。底部は前時期に比べ底径が小さくなる。他の小型器種においても中期的な要素が一掃されるのがこの時期である。高坏の脚部に円孔を穿つものが出現する。
雄城台遺跡においては、この時期からⅡ期の貯蔵穴群に次いで、再び本格的に集落が営まれるようになる。この動きはⅨ期まで続くことになる。

Ⅷ期（後期後葉）
高橋編年Ⅴ期、坪根編年後期Ⅲ期に該当する。安国寺式土器壺の口縁部上半はさらに拡張が進み、二条の櫛描波状文が描かれるようになる。甕は長胴で、底部は底径の小さな上げ底、または平底となる。高坏は口縁部上半が大きく伸びるようになる。

Ⅸ期（終末）
高橋編年Ⅵ期、坪根編年の後期Ⅳ期に該当する。雄城台遺跡では、8次調査の溝から一括で良好な資料が出土しているので、セット関係も確実である。それによると、基本的に安国寺式土器壺の口縁部上半は大きく拡張し、三条以上の櫛描波状文が施されるようになる。しかしながら、1612のように口縁部上半は伸びないタイプも確実に存在する。また、安国寺式土器とともに、単口縁の壺（1623）も存在する。甕は長胴で、小さな上げ底から丸底まで存在する。高坏は、坏部から口縁部への移行が緩やかで、先端で外反して開くものがある。鉢は、口縁部が外反して開き、そのまま丸底をなすものと、円孔を持つ脚部が付くものがある。

Ⅹ期（古墳時代前期）
古留式土器の影響を受けた土器が共伴する。安国寺式土器の口縁部上半はほぼ垂直に立ち上がり、外面に櫛描波状文を施す。甕は内面ヘラケズリにより器壁が薄くなり、口縁部はやや内湾気味のものと外反して開くものがある。小型壺は中型のものと、いわゆる小型丸底壺がある。鉢は浅く、丸底を呈す。
時期巾があるが、出土遺物が少ないため、古墳時代前期で一括した。


Ⅰ期
1385
1352
1403
1350
1388
1389
1349
820
1356
1355
1184
1390
1360
1361
1366
1367
1371
Ⅱ期
1708
1696
1433
902
1693
1417
1469
909
1717
1718
1695
1731
1699
1694
1466
1440
917
1704
1446
627
1715
1716
1700
621
596
924
1292
626
Ⅲ期
1450
1412
1414
1733
1415
1417
1739
1418
464
1427
1426
1425
1731
1409
1408
1120
1411
1121
463
1416
456
753
68
1424
1279
1423
Ⅳ期
439
1097
581
1035
582
583
1101
1103



第 395 図　雄城台遺跡出土弥生土器編年図

（2） 出土遺構の年代的位置づけと遺構の変遷

前節で行った編年によって各遺構の時期の検討を行った結果は、第２章「調査の成果」の各遺構の説明の最後に記しているので、ここでは総括的なことを記す。ただし、第２章の各遺構の所でも記しているが、明らかに後期の遺構であるのにも関わらず、掲載した土器がほとんど中期のものであったり、出土遺物が少なかったりして、必ずしもすべての遺構の時期が確実に押さえられるわけではない。

大分平野では中期は円形建物が主で、一部小型の方形建物が存在する。後期になると、方形建物が増えては来るが、大分平野では後期後葉まで円形建物が使われるため、円形建物というだけで中期のものと判断することはできない[文献50]。雄城台遺跡で計 104 基調査された竪穴建物の内、形状がわかる 92 基の内訳は、円形９基、方形 83 基である。円形建物の内、出土遺物から確実に中期に位置づけられるのは、３次調査Ｂ区１号、２号竪穴建物である。本文中にも記したが、この２基の竪穴建物は、床面を２段掘りにした１軒の建物であった可能性が高い。この調査が行われた昭和 40 年代では類例がなかったが、その後大野川流域で類似の事例が見つかってきた。いずれも中期に属するものであり、雄城台遺跡の事例も中期（Ⅲ期）で間違いないと思われる。その他、７次調査区の 12 号、18 号、23 号も円形建物で、出土土器も中期のものであり、Ⅲ期を中心とした時期に位置づけられるだろう。３次調査区 B5 号は調査面積が狭いので確実ではないが、中期の可能性がある。そうすると、中期の竪穴建物は、３次調査区と７次調査区に集中し、台地全体で言えばより台地中央部に近いところになる。すべての形状が明らかなわけではないが、形状はほぼ円形であると言える。

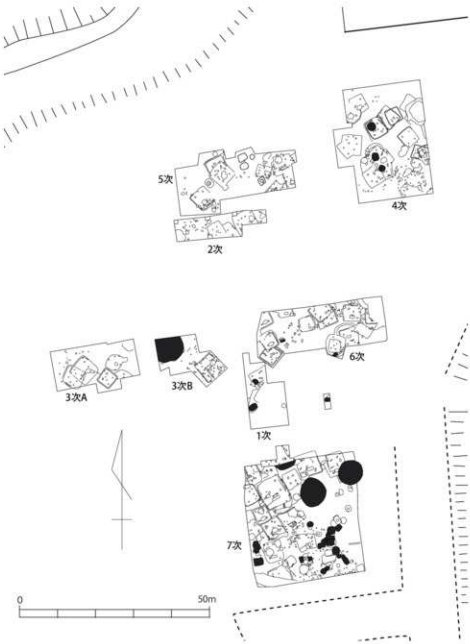
では、多く検出された前期後半から中期に属する土坑との関係はどうなるであろうか。第 394 図にⅡ期からⅢ期とした竪穴建物と土坑のみを網掛けして示したが、興味深いのは竪穴建物の広がる部分にはほとんど土坑が見られず、その南側にⅢ期の土坑が、また竪穴建物群の北側にはⅡ期の土坑群が集中的に作られていることである[注1]。6 次調査 18 号竪穴建物のみはⅡ期に遡る可能性はあるが、それ以外にはⅡ期以前の建物は確認されていない。Ⅲ期の竪穴建物群と、その南にあるⅢ期の土坑群が関連するものであるとすると、Ⅱ期の土坑群を使用した人が居住した竪穴建物も、台地上のどこかにあったと考えた方が良いのかもしれない。Ⅰ期の土坑も第７次調査区で３基が集中して確認されており、近接地に建物群が展開していた可能性がある[注2]。

竪穴建物はⅣ期から Ⅵ期は少なく、Ⅶ期以降に一気に増加する。これはⅣ期（中期末）以降Ⅵ期（後期前葉）にかけて集落が一時的に衰退したことを表しているのであろう。土坑もⅣ期以降は３基確認されているだけである。もっとも、大分市内においては、土坑（特に円形貯蔵穴）は中期末頃には減少に転じ、後期にはほとんど見られなくなるので、雄城台遺跡の状況も同一であると言うことではある。ここでは、後期後半に集落が再び拡大、あるいは全く新しく作られることに注意しておきたい。後期中葉から竪穴建物数が増加するのは、大分平野の沖積微高地に展開する下郡遺跡でも同様であり、大野川流域に広く展開する集落も、大規模化するのは後期中葉である。このことについては節を改めて触れることにする。

掘立柱建物が第６次調査で１基確認されている。周囲にはちょうど重なる遺構はなく、後期の竪穴建物に囲まれているように見える。大分平野周辺では、上野遺跡群[文献53]と横尾遺跡群[文献106]で溝に囲まれた後期の掘立柱建物が確認され、祭祀との関連性が考えられているが、それ以外ではほとんど掘立柱建物が確認されていない。一方、大野川を遡れば、中流域（白鹿山周辺）で後期後半に１間×１間の掘立柱建物（倉庫と考えられる）が竪穴建物数基に１棟といってもよいほどの頻度で検出される地域がある。雄城台遺跡の掘立柱建物は形状からしてもそれらとの関わりはないであろう。むしろ、北部九州に見られる１間×２間の倉庫と考えた方が良いかもしれない。

また、墓については小児用と考えられる壺棺は１基確認されているが、成人用の墓は検出されなかった。東九州では、近年の調査で集落からやや離れた台地縁辺に近い部分で、古市上遺跡[文献40]や都野原田遺跡[文献127]など後期の木棺墓、土坑墓で構成される墓地が確認される事例が増えてきている（表２～５参照）。雄城台遺跡の調査は台地縁辺部にはほとんど及んでおらず、その確認はできないが、台地縁辺部に墓地が存在する可能性は高いであろう。

８次調査区で確認されたⅨ期の溝も注意される。多量に出土した土器群は、ほぼ同型式のもので構成されており、一時期に一括して廃棄している。また、７次調査区の南端でもほぼ同規模で、同時期と考えられる溝が確認されており、これらが関係するのかどうかがポイントとなるが、現状では判断できない。しかしながら、Ⅸ期には周溝が台地上を遡る可能性が高いことがわかったことは重要である。そのことについては後述する。



第 394 図　雄城台遺跡 II 期、III 期の遺構

（3） 雄城台遺跡と東九州弥生社会

はじめに

雄城台遺跡は、大分県内では早い時期の発掘調査事例として著名な存在であったが、正式報告書の刊行が遅れたために、イメージが先行してしまったのは否めない。ある時は高地性集落と捉えられ、ある時は拠点集落である、と言われながらも実態がつまびらかではなかった。そして、ここ20年余りで雄城台の台地を取り巻く平野部の発掘調査が進むにつれ、雄城台遺跡と同時期の水田や水路、墓地が発見されるなど、雄城台遺跡だけでは遺跡の理解が完結しないことが明白になってきた。

そこでここでは、まず雄城台遺跡を取り巻く東九州の弥生時代（文化）の特徴について、いくつかの遺構や遺物からひも解いていきたい。そのうえで、雄城台遺跡の時期的な変遷が周辺の遺跡とどのように噛み合うのかについて考え、雄城台遺跡の歴史的位置づけを見通していきたい。

東九州弥生社会はどのように理解されてきたか

雄城台遺跡のある大分市は、少なくとも古代においては国府や国分寺が置かれ、豊後の中心であった。この地は、大分川と大野川という大分県を代表する河川が形成する広い平野部を有することがその大きな要因であったのは想像に難くない。さらに瀬戸内海に面していること、両河川を伝う交通の要の位置にあることも要因の一つとして挙げられよう。

しかしながら、それがそのまま古墳時代、弥生時代に遡及できるわけではない。洪水などの河川の不安定さや沖積作用などの要素は、安定的な台地、特に火山灰台地にはないものであり、一概に有利不利を言うことはできない。一度地理的要因をニュートラルにした上で、各地の遺跡で出土した遺物について数値化し、その意味について考えてみたい。

その前に、過去に東九州（ほぼ現在の大分県域）の弥生文化についてどのように語られていたか確認しておこう。雄城台遺跡調査直前の昭和46年（1971）刊行の『大分県の考古学』[文献195]で、賀川光夫は東九州の弥生文化について、「県の南部に見られる刻目突帯文土器の如く停滞性もみられ、弥生文化の促進と縄文的封鎖性が混在する」と述べ、特に刻目突帯を有する下城式土器類の評価（停滞性）に基づく見解を示した。この見解に同調するように、昭和51年（1976）の『大分の歴史(1)ふるさと誕生』[文献189]の中で後藤宗俊は、雄城台遺跡のような大集落が「きわめて限られた数しかなかったことは」「東九州弥生文化の停滞性」の顕著な現れであり、「東九州弥生文化の開拓―生産の停滞的傾向ははっきりと見ることができる」とした。また、大分平野の弥生文化は、「背後にひかえる大野川流域の縄文時代後期以来の栄えた畑作地帯の文化の上に立ち、背後の火山灰地帯の集落を意識してできているように思われる」とも述べていた。この段階では、大分平野で確認された弥生時代集落は雄城台遺跡など数少なく、一方で大野原（豊後大野市大野町）や菅生原（竹田市）などの火山灰台地で弥生時代の大集落が次々と確認されつつあった時期であったことを考えると、当然の理解であったと思われる。

その調査の進展を踏まえ、昭和53年（1978）、北郷泰道は「祖母傾山系山岳地域論序説」[文献206]を著し、大野川上流域やそこと共通する甕（粗製甕）が出土する五ヶ瀬川上流の高千穂地域（宮崎県）を「山岳地域」と規定した。そして、「同一型式の甕型土器に表徴される規範をもって、地域共同体としての主体を確立し、しかし、その地域共同体としての特有な性格をこわすことなく、その上に他の地域共同体がすっぽり接木されている、きわめて、＜アジア＞的・ないしは＜列島弧＞的＜小国家＞存立の原理的様態」をそこに読み取ったのであった。このことは、東九州の、さらにその最深部に位置する「山岳地域」の地域論であったとはいえ、東九州弥生社会の様相解明にとっては重要な所見であったと言えるだろう。

昭和54年（1979）に高橋徹は「廃棄された鏡片―豊後における弥生時代の終焉―」[文献198]を書いた。そこでは、「「辺境（！）」と称せられる地域」において、北部九州弥生文化の象徴とも言える青銅鏡が多数出土しつつあった状況に対して、一つの見通しを示した。それは鏡が特定個人の所有、管理となる北部九州に対して、「当地域（大野川上・中流を中心とした豊後）では、有力集団、あるいは特定個人を代表とする共同的所有、共同的管理をうけた、より共同体に帰属するものとして取り扱われた祭祀品」と考えた。その背後にはやはり「東九州弥生文化の停滞性」という呪縛があったと見てよいであろう。

昭和59年（1984）に刊行された『講座日本史1 原始・古代1』[文献202]で、都出比呂志は初めてこの地域（特に大野川上流域）の特性を「畑卓越型」の農耕社会と呼び、網野善彦の言葉を引用しながら「畑作の比重を軽視している研究」に対して警鐘を鳴らした。爾来東九州、特に大野川流域の弥生社会については「畑卓越型」というイメージが定着したが、逆にその実態に迫る研究は行われてこなかった。

その5年後の平成元年（1989）に出版された『大分県史先史篇Ⅱ』[文献188]では、昭和50年代以降に確認された膨大な弥生時代の資料を駆使して、個別具体的な要素（住居跡の型や土器・鉄器・石器・青銅器の在り方など）の詳細な検討はなされたが、東九州弥生文化の総体としての評価については具体的に言及されていない。その背後には、圃場整備や畑地帯土地総合整備事業（畑総）に対応する大規模調査によって出土した多くの遺構、遺物を前に、どのような評価をするべきかという戸惑いがあったように思われる。その中で、玉永光洋は、大野川中・上流域の社会について、各集落の「集団の孤立性や自立性も高」く、「粗製甕の小地域にまとまる分布とその根強い伝統性[註3]については、台地を単位とした隔絶性の大きい地形と無縁ではなく、その領域は強固な同祖的ないし同族的意識で結ばれた地域」であるとした。また、この集団は「豊後国風土記」に登場する土蜘蛛として描かれる集団だったのではないかと考えたことは注意される[註4]。

平成23年（2011）刊行の『講座日本の考古学5 弥生時代（上）』[文献203]の中で、武末純一は「東部九州地帯」を「これまでの研究では、北部九州中枢地域の周辺地域（第二地帯）とされてきた」が、「逆にいえば北部九州流の国のやり方、王をはじめとする首長層を明確にして権力を集中し、国と国の格差を広げて政権を運営するツクシ政権のやり方を最終的には拒否した地域ともいえる」という積極的評価の可能性について言及している。

平成24年（2012）に、小柳は「大分の弥生時代はどこまでわかったのか：大野川上・中流域弥生社会再考」[文献195]の中で、「大野川上・中流域の弥生文化は、縄文文化の直接的な末裔などではなく、米作中心の北回りの弥生文化に対して、畑作中心の南回りの弥生文化の最前線」ではないかと考えた。

このように、資料の少ない段階での「後進的、停滞的」という評価から、資料が増大する中で、特に火山灰地帯における畑作の評価がなされはしたものの、東九州の弥生文化の位置づけは、“発見”から半世紀近くがたとうとしている現在においても、依然としてあいまいなままのように見える。武末の評価がそれを切り開く突破口になることが期待される。

東九州弥生社会の実相

東九州と一口に言っても、筑後川上流域の日田・玖珠地域や豊前に属する中津・宇佐地域といった水田依存度の高い地域と、大分川や大野川中、上流域に広がる火山灰台地のように水田依存度が低く、畑作や狩猟にかなり依存していた可能性の高い地域とに大きく二分できよう。前者は、日田市吹上遺跡[文献128]での銅剣、銅戈を副葬する甕棺の出土や、古墳時代初頭の「豪族居館」の存在（日田市小迫辻原遺跡[文献177]、宇佐市小部遺跡[文献3, 4]）から、北部九州弥生文化の一端に位置づけられるのは間違いないだろう。さらに、第3の地域とも呼ぶべき大分平野や、中小河川沿いの平野部、さらには漁労に比重が高かったと考えられる沿岸部（国東半島から旧海部郡にかけて）などはどのように位置づけられるのだろうか。石包丁と鉄器の出土状況を見ることによって簡単に整理しておきたい。

まず、水田稲作と直結する石包丁について、遺跡ごとの保有率（出土点数÷竪穴建物数）を見ると、沖積平野を望む洪積台地上の遺跡である諫山遺跡（中津市）[文献42]で竪穴建物一基あたり0.32本（中期から後期：57本/180基）、同じく台地上の遺跡である四日市遺跡（玖珠町）[文献84]で0.47本（中期：56本/120基）、同じく台地上の後迫遺跡（日田市）[文献28]で0.62本（中期から後期：59本/95基）であるのに対して、火山灰台地上の鹿道原遺跡（豊後大野市）[文献165]や石井入口遺跡（竹田市）[文献150]（いずれも中期は僅かで、後期が主体）では全く出土しておらず0本、久住高原の小城原遺跡（竹田市）[文献129]0.02本（中期から後期：2本/103基）、脇遺跡[文献151]0.11本（中期：2本/18基）と、主体となる時期がやや異なるとはいえ、火山灰台地上の集落ではほぼ石包丁を持たないということになる[註5]。では雄城台遺跡はどうかというと、0.05本（5本/107基）である。どちらかというと火山灰台地上の集落に近い。これらの数値は集落の主体をなす竪穴建物の時期が、鉄器が急速に普及する後期後半という時期の問題とも言えるが、中期の遺構が一定数ある割には石包丁が少ないという印象がある。水田依存度をある程度反映したものであれば、雄城台遺跡の集落はあまり水田に依存していないことになり、後で述べる台地周辺地域の広域な水田の検出（玉沢地区条里跡）とはやや隔たりを感じる。甕も出土しており、石包丁の少なさの要因は別に考える必要があろう。

ちなみに、大野川上流域のさらに西に展開する阿蘇谷の中心的弥生時代集落である小野原A遺跡[文献136]では、弥生時代後期の集落で0.44本（7本/16基）、同じく下扇原遺跡[文献126]で0.22本（19本/86基）、同じく南郷谷の拠点集落である幅・津留遺跡[文献127]では0.87本（61本/70基）となり、鉄器生産が盛んな阿蘇カルデラ内でも弥生時代後期後半まで石包丁が使われ続けたことがわかる。

次に出土鉄器の器種構成比率を見てみよう。石包丁の分析によってある程度水田依存度の大きかった諫山遺跡（中津市）では鉄鏃と刀子で70%近いが（それぞれ32%、37%）、火山灰台地上の遺跡では、鉄鏃だけで50%から70%近くを占めるという共通性がある。しかも、鉄鏃の次が斧や手鎌（摘鎌）、鉋であり、刀子は少ないという共通点もある。では雄城台遺跡はどうかというと、鉄鏃と刀子で70%（それぞれ40%、30%）と諫山遺跡と同じで

ある。鉄鏃が狩猟具であれば、火山灰台地上の鉄鏃の多さは狩猟依存度が大きかったことを示していると言えよう。逆に考えれば、諫山遺跡や雄城台遺跡ではそこまではなかったのであろう。これはおそらく石鏃の保有率にも反映していると考えられる。

ところで、大野川上流域の西側は、弥生時代後期中葉から終末にかけては、鍛冶遺構の「分布密度は日本列島で最も濃い」[文献207]とされる阿蘇盆地、そしてその先の白川流域につながっている。ところが、1,000基以上の竪穴建物を調査した大野川上流域では弥生時代の鍛冶遺構は見つかっていない。その一方、大野川中流域の白鹿山周辺の高松遺跡[文献2]では鍛冶を行った竪穴建物が2基見つかっている（後葉から古墳初頭）。この周辺の遺跡でも、可能性のある事例がある[注6]ので、この大野川中流域の白鹿山周辺エリアが鉄器の供給地になっていた可能性がある。鉄素材の供給元については、鉄器組成から北部九州ではなく肥後地域との関係が指摘されている[文献207]。また、野島永氏は九州中部地域の鉄器の在り方から、「市場による供給というよりは、首長層あるいは村落内上位階層による分配」を想定する[文献205]。大野川中、上流域における鉄器分析の際の一視点として考えておきたい点である。

以上を踏まえた上で、雄城台遺跡の評価に結びつく大分平野から大野川中・上流域、久住山麓の遺構や遺物を見るといくつかの点で共通点を有する。それらは、竪穴建物における柱配置の特異性（多樣性）、半月形に加工するメンコ（土器片加工品）、多量の緑泥片岩製磨製石鏃であり、内部での偏りはあるものの、粗製甕と呼ぶ独特の甕もその特色の一つである（ハケ調整甕が盛行する地域もある）。これらのうち、他地域にまで広がるのは大分平野でもよく出土する緑泥片岩製の磨製石鏃のみである（むしろ、緑泥片岩の産地は大分平野の東部地帯）。他は、大野川上中流域という限られた範囲で終始している。逆に、他地域との共通性を探れば、安国寺式土器の壺が第一にあげられる。次に、それらの内のいくつかについて、現状を押さえ、意味するところを考えてみたい。

（青銅鏡）

大分平野から大野川流域は、舶載鏡片と国産鏡の出土数が大分県で突出している。そのことについては第2節で高橋が詳述しているので繰り返さないが、一つには調査面積、調査遺跡が多いことが背景としてある。しかし、それ以上にこのルートが肥後地域と接していることも大きいと考えられる。多量に出土する鉄器については、前項で述べたように鍛冶を行ったことも確かではあるが、鉄素材の入手も含めて製品の搬入もこのルートでなされた蓋然性が高い。もちろん、鏡については大分平野経由も当然あるであろう。このように両方のルートを考えておくべきであろう。

この大野川中・上流域、久住山麓（以下、「大野川流域等」と呼ぶ）の集落は、後述するようにⅦ期（後期中葉）になって急激に集落規模を拡大し、集落自体も様々な地形の地点に進出するようになる。一方で、鏡の廃棄はⅧ期から始まるとされている。このことは、仮に集落が拡大、あるいは新規に形成された段階（Ⅶ期）で鏡を入手したのであれば、それほど長くは保持せずに「廃棄」したことになる。漢鏡片や国産鏡は、最近の調査では集落の大小には関係なく出土しており、極端な言い方をすれば、ほぼすべての集落にあったと考えられるほどである。現在この地域では合計32枚出土していることから考えると、調査された竪穴建物が作られた数の何割程度かにもよるが、仮に1%とするとこの地域には本来その100倍の数が、仮に10%とすると10倍の数がもたらされていることになる。おそらく実態はその間にあるものと考える。これだけの数が、おそらく集落形成の大きな画期であるⅦ期以降にもたらされたとすると、「希少性」というものは低下し、別の意味が付与されたと考えることができよう。このエリアの中では、今まで述べたように、竪穴建物の形態から土器や鉄器に至るまで、共通性が貫かれている部分と、小エリア同士で異なる様相を見せる部分が同時に存在している。そのような中で鏡は共通性が認められる要素であり、鏡があらゆる集落に行き届くという現象が何を意味しているのであろうか。おそらく、何らかのモノや情報の動きと同時にもたらされたものであるとしても、数から考えるとそうしばしばあることではなかったであろう。集落にもたらされた鏡は、一定の期間何らかの機能を発揮した後、竪穴建物が廃絶したあとにできた窪みに遺棄された。あるいは、遺棄する行為そのものが、鏡の機能を発揮する場であったのかも知れない。

いずれにしても、その行為の実態を解明するのは難しいが、この大野川流域等には共通する背景が存在したことは確かである。

（安国寺式土器）

安国寺式土器は、中期末に出現し、広く豊後から日向に広がった小川原式土器（壺）と、中期に豊後沿岸部で盛行した半裁竹管で重弧文を描く下城式土器壺の折衷様式として後期初頭に成立する。その成立地は大分平野と考えられる[文献194]。この古いタイプの安国寺式土器（櫛描波状文を持たず、ヘラで連続山形文などを描くもの）は、時

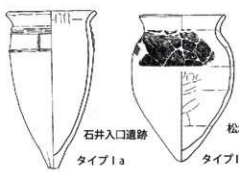
間を置くことなく大野川を遡り、上流域にまで達する（その背後には小川原式土器の急速な広がりがあったと考えられる）。その大野川中流域の大野原台地や上流域（旧市町村名で大野町、竹田市、荻町）の菅生原台地などでは、後述するように研究者が「粗製甕」と呼ぶナデ調整で器壁が厚く、太い突帯を三条から四条廻らせるという非弥生土器的な甕が中期末から使われており、大分平野からハケ調整甕は受け入れなかった。さらにはハケ調整甕のみならず、鉢や高坏、器台などの小型土器も受け入れなかった。大野川上流域で出土する粗製甕と安国寺式土器は、色調、胎土、器面調整技法が異なっており、同一集団が製作したとはとても思えないもので、胎土分析（蛍光X線分析）でも、用いられた粘土は明らかに異なっていた[註7]。一方で、少量ではあるが、粗製甕と同一の胎土を持つ安国寺式土器も存在する。それらの安国寺式土器壺は茶褐色の色調やハケ調整を施さないという器面調整は粗製甕と同一である。すなわち、大野川上流域では、少量の安国寺式土器は製作するものの、大部分はどこかから持ち込まれたことが想定できるのである[註8]。

このように、安国寺式土器はあまり地域性を有することなく、筑後川上流域の玖珠、日田地域を除いては[註9]、後の豊後国域にほぼ重なるように分布する。安国寺式土器の成立地であろうと考えられる大分平野周辺は、その後の型式変化でも主体的な役割を果たしたことが想定できる。

（粗製甕）

次に粗製甕と呼ばれる甕について見てみよう。粗製甕は主に中流域の大野原で主体をなす櫛描の波状文などを胴部に施すタイプ（タイプⅡ粗製甕とする）と、大野川上流域で主体をなす工字状突帯（上下の突帯の間を縦に突帯でつなぐ）を施すタイプ（タイプⅠａ粗製甕とする）の２種類ある。最も古く遡る可能性のある「工」字突帯文粗製甕としては、久住高原の脇道跡で中期末の竪穴建物から、口縁部が短く折れる四条の「工」字状突帯文土器が出土している。今のところ、この土器を遡る「工」字状突帯文を有する粗製甕は知られていない。ちなみに、共伴する甕は多くが肥後の黒髪系の甕と東北部九州系の跳ね上げ口縁の甕である。さらに粗製甕の祖型と考えられる個体は、大田原遺跡（竹田市）[文献141]で出土している。一方で、大野川上流域では黒髪式土器などの肥後型土器が結構な比率で出土するが、それらは大野川上流域から大野川を下ることはない。このことは、肥後方面からの何らかの情報が、大野川上流域で止まったことを示しているのであろう。

「工」字状突帯粗製甕の成立については定説はない。下城式土器の甕の中に僅かに口縁部下の刻み目突帯と、胴部に廻らせる刻み目突帯の間を縦につなぐものがあり、雄城台遺跡では２点出土している。おそらく、下城式土器に伴う壺形土器が半裁竹管で沈線を「工」字状につなぐところから派生したと考えられる。このタイプの下城式土器甕は上流域の大田原遺跡[文献143]でも出土しているが、器面調整が通有の下城式土器に見られるハケではなくミガキである。そして、同じく大田原遺跡で出土した粗製甕の最も古いと思われる破片にもミガキが施されており、下城式土器の「工」字状突帯が、上流域の粗製甕成立に何らかの影響を与えたのは間違いないであろう。



第395図　粗製甕　左　文献150より　右　文献109より

また、大野原台地などの中流域に多い櫛描き波状文を施文する粗製甕は、古いものはヘラ描き沈線を廻らせ、「工」字状につなぐばかりか、下城式土器に伴う壺とまったく同じ重弧文を描く。これは粗製甕の成立に下城式土器壺の意匠が影響を与えたことを如実に物語る。

つまり、大野川中・上流域に展開する粗製甕の「工」字状突帯文は下城式土器甕に（ただし、下城式土器甕の「工」字状の文様は壺から得たものかもしれない）、櫛描き波状文は下城式土器壺にそれぞれ求めることができるのである。このことは、大野川流域等の地域社会成立時の様相を物語る要素として注目される。

しかし、文様の問題とは別に解決しなければならない問題に、粗製甕そのもの、つまり厚手で口縁部を小さく折り開き、砲弾型の胴部を持ち、ハケ調整を全く用いずにナデ調整で整形する甕のルーツである。今のところ、古い形態を持つものは久住山麓の脇遺跡（ここでは、中期後半の段階で「工」字状突帯になっている。）、上流域の大田原遺跡、鳩の原遺跡[文献113]、紙漉遺跡[文献158]、中流域（大野原）の近中遺跡[文献109]などで出土している。同じ時期に後

述のように宮崎経由で花弁型住居が伝わってきた可能性が高いことを考えれば、同じルートでその祖型となる甕が伝わった可能性も考えられる。そのルーツについては以前、南九州に広がる山ノ口式土器を考えたことがあったが[文献195]、今のところ山ノ口式土器そのものが出土したことはないので確定的ではない。いずれにしても中期後半から末に突然姿を現す粗製甕は、口縁部が小さく折れ、器面調整にナデ、ないしはミガキを用い、4本のあないは1本のあまりシャープではない突帯を廻らせる（大部分は「工」字にはならない可能性が高い）という共通点があるので、何らかの範型が存在したことは確かであろう。

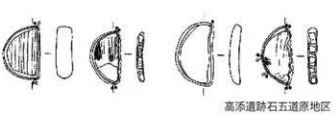
ちなみに、「工」字状突帯文粗製甕は、大野川を下ると豊後大野市犬飼町の舞田原遺跡[文献1]出土例が最東端で、大野川上流域の北に広がる久住山麓もいくつかの遺跡で少量出土する。また、西に行って阿蘇盆地に下れば、南郷谷では安国寺式土器壺と併せて客体としては比較的普遍的に出土するようであるが、阿蘇谷ではあまり出土しない。また、五ヶ瀬川上流の高千穂地域では、突帯の形状が「ミミズ腫れ」と称される細かな摘まみで整形された「工」字状突帯文粗製甕（タイプⅠb 粗製甕）が盛行する。このタイプの粗製甕は豊後内ではほとんど出土しないが、南郷谷の幅・津留遺跡では出土している。

なお、大野川中流の白鹿山周辺と久住山麓では、ごく少数の持ち込まれた粗製甕は出土するが、基本となる甕は大分平野と同様のハケ調整甕である。

（土器片加工品）

土器片加工品とは、土器の破片を円形、もしくは半円形に加工し、しばしば半円形の直線部分に刻みを施すもので、周辺部は摩耗して平滑になっている。特に下流域を除く大野川流域では半月形に加工されたものが中心となり、それが中流域から上流域、久住山麓と広く分布する。特にその中心をなすのは出土量から言って大野川中流域の白鹿山周辺である。上流域ではあまり出土しないが、久住山麓では多く出土するという地域偏差を有する。この遺物も、大分川下流の大分平野では円形に加工したものは少量出土するもの、半月形に整えられ、刻みとミガキを施すものはほとんど出土しない（雄城台遺跡ではわずかに出土）。大分平野の東部を占める大野川下流域では多武尾遺跡[文献49]で刻みを持つ半月形のものが5基の竪穴建物から24点出土しており（竪穴建物1基につき4.8個）、大野川下流域まで広がっていたことがわかる。下流域と中流域の中間にある利光遺跡[文献28]でも出土しており、竪穴建物15基に対して27点（竪穴建物1基について1.8個）と、久住地域と同程度である[註10]。大野川中流域（白鹿山周辺）の鹿道原遺跡では、237基の竪穴建物に対して1,648点なので竪穴建物1基につき7個弱、同じく陣箱遺跡第3次調査[文献184]では後期の竪穴建物41基に対して188点で4.5個、久住山麓の原田第Ⅲ遺跡[文献133]では竪穴建物33基に対して94点で2.8個、同じく都野原田遺跡では竪穴建物83基に対して97点で1.2個、大野川上流域の小園遺跡[文献144]では竪穴建物43基に対して24点で0.5個と、地域的なおおよその傾向はつかめる。ただし、出土の傾向として、どの竪穴建物からも平均的に出土するのではなく、出土する竪穴建物からは多く出土するが、出土しない竪穴建物からは全く出土しない、といった偏りが見られる。例えば、鹿道原遺跡では50個以上を出土した竪穴建物は4基、50個未満で20個以上は同じく12基であり、これら16基で638点、つまり6%の建物で38%の土器片加工品を出土したことになる。これは、土器片加工品を利用して行う何らかの行為が、すべての建物でなされていたわけではないことを示している[註11]。

この土器片加工品が普遍的に出土するようになる時期は大野川中流域（白鹿山周辺）では後期前半である。ただし、近年調査された陣箱遺跡4次調査[文献46]では、中期後半の花弁型住居から5個の半月形土器片加工品が出土しているので、その出現時期は中期後半に求めることができる。そして、この土器片加工品は古墳時代前期まで存在し、その後は集落の衰退とともに姿を消す。



第396図　土器片加工品（文献179より）

用途については「土器製作時の調整具等の考えがあるが、未だそれは想定の域を出ていない」[文献164]とされる。祭祀品ではなく、何らかの実用的な用途に用いたと考えられる。

（竪穴建物）

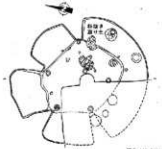
この地域は独特な柱配置で知られている。それとともに、福岡や鹿児島、宮崎で検出数が増加しているいわゆる

「花弁型住居」もこの地域で発見が相次いでいる。ここではまず花弁型住居について見ることにする。

花弁型住居は、今のところ大野川中流域の白鹿山周辺で最も多く確認されており、次いで久住山麓地域である。いずれも中期後半から末である。大野川上流域や中流域の大野原では今のところ確認されていない。大野川上流域では、中流域でであれば花弁型住居（またはその変形タイプ）になる中期後半から末でも方形のプランで、まれに床面が二段掘りになるものがある。土器は肥後型の甕、東北部九州系の甕、須玖系の高坏や小型壺などである（宇土遺跡 A 地点[文献 156]など）。一方、近接する久住山麓でも土器の基本構成は上流域に近い（脇遺跡など）が、竪穴プランは花弁型になるなど異なる。この花弁型住居の伝播ルートが問題となるが、大分平野や大野川上流域では全く確認されていないことから、福岡から筑後川経由で久住山を越えて久住山麓に至るルートか、または肥後経由で久住山麓に至るか（後の豊後街道のルートなど）、宮崎の延岡あたりで北川を遡り大野川中流域に至るルートに限定できるだろう。典型に近い花弁型住居が大野川中流の白鹿山周辺に多いことを考えれば後者のルートの蓋然性が高いように思われるが、形態の違いが伝播ルートの違いを表していることも考えられる。

また、花弁型住居以外にも、大野川中・上流域、久住山麓では共通する特異な形状を有するものが存在する。その一つを挙げると、小型で長方形プランを呈する竪穴で、片側の短辺側中央部が内側に突出するという特徴を持つものが、大野川中流域から上流域、そして久住山麓にわずかではあるが広がっている。どのような意味を持った竪穴建物かは分からないが、同様の用途を持つものであろう。このタイプも大分平野には存在しない。他に方形プランの竪穴建物に複数個所の突出部を有するものがある。これは主に大野川上流域と久住山麓に見られるもので、大野川中流域には及んでいない。逆に久住連山を越えて、筑後川上流域の玖珠盆地にまで達する[注 12]。この突出部を持つ竪穴建物が花弁型住居に祖型を求められるにしても、後期のある段階で一定の型を維持していることは注意する必要がある。

次に竪穴建物の柱配置について見てみよう。大分平野では、弥生時代後期の竪穴建物の柱配置は方形のものは 4 本主柱、円形のものは 6 ～ 8 本前後の円形配置となるのに対し、大野川流域等ではすべて方形基調で、柱配置が極めて特徴的な在り方を示す。様々な報告書で分類案が示されている[注 13]が、中でも最も特異なものは、通常の 4 本主柱の部分が 2 本でセットになって、8 本となるものである。やや大型の建物で採用される傾向はあるものの、小型のものにも採用されている。上流域の石井入口遺跡では 6 基 /97 基（調査された 97 基の内 6 基が 8 本主柱であることを示す。以下同じ。後期初頭あり）、鞍ヶ田尾遺跡[文献 160]では 3 基 /28 基（後期末）、中流域の大野原台地の二本木遺跡[文献 109]1 基 /43 基（後期初頭）、松木遺跡[文献 109]2 基 /43 基、中流域の白鹿山周辺の陣箱遺跡第 3 次調査区 6 基 /31 基（後期初頭あり）、鹿道原遺跡 12 基 /237 基（後期初頭あり）、高添遺跡（石五道原地区と出口地区）[文献 34、161、162、170]20 基 /132 基、下藤遺跡[文献 171]3 基 /32 基（後期後葉）、久住山麓の都野原田遺跡 3 基 /251 基（古墳初頭）、原田第Ⅲ遺跡 1 基 /33 基（古墳初頭）などである。大分平野では全く確認されないが、大分市戸次地区の利光遺跡で興味深い事例が確認されている。大分市戸次地区大野川が急峻な崖をなし中流域から下ってきて、急に開けた場所に当たる。つまり大分平野の最深部ということになるが、そこの利光遺跡脇ノ津留地区で「17 本の主柱」を持つ竪穴建物が調査されている。この柱配置は、中流域以上で確認される 2 本セットの基本形（8 本）に、1 本を加え 3 本とし、さらに各々の間に 1 本（4 本）、そして中央に 1 本で合計 17 本となったものである。つまり、2 本セットの変形と理解できる。ここからは半月形土器片加工品も多く出土しており、地理的にも文化的にも大野川中流域と大分平野をつなぐ重要な場所ということになろう。

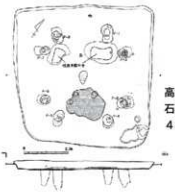


第 397 図　花弁型住居（文献 165 より）

この柱配置は日田・玖珠地域や阿蘇盆地でも確認されない。つまり、大野川流域等に限定された柱配置と言える。少なくとも久住山麓では弥生時代には今のところ確認されておらず、古墳時代初頭に出現する。一方、中流域から上流域は後期初頭には確実に存在する。出現地域の特定はできないが、後期初頭の遺構が中流地域で多数確認されている状況から、中流域のどこかで出現したと考えておきたい。その柱配置を採用するようになったルーツについても今のところ不明と言わざるを得ないが、長く伝統を保持し続けるのはそこに何らかの意味があったと言うことであろう。

また、大野川中流域と上流域とでは、長方形になる竪穴プランが、南北方向に長いのか（中流域）、東西方向に長いのか（上流域）という違いがある。そして両者とも炉跡は中央よりやや南側にあり、さらにその南の壁際に土

坑を設けるという共通点がある。このことも、粗製甕という共通項の上に、施文方法の違いという差異を（おそらく意図的に）生じさせ、アイデンティティを主張しているように見えることと共通するように思われる。



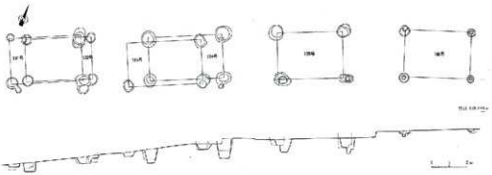
第 398 図　8 本主柱住居（文献 179 より）

（掘立柱建物）

ここでいう掘立柱建物とは、中流域の白鹿山周辺の鹿道原遺跡で初めてその存在が注目された 1 間×1 間の掘立柱建物を指している。これが確認された当初は、竪穴建物が削平されて柱穴だけが残ったのではないかと言われたこともあったが[註 14] その後の周辺地域での発掘調査でも確認されており、存在したことは間違いない。今のところ、初めて確認された鹿道原遺跡での 221 基の確認が最大である。鹿道原遺跡での竪穴建物の検出数が 237 基であり、ほぼ同数と言ってもよいほどの数である。周辺の陣箱遺跡では 3 次調査で竪穴建物 44 基に対して掘立柱建物 31 基とやはりかなりの数となる。大野川流域では、この白鹿山周辺エリアに特徴的な遺構といってもよい。中でも鹿道原遺跡の集落の外れに集中する在り方、さらには「並び倉」とも称される並置状況は、倉庫群を彷彿とさせる（第 399 図）。もし仮に、1 間 × 1 間の建物が倉庫だとすれば、この大野川中流域の白鹿山周辺に、何らかの巨大な物資の集積地が存在したことを直接的に示すことになる。そのことが、大野川流域等、そして大分平野を含めた社会システムが稼働する上でどのような役割を果たしたのかについては、最も注意すべき点と考えられる。

他に集落内で集中的に掘立柱建物が建てられた遺跡では、高添遺跡石五道原地区[文献 179] がある。ここでは 100 基ほどの竪穴建物に対して 23 基の掘立柱建物があるが、その多くは集落内部の竪穴建物が無い 100m × 50m ほどの空間に建てられている。先に記した陣箱遺跡第 3 次調査では、やはり竪穴建物が建てられていない空間に多くの掘立柱建物が建てられていた。

このように、まとまって建てられた掘立柱建物と、数棟の竪穴建物に伴うように単独で 1 棟だけ建てられたものとがある。前者は集落全体、あるいは特定の階層（または特定の個人）によって管理されたもので、後者は集落を構成する複数の竪穴建物群（単位集団）によって管理されたものであろうか。

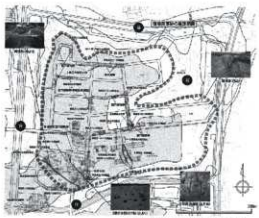


第 399 図　鹿道原遺跡の掘立柱建物（文献 165 より）

（集落の区画）

大野川流域から久住山麓にかけての弥生時代遺跡で、区画を示すような溝が検出される事例は少ない。大分平野では、雄城台遺跡から北西に 2.5km、大分川とその支流賀来川の合流点近くの自然堤防上に立地する賀来中学校遺跡[文献 52] で条溝が検出されている。調査はわずか 15m ほどであるが、幅 2.2m、深さ約 1m の断面は緩い V 字形を呈する溝である。大量の土器が出土しており、それらは後期後葉から終末に位置づけられる。残念ながら、全体の形状は不明である。

雄城台遺跡の北側約 1kmにある、七瀬川が作り出す段丘上の北ノ後遺跡[文献 27] では、幅 1 ～ 2.3m で残存する深さ 0.5 ～ 0.9m の逆台形を呈する溝が、L 字形に折れ、直線的に伸びるのが確認されている。時期は後期後葉から終末で、多量の土器が捨てられている。囲まれていたと思われる内部からは遺構は確認されなかったが（おそらく居住区の端の建物が無い場所が調査区にあたったと考えられる）、雄城台遺跡周辺でも同時期に区画溝が機能していたことを示している[註 15]。



横尾遺跡（文献 106 より）

二本木遺跡（文献 109 より、一部改変）

都野原田遺跡（文献 127 より、一部改変）

北ノ後遺跡（文献 25 より）

第 400 図　東九州の環濠集落

同じく大分平野の下郡遺跡[文献 88]（大分川下流）では、2 カ所で弥生時代後期後葉から終末の環濠が検出されている。E 区で確認されている環濠は幅 2 ～ 3m、深さ 1 ～ 1.5m で、沖積微高地に作られ、径約 65m で 3,000㎡を囲う。数回の掘り直しの後、終末に土器を大量に投棄している。H 区の環濠は最大幅 5.4m、深さ最大 1.87m で、南北に延びる自然堤防を南北に分断するように伸びる。最初の土器廃棄が後葉～終末、最終的な土器廃棄が終末から古墳時代初頭である。

また、大野川下流域の低丘陵にある横尾遺跡[文献 40、76 など　註 16]では、やはり弥生時代終末に小銅鐸と一緒に土器が大量に投げ込まれていた。

大野川中流域では松本遺跡で台地の一部を切り取るように、幅 2m、深さ 0.6m ほどの直線的な溝が「く」字形に伸びる。後期初頭の V 期のもので、調査区内では内部に同時期の遺構はない。

同じく中流域の二本木遺跡[文献 24]では南北に延びる台地の南北の狭まった箇所に溝が掘られている。規模は北側溝で幅 2m、深さ約 1.7m で長さ 200m あまり、南側溝は幅 2m、深さ 0.45m で検出した長さは 8m ほどであるが、全長は 150m ほどになるだろう。南溝の断面はゆるやかな半円形である。南北の溝とも後期後葉に掘られ、集落が廃絶する古墳時代前期まで機能したとされる[文献 24]。この 2 本の条溝によって南北 700m、幅 200 ～ 300m の広大な面積を囲むことになる。ただし、北側半分ほどには竪穴建物がほとんどなく、畑地などとして利用されたのではないかと考えられている[文献 22]。

久住山麓の都野原田遺跡では、台地の基部を切断するように幅 1.2 ～ 1.9m、深さ 0.3m 前後のほぼ直線的な溝が検出されている。内部からは後期後葉から終末の土器が出土しており、溝が埋まった後も古墳時代前期まで竪穴建物が作られ続けたことがわかる。この動きは大分平野と軌を一にするものである。

このように数は少ないが、明確な意図を持った条溝が作られる事例があるものの、大規模な集落が展開する上流域の菅生原などでは検出例がない[註 17]。

このように、大分平野の低地部から大野川中流域、久住山麓にかけて、弥生時代後期後葉には環濠が機能し、終末には埋められた状況がまることがわかる（ただし、一部については古墳時代前期に廃絶）。雄城台遺跡 8 次調査区で確認された溝とまったく同じ時期であることから、大分平野から大野川中流域、久住山麓で後期後葉から終末にかけて、環濠を掘削する何らかの緊張関係が生じていた可能性が高い。この後期後葉という時期は、集落が拡散し、竪穴建物の数が増加する時期である。このことが背景としてあるとすれば、人口増加による耕作地の確保、つまり開拓の主導権争いなども緊張を生む要因になったかもしれない。

（集落の構造）

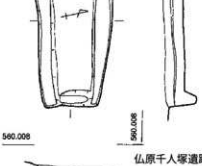
中流域の白鹿山周辺にある鹿道原遺跡では、集落のほぼ全域を調査している。それによると、集落を画す溝はなく、一定の範囲にほぼ南北方向に軸をとる竪穴建物が粗密に分布するのみである。中でも注目されるのが集落のほぼ中央をやや湾曲しながら東西に延びる空間と溝である。ここには建物が建てられておらず、報告者は道ではないかとも考えられるとしている。溝は幅0.3～0.5mで、深さは0.1～0.2mである。最も長い1号溝状遺構は全長80m検出されたが、さらに同様に建物がない細長い空間がさらに100mほど続く。特に1号溝状遺構が東西に延びる空間の両側の竪穴建物は、東西方向に立ち並んでいるように見える。このような在り方は竪穴建物の建築に当たり、集落全体で何らかの規制が働いていることを示しているが、同様の切り合い関係は大規模な集落遺跡で見ることができる（石井入口遺跡など）。逆に小規模な集落では顕著には表れないのは、そこに集落規模による何らかの差異が存在していることを示している。

（墓地）

近年、ようやく弥生時代中期から後期の墓地が見つかるようになってきた。菅生原などの上流域の広大な台地上では現在も全く確認されていないが、少し狭い台地や沖積地に近い段丘上などでは木棺墓を中心とした墓地が確認されている。

現在見つかっている墓地は、久住山麓で7箇所、大野川中流域（大野原よりさらに上流側）で1箇所である。いずれも、木棺墓または土坑墓であり石を使用した例はない。久住山麓の都野原田遺跡、原田第Ⅲ遺跡[文献133]、仏原千人塚遺跡[文献129]は500m×250mほどの範囲に収まる。各々で木棺墓が51基、33基、51基検出されており、その開始は弥生時代後期後葉で、最終的には古墳時代前期前半の前方後円墳と前方後方墳が各1基築かれ、集落そのものも姿を消す。比較的均質な弥生社会から、前方後円墳を頂点とした階層社会への転換が追える希有な事例である。

また、大野川中流域の古市上遺跡[文献40]では、後期後葉に墓地が形成され始め、古墳時代前期前半まで継続する。この古市上遺跡も含め、時期を示す明確な遺物（副葬品）を持つ事例が少なく、厳密な時期を決められないものが大半であるが、現在のところ、すべての墓地の形成時期は後期後葉から古墳時代前期前半と考えられている。つまり、大野川中・上流域、久住山麓で集落が飛躍的に増加する時期と軌を一にするのである。



第401図　木棺墓（文献129より）

このような集団墓地は、阿蘇南郷谷の幅・津留遺跡でも確認されており、幅地区で162基、津留地区で108基もの土坑墓、木棺墓が調査されている。幅地区では近接する土器廃棄土坑が調査されており、時期は中期後半から後期前半が中心となる[文献192]。時期的には大分県内の事例より幅・津留遺跡が先行しており、この影響下で後期後葉に久住山麓で同様の木棺墓を主体とした墓地の形成が始まった可能性を想定しておきたい[注18]。木棺墓や土坑墓で形成される墓地は、大分平野や大野川中流域（白鹿山周辺）では見つかっていない。このことも、同種墓地の受容が阿蘇方面からであった可能性を示しているように見える。

別府湾沿岸地域では、中期末の小川原式土器に伴って石蓋土坑墓や土器片を棺材に利用した土器棺墓などが豊前地域の影響でもたらされる。小川原遺跡[文献110]（杵築市大田）や雄城台遺跡周辺の玉沢地区条里跡の2次調査区[文献57]と3次調査区[文献64]で確認された石棺墓と土坑墓、小児用の壺棺墓群で構成される2カ所の墓地（報告書では墳丘墓とする）などで、日出町の真郡井中原遺跡[文献12]や別府市の羽室遺跡[文献43]の中期後半の石棺墓も含めて、国東半島から別府湾岸にかけ、豊前南部の影響下に中期後半から末に石棺墓が作られたことがわかる。阿蘇カルデラ内の状況とは異なるので、このことが大野川中流域にどのような影響を与えたのか、今後注意が必要である。

前記した様々な要素を踏まえて、この地域の在り方を模式化すると第402図のようになる（特に安定的に機能していた後期中葉以降を念頭においている）。まず、様々な要素によって大野川上流域、大野川中流域（大野原周辺）、大野川中流域（白鹿山周辺）、久住山麓という4つの地域が明確に浮かび上がる。これらの地域の内、大野川上流域と大野川中流域（大野原周辺）、大野川中流域（白鹿山周辺）は起伏の少ない火山性台地に立地し、水田ができる場所が殆ど無い。一方、久住山麓は同じく火山性の台地ではあるものの、台地上に谷が発達し、部分的には水田

が可能な立地となる（僅かに石包丁が出土する）。しかしながら、いずれも畑作が卓越していたことは間違いない。

これら4つの地域の内、粗製甕を使う大野川上流域と大野川中流域（大野原周辺）は、粗製甕の文様が突帯か櫛描き文（古い段階ではヘラ描き）かという違いだけで、極端に言えば意識的に差異を強調しあう関係にあるともいえる（あるいは「双分組織」的な関係？）。一方、大野川中流域（白鹿山周辺）は、地理的に大野原周辺に近いものの、土器の様相（粗製甕や高坏などの小型土器の有無など）では明確な違いがあり、掘立柱建物も白鹿山周辺に集中している。久住山麓も、土器の様相が大野川上流域や大野川中流域（大野原周辺）とは異なる。このように、4つのエリアは、調査事例に縛られるとは言うものの、お互いの間がグラデーションのような状況ではなく、どこかで国境のような領域が明確に定められているのではないかと思われる程、共通性と異質性が明確に存在している。

一方で、大分平野に型式変化の中心があると考えられる安国寺式土器は、大野川流域だけでなく、広く後の豊後国に重なるようなエリアで出土する。一方、粗製甕、半月形に加工された土器片、竪穴建物の特徴的な柱配置などは大野川中・上流域、久住山麓というエリアに分布し、このエリアの外には広がらない。これらからは、この地域を貫く共通性と内部での完結性が強固なものであったことを遺構、遺物両面が示しているといえるであろう。一方で、鉄器については肥後地域との強い関係性が指摘できる。地域だけで完結できるものとできないものがあるのは当然であろう。この大野川中・上流域、久住山麓のエリアにとっては、その両側に位置する大分平野と肥後地域が、エリア内で完結できないものを補完する役割を担った地域とすることができる。

つまり、粗製甕を使う二つのエリア、そしてそのすぐ外側を覆う畑作卓越エリア、さらにそれを包み込む安国寺式土器分布圏といったように何重にも覆われ、安国寺式土器分布圏の中核にあると考えられる大分平野や隣接する後の肥後や筑後、日向といった地域と活発に交流する姿を描くことができる。

また、第402図では十分に表現できない時間的なことに注目すると、この地域では中期の後半から末にかけて花弁型住居という明らかに外来の要素によって集落のスタートが切られるものが多い。その時の土器を見ると、久住山麓では肥後型土器の占める割合が大きいのに対し、大野川中流域（白鹿山周辺）では下城式土器の出土が顕著に見られるという違いがある。一方で、中期末には小川原式土器という花弁型住居に結びつかない土器が国東半島から別府湾岸（大分平野など）、そして大野川中、上流域に展開していくのも何らかの動きを示しているのであろう[文献195]。

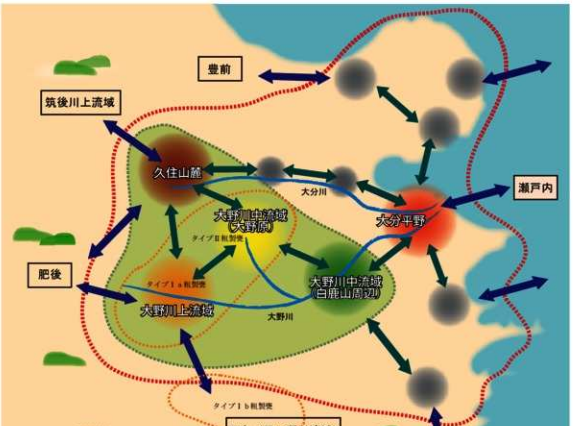
後期初頭になると、安国寺式土器というほぼ豊後地域に共通する土器が成立するが、大野川中・上流域、久住山麓では早くもこの地域に独特な竪穴建物の柱配置を生み出し、半円形土器片加工品を作り出すようになる。そして、大野川中流域（大野原周辺）や大野川上流域で盛行するいわゆる粗製甕（工字突帯文やヘラ描き沈線文のもの）が成立するのもこの時期である。それに符合するように、大野川上流の菅生原などの大規模な台地にも集落が多数進出し、後期中葉になるとその数は顕著に増加し、鉄器の流通（一部生産も）が盛行、そして中国鏡片や完形国産鏡がもたらされるなど、最も繁栄した時期を迎えることになる。この時期が、大分平野から大野川流域、そして久住山麓を貫く、畑作に重心をおいた、閉鎖性と開放性を併せ持った地域社会システムが最も良好に機能していたのである。

東九州弥生社会の成立から崩壊まで

第402図のように東九州の後期弥生時代を描くことができるとすれば、そこに至るプロセスとそれが崩壊するプロセスも当然ながら描く必要性が生ずる。考古学では、土器の変化が社会の変化を鋭敏に反映しているであろうという前提がある。弥生時代から古墳時代への移り変わりはその顕著な例である。その前提に立って東九州の弥生土器を見たとき、どのようなことが言えるであろうか。

近年、下城式土器（甕）の成立プロセスが明らかになりつつある[文献203]が、それによると前期前葉（中段階）とする下志村1式、あるいはそれにやや先行するとされる上七曽子式の中に下城式土器の祖型を見ることができ、次の前期前葉（新段階）とする下志村2式の段階で古式の下城式土器が成立する。その背景には西部瀬戸内地域を介した遠賀川式系の甕（口縁下端凸状甕）の影響があるとされる。そう考えれば、古い下城式土器の口縁部は小さく外反するものが多いのも納得できる。今のところ、これらの動きは大分平野周辺で確認されているので、その成立地も大分平野周辺と想定しておきたい。そして、やや遅れて前期後葉から末にはヘラで重弧文を描く壺も成立してくる。ただ、現在ではこの壺については、中期の半裁竹管文で重弧文を描く壺の祖型と捉えてはいるが、「下城式土器壺」とはされていない。しかしながら、明らかに重弧文という文様の連続性を有し、独自性を発揮するこの壺は「下城式土器壺」と捉える方がよいだろう。ここではⅠ期に存在するヘラ描きの重弧文を有する壺も「下城式土器壺」と呼称する。

そして、この下城式土器の甕、壺のセットは、大分平野などでは甕が徐々に東北部九州系の跳ね上げ口縁のもの



第 402 図　東九州の弥生時代後期社会構造想定模式図

に置き換わっていくものの、中期を通して大分平野周辺の様式を形成する。また、下城式土器の甕と壺のセットは、ごく少数ながら大野川中、上流域まで達し、後期の安国寺式土器分布圏の成立に寄与していると考えられる。すなわち、前期後半から中期後葉までは「下城期」と呼べる時代であった。

その「下城期」に突如全く異なる壺が出現する。小川原式土器である。下膨れの体部から頸部にかけての三か所に突帯を廻らせ、鋤先状を呈する口縁部には浮文を付す。この小川原式土器は国東半島、別府湾岸と「墓」に関係して使われ（そのまま壺棺として使われたり、大きく割った破片を組み合わせた土器棺として使われたりする。）、大野川中、上流域から宮崎の五ヶ瀬川上流、さらには宮崎平野まで分布する[文献 195]。おそらく、この動きの中には、新しい墓制である「石棺墓」も伴っていたと考えられる。何らかの社会的な影響を与えたこの短い時期を「小川原期」としておきたい。

そして、小川原式土器壺と下城式土器壺の折衷様式として安国寺式土器が成立し、大野川中・上流域の粗製甕が下城式土器壺の文様構成を取り入れて成立するのが後期初頭である。そして、古墳時代前期まで安国寺式土器は使われた。この時期を「安国寺期」とする。

そうすれば、東九州の弥生時代（一部古墳時代も含む）は、「下城期」→「小川原期」→「安国寺期」という変遷を遂げたことになる。それぞれの「期」の始まりは社会の画期と想定できるので、弥生前期後半、同中期末、同後期初頭、という３つの大きな変革期があったことになろう。安国寺期の終わりを加えれば４つと言うことになる。

そう考えられるとすれば、雄城台遺跡の出土遺構はどのように考えられるだろうか。雄城台Ⅰ期（以下、単にⅠ期などとする場合は、雄城台遺跡の変遷を指す）は、下城期が安定的に推移しだす、まさにその時期に該当する。雄城台台地周辺の低地部の状況に目をやると、玉沢地区桑里跡第７次調査[文献 70]において、前期中ごろの水田が確認されている。その時期は雄城台遺跡のⅠ期に先行し、下城式土器成立期に該当する。おそらく、沖積地の水田化

が安定した段階で台地上（雄城台）に貯蔵穴が作られたのであろう。この時期の集落は沖積地周辺では見つかっていないが、雄城台遺跡の調査でも当該時期の竪穴建物は見つかっていないことから、集落は台地上にはなく、沖積微高地に展開した可能性も考慮する必要があるだろう。

次のⅣ期（中期後葉）からⅤ期（後期初頭）の画期は、雄城台遺跡においては遺構の数が減少する時期に重なる。この時期は周辺沖積地では、中期中葉から後葉の溝（玉沢地区条里跡２次調査第１調査区[文献60]）や中期前葉から後期前葉の水田（玉沢地区条里跡６次調査[文献62]）、中期末から後期初頭の墓地（玉沢地区条里跡２次調査第３調査区[文献60]、３次調査４区[文献67]）などが展開する。基本的に前期中ごろに始まった水田を耕作する集団が継続的に居住していたと言えよう。その中で、中期末の小川原期に墓地が形成されるのが注目される。この動きは他地域でも確認されており（日出町成田尾遺跡[文献16]、杵築市小川原遺跡[文献110]など）、土器の変革とともに、何らかの社会的変化が生じたことを推測させる。ただし、この時期の動きは雄城台の台地上ではなく、沖積地周辺で展開していたと考えられる。

雄城台遺跡で集落が本格的に営まれるのはⅥ期（後期中葉）である。この後期中葉という時期は、大野川中・上流域で展開する集落遺跡が拡大、安定化する時期である。例えば、中流域の中核集落と考えられる鹿道原遺跡では竪穴建物177基（発掘された237基の内、時期不明の60基を除いた数字）の内、89％に当たる158基が後期中葉以降である。上流域の拠点集落である石入口遺跡では、同じく85基（発掘された97基の内、時期不明の12基を除いた数字）の内、95％にあたる81基が後期中葉以降である。さらに、大分川下流域の沖積微高地に展開する大分市下郡遺跡群でも、後期から古墳時代前期の竪穴建物34基の内、後期前葉以前は１基のみである。

では、雄城台周辺の沖積地では、弥生時代の集落はどのような動態を見せていたであろうか。今のところ、中期に属する竪穴建物は確認されていない。後期になると、ガランジ遺跡[文献23]で中葉の竪穴建物１基や玉沢地区条里跡第10次調査[文献79]では数基の中葉以降の竪穴建物が確認されている。そして、竪穴建物が一定程度まとまって作られるようになるのは古墳時代前期になってからである。やはり、雄城台遺跡でも遺構の少ない時期は、沖積地においても竪穴建物が見つかっていないし、集落が顕在化するのは後期中葉と考えられる。

大野川流域等の集落の動きについては前節で簡単に触れたが、下城期の中で集落の形成が始まり、後期初頭に竪穴建物の柱配置などで独自性が顕在化し、中葉からは竪穴建物数が飛躍的に増加する。

これらのことを総合すると、東九州の内、少なくとも大分平野から大野川中・上流域の集落の動態はある程度共通しているように見える。沖積地の動き、特に水田の動態がまだまだ不分明であるため、総体的な言及は難しいが、玉沢地区条里跡などで確認された中期末の小川原式土器を伴う墓地の形成が、後期初頭まで継続した後、確認されなくなることも何らかの動きを反映したものと考えられる。

ここまでの検討により、土器によって想定した画期（変革期）と集落の動向が完全には一致しないことがわかった。このことは、下城式土器や安国寺式土器で示される東九州弥生社会が、総体としては土器に見る変革期を経ながらも、個別の要素では環境の変化などによって異なる動きを見せるということだろうか。それとも、集落の動態こそが、社会の変革を表しているのであろうか。両者を総合的に考えたとき、東九州における弥生時代から古墳時代前期の時期区分は、集落の動態も加味しながら、「先下城期」、「下城前期」、「下城後期」、「小川原期」、「安国寺前期」「安国寺後期」という６時期に時期区分して説明するのがすなわち最も相応しいように思える。

「先下城期」は刻目突帯文土器が出現し、丹塗り壺、浅鉢がセットをなす時期から、いわゆる遠賀川式土器が伴うようになる時期で、下城式土器が出現する直前までをあてる。この時期の遺跡は、沖積低地から台地上まで立地しているが、明確な遺構を伴うことが少なく、ほぼ包含層出土遺物に限られているため、この期の様相は今のところ不明である。立地によっては水田耕作を行っていたことも推測できる。

その後、沖積平野やそれを見下ろす台地上では、「下城前期」に水田経営が安定し、小規模な集落が作られるようになる。この時期の後半の「下城後期」には一部大野川中流域の河岸段丘上や小さな台地上でも集落が営まれ、畑作も安定的に行われるようになったきた。この段階は、北部九州から大分平野などの沿岸部には中広銅矛などが多量にもたらされ、一部は海を越えて四国などにも搬出された時期であったが、この動きには沿岸部の集団が関与し、大野川中、上流域の集団は関与していなかったことが想定できる。

そして「小川原期」になると一気に大野川上流域まで出土遺跡が広がるものの、依然として中、小規模の台地に限られ、大規模な台地（菅生原など）で大規模な畑作を行うまでには至っていない。

それが、「安国寺前期」になると、大規模な火山灰台地に進出するようになり、「安国寺後期」には爆発的に集落が増加する。おそらく、この「安国寺期」になって、大野川中流域から上流域の物流や人的交流が安定し、特にその後半期には大分平野地域との安定的な関係が構築されたものと考えられる。これらの動きを主導したのは大野川

中流域（白鹿山周辺）であったと考えられるが、もちろん、もう片方の大分平野地域も北部九州地域との関係を背景に、広域に影響を及ぼしていた。そして、この時期には引き続いて北部九州から広形銅矛の多量搬入があり、やはり四国方面への搬出もなされていた。この動きは、大分平野などの沿岸部の集団が関与しており、大野川中、上流域の集団は一切関与していない[21 19]。しかしながら、後漢鏡片や国産鏡は大野川流域、久住山麓でも出土しており、その入手は肥後からのみならず大分平野との関係の中でも行われたことを示唆する。さらに言えば、大分平野との関係は大野川中流（白鹿山周辺）の集団が担っており、大野川上流や久住山麓へは大野川中流（白鹿山周辺）を介して鏡片がもたらされたものと考えられる[21 20]。

このように、大野川流域では中期末（小川原期）から、徐々に重層的な社会的結びつきが形成され、おそらく後期中葉から古墳時代初頭にかけては最も安定した社会が形成されていたと考えられる。この時期に、周辺地域である筑後川（玖珠川）上流域の玖珠盆地や豊前南部地域、さらには阿蘇カルデラ内に安国寺式土器や粗製甕がもたらされ、さらには玖珠盆地には突出部を持つ竪穴プランも影響を与えるのは、大分平野や大野川中流域を核とした社会の情報発信力が高まったことが背景にあるのではなかろうか。

以前、高橋氏は帆載鏡片や国産鏡が竪穴建物の窪みに廃棄されるようになる後期後葉は、「共同体に残る弥生時代の伝統的な価値観の否定が、共同体内部において開始される時期と定義づけられる」としていた（文献187）が、少なくとも布留式土器が出土するまで継続する集落は多く、鏡の破棄が即東九州弥生社会に何らかの影響を与えたとは考えづらい。画期はおそらく大野川流域等に前方後円墳が出現する時期であろう。大野川上流域では仿製三角縁神獣鏡が出土した七ツ森古墳群[文献6]、大野川中流域の大野原では坊ノ原古墳[文献183]、白鹿山周辺ではやや場所が移動して、三重盆地周辺に作られる４世紀末とされる道ノ上古墳や立野古墳など[文献183 21]、久住山麓では仏原千人塚古墳群（前方後円墳１基、前方後方墳１基など）などが造墓される時期を境に弥生時代後期以来の集落と安国寺式土器は姿を消す。

おわりに

前項までに、東九州弥生社会、中でも大分平野から大野川中・上流域、久住山麓地域の成立から崩壊までを素描した。まとめとして、その社会の中で雄城台遺跡はどのような位置を与えられる遺跡なのかを考え、さらに東九州弥生社会のとは何であったのかについて私見を述べてまとめとしたい。

雄城台遺跡の９次にわたる調査では合計約4,000㎡が対象となったので、台地平坦面約４万㎡の１割を調査したことになる。おそらく、雄城台遺跡全体の様相を語るにはやや割合が少ないが、確認された事項から、何が言えるのかを台地周囲の遺跡の状況も踏まえながら考えていきたい。

雄城台遺跡は大分川と大分川支流の七瀬川に挟まれた丘陵が沖積地に突出した部分に立地する。ここから大分川を遡って、現在の由布市庄内町のところで支流である芹川に入り、上流に向かえば久住山麓に至る。一方、雄城台遺跡の場所は大分川流域とはいうものの、比高差30 ～ 40mほどの低平な分水嶺を越えて直線で約４km東に行けば大野川の支流にでる（現在の国道10号やJR豊肥本線が通っているところなど）。そこから上流を目指せば中流域、上流域に至ることができる。このように、大野川中・上流、久住山麓エリアとの関係を考えた場合には好立地であるということができる。

雄城台遺跡からは石包丁が出土しており、沖積地での水田耕作を行っていたのは間違いない。立地から考えても、雄城台の南側に展開する七瀬川流域の沖積地がその候補地である。雄城台台地周辺の沖積地では、七瀬川流域の低地（旧河道）で弥生時代前期から古墳時代にかけて水田が確認されている。平野に広がる可耕地と台地上の居住地という土地の使い分けがなされていたのか、あるいは時期によっては居住区が沖積地に降りていたのか。この点については台地下での調査が進まないと確定はできない。

ところで、台地下の沖積微高地では、中期末の小川原式期に属する「墳丘墓」とされる墳墓が二カ所で見つかっている。その後の展開は追えないが、この雄城台遺跡を取り巻く地域が、大分平野全体の中でも重要な地域であったことは間違いない。その中にあって雄城台遺跡はその中核的な集落として機能していた可能性があるだろう。

後藤宗俊は、昭和51年（1976）には大分平野の弥生文化は、「背後にひかえる大野川流域の縄文時代後期以来の栄えた畑作地帯の文化の上に立ち、背後の火山灰地帯の集落を意識してできているように思われる」とも述べていた[文献189]。ここまで、主に大野川中・上流域、久住山麓のことについて述べてきたのも、大分平野と大野川流域の繋がりを前提として認めていたからでもある。

ここまでのことを踏まえ、あらためて雄城台遺跡を含む大分平野から大野川中・上流域を見たとき、どのような姿を描けるであろうか。大野川中・上流域、久住山麓であれほど一般的であった花弁型住居、独特な柱配置、半月形に加工された土器片[21 22]、大分平野で盛行した下城式土器壺に文様の担型がある粗製甕などは大分平野にはもた

らされていない。逆に大分平野からは北部九州からもたらされた鏡、下城式土器や安国寺式土器（土器そのもの、あるいは内容物）などが大野川、大分川を遡った。このギャップのある在り方こそ、両者の関係を表しているのではないだろうか。つまり、身分や社会的地位、社会状況などを象徴するようなものは決して大野川を下って大分平野にもたらされることはなかったのである。このことは、東九州を包み込む北部九州というさらに大きなエリアで考えたときにさらに意味がはっきりと浮かび上がってくる。青銅製武器型祭器などの配布を通じて北部九州文化圏に組み込まれていた東九州地域（の中にある核心エリア）は、自分たちの内に更なる“東九州”を作り出そうとしたのではないか。鏡の配布は、それを確認する手立てとしては最も有効だったのではなかろうか。ただし、それは配布する側の論理であって、配布を受ける側はそこまでの意識はなかったのかも知れない。受け取った鏡は、比較的早く廃棄されてしまうのであるから。

上記に想定したような社会的関係が弥生時代後期に成立していたとすると、後藤宗俊の言説はまさに卓見であったといえるだろう。そこに「クニ」と呼べるような政治的まとまりが形成されていたのかはわからないが、大分平野、大野川中流域（白鹿山周辺）、大野川中流域（大野原）、大野川上流域、久住山麓といった少なくとも５つの個性を持った地域がお互いに緊密な関係を持ちながら、一方では瀬戸内を通じた四国や中国地方、阿蘇地域、高千穂地域、そして久住連山を越えて筑後川流域とも関係を保持していた。そして、集落が爆発的に増加する後期の後半から古墳時代前期にかけては、非常に安定的な社会が維持されていたといえるだろう。この「社会システム」は、武末純一が東九州地域を「北部九州流の国のやり方、王をはじめとする首長層を明確にして権力を集中し、国と国の格差を広げて政権を運営するツクシ政権のやり方を最終的には拒否した地域」[文献 203] としたことに照らして言えば、５つの地域は（大分平野の勢力が上位にあるという意識があったにせよ）、大きな一つのシステムの歯車としてそれぞれが機能していたとも言えるであろう。このシステムがそれぞれの地域に前方後円墳が築かれる頃になると一挙に崩壊したのである[註 23]。

註

1　南側の土坑群は、Ⅱ期から Ⅲ期にかけて継続的に作られているが、結果的に直径 15m ほどの半円形をなしており、さらに東側の状況は不明ながら、何かの中心を意識して継続的に土坑が掘られたものと考えられる。同じような形状は下郡遺跡でも確認されており（文献 88）、決して偶然の結果ではないと言えるのではないか。

2　ただし、諫山遺跡などでは墓域台遺跡と同様に、竪穴建物が出現する中期前半以前の前期末から中期初頭に土坑群が先んじて展開する。台の原遺跡では貯蔵穴群のみが確認される地域があり、東九州においても前期から中期初頭には板付遺跡のように貯蔵穴群と居住区が明確に分けられていたようである。

3　玉永は「粗製甕」の起源を縄文晩期の粗製の甕に求め、さらに土器組成や石器が縄文晩期にルーツを求められることから「伝統性」という言葉を使っている。

4　この段階では久住山麓の弥生時代遺跡は殆ど確認されていなかった。そこで、久住山麓の弥生時代遺跡の状況が明らかになった現状で解釈すると次のようになるだろう。『豊後国風土記』には大野川中流域の「大野郡」と、上流域から久住山麓の「直入郡」とでは、共通する要素と異なる要素が描かれている。それは、大野郡朝漏野（豊後大野市朝地町）と直入郡称疑野（上流域の菅生原：竹田市菅生）にはまつろわぬ土蜘蛛が住んでおり、一方久住山麓の宮処野（竹田市久住町都野）には土蜘蛛征伐の際に景行天皇が仮宮を建てた、というのである。つまり、大野川中・上流域は征服される地域として、久住山麓は征服を行う側としてイメージされていたことになる。弥生土器らしからぬ粗製甕を作り続けた大野川中・上流域と、大分平野と同様のハケ調整甕を使い続けた久住山麓という対立する図式がその背景として深く沈殿していたのであろうか。

5　しかし、その代替となり得る収穫具に手鎌（摘鎌）が一定量存在することは考慮する必要がある。しかし、中期後半の建物 18 基で構成される脇遺跡では石包丁が僅か２本しか出土していないので、ある程度は地域性があると考えられる。

6　高添遺跡石五道原地区で、三角形を呈する鉄素材がいくつかの竪穴建物から出土している（文献 162）。

7　さらには、胎土の中のプラントオパール分析では、安国寺式土器からはイネ科の機動細胞が見つかるが、粗製甕からは見つからなかった（文献 150）。

8　その搬出地は大分平野のどこかであろうと想定していたが、大野川中流域の白鹿山周辺から三重原あたり（旧町村名では大飼町、千歳村、三重町）の可能性も想定しておく。

9　玖珠町の四日市遺跡などではわずかに出土する（文献 44）。

10　利光遺跡は竪穴建物の柱配置にも大分平野にはない要素があり、大野川中流域と大分平野をつなぐ重要な位置づけにある可能性がある。今後の同地区での発掘調査に注目したい。

11　鹿道原遺跡の時期的な傾向としては、中期から後期初頭はほぼ出土しておらず、後葉でも 20 個以上出土していない。20 個以上出土してい

るのはすべて弥生時代終末から古墳時代前期の竪穴建物である。

12　陣ヶ台遺跡（文献134）で検出されており、この陣ヶ台遺跡では安国寺式土器が出土していることも示唆的である。

13　文献109、150、165、184などで分類が行われているが、今のところ地域性は見いだせない。

14　竪穴建物は前記したように多様な柱配置を持つのに、6本や8本の変則的な柱をもつ掘立柱建物はなく、すべて1間×1間（4本柱）であることは、竪穴建物の削平などではないことを如実に示している。

15　雄城台遺跡の南側の沖積地に広がる植田条里遺跡D区（文献21）では、幅12mほどの溝が3本平行に湾曲しながら伸びているのが確認されている。時期は雄城台遺跡8次の溝より新しく、古墳時代前期前半である。つまり、台地上で集落が姿を消すとほぼ同時に、沖積地で環濠が掘られていたことになる。

16　多武尾遺跡（文献49）を含む範囲を横尾遺跡としている。

17　石井入口遺跡（文献150）と石井入口遺跡北遺跡（文献150）で、試掘調査によって溝が確認されているが、集落を画するような位置にはないので、ここでは触れない。東九州ということでやや範囲を広げてみても、中津市諫山遺跡や玖珠町四日市遺跡などでは台地上を囲むような環濠はない。緊張関係が生じたとしても、局所的なものだったのであろうか。

18　墓地が見つかっていない大野川上流域でも、南郷谷との地理的な事を考えると、久住山麓と同様の墓地があってもおかしくない。

19　久住山麓で鋼戈２本の出土例があるが、それ以外は出土事例がない（文献188）。

20　久住山麓へは大分平野から直接もたらされた可能性もある。

21　この三重盆地周辺には６基の前方後円墳が盆地を取り巻くようにそれぞれ単独で築かれている。最も古い立野古墳は４世紀後半から末、最も新しい竜ヶ鼻古墳は５世紀中頃とされており、この大野川流域等の中では唯一継起的に古墳の造墓が行われる。背後には、白鹿山周辺の集落が消えた後、三重盆地周辺に人々が移った可能性が高い。ただし、その集落はまだ確認されていない。

22　大分平野西側の大分川下流にはもたらされていないようであるが、大分平野東側の大野川下流域の遺跡では出土する。

23　古墳時代前期後半には上流域の菅生原などで集落が姿を消すが、菅生原を下った竹田盆地に近い大野川支流の小河川によって開かれた谷底平野沿いの傾斜地で確認される集落は、古墳時代中期から後期まで継続するものが最近見つかってきている（文献157、158など）。この立地は、初期の単独で築かれる横穴墓から後期の群集する横穴墓の立地に近い。おそらく、4世紀後半にはほとんど姿を消す台地上の集落の人々は、「畑作」を放棄し、小規模な水田が可能な竹田盆地周辺に下りてきたのであろう。これが、「前方後円墳」という首長層の明確化、顕在化による弥生時代後期以来の「社会システム」の崩壊によるものなのか、あるいは台地上での畑作が不可能になるような自然環境の変化なのかは、今のところはわからない。

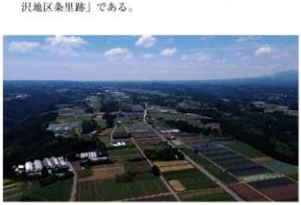
【解説】

次ページの第 403 図と 404 図には大分平野から大野川中、上流域、さらには久住山麓の弥生時代の遺跡を赤色地図の上に表示している。それを見ると、前期の遺跡は大分平野から大野川上流域まで点在しているのがわかる。これらは沖積地に立地しているものが多い。中期になると大分平野での遺跡数が増加するが、大野川中流域の白鹿山周辺や久住山麓で遺跡が集中している。この段階では、沖積地に立地するものより丘陵や台地上に立地する遺跡が多くなる。一方、大野川上流域では小規模河川流域の小規模な台地上に点在するが、菅生台地などの大規模台地（四原と呼ばれる菅生原、恵良原、柏原、篠原などで構成される）では石井入口遺跡と鳩の原遺跡しか確認されていない（それぞれ竪穴建物 1 基のみ）。つまり、広大な台地部分の利用は後期になって始まったと考えても良いだろう。集落が大規模化するのはさらに後の後期中葉から後葉にかけてであった。

それらを確認するために第 2 表から第 5 表に示したのが、各遺跡別の時期別変遷と遺構種別である。必ずしもすべてを網羅できたわけではないし、遺構の数（少数や多数など）も恣意的なものではあるが、全体の傾向は窺うことができる。調査面積にもよるが、各地域の竪穴建物数が最大の遺跡をあげると、大分平野では雄城台遺跡の 104 基、中流域の白鹿山周辺では鹿道原遺跡の 237 基、中流域の大野原では二本木遺跡の 65 基、大野川上流域では石井入口遺跡の 170 基、久住山麓では都野原田遺跡の 250 基になる。これらは少数の中期に属する建物も含むが、多くは後期、特にその後半から古墳時代前期である。年代幅とすれば 150 年間ほどであろうか。これらの遺跡が地域の中核的な集落ということが言える。（ただし、鹿道原遺跡は集落の大部分を調査したのに対し、雄城台遺跡では 1 割程度に過ぎない。また、白鹿山周辺の陣箱遺跡は、広範囲に点在する調査区を合わせると 100 基あまりになるが、全体では 2000 基近くになる可能性を持っているなど、この表からは窺えない要素もある。）そして、この時期がこの地域にとって最も繁栄した時代ということになる。今のところ偏在的ではあるがこの時期に集団墓地（多くは木棺墓）の形成が確認できる。さらに終末には環濠、あるいは条溝を持つ集落も出現し、集落内に鏡（船載鏡片や完鏡の国産鏡）が廃棄される。そして、表では古墳時代中期（5 世紀）以降の状況は記していないが、大部分の集落は姿を消すことになる。

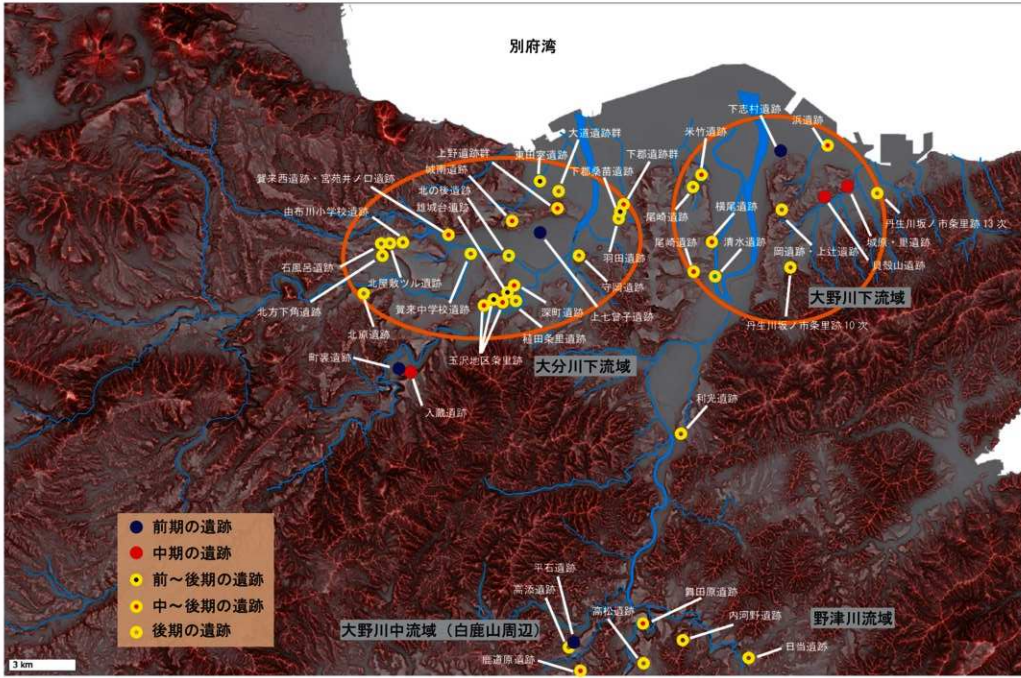
大分川下流域・・・手前右が七瀬川で、雄城台遺跡はこのすぐ左手に位置する。手前に広がる水田は「玉沢地区条里跡」である。

大野川中流域・・・中央右側に見える山が白鹿山、麓の白い建物のところが鹿道原遺跡である。大野川は白鹿山の向こう側を流れる。

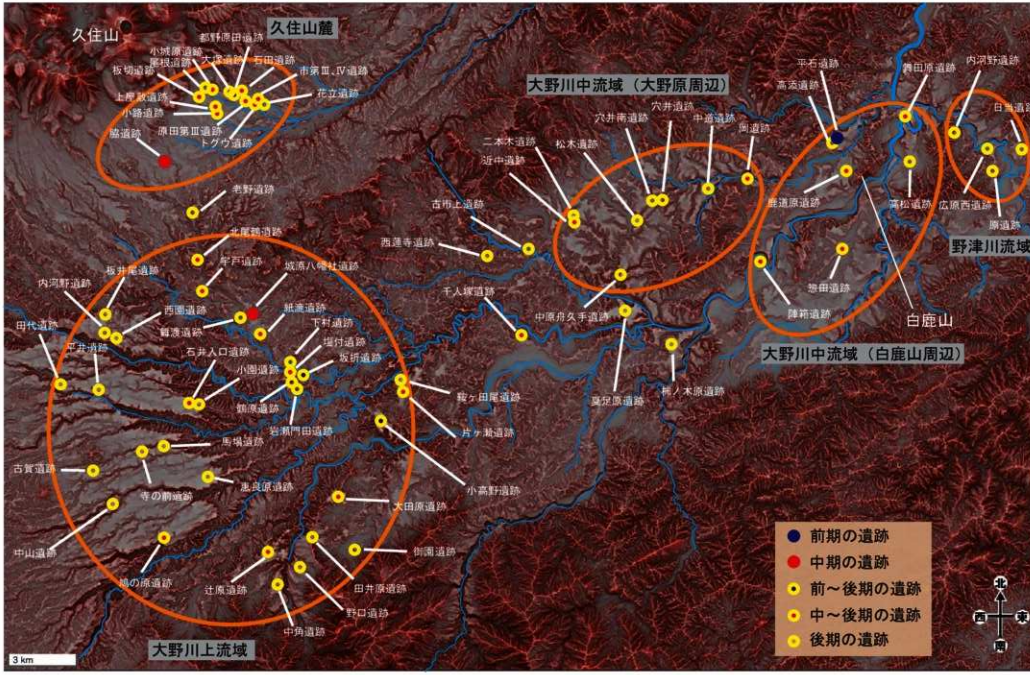


大野川上流域・・・両側を深い谷で挟まれた菅生台地。ほぼ中央が石井入口遺跡である。右側に少し見える山が久住連山。

久住山麓・・・久住連山の南裾に広がる高原は、小さな起伏に富み、幾つもの台地を作り出している。（菅生台地からの撮影）



第 403 図　大分平野の弥生時代遺跡



第 404 図　大野川流域及び久住山麓の弥生時代遺跡

地域	市町村	遺跡名	竪穴住居址数	掘立柱建物	墓	時期（▲遺構不詳又は土器、△遺物少数、○遺物あり、◎遺物多数、□遺物可能性、■墓、●貝、■▲石）									参考文献	備考
						前期	中期前半	中期中～末	後期初頭	後期前葉	後期中葉	後期後葉	終末	古墳前期		
大分平野（大分川）	大分市	上七曽子遺跡				●									63	板付Ⅱａ式の溝
		上野遺跡群	8	1				○●							53	中期後半の溝２条あり。掘立柱建物は周囲を溝で囲む。
		荻原杉下遺跡									●				24	幅３～5.8m、深さ0.6～0.8mの溝由じで伸びる溝。水路か。
		大道遺跡群第１，２，３，７次												□	80	土坑に土器を一括廃棄
		大道遺跡群第20，23，32次										□		□●	92	溝幅は井戸中心。古墳前期の環濠
		大道遺跡群第21，28，31，34，36，37次									×			×	102	土坑
		大道遺跡群第26，27，29，30，33，35，38～42次				×						×	×	×	104	大道遺跡群の総括掲載
		大道遺跡群第４～６，８，12，13次	2											△	84	古墳前期の井戸多数
		大道遺跡群第９～11，14～19，22，24，25次					×	●						×	89	溝は流路、古墳前期の井戸から石出土
		遠城台遺跡	104	1		□	□	△	△	△	◎	○●	○●	△	47	
		賀来中学校遺跡	8		9							▲●	△●	△	52	ほとんど遺物の出土が無い
		賀来中学校遺跡第５次調査			4							▲			102	環濠の内側すぐに小児用土器棺墓
		賀来西遺跡	1					△							33	
		ガランジ遺跡	1								△				21	
		北ノ後遺跡										●	●		25	直線的でＬ字に折れる環濠？
		下郡遺跡群	92		6			△▲●	△	△▲	△▲	○●▲	○●	○	59,61,64,69,72,77,82,88	調査で総括的な記述。２方所に後葉から終末の環濠あり。墓は殆どが小児用土器棺墓。
		下郡桑苗遺跡				×									14,15	田河道から大量の木製品、動植物遺存体が出土
		城南遺跡	10					△	△			△			54	
		城南遺跡第２次、第３次	3						△						58	
		玉沢地区条里跡				×									30	水田層が存在か
		玉沢地区条里跡第10次調査	5												79	微高地上で集落が展開か
		玉沢地区条里跡第11次調査	6											○	79	
		玉沢地区条里跡第14次調査	8											○	79	
		玉沢地区条里跡第15次調査	3							△				△	74	
		玉沢地区条里跡第18次調査	4											○	79	
		玉沢地区条里跡第２次調査			27			▲■	▲	▲		■	■		60	成人墓は土坑墓、石棺墓各１基、他は小児用土器棺墓
		玉沢地区条里跡第３次調査			6			▲	▲						67	
		玉沢地区条里跡第６次調査					■	■	■	■	■	■	■		62	
		玉沢地区条里跡第７次調査				■									70	
		玉沢地区条里跡第９次調査	4											○	75	
		羽田遺跡３	33？							○	○	○	○	○	94	
		東大道遺跡（Ａ地区）	1						×					△	31	包含層から中期出土
		東大道遺跡（Ｂ地区）								×					29	包含層から縄片出土、土坑、溝など
		東田室遺跡２	18			×	×							◎	68	前期は貯蔵穴
		深町遺跡						●							17	溝（幅6m、深さ2m）は水路か
		古国府遺跡群第15次	7		1			×	×	×				○▲	101	墓は小児用甕棺
		他遺跡					●								57	溝は直線的で、水路か。
		宮苅井ノ口遺跡	8		13						□	□▲	▲	○▲	33	小児用甕棺13基
		宮苅井ノ口遺跡第２，３次調査	12		1			△				□	○▲	○	66	墓は小児用甕棺。
		宮苅井ノ口遺跡第４次調査	8											○	78	古墳中、後期もあり
		宮苅井ノ口遺跡第５次調査	10									△●	○●	○	83	沖積微高地上の集落を幅1.2m、深さ0.7mの溝で囲む
		守岡遺跡	49					△					◎	△	48	概報のため、詳細不明
		若宮八幡宮遺跡	4					●	×					△	71	早期の遺物出土
		若宮八幡宮遺跡				×	×	×	×	×	×				32	自然流路、包含層（水田？）、溝など
		稲田市遺跡				×							●	●	19	溝は水路
		稲田条里遺跡	4											△●	21	縄１枚

大分平野（大分川）	由布市挾間町	石風呂遺跡	6		1									○▲	41	溝は水路墓は小児用棺桶
		北方下角遺跡	20						△	○	○	□	△	174	舟形土製品出土（古墳前期）	
		北原遺跡	25	1							△	○	◎	173		
		北屋敷ツル遺跡	7								△	△●	△●	41	幅約 2m、深さ約 1m の V 字溝	
		由布川小学校遺跡	9		1						△▲	△		41	墓は小児用棺桶	
七瀬川中流域	大分市野津原町	入蛭遺跡	6				○							174	方形と円形あり	
		町屋遺跡				×								173	弥生土器出土	
大分川中流域	由布市庄内町	柳原遺跡	4				△				△	△		138		
大分平野（大野川）	大分市	猪野遺跡			1		×	▲						55	墓は小児用甕棺墓、他に土坑あり	
		猪野遺跡３次	7				△	△	△					90		
		猪野遺跡６次					×							107	土坑より中広銅矛が出土	
		上止遺跡	15							○	○			37		
		岡遺跡	28					○	○	○	○	△	△	36		
		尾崎遺跡	27					△	△	△	○			50		
		尾崎遺跡	7				○							27		
		日向山遺跡					×							65	溜井状の遺構	
		北の岬遺跡	19									○●	○	53	幅 2m 前後の V 字溝あり、詳細不明	
		下志村遺跡				×								16	出土遺物については『由遺跡』大分市教育委員会　1996 に掲載	
		清水遺跡	2					△	△					27		
		清水遺跡２次調査	2				△						△	45		
		城原・里遺跡６次調査				×								72	貯蔵穴１基	
		判光遺跡縄ノ木地区	6			×						△	△	28		
		判光遺跡脇ノ津留地区	15								△	○	△	28	半月形土器片加工品あり（下流で唯一?）柱配置が大分平野のものとは異なる。大野川中流域の影響か？２本セットと考えられる柱配置あり。	
		丹生川坂ノ市条里遺跡	7							?				85	第 10 地点から竪穴建物検出。ただし上部が削平受ける	
		丹生川坂ノ市条里遺跡第 13 次			18						▲	▲		96	砂丘上の墓地遺跡で、祭祀あり。石棺墓、土坑墓、小児用壺棺が集中。	
		浜遺跡			6							▲	▲	9	砂丘上の墓地遺跡で、祭祀土器群以外に石棺３基、小児用壺棺３基	
		浜遺跡第２地点				▲	▲	▲	▲					20	砂丘上の墓地遺跡で、当地区では祭祀土器のみ出土	
		横尾遺跡（多武尾遺跡）	25 前後		9		△		○	○	○●▲	○●▲	○●	49.76.81.87.91.95.98.99.103.106	丘陵端に 400m 四方ほどの環濠集落を想定。内部には尾根基部を掘り切る多武尾遺跡を含む。多武尾遺跡の溝から小銅鐸出土。成人墓は４基の木棺墓。	
		米竹遺跡	8			×	×						△	87.93.97		
		米竹遺跡第 10 次				×								105	土坑	
		米竹遺跡第７次					×							108		
野津川流域	臼杵市野津町	内河野遺跡	1			×	×	×			△			172		
		下藤遺跡	35	4			×				○	○	○	171	方形周溝墓１基（時期、主体部不明）	
		新生遺跡	1						△					171		
		曽無田遺跡	8(9)			×		△		△	△			172	すべて円形住居	
		臼当遺跡	13									○	△	10		
		広原西遺跡		5							△			5	中世の掘立柱建物もあるが、弥生時代と考えられる１間×１間のものは５軒。	
大野川中流（白鹿山麓沿）	豊後大野市大岳	烏石遺跡	38(70)				×				△	◎	△	2	製鉄遺構あり、鏡２枚	
		興田原遺跡	32				○				△	△	◎	1	鏡１枚、中期後半の花弁型住居	
	豊後大野市千歳	上原遺跡	20				×				△	○		163		
		大木遺跡	1	2							?			166	出土遺物が少なく時期不明だが、弥生後期か	
		大迫遺跡徳原地区	4	6			△			△	△			164	竪穴からの出土遺物が少なく、時期決定が難しい	
		貞国遺跡	2							△				162		
		高添遺跡石五道原地区１次	36(60)				×		△	○	○	○	△	162	鉄器生産か	
		高添遺跡石五道原地区２, ５次	23	9					△	○	○	△	△	34		
		高添遺跡石五道原地区３, ４次	70	23			×		△	○	◎	○	△	179	鏡１枚	
		高添遺跡出口地区	27					△	△	△	○	○	△	161		
		高添遺跡出口地区３次調査	9								△	△	△	34		

地域	市町村	遺跡名	竪穴の内は検出軒数	竪穴住居	掘立住居	墓	時期（△遺構不詳又は土器、△遺物少数　○遺物あり　◎遺物多数　□遺物可能性　▲墓　●貝　■ｆ石）								参考文献	備考
							前期	中期前半	中期後半～末	後期前葉	後期後葉	後期中葉	後期後葉	終末	古墳前期	
大野川中流（日田盆地周辺）	豊後大野市千歳	高添遺跡上木園地区１次	4											△	△	34	
		高添遺跡上木園地区２次	35									×	○	○	△	34	
		平石遺跡			12	▲										162	壺棺墓群で、土器は板付系
		奥道原遺跡	237	221					△				◎	◎	◎	165	貌２枚
	豊後大野市三重町	折立遺跡	52	3					△				○	□	○	38	中期後半の鉄器あり
		陣場遺跡	3						×				△			185	１次調査
		陣場遺跡（C 地区）	43					△	△	△	△	△	○	○	△	186	
		陣場遺跡第３次	44	31				○	○	○	○	○	○	○	△	184	
		陣場遺跡第４次	9	1				△	△				△	○	○	46	
大野川中流（大野郡）	豊後大野市朝地地司	古市上遺跡	4		29						△	○	▲	▲	▲	40	古市下遺跡と小河川を挟んだ対岸
		古市下遺跡	16										○	○	○	40	古市上遺跡と小河川を挟んだ対岸
	豊後大野市大野町	穴井遺跡	9											○		35	
		穴井南遺跡	1										△			35	貌１枚
		岡遺跡下ノ原地区	3					○								35	貌１枚（包含層出土）
		町方 B 遺跡			8	▲										13	縄文晩期に系譜を持つ甕棺墓群
		二本木遺跡	5										□●	□●		22	出土遺物少ない。朱薄あり。
		二本木遺跡	65									○	○	○		109	貌１枚
		松木遺跡	43								△	△	◎	△		109	貌１枚
		中遺跡	17	3							△	△	○	○	○	180	掘立柱柱穴から後期前葉の壺出土
	豊後大野市緒方町	千人塚遺跡	5					△	△	△						111	
		屋形原遺跡	13													109	詳細時期不明だが、すべて後期か
大野川上流域	竹田市	朝鼎遺跡	98										○	○	○	147	
		当部遺跡	80										○	○		154	
		石井入口遺跡	96(170)	4				△	△	○	○	◎	◎	◎	○	150	鏡６枚
		石井入口北遺跡	8									△	△	○	△	150	
		板井尾遺跡	18											△	○	140	
		若瀬戸田遺跡	5								△		△		△	157	古墳中期あり
		上菅生 B 遺跡	5										□	△	△	145	
		内河野遺跡	37(50)								△	○	△	△	○	140	
		宇土遺跡	13					○					×			156	
		大田原遺跡	9			△	△	△						△		141,143	
		御屋遺跡	8										○			159	
		小園遺跡	40										○	○	○	144	貌２枚と銅鏡
		片ヶ瀬遺跡	2					△			□					153	小川原式土器出土
		片ヶ瀬遺跡 A 地区	1												△	161	
		紙遺遺跡	25					○	△				○	△		158	貌１枚、古墳中期あり
		上畑遺跡	34						△	○	○	○	○			148	
		北尾鶴遺跡	7					△							△	156	
		横野遺跡	14										△		△	11	集落は中期に続く。約 500m 離れて同時期（古墳時代前期～中期）の方形周溝墓群あり。
		鞍ヶ田尾遺跡	43										○	○	○	160	貌２枚
		小高野遺跡				▲										187	壺棺墓、甕棺墓群
		夜折遺跡	6						△						○	157	後期初頭は二段掘り
		塩付遺跡	2			△						△				157	前期は円形住居
		下片ヶ瀬遺跡	1									△				160	
		下村遺跡	7										△	△	△	157	古墳中期あり
		城原八幡社遺跡	23					◎								158	不定形二段掘りの竪穴多数
		田井原遺跡	18(21)								△	△	△			149,151	概報のみのため詳細不明
		塚風遺跡	7												○	142	集落の後、中期の方形墳３基、円形墳１基
		比原遺跡	9					△								149	概報のみのため詳細不明

第５表　弥生時代遺跡一覧表（４）

大野川上流域	竹田市	鶴原遺跡	9								△	○△			157	
		ネギノ遺跡	5									△	△		7	
		野口遺跡	2					△	△						159	
		千井Ｂ遺跡	2								△				152	
		千井Ｇ遺跡	5(9)						△		△	△			139	概報のみのため詳細不明
		古園湯久保遺跡	7				△		△		△	△			155	谷水田沿いの小規模な平坦地に立地
		舞渡遺跡	8			△						△		△	158	古墳中期もあり
		南光寺遺跡	3									○			157	古墳中期あり
	竹田市竹田町	上後迫Ｂ遺跡	13						△	△	○				121	
		上後迫遺跡	8						△	△	△				118	
		上向原遺跡	5						●	△			△		121	
		古屋遺跡Ｐ地区	103												112	概報のため詳細不明、弥生が弥生後期か
		寺の前遺跡	5						△						114	
		中山遺跡	30									○	○	◎	114	
		鳴の原遺跡	1(15)				△								113	
		馬場遺跡	7						△	△					114	溝あり
		山ノ神谷（Ｂ地区）遺跡	3								△	△			119	
		横迫遺跡	3				△	△	△						116	
		山ノ神谷遺跡	5								△	△			117	鏡１枚
		日向（Ｂ地区）遺跡	5									△			120	
久住山麓	竹田市久住町	老野遺跡	14			○					○				132	鏡１枚
		石田遺跡	4			×	×	×	○						122	鏡１枚、鏡出土墾穴は後葉まで下らない？
		板切第Ⅰ遺跡	46											◎	124	
		板切第Ⅱ遺跡	4				×						△		124	
		板切第Ⅳ遺跡	4									△	△	○	124	
		板切第Ⅴ遺跡	4									△	△		124	
		市第Ⅲ遺跡				×	×					×			123	
		市第Ⅳ遺跡	8									○	○		125	
		上七宝田遺跡	3								△				130	
		上屋敷遺跡	15		1	○	○	△			△				126	
		内畑遺跡				×									196	工事中に土器のみ出土
		大塚遺跡	2	2							△			●?	130	溝は幅２～４m、陸橋部あり。
		小城原遺跡	103		20		○		△	○	○	○	○	○▲	128	方形周溝墓あり
		尾板遺跡	10	1			□			△	△	△			130	
		久住遺跡			21						▲?	▲?			133	木棺墓、古墳以前か
		小路遺跡	3				○								126	
		トグウ遺跡	11	6	12		○				△▲?	▲?	△▲?		125	墓地は木棺墓
		花立遺跡	6			△	×		×		△	△	△		125	
		原田第Ⅲ遺跡	33		33		○	△			○▲	○▲	○		123	
		仏原千人塚古墳群	4		50									○▲	129	他に前方後円墳と前方後方墳各１基
		都野原田遺跡	104(250)	7	51	△	△				○◎▲	○◎▲		○▲	127	古墳時代中期に廃小
		扇遺跡	18	2			◎	△							131	変形花弁型住居
	竹田市直入町	打小野遺跡	16											○	169	古墳中期にかけて営まれる集落
		三反田遺跡	10											○	167	
		長野津留遺跡												●	168	幅 3m、深さ 2m の水路
別府湾北入西岸	日出町	カネノトイ遺跡	1								△?				39	
		成田尾遺跡	5		3	△	△▲								16	墓は小児用甕棺
		藤原友田遺跡										●			39	張り出し部のある溝
	別府市	別府遺跡	2		1		△▲								43	墓は小型石棺墓

参考文献

1 『舞田原』 大飼町教育委員会　　1985
2 『高松遺跡』 大飼町教育委員会　　1988
3 『小部遺跡』 宇佐市教育委員会　　2004
4 『小部遺跡Ⅱ』 宇佐市教育委員会　　2020
5 『広原西遺跡第１次・第２次発掘調査報告書』　臼杵市教育委員会　2016
6 『大分県文化財調査報告』第四輯　大分県教育委員会　1956
7 『ネギノ遺跡』 大分県教育委員会　1976
8 『大野原の先史遺跡』 大分県教育委員会　1979
9 『浜遺跡』 大分県教育委員会　1980
10 『日当遺跡』 大分県教育委員会　　1982
11 『楠野』 大分県教育委員会　1983
12 『昭和 58 年度　大分県内遺跡詳細分布調査概報 3』　大分県教育委員会　1984
13 『大野原の先史遺跡』 大分県教育委員会　1984
14 『下郡桑苗遺跡』 大分県教育委員会　1989
15 『下郡桑苗遺跡Ⅱ』 大分県教育委員会　1992
16 『大分空港道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』　大分県教育委員会　1992
17 『深町遺跡』 大分県教育委員会　　1993
18 『大分県埋蔵文化財年報１　1991 年度』 大分県教育委員会　　1993
19 『植田市遺跡』 大分県教育委員会　1994
20 『大在古墳・浜遺跡第２地点』 大分県教育委員会　1995
21 『ガランジ遺跡　植田市遺跡　植田条里遺跡』　大分県教育委員会　1997
22 『二本木遺跡』 大分県教育委員会　1998
23 『大分の前方後円墳　三重・西国東地区編』 大分県教育委員会　1998
24 『在際杉下遺跡』 大分県教育委員会　1999
25 『馬姓遺跡　北ノ後遺跡　乙院屋敷遺跡』 大分県教育委員会　1999
26 『後迫遺跡』 大分県教育委員会　　2001
27 『尾崎遺跡　清水遺跡　新田遺跡　川野遺跡　久本小野遺跡　平岩遺跡』 大分県教育委員会　2002
28 『利光遺跡』 大分県教育委員会　　2002
29 『東大道遺跡（B 地区）』 大分県教育委員会　　2002
30 『玉沢地区条里跡』 大分県教育委員会　2004
31 『東大道遺跡（A 地区）』 大分県教育委員会　　2004
32 『若宮八幡宮遺跡　東横前 a、b 地区　宮ノ前 a ～ d 地区』 大分県教育委員会　2008
33 『賀来西遺跡　宮苑井ノ口遺跡』 大分県教育庁埋蔵文化財センター　2005
34 『一般国道 57 号中九州横断道路建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 (1)』　大分県教育庁埋蔵文化財センター　2007
35 『一般国道 57 号中九州横断道路建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 (2)』　大分県教育庁埋蔵文化財センター　2007
36 『岡遺跡群』 大分県教育庁埋蔵文化財センター　2007
37 『上辻遺跡発掘調査報告書』 大分県教育庁埋蔵文化財センター　2007
38 『折立遺跡』 大分県教育庁埋蔵文化財センター　2008
39 『藤原友田遺跡　カネノトイ遺跡１・２次』 大分県教育庁埋蔵文化財センター　2012
40 『古市下・古市上遺跡』 大分県教育庁埋蔵文化財センター　2014
41 『北屋敷ツル遺跡・石風呂遺跡・由布川小学校遺跡』 大分県教育庁埋蔵文化財センター　2014
42 『諫山遺跡』 大分県教育庁埋蔵文化財センター　2016
43 『羽室遺跡』 大分県教育庁埋蔵文化財センター　2017
44 『四日市遺跡１～４』 大分県教育庁埋蔵文化財センター　2018 ～ 2021
45 『清水遺跡２次発掘調査報告書』 大分県立埋蔵文化財センター　2018
46 『陣箱遺跡（第４次調査区）』 大分県立埋蔵文化財センター　2021
47 『雄城台遺跡』 大分県立埋蔵文化財センター　2021
48 『守岡遺跡』 大分市教育委員会　1979
49 『多武尾遺跡調査概報』 大分市教育委員会　1982
50 『尾崎遺跡』 大分市教育委員会　1984
51 『大分市埋蔵文化財調査年報Ⅰ』 大分市教育委員会　1990
52 『賀来中学校遺跡』 大分市教育委員会　1992
53 『上野遺跡群』 大分市教育委員会　1993
54 『城南遺跡』 大分市教育委員会　1993
55 『猪野遺跡』 大分市教育委員会　1994

56 『羽田遺跡Ⅱ』 大分市教育委員会　1995
57 『曲遺跡』 大分市教育委員会　1996
58 『城南遺跡　第２次・第３次発掘調査報告書』 大分市教育委員会　1999
59 『下郡遺跡群Ⅰ』 大分市教育委員会　2002
60 『玉沢地区条里跡第２次発掘調査報告書』 大分市教育委員会　2002
61 『下郡遺跡群Ⅱ』 大分市教育委員会　2003
62 『玉沢地区条里跡第６次発掘調査報告書』 大分市教育委員会　2003
63 『古国府遺跡群・上七曽子遺跡』 大分市教育委員会　2003
64 『下郡遺跡群Ⅲ』 大分市教育委員会　2005
65 『海部の遺跡Ⅰ』 大分市教育委員会　2005
66 『宮苑井ノ口遺跡第２・第３次調査報告書』 大分市教育委員会　2005
67 『玉沢地区条里跡第３次発掘調査報告書』 大分市教育委員会　2005
68 『東田室遺跡２』 大分市教育委員会　2005
69 『下郡遺跡群Ⅳ』 大分市教育委員会　2006
70 『玉沢地区条里跡第７次調査報告』 大分市教育委員会　2006
71 『若宮八幡宮遺跡第１次調査報告書』 大分市教育委員会　2006
72 『城原・里遺跡６次調査報告書』 大分市教育委員会　2006
73 『下郡遺跡群Ⅴ』 大分市教育委員会　2007
74 『玉沢地区条里跡第 15 次調査報告』 大分市教育委員会　2007
75 『玉沢地区条里跡第９次調査報告』 大分市教育委員会　2007
76 『横尾遺跡１』 大分市教育委員会　2008
77 『下郡遺跡群Ⅵ』 大分市教育委員会　2008
78 『宮苑井ノ口遺跡第４次調査報告書』 大分市教育委員会　2008
79 『玉沢地区条里跡第 10･11･12･13･14･16･18･19 次』 大分市教育委員会　2008
80 『大道遺跡群１』 大分市教育委員会　2008
81 『横尾遺跡２』 大分市教育委員会　2009
82 『下郡遺跡群Ⅶ』 大分市教育委員会　2009
83 『宮苑井ノ口遺跡第５次調査報告書』 大分市教育委員会　2009
84 『大道遺跡群２』 大分市教育委員会　2009
85 『丹生川坂ノ市条里跡　丹生遺跡群』 大分市教育委員会　2009
86 『米竹遺跡３次』 大分市教育委員会　2009
87 『横尾遺跡３』 大分市教育委員会　2010
88 『下郡遺跡群Ⅷ』 大分市教育委員会　2010
89 『大道遺跡群３』 大分市教育委員会　2010
90 『猪野遺跡第３次調査報告書』 大分市教育委員会　2010
91 『横尾遺跡４』 大分市教育委員会　2011
92 『大道遺跡群４』 大分市教育委員会　2011
93 『米竹遺跡４次』 大分市教育委員会　2011
94 『羽田遺跡３』 大分市教育委員会　2012
95 『横尾遺跡５』 大分市教育委員会　2012
96 『丹生川坂ノ市条里跡第 13 次』 大分市教育委員会　2012
97 『米竹遺跡５次』 大分市教育委員会　2012
98 『横尾遺跡６』 大分市教育委員会　2013
99 『横尾遺跡７』 大分市教育委員会　2013
100 『賀来中学校遺跡４』 大分市教育委員会　2013
101 『古国府遺跡群第 15 次調査』 大分市教育委員会　2013
102 『大道遺跡群６』 大分市教育委員会　2013
103 『横尾遺跡８』 大分市教育委員会　2014
104 『大道遺跡群７』 大分市教育委員会　2014
105 『米竹遺跡６』 大分市教育委員会　2014
106 『横尾遺跡９』 大分市教育委員会　2015
107 『大分市埋蔵文化財調査概要報告 2014』 大分市教育委員会　2015
108 『米竹遺跡７』 大分市教育委員会　2018
109 『大野原の遺跡』 大野町教育委員会　1980
110 『古城得遺跡・小川原遺跡』 大田村教育委員会　1996
111 『千人塚遺跡』 緒方町教育委員会　1999
112 『荻台地の遺跡Ⅴ』 荻町教育委員会　1980

113 『荻台地の遺跡Ⅱ』 荻町教育委員会 1985
114 『荻台地の遺跡』 荻町教育委員会 1986
115 『馬場遺跡』 荻町教育委員会 1986
116 『横迫遺跡』 荻町教育委員会 1995
117 『山ノ神谷遺跡』 荻町教育委員会 1997
118 『上後迫遺跡』 荻町教育委員会 1998
119 『山ノ神谷（B 地区）遺跡』 荻町教育委員会 2000
120 『日向（B 地区）遺跡』 荻町教育委員会 2001
121 『上後迫 B 遺跡 上向原遺跡』 荻町教育委員会 2002
122 『市第Ⅰ遺跡・石田遺跡』 久住町教育委員会 1996
123 『県営担い手育成基板整備事業都野東部地区に伴う発掘調査報告書Ⅱ』 久住町教育委員会 1997
124 『板切遺跡群（Ⅰ～Ⅴ）』 久住町教育委員会 1999
125 『市第Ⅳ遺跡・トダウ遺跡・花立遺跡』 久住町教育委員会 2000
126 『小路遺跡 上屋敷遺跡』 久住町教育委員会 2000
127 『都野原田遺跡』 久住町教育委員会 2001
128 『小城原遺跡・中原遺跡』 久住町教育委員会 2002
129 『仏原千人塚古墳群』 久住町教育委員会 2002
130 『尾根遺跡 上七里田遺跡 大塚遺跡』 久住町教育委員会 2003
131 『脇遺跡』 久住町教育委員会 2003
132 『老野遺跡』 久住町教育委員会 2004
133 『原田第Ⅲ遺跡 久住遺跡』 久住町教育委員会 2005
134 『陣ヶ台』 玖珠町教育委員会 1999
135 『狩尾遺跡群』 熊本県教育委員会 1993
136 『小野原遺跡群』 熊本県教育委員会 2010
137 『幅・津留遺跡』 熊本県教育委員会 2019
138 『柳原遺跡』 庄内町教育委員会 1994
139 『竹田地区遺跡群発掘調査概要』 竹田市教育委員会 1982
140 『菅生台地と周辺の遺跡Ⅶ』 竹田市教育委員会 1982
141 『大田原遺跡』 竹田市教育委員会 1983
142 『菅生台地と周辺の遺跡Ⅸ』 竹田市教育委員会 1984
143 『大田原遺跡Ⅱ』 竹田市教育委員会 1984
144 『菅生台地と周辺の遺跡Ⅹ』 竹田市教育委員会 1985
145 『菅生台地と周辺の遺跡ⅩⅠ』 竹田市教育委員会 1986
146 『菅生台地と周辺の遺跡ⅩⅡ』 竹田市教育委員会 1987
147 『朝鍋遺跡』 竹田市教育委員会 1987
148 『菅生台地と周辺の遺跡ⅩⅢ』 竹田市教育委員会 1988
149 『田井原遺跡・辻原遺跡Ⅰ』 竹田市教育委員会 1991
150 『菅生台地と周辺の遺跡ⅩⅤ』 竹田市教育委員会 1992
151 『田井原遺跡・辻原遺跡Ⅱ』 竹田市教育委員会 1992
152 『平井 B 遺跡』 竹田市教育委員会 2000
153 『片ヶ瀬遺跡』 竹田市教育委員会 2001
154 『菅生台地と周辺の遺跡ⅩⅦ』 竹田市教育委員会 2006
155 『法地坊横穴墓群 古園浦久保遺跡』 竹田市教育委員会 2007
156 『宇土遺跡（A・B 地点） 長田尾遺跡 北尾鍋遺跡』 竹田市教育委員会 2009
157 『稲葉川流域遺跡群発掘調査報告書』 竹田市教育委員会 2012
158 『城原八幡社遺跡 舞渡遺跡 紙漉遺跡』 竹田市教育委員会 2014
159 『竹田地区南部遺跡群発掘調査報告書』 竹田市教育委員会 2015
160 『片ヶ瀬遺跡 下片ヶ瀬遺跡 鞍ヶ田尾遺跡』 竹田市教育委員会 2019
161 『高添遺跡－出口地区－』 千歳村教育委員会 1988
162 『高添台地の遺跡』 千歳村教育委員会 1989
163 『上原遺跡』 千歳村教育委員会 1989
164 『大迫遺跡徳原地区 原田第２遺跡原地区』 千歳村教育委員会 1999
165 『鹿道原遺跡発掘調査報告書』 千歳村教育委員会 2001
166 『大木遺跡』 千歳村教育委員会 2004
167 『三反田遺跡発掘調査概報』 直入町教育委員会 1985
168 『直入地区遺跡群発掘調査概報Ⅰ 長野津留遺跡』 直入町教育委員会 1986
169 『釘小野遺跡』 直入町教育委員会 1996

170 『野津川流域の遺跡Ⅴ』 野津町教育委員会 1984
171 『野津川流域の遺跡Ⅵ』 野津町教育委員会 1985
172 『菅無田遺跡』 野津町教育委員会 1986
173 『町裏遺跡』 野津原町教育委員会 1998
174 『入蔵遺跡』 野津原町教育委員会 2004
175 『北原遺跡』 挾間町教育委員会 1994
176 『北方下角遺跡』 挾間町教育委員会 1999
177 『小迫辻原遺跡』 日田市教育委員会／大分県教育委員会 1998
178 『吹上遺跡Ⅳ』 日田市教育委員会 2006
179 『高添遺跡』 豊後大野市教育委員会 2006
180 『中道遺跡』 豊後大野市教育委員会 2013
181 『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書5』 豊後大野市教育委員会 2015
182 『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書6』 豊後大野市教育委員会 2016
183 『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書7』 豊後大野市教育委員会 2017
184 『陣箱遺跡（第3次調査区）』 豊後大野市教育委員会 2018
185 『陣箱遺跡』 三重町教育委員会 1987
186 『陣箱遺跡（C地区）』 三重町教育委員会 1996
187 『大分県史先史篇Ⅰ』 大分県 1983
188 『大分県史先史篇Ⅱ』 大分県 1989
189 『大分の歴史(1)ふるさと誕生』 大分合同新聞社 1976
190 『何の意ぞ碧山に栖む～祖母・傾山系の弥生社会～』宮崎県立西都原考古博物館 2009
191 『大分県の考古学』 吉川弘文館 1971
192 石田智子『幅地区における墓域の土器廃棄遺構と出土土器』『幅・津留遺跡』第2分冊 熊本県教育委員会 2019
193 後藤一重「弥生時代条溝集落について」『二本木遺跡』大分県教育委員会 1998
194 後藤宗俊「東九州歴史考古学論考－古代豊国の原像とその展開－」山口書店 1991
195 小柳和宏「大分の弥生時代はどこまでわかったのか：大野川上・中流域弥生社会再考」『大分縣地方史』第200号 大分県地方史研究会 2012
196 小柳和宏「田原谷の歴史を探る～黎明期から中世まで～」『大田村誌』 杵築市 2012
197 渋谷忠章、坂本嘉弘「久住町内畑遺跡出土の土器」『大分縣地方史』第110号 大分県地方史研究会 1983
198 高橋徹「廃棄された鏡片－豊後における弥生時代の終焉－」『古文化談叢第6集』九州古文化研究会 1979
199 高橋徹「大分の弥生・古墳時代土器編年」『大分県立歴史博物館研究紀要』 2 大分県立歴史博物館 2001
200 高橋徹「大分の弥生式土器編年 －早期～中期－」『大分県立歴史博物館研究紀要』１０ 大分県立歴史博物館 2009
201 武末純一「弥生文化の地域的様相と発展 北部九州地域」『講座日本の考古学5弥生時代（上）』 青木書店 2011
202 都出比呂志「農耕社会の形成」『講座日本史1 原始・古代1』東京大学出版会 1984
203 坪根伸也「東部九州における弥生時代前期土器の様相ー口縁下端凸状甕と下域式甕ー」『土器持寄会論文集 突帯文と遠賀川』 土器持寄会論文集刊行会 2000
204 坪根伸也「東部九州における弥生時代中期土器の様相ー大分平野部（別府湾沿岸地域）を中心とする中期土器の様相ー」『鹿児島大学考古学研究室25周年記念論集』 鹿児島大学考古学研究室25周年記念論集刊行会 2006
205 野島永「弥生時代における鉄器保有の一様相」『京都府埋蔵文化財論集』第6集
206 北郷泰道「祖母傾山系山岳地域論序説」『考古学研究』第25巻3号 考古学研究会 1978
207 村上恭通『古代国家成立過程と鉄器生産』青木書店 2007

第２節　大分県における鏡の廃棄

１）雄城台遺跡の規模と竪穴

雄城台遺跡は大分平野南部に位置する独立丘陵上に営まれた、弥生～古墳時代にかけての集落遺跡である。調査は標高 60 m の等高線に囲まれた東西 350m、南北 300 m の平坦面の一部でしか行われていないが、それによれば主として竪穴式住居からなる集落跡と考えられる。9 次におよぶ調査でおよそ 104 基の竪穴が検出されており、残りの範囲で同じような密度で検出されると仮定すると、総数 2,000 基を越す規模の集落となる。

環濠丘陵南西部で上面幅 5.0 m、深さ 1.4 m の断面 U 字状溝が検出されている。これが集落を全面的に囲む環濠となるのか断定はできないが、その可能性を考えておきたい。

２）雄城台遺跡出土鏡

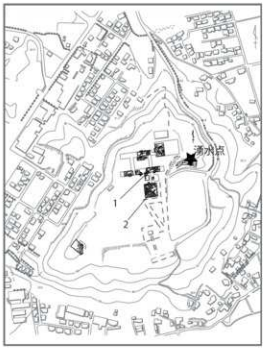
当遺跡からは２点、鏡片が出土している。共に竪穴住居跡で検出されたもので中国鏡の破片である。

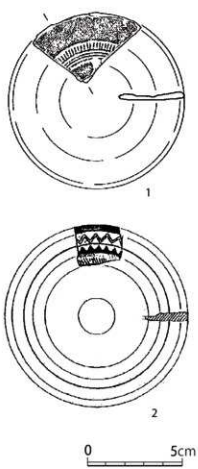
①第 405 図１は第６次８号住居跡出土鏡。復元径 9.3cm で幅 3cm のやや内湾する平縁から直立する櫛歯文帯、２本の平行線文帯、幅狭の櫛歯文帯、８弧の内行花文帯、鈕座へと続く。高橋の雲雷文内行花文鏡編年Ⅳ式でも最新段階に位置づけられ、およそ後漢中葉～後葉のものであろう（高橋 1986a）。漆黒色を呈し、鏡面や破砕面は摩滅している。櫛歯文帯と弧文の間に１孔が穿たれている。

８号竪穴は 5m × 5m の平面方形で、主柱穴は４個確認される。竪穴出土の土器は弥生中期前半が主体だが、後述するように当該中国鏡片と共伴することはあり得ず、出土土器は住居跡に伴うものではなく、付近にある住居跡に先行する弥生中期貯蔵穴に伴うものが混入したと考えられる。他の住居跡などの所見から判断すると、当該竪穴も弥生時代後期に位置づけられ、従って鏡の廃棄時期も同時期になる。

②第 405 図２は第７次１号竪穴住居跡出土鏡である。径 9.7cm に復元される。鏡面の反りは殆ど見られず、幅の狭い平縁から、複波文、陽起鋸歯文の外区へ続き、一段低くなって比較的密度の濃い斜行櫛歯文帯に接する。鏡面の表裏や破砕面ともよく摩滅しており、色調は漆黒色を呈する。穿孔は施されていない。

当住居跡は１辺６m 程の方形プランで、出土土器からみて弥生終末～古墳初頭の時期に比定できよう。鏡片の廃棄時期も同様である。





第 405 図　雄城台の地形と出土鏡

3）県内出土鏡について

大分県の弥生時代遺跡から出土する古鏡について、高橋は一連の論考を発表してきた。その嚆矢となる論考で（高橋徹 1979）、大分の弥生時代遺跡から出土する中国鏡片や弥生時代仿製鏡は北部九州からもたらされたもので、各鏡の製作時期、遺跡への流入時期がそれぞれ相当の時期幅が考えられるにもかかわらず、それらが弥生時代後期後半・終末～古墳時代初頭の極めて短い時期に一斉に廃棄されていることを指摘した。また、それらの一斉廃棄は鏡片などがもつ“弥生社会における価値”を、当の鏡所有者達によって否定された結果であろうと考えた。高橋はその後の論考で、鏡の入手・流入時期や“伝世時期の幅”など多少の修正を行ったが、鏡の廃棄についての“事実”と“解釈”については現時点でも今なお妥当と考えている（高橋 1992）。ところで大分県出土弥生～古墳時代の古鏡については、岡崎敬の集成をもとに その後の出土例を加えた地名表を公表してきたが（高橋 1994a、1994b）、いま弥生時代に絞って集成を行うと現段階で 40 遺跡 52 例が知られる（表 6）。それを整理すると以下のとおりである。

○鏡の種類

出土する鏡は①中国鏡、②朝鮮半島製鏡、③弥生時代仿製鏡である。中国鏡は全て破片であり、朝鮮半島製鏡、および弥生時代仿製鏡は破損したものもあるが本来は完形鏡であったと考えられる。

①中国鏡片は様々な型式がある。列挙すると、広縁の連弧文照明鏡、方格規矩鏡、四葉座雲雷文内行花文鏡、半肉彫獣形鏡、四乳四獣鏡などである。

・連弧文照明鏡は犬飼町高松 16 号住居跡、大分市地蔵原遺跡、大分市守岡遺跡の 3 例が知られており、ゴシック体の銘文を持つ広縁タイプである。3 例とも鏡面、破砕面とも良く摩滅しており、漆黒色を呈する。径、縁の幅や厚さ、櫛歯文帯、銘文からみてそれぞれ別の鏡で、同一鏡を破砕したものではない。広縁の当該鏡はおよそ後漢初頭に中心がある。北部九州では二塚山 76 号甕棺、三津永田甕棺のよう後期初頭を過ぎ、中頃に近い前半と考えられるものを初例とし、三津永田北方箱式石棺、桧鳥山箱式石棺、宝満尾 4 号土墳墓と甕棺葬が例外的になり石棺・土墳が盛行する段階の弥生後期中頃～後半に出土例が増える。

・方格規矩鏡は日田市草場遺跡、野津町原遺跡の 3 号住居跡、雄城台遺跡 7 次調査区 1 号住居跡、安心院宮ノ原遺跡、大分市尼ケ城遺跡、豊後大野市高松遺跡 36 号住居跡、豊後大野市松本遺跡 27 号住居跡、豊後大野市高添遺跡 No.56 号ピット等の出土例がある。松本遺跡 27 号住居跡鏡は四帯に複線三角文があり、佐賀県二塚山 29 号土壙墓例のような獣帯鏡の可能性もあるが、いずれにしても中国における製作年代は前漢末から後漢初頭の古式鏡であろう。

・四葉座雲雷文内行花文鏡は雄城台遺跡 6 次 8 号住居跡、日田市小迫辻原 4 号住居跡、玖珠町おごもり遺跡、宇佐市本丸遺跡、宇佐市上原遺跡、豊後大野市二本木遺跡 34 号住居跡等から出土する。小迫辻原 4 号鏡は復元径 23cm 以上で樋口分類 Aa ア式（樋口 1979）、高橋編年 1 式（高橋 1986）に比定され、製作時期は後漢前葉。二本木遺跡 34 号鏡や宇佐本丸遺跡鏡は重弧文化した特徴からこれより後出するもので、後漢中葉～後葉。雄城台遺跡 6 次 8 号住居跡は本来の雲雷文が平行孤文となり、渦文も消失しており、高橋Ⅳ式の新しい段階に比定できる。

・半肉彫獣形鏡、四乳四獣鏡は安心院町大平石棺、玖珠町名草台遺跡石棺、石井入口遺跡、大分市守岡遺跡 1 区 11 号住居跡鏡があるが、守岡鏡は三国時代初頭によくみられる斜縁の鏡になる可能性があり、他の鏡も古墳初頭にくだる可能性が高い。

②朝鮮半島製鏡、および③弥生時代仿製鏡例としては次の 10 例が知られている。竹田市小園遺跡 5 号住居跡、竹田市石井入口 24 号住居跡、同遺跡耕作土中、竹田市鞍ケ田尾遺跡 A 地区 20 号住居跡、豊後大野市鹿道原 157 号住居跡、由布市北方下角遺跡 10 号住居跡、別府市円通寺遺跡 SC03 住居跡、日田市草場第 2 遺跡 6 号方形墓、日田市後迫遺跡、日田市木村遺跡 32 号住居跡である。朝鮮半島製と思われる石井入口 24 号住居跡鏡（高倉の小型内行花文鏡 1 型）以外は北部九州製である。日田草場第 2 遺跡 6 号墓鏡は、弥生後期～古墳中期の集団墓地において埋土から発見されたもので、出土状況からみて、本来は弥生後期～終末の土墳墓に完成品として副葬されていた可能性が強い。鹿道原遺跡 157 号住居跡鏡は高倉 Ia 式に属し、小園遺跡鏡は複線 6 弧文の高倉Ⅲ b 式に分類される（高倉洋彰 1972、1976）。

○　鏡が出土する遺構

鏡の出土する遺構は石棺や土壙墓などの墳墓（a 類）や竪穴住居・土坑等の生活跡（b 類）に大別されるが、大分県北部地域（宇佐、中津を中心にした地域で周防灘沿岸の平野が発達している。北九州や遠賀川流域との交通関係が顕著である。）や大分県西部地域（日田・玖珠盆地を中心とする地域で筑後川の上流にあたる。筑後、朝倉方面を介して北部九州との結びつきが強い。）の第 4 地域では a 類、b 類が共に存在し、大分県北部地域（別府湾岸、大分平野、佐賀関半島以東のリアス式海岸地域。大分川や大野川の二大河川を介して、西部地域や南部地域との交通が顕著である。）や大分県北部地域（大野川中～上流域を中心にした地域で、厚い火山灰の堆積した台地と深い

峡谷が発達している。大野川や阿蘇外輪山周辺ルートによって大分平野や肥後地域との交通関係を有する。）では、例外なく竪穴住居・土坑等の生活跡（b 類）のみの出土状況となる。

○　弥生時代における中国鏡の変遷

そもそも我が国において、鏡は北部九州の弥生時代前期に墳墓の副葬品として出現する。それは中国で古く開始された鏡副葬の風習が、朝鮮半島を経由して北部九州の弥生社会に波及したものである。我が国における「鏡使用の風習」の画期は以下の IV 期に設定できる。

1 期　弥生時代前期末～中期前葉。福岡市吉武高木遺跡、佐賀県唐津市宇木汲田遺跡、山口県下関市梶栗浜遺跡等、朝鮮半島で製作された多鈕細文鏡が他の半島製青銅武器とともに土壙墓、甕棺墓等に副葬される。初期においては中国鏡は用いられない。

2 期　弥生時代中期中頃～後半。大量の中国鏡が甕棺の副葬品として用いられるようになる。一括出土の鏡群に中国戦国時代の鏡（草葉文鏡、星雲鏡、雷文鏡等）と前漢時代の鏡群が混在しており、それらは中国大陸や、朝鮮半島に紀元前 108 年に設置された楽浪郡周辺において伝世使用されていた鏡が、北部九州弥生人と半島の有力者との接触によって多量にもたらされた結果である（高島 1979、岡村 1984）。

3 期　後期。広縁連弧文照明鏡、方格規矩鏡や長宜子孫内行花文鏡、断面丸・台形の狭縁 1 式仿製鏡が出現する。完形中国鏡は北部九州でしか出土しないが、中国鏡片や小型仿製鏡は周辺の豊後、肥後、四国、近畿地方にまで広くもたらされる。

4 期　弥生時代後期終末～古墳初頭。編蝠座鈕内花文鏡、新式方格規矩鏡、半円方形帯獣文鏡、半三角縁小型飛禽鏡、キ風鏡、半肉彫獣帯鏡、画象鏡などが出土する。北部九州の完形中国鏡独占体制が壊れ、近畿地方を中心に新たな中国鏡、（古墳時代）仿製鏡の使用、製作が開始される。

4）雄城台遺跡出土鏡の歴史的背景

大分県各地の弥生遺跡から出土する鏡はその殆どが前述の 3 期、4 期にもたらされたものである。その頃になると、鏡副葬（風習）地域である北部九州およびその周辺においては王墓やそれに準じる墓の被葬者達に倣って中国鏡への憧憬が高まりつつあり、完形の漢鏡の代用品として鏡片や弥生小型仿製鏡の需要が高まっていった。その需要に応えたのは舶載鏡の輸入を独占する北部九州勢力である。同一鏡と見なされている鏡片の接合例が皆無であることや、鏡片のなかに弥生時代や古墳時代をとおして我が国に完形での出土例のないものがあることなどから見て、彼の地でいわばスクラップであった鏡片を舶載したものであろう[註1]（森貞次郎 1985）。おおかたの鏡片の出土例数やその "大きさ" は、北部九州を中心にして、中部・東九州・四国・中国・近畿地方と地理的勾配を示しており、鏡片の流通が必ずしも政治的な "配布" などで行われたのでは無いことが想定できる。北部九州では、漢鏡片は原則として墳墓の副葬品として使用されたが、墳墓に鏡を副葬する風習のない北部九州以東では、鏡片は穿孔され、磨かれ、ペンダント風に加工され日常的に用いられていたようである。宇佐市本丸土壙墓例では首飾りとして生前の被葬者の胸を飾っていた。兵庫県有年原出土の仿製鏡では鏡の上部に 2 孔が穿たれており、仿製鏡も漢式鏡片と同様に扱われていたことが推測できる。鏡副葬地域の北部九州に近接した日田、玖珠、宇佐地方や鏡副葬文化を理解した一部の地域では、鏡片の所有者はその死に際して、アクセサリーとしての鏡片を身につけたまま葬られた。一方そうした風習が定着していない地域では鏡片は最終的に彼らの住む住居や集落に廃棄されたのである。それは前方後円墳出現前後であり、近畿地方の有力勢力から定式化した前方後円墳の被葬者に三角縁神獣鏡を主とする大量の完形鏡が配布され、これらを副葬した古墳が築かれていた頃である。三角縁神獣鏡を初めとする大量の「中国における伝世鏡」を入手したと考えられる 4 期の近畿地方においても、北部九州製とは異なった弥生時代小型仿製鏡が作られており、当該期における複雑な社会・歴史的状況を暗示している。3 期後半～4 期に大量に輸入されたと思われる鏡片が、三角縁神獣鏡を主体とする大型鏡の配布リストに載らなかった人々の鏡片副葬やアクセサリーとして用いられたと考える。大量に舶載されたそれら鏡片の一部が、未だ鏡副葬の風習が定着していない雄城台遺跡などの集落に鉄器やガラス玉などと共に持ち込まれた。4 期以降の新たな政治状況下、畿内政治勢力の主導で新規に持ち込まれた中国鏡や古墳時代小型仿製鏡等の配布、生産が本格化するにつれ、北部九州勢力が隅与した後漢鏡片や弥生時代小型仿製鏡の生産と配布システムは終了するのである。それは北部九州弥生社会が担っていた政治・社会的秩序の変革と崩壊をも示唆するものである。さらに言えば、北部九州を超えて、弥生時代そのものの終焉を暗示しているのである。

第６表　大分県内弥生時代出土鏡一覧表

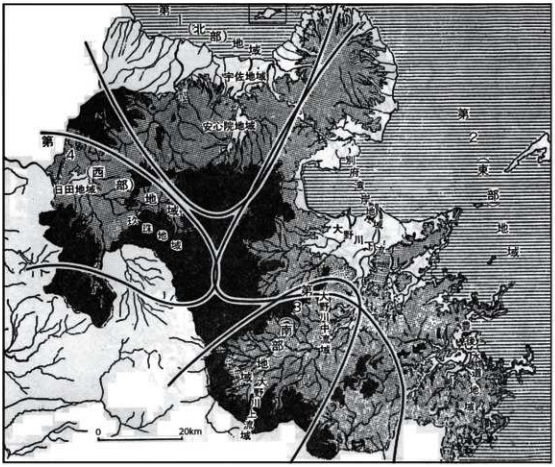
番号	遺跡名(出土遺構)	遺跡所在地	鏡　式	直径cm	弥式の年数	製作年代	出土遺構の時期	備　考	文　献
1	小岡遺跡１号竪穴住居跡	竹田市大字竹上字小岡	方格規矩鏡	9～	3	前漢中葉	前漢前期後葉		『野外の地と民芸の遺跡』, 1965, 竹田市教育委員会
2	小岡遺跡５号竪穴住居跡	竹田市大字竹上字小岡	位製内行花文鏡	7.8		前半期前～	前半期前～終末	宅形鏡	『野外の地と民芸の遺跡』, 1965, 竹田市教育委員会
3	石寿入口遺跡遺構跡出土	竹田市大字菅生	位製鏡	10		前半期	前半期	ほぼ宅形	『野外の地と民芸の遺跡』, 1965, 竹田市教育委員会
4	石寿入口遺跡２号竪穴住居跡	竹田市大字菅生	鼎手状文様鏡	5.5			前半期	宅形鏡	『野外の地と民芸の遺跡』, 1965, 竹田市教育委員会
5	石寿入口遺跡４５号竪穴住居跡	竹田市大字菅生	?			前漢	前半期～	文様不明	『野外の地と民芸の遺跡』, 1965, 竹田市教育委員会
6	石寿入口遺跡３６号竪穴住居跡	竹田市大字菅生	?			前漢	前半期前以降	縁のみ	『野外の地と民芸の遺跡』, 1965, 竹田市教育委員会
7	石寿入口遺跡９２号竪穴住居跡	竹田市大字菅生	半肉彫四乳獣形鏡	12～		前漢晩期		文様不明	『野外の地と民芸の遺跡』, 1965, 竹田市教育委員会
8	鉄鏡遺跡１０号竪穴住居跡	竹田市大字鉄	鼎型手環内行花文鏡		1	前漢中葉	前半期前後	住居跡東側から内小型鼎で埋土から出土。	『福岡八幡社遺跡・鉄遺跡・和遺遺跡』, 2014, 竹田市教育委員会
9	駅ヶ田尾遺跡 A 地区 20 号竪穴住居跡	竹田市大字竹ヶ瀬字沖ノ原	位製鏡（６孤文）	11			古墳初頭	住居跡埋土の中位から出土。宅形鏡	『竹ヶ瀬遺跡・下竹ヶ瀬遺跡・駅ヶ田尾遺跡』, 2019, 竹田市教育委員会
10	駅ヶ田尾遺跡 A 地区 27 号竪穴住居跡	竹田市大字竹ヶ瀬字沖ノ原	櫛歯文帯鏡		1		古墳前～前半期前後	住居跡埋土の中ほど	『竹ヶ瀬遺跡・下竹ヶ瀬遺跡・駅ヶ田尾遺跡』, 2019, 竹田市教育委員会
11	老野遺跡７号竪穴住居跡	竹田市久住町大字久住	位製鏡（４孤文）	13	4	前漢中葉～後葉	前半期中葉	周囲、破砕部以下等に破壊。	『老野遺跡』, 2014, 久住町教育委員会
12	石田遺跡７号位置跡	竹田市大字石田	位製鏡（与五匹文様多分所出）	5.0			前半期	赤色顔料付着、宅形鏡	『石田遺跡・石田遺跡』, 1986, 大分町教育委員会
13	山ノ神谷遺跡１号竪穴住居跡	竹田市前町大字町	方格規矩鏡?	9.8	無	前漢	前半期前後	住居跡埋土中心出土	『山ノ神谷遺跡』, 1997, 前町教育委員会
14	二本木遺跡２１号竪穴住居跡	豊後大野市大野町大字切中	雲雷文流宜子藤内行花文鏡	15～1	1	前漢中～前期	前半期前後	床面直上出土	『大野原六遺跡』, 1980, 大野町教育委員会
15	松本遺跡 25 号竪穴住居跡	豊後大野市大野町大字中原	方格規矩鏡?	11.4		前漢中葉	前半期前後葉	床面から15cm上で出土	『大野原六遺跡』, 1980, 大野町教育委員会
16	穴井南遺跡１号竪穴住居跡	豊後大野市大野町相原字東迫	雲雷文内行花文鏡	11.4	1	前漢前葉～	前半期～	6.2×4.2cmの方形穴穴周囲から出土。石本柱、破砕部は手慣れあり。鋳片・鉄滓や勾玉出土。	『一般国道中九州横断道路建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（2）』, 2007, 大分県教育庁埋蔵文化財センター
17	岡遺跡下ノ原地区包含層	豊後大野市大野町長笛	位製鏡（10 孤文）	7.8				文様不明瞭。	『一般国道中九州横断道路建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（2）』, 2007, 大分県教育庁埋蔵文化財センター
18	鬼道原遺跡 152 号竪穴住居跡	豊後大野市千歳村大字柴山字鬼塚入保	位製鏡	10			前半期前後葉	宅形鏡	『鬼道原遺跡発掘調査報告書』, 2005, 千歳村教育委員会
19	鬼道原遺跡 168 号竪穴住居跡	豊後大野市千歳村大字柴山字鬼塚入保	方格規矩鏡?	13	無	前漢	前半期前後葉	5×3.6cmの方形穴穴、礫黒色炭質。側の口に赤色顔料付着	『鬼道原遺跡発掘調査報告書』, 2005, 千歳村教育委員会
20	舞田原遺跡 36 号竪穴住居跡	豊後大野市大野町大字田原	鼎型鏡		無	前漢前葉	前半終末～古墳初頭		『舞田原』, 1985, 大野町教育委員会
21	高松遺跡 16 号竪穴住居跡	豊後大野市大野町大字大野字松山	連弧文昭明鏡	9.6	1	前漢	前半終末	側口付鉄鏃。	『高松遺跡』, 1986, 大野町教育委員会
22	高松遺跡 36 号竪穴住居跡	豊後大野市大野町大字大野字松山	鼎型文様方格規矩鏡	15.3	1	前漢	前半期前後葉～終末	側口付鉄鏃。	『高松遺跡』, 1986, 大野町教育委員会
23	高松遺跡 No.56ピット	豊後大野市大野町茨城	鼎文鏡方格規矩鏡		1	前漢末	前半?	覆孔上に赤漆の孔上。	『高松遺跡　石生遺跡Ⅰ次調査・石生遺跡Ⅰ次調査・石生遺跡Ⅱ次調査』, 2006, 豊後大野市教育委員会
24	雄城台遺跡６次８号竪穴住居跡	大分市ミドル西ノ口	雲雷文内行花文鏡		1	前漢中葉～後葉	前半前期～古墳初頭	内部黒色炭質。側の口に赤色顔料付着	本報告書
25	雄城台遺跡７次１号竪穴住居跡	大分市玉沢西ノ口	方格規矩鏡		無	前漢中葉～前漢後葉	前半終末～古墳初頭		本報告書
26	樋田条里跡 B 区溝	大分市玉沢	小型位製鏡（乳手状文様?）	5.9			前半終末?	宅形鏡、文様不明瞭	『ヤシロ遺跡　樋田条里跡　樋田条里遺跡』, 1997, 大分県教育委員会
27	宇岡遺跡Ｂ区１号竪穴住居跡	大分市大字鶴字宇岡	連弧文昭明鏡	9.3	無	前漢初	前半終末		『宇岡遺跡』, 1985, 大分県教育委員会
28	宇岡遺跡Ｂ区 10 号竪穴住居跡	大分市大字鶴字宇岡	四乳獣帯鏡	12～	無	前漢後葉	前半終末	貫穴の文字。破砕前埋葬遺ったか。	『宇岡遺跡』, 1985, 大分県教育委員会
29	地蔵原遺跡竪穴住居跡	大分市大字小地原	連弧文昭明鏡?	10	2	前漢初	前半前期後葉		『大分県文化史論文』, 1980, 大分県
30	尻ケ城遺跡竪穴住居跡	大分市永興字鶴城	方格規矩鏡	17	2	前漢中葉～	前半前期～		『大分市の文化財』, 1982, 大分市教育委員会
31	大道遺跡 4SX015	大分市大道町	方格規矩鏡?			?	不明		『大道遺跡第２』, 2009, 大分市教育委員会
32	鶴大道遺跡 B 地区	大分市金池南１丁目	方格規矩鏡?	11.3	無	前漢中葉～		近畿系目の前上下部出土。	『鶴大道遺跡第２』, 2012, 大分市教育委員会
33	鶴遺跡３号竪穴住居跡	臼杵市野津町原字下藤	方格規矩鏡	8～		前漢中葉	前半前葉～終末（?）		
34	北方下角遺跡 10 号竪穴住居跡	南海市佐賀町大字北方下角	位製鏡（７孤文）			弥生後期後葉	弥生後期後葉	住居跡床面より6ヶ所に炭化物で出土。宅形鏡。	『北下角遺跡』, 1999, 佐賀町教育委員会
35	円通寺遺跡 SC03 竪穴式住居跡	別府市大字北石垣字小林手	位製鏡（複線6孤文）	7.4				宅形鏡。	『文化財研究所年報』（4）第4次調査（2003年）, 2005, 別府大学文化財研究所
36	古城遺跡 20 号住居跡	杵築市大字上小倉前	格獣文鏡		無	前漢	前半終末～古墳初頭		『古城遺跡調査－小川和遺跡』, 1986, 宗川教育委員会
37	御供遺跡２号石蓋土壙墓	豊後高田市大字宝満	雲雷文内行花文鏡		2	前漢		御供付近から出土。ペンダントとして使用か。鋳片口は摩滅。	『御供遺跡』, 1986, 豊後高田市教育委員会
38	御供遺跡１号石棺墓	豊後高田市大字宝満	方格規矩鏡		無	前漢		敷石側壁直上他４ヶ所に敷設され。	『御供遺跡』, 1986, 豊後高田市教育委員会
39	百ノ原遺跡 B3 区北部遺構	安心院下毛郡ノ原	方格規矩鏡	13.2	無	前漢中葉～	前半期?		『安心院百ノ原遺跡』, 1984, 安心院町教育委員会
40	百ノ原遺跡 12 号竪穴住居跡	安心院下毛郡ノ原	方格規矩鏡	10.4	無	前漢中葉～	前半期?	竪穴住居跡上面出土。	『安心院百ノ原遺跡』, 1984 安心院町教育委員会
41	上原遺跡竪穴住居跡	宇佐市法鏡寺上原	鼎型手環内行花文鏡			前漢中葉～後葉	前半終末～古墳初頭		
42	木丸遺跡 15 号石蓋土壙墓	宇佐市真珠	雲雷文内行花文鏡		2	前漢前葉	前半終末～古墳初頭（?）	鼎型出。	
43	深山遺跡草刈ヒカ	中津市大字深山	位製鏡（７孤文）	7.5				宅形鏡。	『深山遺跡』, 2016, 大分県教育庁埋蔵文化財センター
44	草場第二遺跡小竹ヶ谷墓内	田川市高野寺	位製鏡	5.5		弥生後期		本来宅形の可能性。鋳型品か（?）	『草場第二遺跡』, 1986, 大分県教育委員会
45	草場遺跡１３号墓	田川市法師寺	位製鏡	12～		前漢前葉	前半期か?	鋳片。	『大分県の考古学』, 1975, 雪山史太
46	小倉辻原遺跡 B 区４号竪穴	田川市大字小倉字辻原	鼎型手環内行花文鏡	22～	1	前漢前葉			『小倉辻遺跡』, 1996, 大分県教育委員会
47	浅辻遺跡	田川市大字二和	位製鏡	7.7		前半期～終末	前半期か?	宅形鏡。	『前遺遺跡』, 2001, 大分県教育委員会
48	本村遺跡 32 竪穴住居跡	田川市南五田町	位製鏡	8			前半期前後葉	長方形プラン竪穴住居跡南西から6ヶ所で炭化物出土。鋳片出る。	『本村遺跡３次』, 2004, 田川教育委員会
49	惣原遺跡 C 区	田川市南五田字惣原	位至三公鏡				古墳前期～中期	鋳片。	『平成５年度田川教育庁文化財年報』, 1995, 田川教育委員会
50	おこそ山遺跡上壙墓	直鳥町大隈	鼎型手環内行花文鏡（?）	15～			前半～古墳初頭?	鼎型出。土壙中央部原槨部で出土。	『おこそ山遺跡調査概報』, 1977, 直鳥町教育委員会
51	若草台地式石棺	直鳥町大字若草台	鼎型文様	7			古墳初頭?	鼎型出。	『大分県の考古学』, 1975, 雪山史太
52	弟尾川地区遺跡 SB15 竪穴住居	直鳥郡久恵町大字直鳥字弟尾	鼎型手環内行花文鏡（?）	16	無	前漢前葉	古墳前期（?）	古墳前期の方形竪穴住居跡出土。	『弟尾川地区遺跡』, 2011, 大分県教育庁埋蔵文化財センター

註 1

高橋はかって、弥生時代終末に出土する、製作時期の異なる中国鏡片を国内における「伝世」として理解する往時の通念を無批判に用い、拙考を惑らしたことがある。しかしながら、その後、前提とした「伝世(概念)」は再検討されなければならないという認識に至り、試論を発表している(高橋 1979、1986)。

文献

岡村秀典 1984「前漢鏡の編年と様式」『史林』67-5
高倉洋彰 1972「弥生時代小形彷製鋼鏡について」『考古学雑誌』58-3
高倉洋彰 1976「弥生時代副葬遺物の性格」『九州歴史資料館研究論集』2
高島忠平 1979「漢式鏡について」『二塚山遺跡』佐賀県文化財報告書 46。
高橋徹 1979「廃棄された鏡片－豊後における弥生時代の終焉－」『古文化談叢』第 6 集
高橋徹 1986「伝世鏡と副葬鏡」『九州考古学』60
高橋徹 1992「(E) 鏡」『菅生台地と周辺の遺跡XV　大分県竹田地区遺跡群発掘調査報告』 竹田市教育委員会
高橋徹 1994a「大分県出土の古鏡について (1) －出土地名表－」『大分県地方史』第 152 号
高橋徹 1994b「大分県」『国立歴史民俗博物館研究報告第 56 集　共同研究日本出土鏡データ集成 2』
森貞次郎 1985「弥生時代の東アジアと日本」『稲と青銅と鉄』 日本書籍



第 406 図　弥生時代における地域概念図

第７表　遺構一覧表（1）

種別	調査次数	遺構番号	形状	規模	時期	備考
竪穴建物	1	1	方形		後期	
		2	方形		Ⅸ	
		4	方形		Ⅵ～Ⅶ	
		5	方形		Ⅵ～Ⅶ	
		6	方形？		後期以降	
		7	方形？		Ⅶ	
	2	3	長方形？		Ⅶ～Ⅷ	４本柱？、中央に炉、焼土４カ所
		4	方形		Ⅶ～Ⅷ	４本柱、中央に炉、西壁際に焼土
		5	方形		Ⅶ～Ⅷ	６本柱？、焼土３カ所
	3A	1	方形		Ⅷ～Ⅸ	
		2	方形		Ⅸ以降	
		3	隅丸方形		Ⅵ	
		4	方形			
		5	方形？		Ⅵ～Ⅶ	
		6	方形		Ⅶ～Ⅷ	
		7	方形		後期	
	3B	1	円形		Ⅲ	２号と相似形で拡張
		2	円形		Ⅲ	
		3	方形		Ⅵ～Ⅶ	
		4	方形		Ⅸ以降	
		5	？		Ⅳ～Ⅴ	ごく一部の調査
	4	1	方形		Ⅵ～Ⅶ	４本主柱、周溝あり
		2	方形		Ⅵ～Ⅶ	周溝あり
		3	方形		Ⅶ	４本主柱
		4	不明		Ⅵ～Ⅶ	
		5	円形		後期	
		6	隅丸方形		後期	
		7	方形		Ⅸ	
		8	？		後期	焼土の広がりあり、壁削平か
		10	方形		後期	
		11	方形			他の竪穴に切られていて、ほとんど残存しない
		16	方形		後期	
		20	方形		後期？	
		21	方形		後期	４本主柱、周溝あり
		22	方形		後期	
		23	円形		Ⅶ	
		24	隅丸方形			４本主柱、壁溝あり
		25	方形		後期以降	４本主柱、壁溝あり
		26	方形		後期以降	
		27	方形			
		28	方形		後期以降	
		29	方形		Ⅵ～Ⅶ	
	5	1	方形		Ⅶ以降	４本主柱
		3	方形		Ⅸ	
		4	方形		Ⅸ以降	４本主柱
		10	方形		後期以降	壁際６本主柱
		12	方形		後期	
		13	方形		Ⅶ以降	
		14	不明		Ⅶ以降	全体形状不明
		15	方形		Ⅶ以降	
		16	方形		後期か	
		17	方形		Ⅶ	
	6	1	方形		Ⅵ	
		2	方形		Ⅹ	
		3	方形		Ⅹ	

第８表　遺構一覧表（2）

種別	調査次数	遺構番号	形状	規模	時期	備考
竪穴建物	6	4	方形		後期以降	花弁形住居の系譜か
		5	方形		Ⅶ～Ⅷ	
		6	方形		Ⅶ～Ⅷ	
		7	方形		Ⅸ	
		8	方形		Ⅷ～Ⅸ	
		9	方形		Ⅶ	
		10	方形		Ⅸ以降	
		13	方形		後期以降	
		14	方形		Ⅶ～Ⅸ	
		15	方形		古墳後期	
		18	方形		Ⅵ	ピット二つに接する、全体形状不明
		23	方形		Ⅹ	
		24	方形		Ⅸ～Ⅹ	
		25	?		Ⅷ	
	7	1	方形		Ⅸ	壁溝巡る
		3	方形		後期前半	
		4	方形			
		6	―			
		7	方形		後期?	
		8	―			
		9	方形			
		10	方形		Ⅷ	４本主柱
		11	円形		古墳後期	
		12	円形		中期?	９本主柱
		13	―			
		14	方形		Ⅵ～Ⅶ	４本主柱
		15	方形		Ⅶ	ほとんど残存しない
		16	方形		後期?	
		17	方形		後期	壁溝のみ
		18	円形?		Ⅱ～Ⅲ	
		19	方形		Ⅶ	大型住居、火災住居?
		20	方形?		後期?	
		23	隅丸方形?		Ⅲ～Ⅳ	
		24	方形		Ⅸ	
		25	方形		Ⅶ以降	４本主柱か
		26	隅丸方形		Ⅶ	
		27	方形		Ⅶ～Ⅷ	壁溝巡る
		28	方形			
		29	不明		Ⅶ	大部分削平受ける
		30	方形?			半分未掘
	9	1	方形			
		2	隅丸方形?		後期?	
		3	隅丸方形		後期?	
		4	方形		後期?	
		5	方形		後期?	
		6	円形		Ⅳ	
		7	方形		後期?	
		8	円形?		後期	壁は削平受ける
土坑	1	1号土坑	長楕円形		Ⅱ	
		3号土坑	大型楕円形		Ⅲ	
		9号土坑	長方形		Ⅶ	
		10号土坑	隅丸長方形		Ⅲ	
		12号土坑	長方形		Ⅸ	
		13号土坑	円形		中期	貯蔵穴?
	4	12号土坑	円形			

第９表　遺構一覧表（3）

種別	調査次数	遺構番号	形状	規模	時期	備考
土坑	4	13 号土坑	円形			
		15 号土坑	方形		Ⅲ	
		17 号土坑	円形		Ⅲ	
		27 号土坑	楕円形			27pit
		32 号土坑	円形		前～中	
		33 号土坑	円形		Ⅱ	
		101 号土坑	隅丸方形			2 基の土坑が切り合う。
		6 区南壁ピット	円形			
	5	18 号土坑	円形		Ⅳ	
		2 号土坑	方形		Ⅳ	
		5 号土坑	円形		Ⅲ～Ⅳ	
		6 号土坑	円形		後期か	
		7 号土坑	方形		Ⅱ	
		8 号土坑	楕円形		Ⅱ	
		9 号土坑	隅丸方形		Ⅱ	
		11 号土坑	方形		Ⅱ	
		20 号土坑	円形		Ⅱ	16 号住居内
		23 号土坑	不定形			
		24 号土坑	楕円形			甕埋置
	6	1 号土坑	隅丸長方形			
		2 号土坑	長方形？		Ⅲ	
	7	1 号土坑	方形		Ⅱ～Ⅲ	
		2 号土坑	長方形		Ⅲ	
		3 号土坑	方形		後期	
		4 号土坑	方形		Ⅱ	
		4 号土坑南側土坑	円形		Ⅱ	袋状ピット、貯蔵穴
		5 号土坑	―			
		6 号土坑			Ⅱ～Ⅲ	複数の土坑が切り合っている？
		7 号土坑	楕円形		Ⅱ～Ⅲ	
		8 号土坑	円形		Ⅰ～Ⅱ	貯蔵穴
		9 号土坑	方形		Ⅳ～Ⅴ	
		11 号土坑	方形		後期	
		12 号土坑	―			
		13 号土坑	方形		Ⅲ	
		14 号土坑	円形		Ⅱ～Ⅲ	貯蔵穴
		15 号土坑	楕円形			
		16 号土坑	方形		Ⅱ～Ⅲ	
		17 号土坑	楕円形		Ⅱ	
		18 号土坑	方形？		Ⅲ	複数が切り合っている？
		19 号土坑	方形？		Ⅱ～Ⅲ	いくつかの土坑が重なっている
		20 号土坑	―			
		21 号土坑	―			
		22 号土坑	隅丸長方形		Ⅲ	
		23 号土坑	隅丸長方形		Ⅲ	
		24 号土坑	方形？		Ⅱ	標高不明
		25 号土坑	長方形		Ⅱ以降	
		26 号土坑	長楕円形		Ⅶ	
		27 号土坑	円形		Ⅰ	貯蔵穴
		28 号土坑	円形		Ⅰ	貯蔵穴
		29 号土坑	長方形			
		30 号土坑	隅丸方形		Ⅱ	
		31 号土坑	円形			

第 10 表　遺構一覧表（4）

種別	調査次数	遺構番号	形状	規模	時期	備考
土坑	7	32 号土坑	長方形			
		34 号土坑	不整形		Ⅰ	切り合っている?
		35 号土坑	隅丸方形?		Ⅱ	
		37 号土坑	長方形		Ⅲ	墓か?
		38 号土坑	楕円形			
		39 号土坑	隅丸方形		Ⅱ	
		40 号土坑	円形		Ⅵ以降	貯蔵穴?
		41 号土坑	楕円形?		中期?	
		42 号土坑	円形		中期?	貯蔵穴
		43 号土坑	―			
		45 号土坑	―		Ⅱ	
		46 号土坑	―			
		47 号土坑	方形?			
		48 号土坑	円形		中期?	
		49 号土坑	楕円形			
		50 号土坑	不整形			
		51 号土坑	方形?			
		52 号土坑	不整形			
		54 号土坑	楕円形		Ⅸ	貯蔵穴
		55 号土坑	方形		Ⅲ～Ⅴ	
		58 号土坑	長方形			
		60 号土坑	方形?		Ⅲ	
		1 号住西土坑				
		9 号住東南土坑				
	8	1 号土坑	長楕円形			
		2 号土坑	方形			
		3 号土坑	方形			
		4 号土坑	不整形			
		5 号土坑	楕円形?			
		6 号土坑	楕円形			
		7 号土坑	楕円形			
		8 号土坑	隅丸方形			
		9 号土坑	長方形			
	9	巴形銅器埋納坑				巴形銅器
		1 号土坑	不整形			
		2 号土坑	不整形			
		3 号土坑	円形			
		4 号土坑	長方形		Ⅱ	
		5 号土坑	長方形		Ⅱ	
		6 号土坑	円形			
		7 号土坑	円形		Ⅱ	
		8 号土坑	円形		Ⅱ	
		9 号土坑	円形		Ⅱ	
		10 号土坑	楕円形			
		11 号土坑	方形		中期	
		12 号土坑	不整形		後期後半	
溝	7	2 号溝				
	8	溝状遺構			Ⅸ	
	9	第 1 トレンチ溝 1			Ⅱ	
		溝 2				
掘立柱建物	6	1 号掘立柱建物	1 間 ×2 間		弥生か	

第 11 表　遺物一覧表土器（1）

図版番号	遺物番号	調査区数	遺構	層種	口径(残存幅)	器高(残高)	底部径(脚部最大径)	外面の文様・調整	内面の文様・調整	土師器				遺物特記
										角閃石	長石	石英	その他	
第68図	1	1区	2号竪穴	壁		12.9+α		横位ミガキ　板状押圧	ﾅﾃﾞ　指圧痕	多	多		少	2号住
第68図	2	1区	2号竪穴	壁	(14.7)	11.8+α		横編み成形文　磨滅　刷毛痕跡	指圧痕　ﾅﾃﾞ		多		多	2号住
第68図	3	1区	2号竪穴	壁		5.1+α		横編み成形文（磨滅）　ナデ	横編み成形文（磨滅）　ナデ　（指圧痕）	多	多		多	2号住
第68図	4	1区	2号竪穴	壁				ヘラ状ケズリ　ナデ	ナデ　（指圧痕）	少	多		多	2号住
第68図	5	1区	2号竪穴	壁		2.0+α	底有	ナデ　ハケ目ナデ	磨滅	少	多		多	2号住
第68図	6	1区	2号竪穴	壁	(20.0)	8.9+α		ヨコナデ　ハケ目	ヨコナデ　工具ナデ　ナデ　指圧痕	多	多		多	2号住
第68図	7	1区	2号竪穴	壁		3.7+α		ナデ　工具ナデ	工具ナデ　（指圧痕）	少	多		多	2号住
第68図	8	1区	2号竪穴	壁				磨滅	磨滅	多			多	2号住
第68図	9	1区	2号竪穴	表採		5.9+α		ヨコナデ　ハケ目	横位痕　ﾅﾃﾞ	多	多		多	2号住
第69図	10	1区	4号竪穴	壁				ナデ　粘質土貼付　与え状押文	ナデ	多	少		多	4号住
第69図	11	1区	4号竪穴	壁		3.7+α	(7.4)	縦方向ﾐｶﾞｷﾞ	ﾅﾃﾞ　指圧痕	多		少	多	4号住
第69図	12	1区	4号竪穴	壁		5.3+α	(5.3)	縦方向ﾐｶﾞｷﾞ	ﾅﾃﾞ	多	多		多	4号住
第69図	13	1区	4号竪穴	壁	(19.8)	7.1+α		ヨコナデ　磨滅	ナデ　ヨコナデ　（指圧痕）	少	多		多	4号住
第69図	14	1区	4号竪穴	壁				ヨコナデ　（指圧痕）　ナデ	ハケ目　工具ナデ　ヨコナデ（指圧痕）	少	多		少	4号住
第69図	15	1区	4号竪穴	壁				磨滅	磨滅	多	多		多	4号住
第69図	16	1区	4号竪穴	壁				ナデ　ヨコナデ　突帯貼付	ナデ　ヨコナデ	少	多		少	4号住
第69図	17	1区	4号竪穴	壁		3.6+α	(6.4)	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ				多	4号住
第69図	18	1区	4号竪穴	壁		2.9+α	(6.0)	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ				多	4号住
第69図	19	1区	4号竪穴	壁		5.6+α	(7.2)	縦方向ﾐｶﾞｷﾞ　磨滅	ﾅﾃﾞ	多	多	少	多	4号住
第69図	20	1区	4号竪穴	壁		5.1+α	(7.0)	縦方向ﾐｶﾞｷﾞ	磨滅				多	4号住
第69図	21	1区	4号竪穴	鉄	(22.2)	9.5+α		磨滅	ﾅﾃﾞメ方向のハケ　ナデ	多	多		多	4号住
第71図	22	1区	5号竪穴	壁		6.1+α		ﾅﾃﾞ　三角突帯	ﾅﾃﾞ	多	多		多	5号住
第71図	23	1区	5号竪穴	壁		6.3+α		ﾅﾃﾞ　三角突帯	ﾅﾃﾞ	多	多		多	5号住
第71図	24	1区	5号竪穴	壁		3.7+α		ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	多	多			5号住
第71図	25	1区	5号竪穴	壁		3.5+α	(11.0)	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	多	多			5号住
第71図	26	1区	5号竪穴	壁		3.2+α		ﾅﾃﾞ　ﾅﾃﾞ　ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	多	多			5号住
第71図	27	1区	5号竪穴	壁				ヨコナデ　粘土貼突帯	ヨコナデ　指圧痕	多	多		多	5号住
第71図	29	1区	5号竪穴	壁		11.7+α	3.5	工具ﾅﾃﾞ　ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	多	多			5号住
第71図	30	1区	5号竪穴	壁		5.1+α	(4.8)	磨滅	ﾅﾃﾞ	多	多		多	5号住
第71図	31	1区	5号竪穴	壁		4.8+α	2.5	ﾅﾃﾞ	工具ナデ	多	多	多	多	5号住
第71図	32	1区	5号竪穴	表採		3.1+α		ﾅﾃﾞ　ﾎｲﾄﾞ	工具ﾅﾃﾞ	多	多			5号住
第71図	33	1区	5号竪穴	表採		4.8+α		ﾋﾞｶﾞｷ	ﾅﾃﾞ	多	多			5号住
第71図	34	1区	5号竪穴	覆		9.0+α	(13.0)	ﾅﾃﾞ　指圧痕	ﾅﾃﾞ　指圧痕	多	多			5号住
第71図	39	1区	7号竪穴	壁		2.5+α		ﾅﾃﾞ　横編成状文	ﾅﾃﾞ	多	多		多	7号住
第71図	40	1区	7号竪穴	壁		3.7+α		ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	多	多			7号住
第71図	41	1区	7号竪穴	壁		7.3+α		ﾅﾃﾞ　粘土突帯	ﾅﾃﾞ　指圧痕	多	多			7号住
第71図	42	1区	7号竪穴	壁		3.2+α		竹管刻文　ﾅﾅﾒﾊｹ目	ﾅﾃﾞ	少	多			7号住
第71図	43	1区	7号竪穴	壁		5.1+α	(4.8)	ﾅﾃﾞ　粘土突帯	ﾅﾃﾞ	多	多		多	7号住
第71図	44	1区	7号竪穴	壁		4.9+α	4.8	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	多	多		多	7号住
第71図	45	1区	7号竪穴	壁	(21.2)	7.8+α		ヨコナデ　ﾅﾅﾒ方向のハケ後ナデ（磨滅）	ﾅﾃﾞ		少		多	7号住
第71図	46	1区	7号竪穴	鉄				磨滅　ﾅﾅﾒ方向のハケ後ナデ	磨滅	少	少		少	7号住
第71図	47	1区	7号竪穴	付属土坑				ナデ	ナデ	多	多		多	7号住
第71図	48	1区	7号竪穴	表採?				磨滅	磨滅	多	多		多	7号住
第71図	49	1区	7号竪穴	覆	(21.4)	6.0+α		ﾅﾅﾒ方向のﾐｶﾞｷ	ﾅﾅﾒ方向のﾐｶﾞｷ後ﾅﾅﾒ方向のﾐｶﾞｷ	多	多		多	7号住
第72図	51	1区	1号土坑	覆	(30.4)	8.7+α		ﾖｺﾅﾃﾞ　細沢突帯　ﾅﾅﾒﾊｹ	ﾖｺﾅﾃﾞ　ﾎﾟ	多	多			6A　6C土坑
第72図	52	1区	1号土坑	覆	(31.4)	6.0+α		ﾖｺﾅﾃﾞ　細沢突帯　ﾎﾟ	ﾎﾟ	多	多			6C　1A土坑
第72図	53	1区	3号土坑	覆	(18.6)	3.0+α		ヨコナデ　（指圧痕）	ナデ　ヨコナデ	少	多		多	3号住直上
第72図	54	1区	3号土坑	覆		5.5+α	底有	ナデ	磨滅	多	多		多	3号住
第72図	55	1区	3号土坑	覆				粘付突帯　縦方向ﾐｶﾞｷ後横方向ﾐｶﾞｷ	ﾎﾟ		少	少	多	5C　3号住
第72図	56	1区	3号土坑	覆				ヨコナデ	ヨコナデ		少		多	3号住
第72図	57	1区	3号土坑	覆				ヨコナデ　ナデ　突帯貼付	ナデ　ヨコナデ		少		多	3号住
第80図	60	1区	9号土坑	覆				ﾖｺﾅﾃﾞ　ﾎﾟ　三角突帯　ﾎﾟ　工具痕ﾅﾃﾞ（ﾎﾟ）の痕跡）	ﾎﾟ　指圧痕	少	少			9号住
第80図	61	1区	10号土坑	覆		5.3+α		ナデ　横ﾐｶﾞｷ	ナデ	多	多		少	10号住　壁穴Pit
第80図	62	1区	10号土坑	覆				ﾎﾟ　三角突帯	不明		少	少		10号住
第80図	63	1区	10号土坑	覆		3.1+α	(7.0)	ﾎﾟ	ﾎﾟ	少	少			10号住
第80図	64	1区	10号土坑	覆		2.0+α	(10.0)	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	不明	少	少			10号住
第80図	65	1区	10号土坑	覆	(24.6)	6.8+α		ヨコナデ　ナナメハケ目	ヨコナデ　ナデ	多	多		多	10号住　壁穴Pit
第80図	66	1区	10号土坑	覆		1.8+α		ヨコナデ	ヨコナデ	多	多		多	10号住　壁穴Pit
第80図	67	1区	10号土坑	覆		3.8+α		ナデ	ナデ	多	多		多	10号住　壁穴Pit
第80図	68	1区	10号土坑	覆				ﾖｺﾅﾃﾞ　ﾎﾟ　ﾎﾟ　細沢突帯	ﾖｺﾅﾃﾞ　指圧痕	少	少		多	6A　10号住
第80図	69	1区	10号土坑	覆	(23.4)	18.6+α		ヨコナデ　細沢突帯　ナデ方向のハケ後ナデ	工具ナデ	多	多	多	少	10号住　壁穴　Pit　12号住　壁穴
第80図	70	1区	10号土坑	覆		4.5+α		ヨコナデ　ナナメハケ目	ヨコナデ　ナデ	多	多		多	10号住　壁穴Pit
第80図	71	1区	10号土坑	覆				ﾖｺﾅﾃﾞ　ﾎﾟ	ﾖｺﾅﾃﾞ　ﾎﾟ　指圧痕	少	少		少	10号住
第80図	72	1区	10号土坑	覆		3.6+α	(6.2)	ﾎﾟ　ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾎﾟ	少	少		少	10号住
第80図	73	1区	10号土坑	覆		5.2+α		ナデ	ナデ	多	多		多	10号住　壁穴Pit
第82図	76	1区	12号土坑	覆	(14.0)	22.7+α		横編ミ(ナデ方向のハケ目)	磨滅	多	多		多	12号住　壁穴　一括
第82図	77	1区	12号土坑	覆				ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	少	少		少	12号住
第82図	78	1区	12号土坑	覆		6.9+α		ヨコナデ　粘付突帯　ナナメハケ目	ヨコナデ　ナデ	多	多		多	12号住　壁穴
第82図	79	1区	12号土坑	覆		7.3+α	6.7	横編　ヨコナデ	磨滅	多	多	多	12号住	12号住
第82図	81	1区	一括	壁		4.2+α		縦方向のﾐｶﾞｷ　粘付突帯	ﾎﾟ　指圧痕　ﾍﾗ	多	多		多	6B　A ブロック-11
第82図	82	1区	一括	壁		27.1+α		ﾎﾟ+横ﾐｶﾞｷ　ﾎﾟ　細沢突帯　涉文 位置ﾍﾗ+縦ﾐｶﾞｷ	ﾎﾟ　指圧痕	少	少		少	6B　A ブロック-16
第82図	83	1区	一括	壁	(21.2)	11.6+α		ﾖｺﾅﾃﾞ　不明　ﾎﾟ+ﾍﾗ　横編成成文	ﾖｺﾅﾃﾞ　ﾎﾟ　指圧痕	少	少		少	
第82図	84	1区	一括	壁				ﾎﾟ　横編成成文	ﾎﾟ	少	少			11号pit
第82図	85	1区	一括	壁				ﾎﾟ　細沢突帯	ﾎﾟ		ﾎﾟ			11号pit
第82図	86	1区	一括	壁		6.2		粘付突帯　ﾎﾟ	ﾎﾟ　指圧痕	少	少		少	2C
第82図	87	1区	一括	壁				ﾖｺﾅﾃﾞ　ﾎﾟ　三角突帯	ﾎﾟ　指圧痕			少	多	11号pit
第82図	88	1区	一括	壁		16.0+α	6.2	ﾎﾟ　指圧痕	ナデ	多	多			
第82図	89	1区	一括	壁		13.5+α		ﾎﾟ+ﾍﾗ+ﾐｶﾞｷ	ﾎﾟ	少	多		少	
第82図	90	1区	一括	壁		8.5+α		縦方向ﾐｶﾞｷ	工具ﾎﾟ	多	少		少	6D
第82図	91	1区	一括	壁		20.0+α		縦方向ﾐｶﾞｷ	横方向ﾐｶﾞｷ　ﾎﾟ	少	少	少	多	6B　A ブロック
第82図	92	1区	一括	壁	(12.0)	15.7+α		ヨコナデ　ﾎﾟ	ヨコナデ　ﾎﾟ	多	多		多	a ブロック
第82図	93	1区	一括	壁	15.3	13.1+α		磨滅	磨滅	多	多	多	多	
第82図	94	1区	一括	壁	13.4	36.7+α		不明瞭	板状工具ナデ後ナデ	少	多		少	6D
第82図	95	1区	一括	壁	(46.8)	14.7	(15.6)	ﾖｺﾅﾃﾞ　ﾋﾞﾎﾟ　指圧痕　ﾎﾟ　縦方向のﾐｶﾞｷ	ﾖｺﾅﾃﾞ　ﾎﾟ　指圧痕　ﾎﾟ　縦方向のﾐｶﾞｷ	多	多		多	6B　A ブロック
第82図	96	1区	一括	壁		17.3+α		ﾖｺﾅﾃﾞ　斜めの方向ﾍﾗ+ﾐｶﾞｷ　磨滅	ﾖｺﾅﾃﾞ　斜めの方向ﾍﾗ+ﾐｶﾞｷ　ﾎﾟ	多	多			
第82図	97	1区	一括	壁	(13.0)	18.7		ﾖｺﾅﾃﾞ　不明瞭	板状ﾍﾗ+ﾎﾟ　ﾖｺﾅﾃﾞ　指圧痕	少	少			6B　A ブロック　一括
第82図	98	1区	一括	壁	(22)	6.5		ﾎﾟ　指圧痕　縦方向のﾐｶﾞｷ　磨滅	ﾖｺﾅﾃﾞ　ﾍﾗ状工具によるﾎﾟ	多	多		多	6B
第82図	100	1区	一括	鉄		6.1	7.2	ﾎﾟ方向のﾐｶﾞｷ後ﾍﾗ状工具によるﾎﾟ	ﾎﾟ　ﾍﾗ状工具によるﾎﾟ	多	多		多	6A
第82図	101	1区	一括	覆		4.1+α	(5.2)	ナデ	工具ナデ	少	多	多		
第82図	102	1区	一括	覆		7.2+α	8.8	ﾍﾗﾎﾟ　ﾎﾟ+ﾐｶﾞｷ　指圧痕	ﾎﾟ	多	多			6A
第82図	103	1区	一括	覆	(32.5)	13.4+α		ﾖｺﾅﾃﾞ　細沢突帯　縦方向のﾐｶﾞｷ	ﾎﾟ	少	少		多	
第82図	104	1区	一括	覆	(21)	12.6	ﾎﾟ	ﾎﾟ　縦方向のハケ目　粘付刻目突帯	ﾍﾗ指ﾎﾟ　ﾎﾟ　指圧痕	多	多		多	6B
第82図	105	1区	一括	覆	(30.6)	6.7+α		刻目工具　刻目突帯　斜めの方向ﾍﾗ	刻目工具	多	多		多	6D
第82図	106	1区	一括	覆				ﾖｺﾅﾃﾞ　細沢突帯　不明	ﾎﾟ　指圧痕	少	少		多	11号pit
第82図	107	1区	一括	覆				細沢突帯　ハケ目(磨滅)	ナデ(磨滅)		多	多	多	

第12表 遺物一覧表 土器（2）

図版番号	遺物番号	調査次数	遺構	器種	口径(残存幅)	器高(残存高)	底部径(脚部最大径)	外面の文様・調整	内面の文様・調整	胎土 角閃石	胎土 長石	胎土 石英	胎土 その他	遺物注記
第26図	108	1次	一括	甕				磨滅 刻目突帯	磨滅	少			多	
第26図	109	1次	一括	甕				ﾖｺﾅﾃﾞ ﾅﾃﾞ ﾊｹﾒ 刻目突帯	ﾅﾃﾞ 指圧痕	少	少		少	14号pit
第26図	110	1次	一括	甕	(22.8)	5.2+α		刻み目突帯貼付 ハケ目	ヨコナデ ナデ	少	少		少	
第26図	111	1次	一括	甕	(24.6)	11.2+α		ヨコナデ ハケ目 磨滅 刻み目突帯貼付	ヨコナデ ナデ	少	少		少	
第26図	112	1次	一括	甕	(22.0)	12.7+α		ヨコナデ 刻目突帯 タテ方向のハケ後ナデ	指圧痕 ヨコナデ 工具ナデ		少	少		
第26図	113	1次	一括	甕	(21.8)	14.6+α		ヨコナデ 刻目突帯 タテ方向のハケ後ナデ	指圧痕 ヨコナデ 工具ナデ		少	少		12号住 竪穴 10号住 竪穴 Pit
第26図	114	1次	一括	甕	(26.0)	22.4+α		刻目口縁 刻目突帯 縦方向ﾊｹﾒ	ﾅﾃﾞ 指圧痕	多		多	多	6D
第26図	115	1次	一括	甕				刻目突帯 ナデ	ナデ	多	多	多	多	
第26図	116	1次	一括	甕				ﾖｺﾅﾃﾞ ﾅﾅﾒﾊｹ 刻目突帯	ﾅﾃﾞ ﾖｺﾅﾃﾞ 指圧痕	少	少			14号pit
第26図	117	1次	一括	甕				ﾖｺﾅﾃﾞ ﾅﾃﾞ 刻目突帯	ﾖｺﾅﾃﾞ ﾅﾃﾞ 指圧痕	少	少		少	14号pit
第26図	118	1次	一括	甕				ﾅﾃﾞ ﾖｺﾅﾃﾞ 刻目突帯	ﾖｺﾅﾃﾞ ﾅﾃﾞ 指圧痕	少	少			14号pit
第26図	119	1次	一括	甕	(18.6)	11.1+α		ﾖｺﾅﾃﾞ 刻目突帯 ﾅﾅﾒﾊｹ	ﾖｺﾅﾃﾞ ﾅﾃﾞ	多	多			
第27図	120	1次	一括	甕	(28.9)	14.9+α		ﾖｺﾅﾃﾞ ﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ ﾅﾅﾒﾊｹﾒ	多	多			
第27図	121	1次	一括	甕				ヨコナデ 貼付突帯	ヨコナデ	少	少		多	
第27図	122	1次	一括	甕	(21.3)	2.9+α		ヨコナデ	ヨコナデ	少	少		少	
第27図	123	1次	一括	甕	(27.3)	10.8+α		ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	多	多		多	aブロック4
第27図	124	1次	一括	甕	19.7+α	40.8		ﾀﾃﾊｹﾒ ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ 指圧痕 ﾖｺﾅﾃﾞ	少	少		少	6D 6BAﾌﾞﾛｯｸ 一括
第27図	125	1次	一括	甕	(15.2)	28.5+α		タテ方向のハケ目(磨滅)	磨滅	多	多		多	
第27図	126	1次	一括	甕	(15.9)	28.9+α		タテ方向のハケ後ナデ	ヨコ方向のハケ後ナデ ヨコナデ	少	多		少	aブロック2
第27図	128	1次	一括	甕		23.0+α		縦方向のﾊｹﾒ後ﾅﾃﾞ	斜め方向のﾊｹﾒ後ﾅﾃﾞ	多	多		少	6D
第27図	129	1次	一括	甕	(15.0)	13.6+α		ヨコナデ ナナメハケ目	ヨコナデ ナナメハケ目	多	多		多	aブロック4
第27図	130	1次	一括	甕	(25.8)	15.3+α		ﾖｺﾅﾃﾞ 横方向工具ﾅﾃﾞ 縦方向工具ﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ 工具ﾅﾃﾞ	多	多			6A
第28図	131	1次	一括	甕		32.2+α		ﾅﾃﾞ	多方向ﾊｹﾒ後ﾅﾃﾞ		少		少	6B Aﾌﾞﾛｯｸ
第28図	132	1次	一括	甕		13.4+α		縦方向のﾊｹﾒ後ﾅﾃﾞ	斜め方向のﾊｹﾒ後ﾅﾃﾞ 指圧痕	多	多		少	6B Aﾌﾞﾛｯｸ 6D
第28図	133	1次	一括	甕		18.7+α	4.5	ﾀﾃﾊｹﾒ ﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾅﾃﾞ ﾅﾃﾞ	少		多		
第28図	135	1次	一括	甕		8.1+α	7.2	ナデ 指ナデ	ナナメハケ目 ナデ	多	多		多	
第28図	136	1次	一括	甕		8.7+α	7.8	ナナメハケ目(磨滅)	ナデ	多	多		多	
第28図	137	1次	一括	壺		6.4+α		重弧文 刻目突帯 ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	多	多			
第28図	138	1次	一括	甕		8.3+α		ﾅﾃﾞ 刻目突帯	ﾅﾃﾞ	多	多			
第28図	139	1次	一括	壺				刻目突帯 ヘラミガキ(磨滅)	指圧痕 磨滅	少	少		多	
第28図	140	1次	一括	鉢	(15.4)	11.0		ナデ(磨滅)	ナデ(磨滅)	多	多		多	
第28図	141	1次	一括	高台付坏		10.4		ﾅﾃﾞ ﾊｹ 磨滅	ﾅﾃﾞ ﾐｶﾞｷ	多	多		多	7C
第28図	142	1次	一括	高坏	(19.8)	10.0+α		ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	多	多			
第28図	143	1次	一括	高坏	(21.6)			ﾅﾃﾞ ﾀﾃﾐｶﾞｷ	ﾅﾃﾞ	少	少		少	6B Aﾌﾞﾛｯｸ
第28図	144	1次	一括	高坏				磨滅	磨滅 絞り痕	多	多		多	6D
第28図	145	1次	一括	高坏	(19.8)	7.2+α		ヨコナデ ミガキ	ヨコナデ ナデ	多	多		多	1号溝 41
第28図	146	1次	一括	壺		5.2		ﾅﾃﾞ 磨滅により不明部分多	ﾅﾃﾞ 磨滅により不明部分多	多			多	7C
第28図	147	1次	一括	ミニチュア土器	(3.5)	5.3		ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ・指ｵｻｴ	少	少		少	C.D
第28図	148	1次	一括	甑		5.3+α	6.4	磨滅、焼成後穿孔	磨滅	少	多		多	
第28図	149	1次	一括	鉢の把手	縦6.8	横3.3	厚さ1.2			多	多		少	Ⅱ層のブロック
第28図	150	1次	一括	中世土師器坏		1.2+α		ﾖｺﾅﾃﾞ・回転糸切り	ﾖｺﾅﾃﾞ				少	暗褐色粘質土
第34図	164	2次	3号竪穴	壺		19.2+α		ﾀﾃﾊｹﾒ 貼付三角突帯 ﾅﾅﾒﾊｹﾒ	ﾅﾃﾞ (磨滅)	多	多		多	3号住
第34図	165	2次	3号竪穴	壺				櫛描き波状文 ﾖｺﾅﾃﾞ 縦方向ﾊｹ	ﾅﾃﾞ		少			3号住 東側
第34図	166	2次	3号竪穴	壺				貼付突帯 浮文 ﾀﾃﾊｹﾒ	ﾅﾃﾞ	少	少	少	少	3号住 ES区
第34図	167	2次	3号竪穴	甕		12.2+α		ﾖｺﾅﾃﾞ ﾅﾃﾞ (磨滅のため不明)	ﾖｺﾅﾃﾞ ﾅﾃﾞ (磨滅の為不明)	多	多		多	3号住 北西壁 3号住東側中
第34図	168	2次	3号竪穴	甕				ﾅﾃﾞ 刻目突帯 縦方向ﾊｹ	ﾅﾃﾞ			多		3号住 ES区
第34図	169	2次	3号竪穴	甕				ﾖｺﾅﾃﾞ 刻目突帯	ﾖｺﾅﾃﾞ		少		少	ⅡL4 3号住
第34図	170	2次	3号竪穴	壺?				ﾅﾃﾞ	指圧痕				少	3号住
第36図	171	2次	4号竪穴	壺		3.5+α		ﾖｺﾅﾃﾞ 櫛描波状文	ﾖｺﾅﾃﾞ	多	多			4号住
第36図	175	2次	4号竪穴	甕	(15.9)	7.7+α		ﾖｺﾅﾃﾞ ﾀﾃﾊｹ	ﾖｺﾅﾃﾞ ﾊｹ状工具によるﾅﾃﾞ 一部ﾐｶﾞｷ	少	少		少	4号住
第36図	176	2次	4号竪穴	脚付鉢		8.8+α	10.2	板状工具によるﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ 磨滅	多	少	少	少	4号住居 北東
第38図	178	2次	5号竪穴	甕	15.8	26.0+α		ﾖｺﾅﾃﾞ 板状工具による縦方向ﾅﾃﾞ	指圧痕 ﾅﾃﾞ 磨滅	多	多		多	5号住 西側
第38図	179	2次	5号竪穴	甕			3.8	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	少	少		少	5号住 西側
第38図	180	2次	5号竪穴	取っ手付鉢	(19.4)	13.8	7.4	縦方向ﾊｹﾒ後ﾅﾃﾞ	板状工具によるﾅﾃﾞ	多	多		多	5号外
第38図	181	2次	5号竪穴	鉢	(17.8)	7.7	6.7	ﾊｹ状工具によるﾅﾃﾞ 指圧痕 ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	少	少		少	5号貯蔵穴
第38図	182	2次	5号竪穴	高坏				ﾖｺﾐｶﾞｷ	ﾅﾃﾞ	少			多	5号住 西側
第39図	184	2次	12号竪穴	壺	(9.0)	3.7+α		横方向ﾅﾃﾞ	横方向ﾅﾃﾞ	少	少		少	ⅡL4 2・3号住
第39図	185	2次	12号竪穴	壺				貼付突帯 ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	少	少	少	少	ⅡL4 2・3号住
第39図	186	2次	12号竪穴	甕				刻目突帯 ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ		少		少	ⅡL2 1号住A
第39図	187	2次	12号竪穴	甕	(18.0)	14.9+α		ﾖｺﾅﾃﾞ 多方向ﾊｹ後ﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ ﾅﾃﾞ	多	多	少	少	1号住南
第39図	188	2次	12号竪穴	壺	(13.6)	2.1+α		ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	多	多	少	少	ⅡL4 2号住
第39図	189	2次	12号竪穴	甕				ﾖｺﾅﾃﾞ ﾀﾃﾊｹ	ﾖｺﾅﾃﾞ	少	少	少	多	ⅡL4 2・3号住
第39図	190	2次	12号竪穴	甕		5.7+α	6.8	板状工具ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	多	多		多	ⅡL4 2・3号住
第39図	191	2次	12号竪穴	甕		1.0+α	3.6	ﾅﾃﾞ 指圧痕	ﾅﾃﾞ	少	少		多	ⅡL4 2号住
第39図	192	2次	12号竪穴	高坏		6.5+α		磨滅	絞り痕	少	少		少	ⅡL4 3号住
第39図	193	2次	12号竪穴	縄文土器鉢				ﾅﾃﾞ 突帯	ﾅﾃﾞ		多		少	ⅡL4 2号住
第40図	194	2次	土器群	壺	(13.0)	35.8+α		ﾖｺﾅﾃﾞ 櫛描波状文（磨滅）	ﾅﾃﾞ	多	多		多	土器群P11 南北T中央土器群
第40図	195	2次	土器群	壺		4.7+α		櫛描波状文 ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	多	多			南北T中央土器群
第40図	196	2次	土器群	壺	(15.6)	4.7+α		櫛描波状文?（磨滅） ﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ ﾅﾃﾞ	多	多		多	南北T中央土器群
第40図	197	2次	土器群	壺	(16.7)	5.0+α		ﾖｺﾅﾃﾞ 櫛描波状文 ﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ ﾅﾃﾞ	多	多			南北T中央土器群
第40図	198	2次	土器群	壺	(15.1)	6.0+α		ﾖｺﾅﾃﾞ 櫛描波状文 ﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ ﾅﾃﾞ	多	多			南北T中央土器群
第40図	199	2次	土器群	壺		6.2+α		ﾖｺﾅﾃﾞ 櫛描波状文	ﾅﾃﾞ	多	多		多	南北T中央土器群
第40図	200	2次	土器群	壺		17.0+α		不明瞭	不明瞭	多	多		多	土器群P4 南北T中央土器群
第40図	201	2次	土器群	壺		32.7+α		ﾀﾃﾊｹ 磨滅	ﾅﾃﾞ 指圧痕	少	少			土器群P17 南北T中央土器群
第40図	202	2次	土器群	壺	(13)	18.7		ﾅﾃﾞ ﾖｺﾅﾃﾞ 縦方向のﾅﾃﾞ 磨滅	ﾅﾃﾞ縦方向のﾅﾃﾞ 部分的に磨滅	多	多		多	土器群 P5の下
第41図	203	2次	土器群	壺		5.1		櫛描波状文 ﾖｺﾅﾃﾞ 磨滅 丹塗り	ﾖｺﾅﾃﾞ 磨滅	少	少		多	土器群 P4
第41図	204	2次	土器群	甕	(17.7)	33.0	2.0	ﾖｺﾅﾃﾞ ﾅﾃﾞ（磨滅している）	ﾖｺﾅﾃﾞ ﾅﾃﾞ（磨滅している）	多	多		多	南北T中央土器群P4 P14 P16
第41図	205	2次	土器群	甕	(15.8)	30.9	2.5	ﾐｶﾞｷ ﾅﾃﾞ、黒斑あり	ﾅﾃﾞ 板状のﾅﾃﾞ 指圧痕	多			多	土器群P14
第41図	206	2次	土器群	甕	(16.6)	5.7		ﾖｺﾅﾃﾞ ﾅﾃﾞ 指圧痕	ﾖｺﾅﾃﾞ ﾅﾃﾞ	多	多		多	土器群 P5の下②
第41図	207	2次	土器群	甕		8.5		板状工具による縦方向のﾅﾃﾞ、黒斑あり	板状工具によるナデ	多	多		多	土器群 P18
第41図	208	2次	土器群	甕	(18.8)	10.7+α		ﾖｺﾅﾃﾞ ﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ ﾐｶﾞｷ 指圧痕	少			少	土器群P9
第41図	209	2次	土器群	甕	(20.2)	18.2+α		ﾅﾃﾞ 板状工具による縦方向ﾅﾃﾞ	指圧痕 ﾅﾃﾞ	多	多		多	土器群P3
第41図	210	2次	土器群	甕	(15.8)	17.6		ﾖｺﾅﾃﾞ ﾀﾃﾊｹ	ﾖｺﾅﾃﾞ ﾖｺﾐｶﾞｷ 丁寧なﾅﾃﾞ ﾐｶﾞｷ 指圧痕	少			多	土器群最下層 P12の下
第41図	211	2次	土器群	甕		9.3		ﾖｺﾅﾃﾞ ﾅﾃﾞ 磨滅により不明	ﾅﾃﾞ 磨滅により不明	少	少		多	土器群 P4の下
第41図	212	2次	土器群	甕		20.1	(21)	ﾅﾃﾞ 磨滅にて不明、黒斑あり	ﾅﾃﾞ 板状工具によるﾅﾃﾞ 指圧痕		多		多	土器群 P5の下
第41図	213	2次	土器群	壺	(14.3)	9.3+α		ﾖｺﾅﾃﾞ ﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ ﾅﾃﾞ	多	多			南北T中央土器群 上部
第41図	214	2次	土器群	壺	(14.2)	5.6+α		ﾖｺﾅﾃﾞ ﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ ﾅﾃﾞ、内側から穿孔	多	多		少	南北T中央土器群
第41図	215	2次	土器群	高坏		14.9	(18.3)	板状工具によるﾅﾃﾞ ﾅﾃﾞ ﾖｺﾅﾃﾞ 磨滅にて不明部分あり 穿孔（0.5～0.6cm）1×10ヶ所	ｼﾎﾞﾘ 板状工具による縦方向のﾅﾃﾞ	多	多		多	土器群 P16
第42図	217	2次	一括	壺	(16.5)	12.3+α		ﾖｺﾅﾃﾞ 櫛描波状文 ﾅﾃﾞ 浮文	ﾅﾃﾞ ﾀﾃﾊｹ ﾅﾅﾒﾊｹ ﾅﾃﾞ	多	多		多	ⅡL7
第42図	218	2次	一括	壺				櫛描き波状文 櫛ｻｼﾒ ﾅﾃﾞ 櫛（5本2組）	ﾅﾃﾞ				多	ⅡL5
第42図	219	2次	一括	壺				櫛描き波状文 磨滅 ﾅﾃﾞ	横方向ﾅﾃﾞ	少	少	少	少	ⅡL3

第 13 表　遺物一覧表 土器（3）

図版番号	遺物番号	調査次数	遺構	器種	口径(残存幅)	器高(残存)	底部径(胴部最大径)	外面の文様・調整	内面の文様・調整	胎土 角閃石	胎土 長石	胎土 石英	胎土 その他	遺物注記
第42図	220	2次	一括	壺				ﾅﾃﾞ　刻目突帯	ﾅﾃﾞ	少			少	
第42図	221	2次	一括	壺				ﾅﾃﾞ　刻目突帯	ﾅﾃﾞ		少		少	
第42図	222	2次	一括	甕				ﾖｺﾅﾃﾞ　ﾀﾀｷ　刻目突帯	ﾖｺﾅﾃﾞ　ﾅﾃﾞ	少				pit1
第42図	223	2次	一括	甕				ﾖｺﾅﾃﾞ　ﾀﾀｷ	ﾖｺﾅﾃﾞ　ﾅﾃﾞ		少			Apit
第42図	224	2次	一括	甕				ﾖｺﾅﾃﾞ　ﾅﾃﾞ　三角突帯	ﾖｺﾅﾃﾞ　ﾅﾃﾞ　指圧痕				少	
第42図	225	2次	一括	甕	(15.6)	30.7	2.1	ﾖｺﾅﾃﾞ　ﾀﾀｷ	ﾖｺﾅﾃﾞ　板状工具によるﾅﾃﾞ	少			少	P14
第42図	226	2次	一括	甕		29.0+α		ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ　指圧痕	多			少	P16　一括
第42図	227	2次	一括	甕		8.1+α	8.0	ﾅﾅﾒﾊｹﾒ　ﾖｺﾅﾃﾞ　ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	多	多		多	Ⅱ L2
第42図	228	2次	一括	鉢		3.4+α		ﾐｶﾞｷ　磨滅	ﾅﾃﾞ			少		Ⅱ L6
第42図	229	2次	一括	鉢	(14.0)	11.4		ﾅﾃﾞ、黒斑あり	ﾅﾃﾞ	多	多		多	遺構不明
第42図	230	2次	一括	壺または鉢				ﾖｺﾅﾃﾞ　ﾅﾃﾞ　摩耗	ﾅﾃﾞ		少		少	pit1
第42図	231	2次	一括	脚付鉢	(18.2)	14.8+α		ﾅﾃﾞ（磨滅している）	ﾍﾗ工具によるﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ	多	多		多	Ⅱ L2
第42図	232	2次	一括	高坏		6.5+α		不明瞭	ﾐｶﾞｷ　磨滅	少	少			Ⅱ L6
第42図	233	2次	一括	高坏		5.0+α		不明瞭	ﾐｶﾞｷ		多	少	多	Ⅱ L6
第42図	235	2次	一括	須恵器坏蓋		2.3+α		ﾖｺﾅﾃﾞ　回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾖｺﾅﾃﾞ　ﾖｺﾅﾃﾞ後ﾅﾃﾞ				少	
第46図	242	3次	A1号竪穴	甕				刻目突帯　縦方向ﾊｹﾒ	ﾅﾃﾞ				少	1号住床
第46図	243	3次	A1号竪穴	壺?				ﾖｺﾅﾃﾞ	板状工具によるﾖｺﾅﾃﾞ	少	少	少		1号住床
第46図	244	3次	A1号竪穴	壺		6.2+α		不明瞭	不明瞭		少	少	少	1号住
第46図	245	3次	A1号竪穴	壺				ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ		少		少	1号住床
第46図	246	3次	A1号竪穴	高坏		3.3+α		磨滅	磨滅	多	多	多	多	1号住
第46図	247	3次	A1号竪穴	高坏		13.6+α	(15.5)	ﾅﾃﾞ　ﾐｶﾞｷ　磨滅	絞り痕　工具ﾅﾃﾞ　ﾅﾃﾞ　磨滅	多	多			1号住
第48図	252	3次	A2号竪穴	甕		2.7		工具によるﾖｺﾅﾃﾞ　ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ　磨滅	少	多		多	2号住
第50図	257	3次	A3号竪穴	壺		5.8+α		三角突帯　工具ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ　指圧痕	多	多			3号住　土壙内
第50図	258	3次	A3号竪穴	甕		6.3+α		ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	多	多		多	3号住床
第50図	259	3次	A3号竪穴	甕		8.9+α		磨滅　ﾖｺﾅﾃﾞ　ﾅﾅﾒﾊｹ	ﾖｺﾅﾃﾞ　ﾅﾃﾞ	多	多		多	3号住　土坑内
第50図	260	3次	A3号竪穴	甕	(27.0)	26.6+α		ﾖｺﾅﾃﾞ　ﾅﾃﾞ　磨滅	ﾖｺﾅﾃﾞ　ﾅﾃﾞ　磨滅	多	多		多	3号住床
第50図	261	3次	A3号竪穴	甕		8.0	(6.0)	板状工具によるﾅﾃﾞ　ﾖｺﾅﾃﾞ　ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ　磨滅にて不明	多	多			3号住　柱穴側北東
第50図	262	3次	A3号竪穴	高坏?		2.7+α	(14.5)	ﾅﾃﾞ　ﾐｶﾞｷ	ﾅﾃﾞ	多	多			3号住
第53図	267	3次	A5号竪穴	壺		4.6		ﾖｺﾅﾃﾞ　磨滅	磨滅	多	多		多	5号住
第53図	268	3次	A5号竪穴	壺	(14.6)	4.6		ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ　磨滅	多	多		多	5号住
第53図	269	3次	A5号竪穴	壺	(17.0)	6.6		ﾅﾃﾞ　口縁部刻目	ﾅﾃﾞ　磨滅　ﾍﾗ描きの連続山形文	多	多		多	5号住
第55図	272	3次	A6号竪穴	壺	(13.2)	6.2		縦方向のﾊｹ　ﾅﾃﾞ　貼付三角突帯	ﾅﾃﾞ	多	多			6号住炉穴内
第55図	273	3次	A6号竪穴	高台風鉢	(15.0)	11.2+α		工具ﾅﾃﾞ	工具ﾅﾃﾞ	多	多			6号住　炉穴内
第57図	276	3次	A7号竪穴	壺		5.4		ﾖｺﾅﾃﾞ　貼付三角突帯	工具ﾅﾃﾞ　ﾅﾃﾞ		多		多	7号住
第57図	277	3次	A7号竪穴	甕		3.0		ﾖｺﾅﾃﾞ　貼付刻目突帯	ﾖｺﾅﾃﾞ	少			多	7号住床
第57図	278	3次	A7号竪穴	甕		5.2		ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	多	多		多	7号住床
第57図	279	3次	A7号竪穴	中世土師器坏	(12.0)	3.25	(7.8)	ﾖｺﾅﾃﾞ　ﾅﾃﾞ　磨滅、底部糸切り	ﾖｺﾅﾃﾞ　磨滅	多	多			7号住
第59図	280	3次	B1号竪穴	甕				刻目突帯　ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ		少		少	1号住
第59図	281	3次	B1号竪穴	甕				ﾖｺﾅﾃﾞ　貼付突帯	板状工具によるﾅﾃﾞ		少			1号住
第59図	282	3次	B1号竪穴	甕				ﾖｺﾅﾃﾞ　三角突帯	ﾅﾃﾞ　ﾖｺﾅﾃﾞ	少	少			1号住
第59図	283	3次	B1号竪穴	甕				ﾖｺﾅﾃﾞ　ﾅﾃﾞ　三角突帯	ﾖｺﾐｶﾞｷ　ﾅﾃﾞ	少	少		少	1号住
第59図	284	3次	B1号竪穴	甕				ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	多	多			1号住
第59図	285	3次	B1号竪穴	甕				ﾖｺﾅﾃﾞ　ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ　ﾖｺﾅﾃﾞ	少	少	少		1号住
第59図	286	3次	B1号竪穴	甕		4.3+α	6.0	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ		多	多	多	1号住
第59図	287	3次	B1号竪穴	甕		4.4+α	5.5	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	多	多	多	多	1号住
第59図	288	3次	B1号竪穴	甕		3.5+α	5.8	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	少	少		少	1号住
第59図	289	3次	B1号竪穴	甕		5.2+α	5.3	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	少	少		少	1号住
第59図	290	3次	B1号竪穴	甕		4.4+α	4.3	縦方向ﾊｹ　ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾊｹ後ﾅﾃﾞ				少	1号住
第59図	291	3次	B1号竪穴	甕		2.8+α	5.9	磨滅	磨滅	多	多		多	1号住
第59図	292	3次	B1号竪穴	壺		2.8+α	(5.6)	ﾖｺﾅﾃﾞ　ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	少	少			1号住
第60図	294	3次	B2号竪穴	壺	(16.0)	4.0+α		ﾖｺﾅﾃﾞ　ﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ　ﾅﾃﾞ	多	多		多	円形住１号　壁面W部
第60図	295	3次	B2号竪穴	甕	(13.8)	4.7+α		ﾖｺﾅﾃﾞ　ﾀﾀｷ	ﾖｺﾅﾃﾞ	少	少			円形住床
第60図	296	3次	B2号竪穴	甕		8.2+α		ﾖｺﾅﾃﾞ　刻目突帯　ﾅﾃﾞ　ﾅﾅﾒﾊｹ	ﾅﾃﾞ	多	多			円形住
第60図	297	3次	B2号竪穴	壺		4.0+α		ﾖｺﾊｹ　刻目突帯　ﾅﾅﾒﾊｹﾒ	ﾅﾃﾞ	多	多			円形住
第60図	298	3次	B2号竪穴	甕		4.2+α		ﾖｺﾅﾃﾞ　刻目突帯　ﾅﾃﾞ　ﾅﾅﾒﾊｹ	ﾅﾃﾞ	多	多			円形住
第60図	299	3次	B2号竪穴	甕?				ﾖｺﾅﾃﾞ　ﾅﾃﾞ　刻目突帯	ﾖｺﾅﾃﾞ　三角突帯	少	少		少	円形住床
第60図	300	3次	B2号竪穴	甕	(27.5)	9.0+α		ﾖｺﾅﾃﾞ　ﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ　ﾅﾃﾞ	多	多			円形住　大住跡内
第60図	301	3次	B2号竪穴	甕	(28.1)	7.0+α		ﾖｺﾅﾃﾞ　三角突帯　ﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ　ﾅﾃﾞ	多	多			円形住
第60図	302	3次	B2号竪穴	甕		3.2+α	9.1	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	少			多	円形住床
第60図	303	3次	B2号竪穴	壺		7.8+α	8.6	ﾅﾃﾞ　磨滅	ﾅﾃﾞ	多	多			円形住P1
第60図	304	3次	B2号竪穴	壺		7.9+α	(8.5)	ﾅﾅﾒﾊｹ　ﾀﾀｷ　磨滅	ﾅﾃﾞ	多	多			円形住床
第60図	305	3次	B2号竪穴	甕		3.2	5.5	工具によるﾅﾃﾞ　ﾅﾃﾞ　磨滅	ﾅﾃﾞ　磨滅	多	多		多	2号住
第60図	306	3次	B2号竪穴	高坏		8.9+α		ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ　絞り痕	少	少			円形住 P1
第60図	307	3次	B2号竪穴	高坏		6.6+α		ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ　工具ﾅﾃﾞ	少	少		少	円形住 P2
第63図	315	3次	B3号竪穴	壺		3.3		ﾖｺﾅﾃﾞ　貼付三角突帯	ﾅﾃﾞ		多		多	3号住
第63図	316	3次	B3号竪穴	壺		5.2		ﾖｺﾅﾃﾞ後ﾍﾗ状工具によるﾐｶﾞｷ　一部磨滅 貼付三角貼付突帯	磨滅にて不明		多		多	3号住
第63図	317	3次	B3号竪穴	鉢		2.7		工具によるﾅﾃﾞ　ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ　ﾅﾃﾞ上げ痕		多			3号住　[illegible]内
第63図	318	3次	B3号竪穴	甕		4.2		ﾅﾃﾞ　貼付刻目突帯	板状工具によるﾅﾃﾞ	多	多		多	3号住
第63図	319	3次	B3号竪穴	甕		3.6	(2.3)	縦方向のﾅﾃﾞ　ﾅﾃﾞ	工具によるﾅﾃﾞ	多	多		多	3号住
第65図	320	3次	B4号竪穴	壺				ﾅﾃﾞ　刻目突帯	ﾅﾃﾞ　指圧痕				少	4号住
第65図	321	3次	B4号竪穴	壺				ﾅﾃﾞ　刻目突帯	ﾅﾃﾞ		少			4号住
第65図	322	3次	B4号竪穴	甕				刻目突帯　縦方向ﾊｹ	指圧痕　斜め方向ﾊｹ		多	多		4号住　P1
第65図	323	3次	B4号竪穴	甕	(13.1)	6.1+α		ﾖｺﾅﾃﾞ　縦方向ﾊｹ後ﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ　板状工具によるﾅﾃﾞ	少	少		多	4号住
第65図	324	3次	B4号竪穴	甕				板状工具によるﾅﾃﾞ	板状工具によるﾅﾃﾞ		少			4号住　大ピット
第65図	325	3次	B4号竪穴	甕		4.5+α	(5.9)	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	少			少	4号住
第65図	326	3次	B4号竪穴	壺				ﾅﾃﾞ　貼付突帯	ﾅﾃﾞ　指圧痕	少	少			4号住　P2
第65図	327	3次	B4号竪穴	小型壺				穿孔　ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ		多			4号住
第65図	328	3次	B4号竪穴	甕		9.2+α		磨滅	板状工具によるﾅﾃﾞ	少	少	少	少	4号住　P2
第65図	329	3次	B4号竪穴	鉢	(19.0)	8.8+α		ﾅﾃﾞ　縦方向ﾊｹ後ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ　板状工具によるﾅﾃﾞ	少	少		少	4号住
第65図	330	3次	B4号竪穴	高坏		6.8+α		ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ		少	少	少	4号住　大ピット　覆土上
第65図	331	3次	B4号竪穴	ミニチュア		3.3+α		指ﾅﾃﾞ	指ﾅﾃﾞ		少		少	4号住
第66図	335	3次	B5号竪穴	壺		4.3		ﾖｺﾅﾃﾞ　貼付三角突帯	ﾅﾃﾞ　磨滅				多	5号住
第67図	336	3次	A12号竪穴	壺		6.5+α		刻目突帯　リボン状の飾り	ﾅﾃﾞ	多	多		多	1・2号住
第67図	337	3次	A12号竪穴	甕	(19.0)	7.1+α		ﾖｺﾅﾃﾞ　ﾅﾃﾞ　刻目突帯	ﾖｺﾅﾃﾞ　ﾅﾃﾞ	少			少	1・2号住　円形住
第67図	338	3次	A12号竪穴	甕				ﾖｺﾅﾃﾞ　ﾀﾀｷﾒ　刻目突帯	ﾖｺﾅﾃﾞ　ﾅﾃﾞ　指圧痕		少			1・2号住
第67図	339	3次	A12号竪穴	甕				ﾖｺﾅﾃﾞ　ﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ　ﾅﾃﾞ	少		少	少	1・2号住
第67図	340	3次	A12号竪穴	甕		5.9+α	6.7	ﾅﾃﾞ　磨滅	ﾅﾃﾞ	少	少			1・2号住
第67図	341	3次	A12号竪穴	甕		7.5+α	5.4	ﾖｺﾅﾃﾞ　ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	少			多	1・2号住
第67図	342	3次	A12号竪穴	壺		13.8+α		ﾖｺﾊｹ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ	不明瞭			多	多	1・2号住
第68図	344	3次	一括	壺	(33.4)	2.5+α		ハの字状の刻目　ﾅﾅﾒﾊｹ	ﾅﾃﾞ　浮文（円形1つ楕円3つ残存） ﾖｺﾊｹ　ﾖｺﾅﾃﾞ	多	多		多	中pit1
第68図	345	3次	一括	壺	(30.0)	2.7+α		ﾖｺﾅﾃﾞ　ハの字状の刻目　ﾅﾃﾞ　磨滅	ﾖｺﾅﾃﾞ　ﾅﾃﾞ　浮文	多	多			
第68図	346	3次	一括	壺	(32.0)	3.0+α		ﾖｺﾅﾃﾞ　ﾊｹﾒ後ﾐｶﾞｷ　浮文（2個セットが1ヶ所残存）	ﾖｺﾅﾃﾞ	少			少	
第68図	347	3次	一括	壺		2.0		ﾖｺﾅﾃﾞ　貼付三角突帯	ﾅﾃﾞ	少	少			8号住
第68図	348	3次	一括	壺		4.1		ﾊｹ、ﾅﾃﾞ　ﾖｺﾅﾃﾞ　貼付三角突帯	ﾅﾃﾞ	多	多		多	8号住
第68図	349	3次	一括	壺	(10.0)	5.5+α		ﾖｺﾅﾃﾞ　三角突帯	ﾅﾃﾞ	多	多		多	中pit1
第68図	350	3次	一括	脚付鉢	(25.0)	7.9+α		ﾖｺﾅﾃﾞ　ﾅﾅﾒﾊｹ	ﾖｺﾅﾃﾞ　ﾐｶﾞｷ	多	多			
第68図	351	3次	一括	甕		1.9		ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ　磨滅	多	多		多	8号住
第68図	352	3次	一括	鉢	(25.8)	10.8+α		ﾖｺﾅﾃﾞ　ﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ　ﾅﾃﾞ	多	多			

第 14 表　遺物一覧表土器（4）

図版番号	遺物番号	調査区名	遺構	層種	口径（残存幅）	器高（残存高）	底部径（接地面残径）	外面の文様・調整	内面の文様・調整	角度	焼土	石英	石英	その他	遺物注記
86A08	353	3区	一括	表	(23.6)	12.1+α		ﾖﾅﾃﾞ　ﾀﾃﾊｹﾒ　ﾔﾅｷﾞ	ﾖﾅﾃﾞ　丁寧なﾅﾃﾞ	少	少		少		
86A08	354	3区	一括	表		7.1+α		ﾖﾅﾃﾞ　ﾀﾃﾞ　細目突帯	ﾀﾃﾞ　工具ﾅﾃﾞ	多	多				
86A08	355	3区	一括	表		7.1+α		ﾖﾅﾃﾞ　二角突帯　ﾀﾃﾊｹ	ﾖﾅﾃﾞ　ﾀﾃﾞ	多	多				
86A08	356	3区	一括	表	(35.4)	4.0+α		ﾖﾅﾃﾞ　ﾀﾃﾞ　二角突帯	ﾀﾃﾞ	多	多		多		
86A08	357	3区	一括	鉢	(24.0)	11.3+α		ﾖﾅﾃﾞ　ﾀﾃﾊｹﾒ　ﾀﾃﾞ	ﾖﾅﾃﾞ　ﾀﾃﾞ	多	多				表編
86A08	358	3区	一括	表		5.5+α	7.0	ﾖﾅﾃﾞ　ﾀﾃﾞ	ﾀﾃﾞ	多	多		多		
86A08	359	3区	一括	内行程		3.3+α		ﾀﾃﾞ　磨滅　浮孔（1～3ヵ×所残存） ﾔﾅｷﾞ（ﾖｺ：2.6縦方向ﾀﾃﾞ　浮孔（残存1～2）	ﾀﾃﾞ	少	少				
86A08	360	3区	一括	高坏		13.3+α		ﾖﾅﾃﾞ　ﾀﾃﾞ	ﾖﾅﾃﾞ　ﾀﾃﾊｹﾒ　ﾀﾃﾞ　縦ﾅﾃﾞ	少	少		少		土坑内
86A08	362	3区	一括	表	(12.8)	5.4+α		ﾖﾅﾃﾞ　ﾀﾃﾞ	ﾀﾃﾞ　ﾀﾃﾊｹﾒ	少					
86A08	363	3区	一括	表				ﾖﾅﾃﾞ	ﾀﾃﾞ	少					1-2 型生
86A08	364	3区	一括	表	(30.1)	15.0+α		刺突列　細目突帯　縦方向ﾊｹﾒﾅﾃﾞ 刺目（長1～02 間隔　矢印は本数）	ﾀﾃﾞ	多	多		多		
86A08	365	3区	一括	表				ﾖﾅﾃﾞ　ﾀﾃﾞ　二角突帯	ﾀﾃﾞ	少			多		表土
86A08	366	3区	一括	縦形器高坏	(8.7)	8.1	7.1	ﾖﾅﾃﾞ　磨ﾅﾃﾞ　二角突ﾀﾃﾞ(残1ヵ)	ﾖﾅﾃﾞ				多		
87T20	376	1区	1号竪穴	表				ﾖﾅﾃﾞ　ﾀﾃﾞ　細目突帯	ﾀﾃﾞ	少	多	少	多		1号住
87T20	377	4区	1号竪穴	表				ﾖﾅﾃﾞ　磨滅	ﾖﾅﾃﾞ　磨滅	多		多	多		1号住
87T10	380	4区	2号竪穴	表				細目突帯　磨滅	磨滅	少	少	少	少		29号住
87T20	382	4区	3号竪穴	表		8.9+α		ﾀﾃﾊｹﾒ　ﾖｺﾅﾃﾞ　与玉状浮文（残存4ヵ） 細目突帯	磨滅	多	少	少	多		3号住（床）
87T20	383	4区	3号竪穴	表		2.2+α	4.0	ﾀﾃﾞ　磨滅	磨滅		少	多	多		3号住（床）
87T20	384	4区	3号竪穴	表		4.2+α	8.2	ﾀﾃﾞ　段ﾅﾃﾞ　ﾀﾃﾊｹ	3方向ﾀﾃﾞ	少	多		多		3号住　pit6
87T20	385	4区	3号竪穴	表	(14.2)	21.8+α		ﾀﾃﾊｹ　ﾀﾃﾞ　磨滅	磨滅	少	少				3号住
87T20	389	4区	3号竪穴	表				ﾖﾅﾃﾞ 細目突帯 & 浮文	ﾖﾅﾃﾞ	少	多		多		4号住床
87T20	390	4区	4号竪穴	表		6.8+α		ﾀﾃﾞ	磨滅	少	少	多			4号住床
88A20	391	4区	5号竪穴	表				磨滅	ﾖﾅﾃﾞ	少	多	多			5号住 pit
88A20	392	4区	6号竪穴	表				ﾖﾅﾃﾞ　ﾀﾃﾞ　細目突帯	ﾀﾃﾞ	多	多	少	多		6号住床1
88A20	393	4区	7号竪穴	表				磨滅	磨滅		多		多		7号住床
88A08	394	1区	8号竪穴	表				ﾀﾃﾞ　二角突帯　ﾀﾃﾊｹ	丁寧なﾅﾃﾞ	少	少	多	多		8号住　18pit
88A08	396	1区	10号竪穴	表		1.8		ﾖﾅﾃﾞ　指圧痕	ﾀﾃﾞ	少	少		多		10号住
88A08	397	1区	10号竪穴	表		2.9		二角突帯　ﾀﾃﾊｹ	ﾀﾃﾞ　指圧痕	多	少	少	多		10号住
88A08	398	1区	10号竪穴	表		4.7	(5.0)	ﾀﾃﾞ	工具ﾅﾃﾞ	多	少	少	多		3号住
88A08	399	1区	10号竪穴	表	(16.0)	4.0		指ﾅﾃﾞ　ﾀﾃﾊｹ	指圧痕　ﾀﾃﾊｹ	多	多		多		10号住床
88A08	401	1区	16号竪穴	表	(21.8)	11.8+α		ﾀﾃﾊｹ　ﾀﾃﾊｹ	ﾀﾃﾞ　ﾀﾃ	少		多	多		16号住
88A08	405	1区	16号竪穴	表		8.6+α	7.2	磨滅	磨滅	少	少		多		16号住
88A08	406	1区	16号竪穴	表		4.7+α	7.5	ﾀﾃﾞ	ﾀﾃﾞ	多	多		多		16号住壁
88A08	407	1区	16号竪穴	表		3.1+α	6.0	ﾀﾃﾞ	ﾀﾃﾞ	少	多		少		16号住
88A08	408	1区	16号竪穴	縄文土器				刺突文	ﾀﾃﾞ	少	多		少		16号住貼
88A08	409	4区	16号竪穴	縄文土器器				2 枚目条痕	2 枚目条痕	多	多		多		16号住貼
88A08	410	4区	20号竪穴	表				半截竹管 2ヵの平行文	磨滅	少	多		多		20号住
88A08	411	4区	20号竪穴	表				半截竹管 2ヵによる重弧文	丁寧なﾅﾃﾞ	多	多		多		20号住pit
88A08	412	4区	20号竪穴	表				半截竹管 2ヵによる重弧文	丁寧なﾅﾃﾞ	多	多		多		20号住pit
88A08	413	4区	20号竪穴	表	(14.4+α)	6.0		ﾀﾃﾞ　ﾀﾃ　段ﾅﾃﾞ　ﾀﾃ	ﾀﾃﾞ	多			多		20号住
88A08	414	4区	20号竪穴	表				細目突帯　磨滅	多	多	多		多		20号住
88A08	415	4区	20号竪穴	表				ﾖﾅﾃﾞ　細目突帯　工具ﾅﾃﾞ	磨耗	多	多		多		20号住pit　P-3
88A08	416	4区	20号竪穴	表				ﾖﾅﾃﾞ　細目突帯　工具ﾅﾃﾞ	磨耗	多	多	多	少		20号住pit
88A08	417	4区	20号竪穴	表				ﾖﾅﾃﾞ　刻目突帯　縦方向ﾊｹﾒ	ﾀﾃﾞ　ﾖﾅﾃﾞ				少		20号住
88A08	418	4区	20号竪穴	表	(26.8)	15.4+α		ﾀﾃ　磨滅	磨滅				少		20号pit p-2
88A08	420	4区	20号竪穴	表				浮孔（2 個ｶｽﾞﾂ）　磨滅、補修	磨滅	多	多		多		20号住
88A08	421	4区	20号竪穴	表				ﾀﾃﾞ	ﾀﾃﾞ	多	多		多		20号住
88A08	422	4区	21号竪穴	舞打土師	(12.8)	11.5+α		ﾀﾃﾞ	ﾀﾃﾞ	多	多		多		21号　3　P12
88A08	423	4区	21号竪穴	表				ﾖﾅﾃﾞ	磨滅	少	多		少		21床　3pit
88A08	425	4区	22号竪穴	表		3.6+α	4.0	磨滅	ﾀﾃﾞ	少	多		多		22号住 1pit
88A08	427	4区	23号竪穴	表	9.6	3.0+α		指圧痕　磨滅　磨滅&流状文	指圧痕　磨滅	多	多		多		23号1
88A08	428	4区	23号竪穴	表				二角突帯　ﾀﾃﾞ	ﾀﾃﾞ	多	多	多			23号住2
88A08	429	4区	23号竪穴	表	(22.4)			ﾖﾅﾃﾞ　ﾀﾃﾊｹﾒ　細目突帯（10.5cm）	ﾖﾅﾃﾞ　ﾀﾃﾊｹﾒ　ﾀﾃ	多	多	少			23号1
88A08	430	4区	23号竪穴	表			(6.8)	ﾖﾅﾃﾞ	ﾀﾃﾞ	少	多	少			23号住
88A08	431	4区	23号竪穴	内行鉢		3.4+α	(6.0)	ﾖﾅﾃﾞ	ﾀﾃﾞ	多	多	少			23号住
88A08	434	4区	26号竪穴	鉢				ﾖﾅﾃﾞ　ﾀﾃ　細目突帯	ﾀﾃﾞ	多	多				26号住
88A08	435	4区	26号竪穴	表			(8.6)	ﾀﾃﾊｹﾒ　ﾀﾃﾊｹﾒ　細目突帯	ﾀﾃﾞ	多	多	少			26号住
88A08	436	4区	26号竪穴	高坏		3.4+α	(6.0)	ﾀﾃﾊｹﾒ　磨滅　浮孔（残存2～6個）	ﾀﾃﾞ	多	多	少			26号住
88A08	438	4区	29号竪穴	表		3.2+α		二角突帯（3～6ヵ）　ﾀﾃﾊｹ　刻目あり	指圧痕　工具ﾅﾃﾞ	多	多	多	多		29号住
88A08	439	4区	29号竪穴	表	(22.6)			ﾖﾅﾃﾞ　浮文　磨耗ﾅｼ　ﾀﾃﾞ	ﾀﾃﾞ	少	多	多			29号住1
88A08	440	4区	29号竪穴	表	(18.2)	9.8+α		ﾀﾃﾊｹ&ﾀﾃﾞ　ﾖｺﾅﾃﾞ&浮孔　指圧痕&流状文 &刻目突帯	ﾀﾃﾞ	多	少	少	多		29号住
88A08	441	4区	29号竪穴	表	(13.0)	6.3+α		ﾀﾃﾊｹ&ﾀﾃﾞ　指圧痕&流状文	ﾀﾃﾞ	少	少		多		29号住
88A08	442	4区	29号竪穴	表				ﾀﾃﾊｹ&ﾀﾃﾞ　指圧痕&流状文	ﾀﾃﾞ	多	少		多		29号住
88A08	443	4区	29号竪穴	表				磨滅　磨滅&流状文	磨滅	少	少				29号住
88A08	444	4区	29号竪穴	表				ﾖﾅﾃﾞ　ﾀﾃ　与玉浮文　細目突帯	ﾀﾃ	少	少	少			29号住
88A08	445	4区	29号竪穴	表				ﾀﾃ　細目突帯	ﾀﾃ	多	多	多			29号住
88A08	446	4区	29号竪穴	表	(23.6)			ﾖﾅﾃﾞ　工具ﾅﾃﾞ　細目ﾀﾃﾞ	ﾀﾃﾞ	多	多	少			29号住
88A08	447	4区	29号竪穴	表		7.2+α		ﾀﾃﾊｹ　ﾀﾃﾞ　細目突帯	ﾀﾃﾞ	多	多	少			29号住
88A08	448	4区	29号竪穴	表		10.8+α	6.7	磨滅	ﾀﾃﾞ	多	多	多			29号住
88A08	449	4区	29号竪穴	表	(20.8)			ﾖﾅﾃﾞ　ﾀﾃﾊｹﾒ　二角突帯	ﾖﾅﾃﾞ　ﾀﾃ	多	多	多			29号住
88A08	450	4区	29号竪穴	表	11.5	(4.6)	ﾀﾃﾊｹ	指圧痕　ﾀﾃﾞ	ﾀﾃ　ﾀﾃ　指圧痕	少	少	多	多		29号住
88A08	451	4区	29号竪穴	表	9.1+α	6.2	ﾀﾃ	ﾀﾃ	ﾀﾃ	多	多	多			29号住
88A08	452	4区	29号竪穴	表	10.3	3.4	磨滅	指圧痕　ﾀﾃﾊｹ　ﾀﾃ	磨滅　指圧痕	多	少	多	多		29号住
88A08	453	4区	29号竪穴	表	8.3+α	2.4	磨滅	磨滅	磨滅	多	多	少			29号
88A08	454	4区	29号竪穴	鉢	8.6+α			磨滅	磨滅	多	少	少			29号
88A08	455	4区	15号土坑	表	18.1+α	5.4	ﾀﾃ　ﾀﾃ　縦重弧文　ﾀﾃﾊｹ	ﾀﾃ	ﾀﾃ	多	多	多	多		15号住　P-6
88A08	464	4区	15号土坑	表	(27.2)		11.6	ﾀﾃﾞ　磨滅　細目突帯	ﾀﾃﾞ　磨滅	多	多		多		15号住
88A08	465	4区	15号土坑	表	(35.6)	1.2+α		ﾖﾅﾃﾞ　刻目突帯　ﾀﾃﾊｹﾒ	ﾀﾃﾞ　磨滅	少	少		少		15号壁
88A08	466	4区	15号土坑	表	(28.5)	9.6+α		ﾖﾅﾃﾞ　刻目突帯　縦方向ﾊｹ	ﾀﾃﾞ　磨滅	多	多	少	少		15号住壁　P-7-2
88A08	467	4区	15号土坑	表				磨滅　流線	磨滅	少	多		多		15号壁　P-4
88A08	468	4区	17号土坑	表				ﾀﾃﾊｹ　ﾖﾅﾃﾞ　細目突帯	ﾀﾃﾞ　ﾖﾅﾃ	少	多				17号住
88A08	469	4区	17号土坑	表	(30.0)	9.0+α		ﾀﾃﾊｹ　磨滅	ﾀﾃﾞ	少	少		多		17号壁床
88A08	470	4区	101号土坑	表			(10.2)	磨滅　ﾀﾃ	磨滅　ﾀﾃ	少	多	多			101号壁床
88A08	471	4区	南壁土坑	表	(31.6)			ﾀﾃﾞ　細目突帯（5.5cm）　磨滅	ﾀﾃﾞ　磨滅	多	多	少			1pit
88A08	472	4区	一括	表				ﾀﾃ&段ﾅﾃﾞ　沈線	ﾀﾃ&段ﾅﾃﾞ	多	多				
88A08	473	4区	一括	表				ﾀﾃ&段ﾅﾃﾞ　沈線	工具ﾅﾃﾞ　ﾀﾃ　ﾀ	少	多	少			
88A08	474	4区	一括	表				ﾀﾃ&段ﾅﾃﾞ　沈線	磨滅	多	多	少			
88A08	475	4区	一括	表				ﾀﾃ&段ﾅﾃﾞ　沈線	ﾀﾃ&ﾀ	多	多	多			
88A08	476	4区	一括	表				ﾀﾃ 後&ﾀﾃ 上段による沈線	ﾀﾃ	少	多	少	多		
88A08	477	4区	一括	表		3.9		二角突帯　ﾀﾃﾊｹ　突帯に指圧痕	ﾀﾃ　指圧痕	少	少		多		14号壁
88A08	478	4区	一括	表		4.0		ﾖﾅﾃﾞ　ﾀﾃﾞ	ﾀﾃﾞ	少	少	少	多		14号壁
88A08	479	4区	一括	表		5.8	(4.0)	ﾀﾃ　磨滅	指圧痕　ﾀﾃ	多	多	少	少		14号壁
88A08	480	4区	一括	表				ﾖﾅﾃﾞ　細目突帯	ﾀﾃ	少	多				溝内1
88A08	481	4区	一括	表	(26.2)			ﾖﾅﾃﾞ　磨滅	ﾖﾅﾃﾞ　磨滅	少	多				
88A08	482	4区	一括	表	(29.6)			ﾀﾃﾊｹ　ﾀﾃﾊｹ&ﾀﾃ	ﾀﾃﾞ　ﾀﾃ	多	多				
88A08	483	4区	一括	表	(28.6)	6.3+α		磨滅　細目突帯	磨滅	少	多		多		
88A08	484	4区	一括	表	(11.6)	8.8+α		磨滅	磨滅	多	多		多		

図版番号	遺物番号	調査区	遺構	器種	口径(残存幅)	器高(残高)	底部径(側面最大径)	外面の文様・調整	内面の文様・調整	角閃石	長石	石英	その他	備考
										胎土				
第12図	085	4 次	一括	鉢		(5.6)		ﾅﾃｰﾌﾞﾙﾀﾞ	ﾅﾃｰﾌﾞﾙﾀﾞ	○	○			漆内
第12図	086	4 次	一括	脚付鉢	(11.4)	11.9		ﾖｺﾅﾃﾞ　ﾀﾃﾊｹ　磨滅	ﾖｺﾅﾃﾞ　ﾀﾃﾞ	○	◎	◎	◎	11 弥生末　6-7-9-10-11 弥生
第12図	087	4 次	一括	鉢	(12.0)	7.0		指圧痕　磨滅	磨滅	○	◎		◎	18 弥生末　3 弥生末
第12図	088	4 次	一括	高坏	(30.2)	2.3+α		磨滅	磨滅		○			
第12図	089	4 次	一括	高坏の脚		13.3+α	(18.7)	ﾀﾃﾞ　ﾖｺﾅﾃﾞ　ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾀﾃﾞ　ﾖｺﾅﾃﾞ	◎	◎		◎	7世紀　Pig
第12図	090	4 次	一括	縄文土器鉢	(26.6)	11.6+α		ﾖﾂｽﾀﾞﾅﾃﾞ　ﾖﾂｽﾀﾞﾅﾃﾞ　ﾖﾂｽﾀﾞﾅﾃﾞ	ﾖﾂｽﾀﾞﾅﾃﾞ　ﾖﾂｽﾀﾞﾅﾃﾞ　ﾖﾂｽﾀﾞﾅﾃﾞ	◎	◎			
第12図	091	4 次	一括	縄文土器鉢		8.6+α		ﾀﾃﾞ　ﾀﾃﾞ　ﾍﾗｹｽﾞﾅ	ﾀﾃﾞ　ﾍﾗｹｽﾞﾅﾃﾞ　ﾖﾂｽﾀﾞﾅﾃﾞ	◎	◎			
第12図	092	5 次	1 号竪穴	壺				ﾀﾃﾞ	ﾀﾃﾞ		◎		◎	1 号住
第12図	093	5 次	1 号竪穴	壺				櫛描沈線状文	ﾀﾃﾞ　磨滅	○	○		○	1 号住
第12図	094	5 次	1 号竪穴	壺				指圧痕　貼付突帯	ﾀﾃﾞ		○		○	1 号住
第12図	095	5 次	1 号竪穴	壺				貼付突帯	磨耗				○	1 号住
第12図	096	5 次	1 号竪穴	壺		5.3+α	(7.2)	縦方向ﾍﾗﾐｶﾞﾅﾃﾞ	板状工具によるﾅﾃﾞ		◎		◎	1 号 C ﾋﾟｯﾄ
第12図	097	5 次	1 号竪穴	脚付鉢		3.1+α	(16.0)	ﾀﾃﾞ	不明瞭	○	◎		◎	1 号住
第12図	098	5 次	3 号竪穴	壺		2.0+α		ﾖｺﾅﾃﾞ　ﾀﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	◎	◎			3 号住
第12図	099	5 次	3 号竪穴	壺		5.1+α		櫛描沈線状文（6 条 2 列）　ﾀﾃﾞ　ﾀﾃﾞ	ﾀﾃﾞ	◎	◎			3 号住
第12図	100	5 次	3 号竪穴	鉢	(21.0)	8.1+α		ﾖｺﾅﾃﾞ　ﾀﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ　工具ﾅﾃﾞ	◎	◎		○	3 号住
第12図	101	5 次	3 号竪穴	壺		4.3+α	2.6	工具ﾅﾃﾞ　ﾀﾃﾞ　ﾀﾃﾞ	ﾀﾃﾞ	◎	◎			3 号住床
第12図	102	5 次	3 号竪穴	鉢	(9.8)	3.1		ﾀﾃﾞ　指圧痕	ﾀﾃﾞ	◎	◎			3 号
第12図	103	5 次	3 号竪穴	ﾐﾆﾁｭｱ壺	6.3	4.5		ﾀﾃﾞ　指圧痕ﾅﾃﾞ	ﾀﾃﾞ　指圧痕ﾅﾃﾞ	◎	◎			3 号住床
第12図	104	5 次	4 号竪穴	壺				ﾀﾃﾞ　ﾀﾃﾞ	ﾀﾃﾞ　ﾀﾃﾞ	○			○	4 号
第12図	105	5 次	4 号竪穴	壺				ﾀﾃﾞ　三角突帯	ﾀﾃﾞ			○	○	4 号
第12図	106	5 次	4 号竪穴	壺				ﾀﾃﾞ　ﾀﾃﾞ　刻目突帯	ﾖｺﾅﾃﾞ　ﾀﾃﾞ	○		○	○	4 号
第12図	107	5 次	4 号竪穴	壺				ﾀﾃﾞ　刻目突帯	ﾀﾃﾞ	○		○	○	4 号
第12図	108	5 次	4 号竪穴	鉢				ﾀﾃﾞ	ﾀﾃﾞ	○			○	4 号
第12図	109	5 次	4 号竪穴	縄文土器鉢				磨滅	ﾀﾃﾞ	○				4 号
第12図	110	5 次	10 号竪穴	器台	(10.0)	10.2+α		ﾀﾃﾞ　ﾅﾃﾞ　ﾀﾃﾞ	ﾀﾃﾞ	◎	◎		◎	10 号
第12図	111	5 次	12 号竪穴	壺				ﾀﾃﾞ　刻目突帯	ﾀﾃﾞ	○	◎		◎	12 号住
第12図	112	5 次	12 号竪穴	壺	(18.0)	8.0+α		ﾀﾃﾞ　ﾀﾃﾞ　磨滅	ﾀﾃﾞ　ﾀﾃﾞ	○	○		◎	12 号最上層
第12図	113	5 次	12 号竪穴	壺		5.5+α	(7.0)	ﾀﾃﾞ	ﾀﾃﾞ	○	◎	◎	○	12 号
第12図	114	5 次	12 号竪穴	壺				ﾀﾃﾞ　ﾀﾃﾞ	ﾀﾃﾞ	◎	○			12 号
第12図	115	5 次	12 号竪穴	脚付鉢	(12.0)	10.4	4.5	ﾀﾃﾞ　指圧痕	ﾀﾃﾞ	◎	◎			12 号住
第12図	116	5 次	13 号竪穴	壺				ﾀﾃﾞ　三角突帯　浮文	ﾀﾃﾞ			○	○	13 号床
第12図	117	5 次	13 号竪穴	壺				ﾀﾃﾞ　三角突帯	ﾀﾃﾞ			○	○	13 号床
第12図	118	5 次	13 号竪穴	壺				ﾀﾃﾞ	ﾀﾃﾞ	○	○		○	13 号
第12図	119	5 次	14 号竪穴	壺		2.5+α	(5.8)	ﾀﾃﾞ	ﾀﾃﾞ		○		○	14 号住床
第12図	120	5 次	14 号竪穴	器台				ﾀﾃﾞ　ﾀﾃﾞ	ﾀﾃﾞ　指圧痕	○			○	14 号住
第12図	121	5 次	14 号竪穴	縄文土器鉢				縦方向山形文　ﾀﾃﾞ	原体条痕　横方向山形文	○			○	14 号床
第12図	122	5 次	15 号竪穴	壺				ﾀﾃﾞ　櫛描沈線状文	ﾀﾃﾞ	○			○	15 号
第12図	123	5 次	15 号竪穴	壺				ﾀﾃﾞ　刻目突帯	ﾀﾃﾞ　指圧痕		○		○	15 号住
第12図	124	5 次	15 号竪穴	壺				ﾀﾃﾞ　ﾀﾃﾞ　三角突帯	ﾀﾃﾞ　ﾀﾃﾞ	○			○	15 号
第12図	125	5 次	16 号竪穴	壺				ﾀﾃﾞ　ﾀﾃﾞ　刻目突帯	ﾀﾃﾞ				○	16 号
第12図	126	5 次	16 号竪穴	壺				ﾀﾃﾞ　ﾀﾃﾞ　刻目突帯	ﾀﾃﾞ	○	○			16 号
第12図	127	5 次	16 号竪穴	壺		5.7+α	6.4	ﾀﾃﾞ　ﾅﾃﾞ　ﾀﾃﾞ	ﾀﾃﾞ	○		○	◎	16 号
第12図	128	5 次	17 号竪穴	壺				ﾀﾃﾞ　指圧痕　櫛描沈線状文	ﾀﾃﾞ　ﾀﾃﾞ	○			○	17 号
第12図	129	5 次	17 号竪穴	壺				ﾀﾃﾞ　ﾀﾃﾞ　ﾀﾃﾞ　三角突帯	ﾀﾃﾞ	○			○	17 号床面
第12図	130	5 次	17 号竪穴	壺		1.5+α	5.0	ﾀﾃﾞ	工具ﾅﾃﾞ		○		○	17 号
第12図	131	5 次	17 号竪穴	鉢				ﾀﾃﾞ　ﾅﾃﾞ　ﾍﾗ状ﾅﾃﾞ	ﾀﾃﾞ	○	○		○	17 号
第12図	132	5 次	17 号竪穴	器台		2.8+α	8.8	ﾀﾃﾞ　指圧痕	ﾀﾃﾞ　縦ﾍﾗ痕		○		○	17 号
第12図	133	5 次	1B 土坑	炎耳壺	24.2	24.3+α		板状工具によるﾅﾃﾞ後ﾀﾃﾞ　貼付突帯　浮文（2 連ﾅﾃﾞ）ﾀﾃﾞ	板状工具によるﾅﾃﾞ後ﾀﾃﾞ　指圧痕　ﾀﾃﾞ		○		◎	1B
第12図	134	5 次	1B 土坑	壺	(36.4)	14.7+α		ﾀﾃﾞ　貼付突帯　板状工具による横方向ﾅﾃﾞ　縦方向ﾍﾗ痕ﾅﾃﾞ	ﾀﾃﾞ　指圧痕　ﾀﾃﾞ		○		○	1BB
第12図	135	5 次	1B 土坑	壺	(27.2)	13.1+α		ﾀﾃﾞ　貼付突帯　ﾀﾃﾞ	ﾀﾃﾞ　ﾀﾃﾞ	○	○		○	1B
第12図	136	5 次	2 号土坑	高坏				ﾀﾃﾞ　縦方向ﾅﾃﾞ	ﾀﾃﾞ		◎	○		2 号
第12図	137	5 次	2 号土坑	壺				貼付突帯　ﾀﾃﾞ	ﾀﾃﾞ　磨滅		◎	◎	◎	2 号床
第12図	138	5 次	2 号土坑	壺				貼付突帯　ﾀﾃﾞ	ﾀﾃﾞ		○	○	○	2 号
第12図	139	5 次	2 号土坑	壺				ﾀﾃﾞ　刻目突帯	ﾀﾃﾞ		◎	◎		2 号（方形）（東半部）
第12図	140	5 次	2 号土坑	壺				ﾀﾃﾞ　刻目突帯　ﾅﾃﾞ	ﾀﾃﾞ　磨滅			○	○	2 号
第12図	141	5 次	2 号土坑	壺				刻目突帯　ﾀﾃﾞ　ﾅﾃﾞ	ﾀﾃﾞ		○		○	2 号（彩）
第12図	142	5 次	2 号土坑	壺				ﾀﾃﾞ　ﾀﾃﾞ　刻目突帯	ﾀﾃﾞ	○		◎		5 号竪穴
第12図	143	5 次	5 号土坑	壺				ﾀﾃﾞ　ﾀﾃﾞ　ﾀﾃﾞ	ﾀﾃﾞ　ﾀﾃﾞ　磨滅	◎		◎	◎	5 号竪
第12図	144	5 次	5 号土坑	壺		4.4+α	8.0	ﾀﾃﾞ　ﾀﾃﾞ　ﾀﾃﾞ	ﾀﾃﾞ		○		◎	5 号（彩）
第12図	145	5 次	6 号土坑	壺				ﾀﾃﾞ　M 字突帯	ﾀﾃﾞ	○			○	6 号
第12図	146	5 次	6 号土坑	壺				ﾀﾃﾞ　三角突帯	ﾀﾃﾞ				○	6 号
第12図	147	5 次	7 号土坑	壺				ﾀﾃﾞ　刻目突帯　ﾀﾃﾞ	ﾀﾃﾞ	◎	◎		◎	7 号
第12図	148	5 次	7 号土坑	壺		11.0+α		平縄竹管による平行文　意匠文	ﾀﾃﾞ	◎	◎		◎	7 号竪
第12図	149	5 次	7 号土坑	壺		7.6+α		平縄竹管による平行文　意匠文	ﾀﾃﾞ	◎	◎		◎	7 号竪
第12図	150	5 次	7 号土坑	壺				ﾀﾃﾞ	ﾀﾃﾞ　指圧痕	○	○		◎	7 号竪
第12図	151	5 次	7 号土坑	壺	(26.0)	7.4+α		刻目・貼付突帯　ﾀﾃﾞ	ﾀﾃﾞ	◎	◎			7 号竪
第12図	152	5 次	7 号土坑	壺	(34.2)	8.0+α		ﾀﾃﾞ　磨滅	ﾀﾃﾞ　磨滅	○		○	◎	7 号竪
第12図	153	5 次	7 号土坑	壺		6.3+α	7.4	ﾀﾃﾞ　ﾀﾃﾞ　工具ﾅﾃﾞ　ﾀﾃﾞ	ﾀﾃﾞ	◎	◎			7 号竪
第12図	154	5 次	7 号土坑	壺		11.5+α	5.8	ﾀﾃﾞ　ﾅﾃﾞ　磨滅	ﾀﾃﾞ　磨滅		○	○	○	7 号竪
第12図	155	5 次	7 号土坑	壺		9.6+α	6.6	ﾀﾃﾞ　磨滅	ﾀﾃﾞ　磨滅		○	○	○	7 号竪
第12図	156	5 次	7 号土坑	壺		9.3+α	5.8	縦方向ﾍﾗ　磨滅	磨滅　不明瞭		○	○	○	7 号竪
第12図	157	5 次	7 号土坑	壺		11.7+α	5.3	磨滅	磨滅		○	◎	◎	7 号
第12図	158	5 次	7 号土坑	脚付鉢		8.2+α		ﾀﾃﾞ　三角突帯	ﾀﾃﾞ　指圧痕	◎	◎			7 号竪　北半上層
第12図	159	5 次	8 号土坑	高坏		5.5+α		ﾀﾃﾞ　貼付突帯　磨滅	ﾀﾃﾞ	◎	◎		○	7 号
第12図	160	5 次	8 号土坑	壺		7.8+α		ﾀﾃﾞ　ﾀﾃﾞ　貼付突帯　ﾀﾃﾞ	ﾀﾃﾞ	◎	◎			8 号
第12図	161	5 次	8 号土坑	壺		6.0+α		ﾀﾃﾞ　ﾅﾃﾞ	ﾀﾃﾞ　ﾅﾃﾞ　磨滅	◎	◎			8 号住
第12図	162	5 次	8 号土坑	壺		3.9+α	5.1	ﾀﾃﾞ　ﾅﾃﾞ　ﾀﾃﾞ	工具ﾅﾃﾞ	◎	◎			8 号住
第12図	163	5 次	9 竪穴	壺	(18.4)	2.2+α		指圧痕　ﾀﾃﾞ	ハの字状の櫛描ﾅﾃﾞ	◎	◎			9 号住
第12図	164	5 次	9 竪穴	鉢		1.1+α		ﾀﾃﾞ　磨滅　ﾀﾃﾞ　貼付突帯	ﾀﾃﾞ　磨滅	◎	◎			9 号住
第12図	165	5 次	9 竪穴	壺		8.2+α		ﾀﾃﾞ　ﾀﾃﾞ　貼付突帯	ﾀﾃﾞ	◎	◎			9 号住
第12図	166	5 次	11 竪穴	壺		3.5+α	7.5	ﾀﾃﾞ　ﾅﾃﾞ	ﾀﾃﾞ　工具ﾅﾃﾞ	◎	◎			11 号
第12図	167	5 次	11 竪穴	壺		6.5+α		平縄竹管による意匠文　ﾀﾃﾞ	ﾀﾃﾞ	◎	◎			11 号
第12図	168	5 次	11 竪穴	壺		3.2+α		ﾀﾃﾞ　刻目突帯　刻目　ﾅﾃﾞ　ﾀﾃﾞ	ﾀﾃﾞ	◎	◎			11 号　炉穴
第12図	169	5 次	11 竪穴	鉢		2.6+α		ﾀﾃﾞ　ﾀﾃﾞ	ﾀﾃﾞ　ﾀﾃﾞ	◎	◎			11 号
第12図	170	5 次	20 竪穴	壺				ﾀﾃﾞ　ﾅﾃﾞ　刻目突帯	ﾀﾃﾞ		○		○	20 号中間壁
第12図	171	5 次	20 竪穴	壺				ﾀﾃﾞ　沈線　刻目	ﾀﾃﾞ　ﾀﾃﾞ　指圧痕		◎		○	20 号
第12図	172	5 次	20 竪穴	壺				ﾀﾃﾞ　刻目	ﾀﾃﾞ　文様	○	○			20 号
第12図	173	5 次	20 竪穴	壺		6.3+α	(11.2)	ﾀﾃﾞ　ﾅﾃﾞ　ﾀﾃﾞ	ﾀﾃﾞ　指圧痕		○		○	20 号
第12図	174	5 次	20 竪穴	壺	(20.0)	2.5+α		ﾀﾃﾞ　ﾅﾃﾞ　刻目突帯	ﾀﾃﾞ　ﾀﾃﾞ				○	20 号
第12図	175	5 次	20 竪穴	器台?		4.0+α	10.8	ﾀﾃﾞ	ﾀﾃﾞ				○	20 号
第12図	176	5 次	20 竪穴	蓋	(30.8)	11.0+α		ﾀﾃﾞ　ﾍﾗ状ﾅﾃﾞ	ﾀﾃﾞ	○	○		○	20 号
第12図	177	5 次	20 竪穴	甕		9.3+α	7.0	ﾀﾃﾞ　ﾅﾃﾞ　ﾍﾗ状ﾅﾃﾞ　ﾀﾃﾞ　ﾀﾃﾞ	一部ﾀﾃﾞ	◎	◎			20 号
第12図	178	5 次	20 竪穴	甕	16.5	19.5	2.0	工具ﾅﾃﾞ	工具ﾅﾃﾞ	◎	◎		◎	21 号
第12図	179	5 次	一括	壺		6.5+α		ﾀﾃﾞ　櫛描沈線状文（8 条 3 列）	ﾖｺﾅﾃﾞ	◎	◎		◎	
第12図	180	5 次	一括	壺		11.0+α		ﾀﾃﾞ　ﾅﾃﾞ　ﾀﾃﾞ　三角突帯	ﾀﾃﾞ	◎	◎			
第12図	181	5 次	一括	高坏		4.5+α		ﾀﾃﾞ　ﾅﾃﾞ　ﾍﾗ状ﾅﾃﾞ　ﾀﾃﾞ	ﾀﾃﾞ　円盤充填	◎	◎			
第12図	182	5 次	一括	ﾐﾆﾁｭｱ壺		6.2+α		ﾀﾃﾞ	ﾀﾃﾞ	◎	◎			22 号床

第16表　遺物一覧表土器（6）

図版番号	遺物番号	調査区	遺構	器種	口径（残存幅）	器高（残存高）	底部径（脚部高・支径）	外面の文様・調整	内面の文様・調整	角閃石	黒石	石英	その他	遺物注記
										粗土				
第106図	639	6次	1号竪穴	壺		36.8＋α	最大径 14.6	貼付突帯　ナデ方向のハケ後ナデ　焼成前に突帯	磨滅		多		多	1号住　主屋C・D・E　1号住　A・C・D一括
第106図	640	6次	1号竪穴	壺	(18.0)	9.4＋α		ヨコナデ　ハケ目	磨滅	少			少	1号住付近の2号Pit
第106図	641	6次	1号竪穴	壺				磨滅　突帯貼付	磨滅				多	1号住付近の2号Pit
第106図	642	6次	1号竪穴	壺				ヨコナデ　磨滅　突帯貼付	磨滅	少			多	1号住　土器
第106図	643	6次	1号竪穴	壺	(21.0)	5.0＋α		ヨコナデ　ナデ　突帯貼付	ヨコナデ　磨滅	少			多	1号住　住跡
第106図	644	6次	1号竪穴	壺	(16.2)	5.0＋α		ヨコナデ　ナデ	ヨコナデ　ナデ（指圧痕）	少			多	1号住　D・E
第106図	645	6次	1号竪穴	ミニチュア壺		3.4＋α	3.0	ナデ　ハケ目　磨滅	ナデ	少			少	1号住
第106図	646	6次	1号竪穴	鉢	(12.5)	8.4		ナデ方向のハケ後ナデ	指ナデ＋ナデ	少	少		少	1号住
第106図	648	6次	2号竪穴	壺	(20.0)	6.1＋α		ナデ　ヨコナデ　磨耗風化大	ヨコナデ　ナデ	多			多	2号住　住跡
第106図	650	6次	2号竪穴	壺		13.8＋α		磨滅	ハケ目　工具ナデ　磨滅	多			多	2号住　住跡
第106図	651	6次	2号竪穴	壺				磨滅	ナデ	少			少	2号住　住跡
第106図	652	6次	2号竪穴	壺		2.7＋α	1.6	磨滅	磨滅（指圧痕）	少	少		少	2号住　住跡
第106図	653	6次	2号竪穴	壺	(15.8)	17.0＋α		磨滅	磨滅	多			少	2号住　住跡
第106図	654	6次	2号竪穴	壺	(15.15)	21.75		ヨコナデ→ハケ	ヨコナデ→ナデ	少	少	少	少	2号住　住跡
第106図	655	6次	2号竪穴	壺	(11.6)	11.2＋α		ヨコナデ　ハケ目　磨滅	ヨコナデ　磨滅	少			少	2号住　住跡
第106図	656	6次	2号竪穴	鉢	(15.8)	5.6	(5.2)	磨滅	ナデ	少			多	2号住　住跡
第106図	664	6次	3号竪穴	壺	(22.0)	8.0＋α		刷毛目調　刷毛目整　磨滅	指圧痕　指ナデ	多	多	多	多	3号住　南隅　1号
第106図	665	6次	3号竪穴	壺				ナデ　刷毛目整　ナデ方向のナデ後ナデ	ナデ			多	少	2号住
第106図	666	6次	3号竪穴	壺	(26.2)	6.4＋α		ヨコナデ　磨滅	ヨコナデ　工具ナデ	多	多		多	3号住
第106図	667	6次	3号竪穴	壺				ナデ　磨滅	ナデ		多	多	多	3号住
第106図	668	6次	3号竪穴	壺		2.2＋α	6.0	ヨコナデ				多	少	3号住
第106図	669	6次	3号竪穴	底部有孔鉢				磨滅	指圧痕	少	少			3号住
第106図	670	6次	3号竪穴	小型丸底壺	120	8.1		多方向のハケ目ケキ	ナデ＋ハケ後ミガキ	少	少		少	3号住
第106図	673	6次	4号竪穴	壺	(15.8)	7.2＋α		磨滅風化大（磨滅）	指圧痕　ナデ	少			少	4号住
第106図	674	6次	4号竪穴	壺				ヨコナデ　ハケ目　ナデ	ヨコナデ　ハケ目　ナデ	少		少	多	4号住
第106図	675	6次	4号竪穴	壺				磨滅風化大	ナデ		少	多	多	4号住
第106図	676	6次	4号竪穴	壺				ナデ	ナデ	多	多	多	多	4号住　第15号溝
第106図	677	6次	4号竪穴	壺				表風化	ナデ		少		少	4号住　鉄道区土層
第106図	678	6次	4号竪穴	壺				ハケ後ミガキ	ヘラミガキ		少		多	4号住
第106図	679	6次	4号竪穴	壺		4.3＋α	1.7	ナデ	ナデ		多		少	4号住
第106図	680	6次	4号竪穴	壺				刷毛目調　刷毛整　ナデ方向のハケ後ナデ	ナデ＋方向のハケ後ナデ	多	多	少	多	4号住
第106図	681	6次	4号竪穴	壺				ヨコナデ　刷毛整	ヨコナデ			多		4号住　鉄道区
第106図	682	6次	4号竪穴	壺				ナデ　磨滅	ナデ　磨滅	少			少	4号住
第106図	683	6次	4号竪穴	壺		2.2＋α		ナデ	ナデ	多	多			4号 Pit
第106図	684	6次	4号竪穴	壺	25.4	10.7＋α		ヨコナデ　ナデ方向のハケ後ナデ	ヨコナデ　工具ナデ後ナデ	多	多		少	4号住　土層2
第106図	685	6次	4号竪穴	壺	(36.8)	7.9＋α		ヨコナデ　指圧痕跡	ヨコナデ　ナデ	少			少	4号住　土層　一括
第106図	686	6次	4号竪穴	壺		8.7＋α	7.5＋α	ナデ方向のハケ後ナデ（磨滅）	工具ナデ　指圧痕	少	少		多	4号住
第106図	687	6次	4号竪穴	壺		4.5＋α	6.3	ナデ　ヨコナデ	ヨコナデ	少	少	多	多	4号住　土層
第106図	688	6次	4号竪穴	壺		3.7＋α	5.0＋α	ナデ方向のハケ後ナデ　ヨコナデ	磨滅			多	多	4号住　土層
第106図	689	6次	4号竪穴	壺		4.7＋α	6.0	ナデ方向のハケ後ナデ　ヨコナデ	同指文磨滅				多	4号住
第106図	690	6次	4号竪穴	壺		3.9＋α	5.0	ナデ方向のハケ後ナデ	磨滅	多	多		多	4号住　土層
第106図	691	6次	4号竪穴	鉢		1.8＋α	(2.7)	ナデ	ハケ目				少	4号住
第106図	692	6次	4号竪穴	把手付鉢				指ナデ＋ナデ	指ナデ＋ナデ	多	多		多	4号住
第106図	693	6次	4号竪穴	高坏				工具ナデ	工具ナデ	少	少		少	4号住
第106図	700	6次	5号竪穴	壺		10.5＋α		ナデ→ハケ目　貼付突帯　ナデ	ナデ	多	多		多	5号住
第106図	701	6次	5号竪穴	壺		8.7＋α		ナデ	ナデ	多	多		多	5号住
第106図	702	6次	5号竪穴	壺	(32.1)	13.1		ヨコナデ　刷毛整　ナデ→ハケ目	ナデ	多	多			5号住　外縁　溝内土坑
第106図	703	6次	5号竪穴	壺		3.2＋α		刷毛目調　ナデ　刷毛整	ナデ	多	多			5号住
第106図	704	6次	5号竪穴	壺			6.0＋α	ナデ　刷毛整	ナデ	多	多		少	5号住　外縁　溝内土坑
第106図	705	6次	5号竪穴	壺		5.0＋α		ナデ　刷毛整	ナデ	多	多		多	5号住
第106図	706	6次	5号竪穴	壺		3.5＋α		刷毛目調　ナデ　刷毛整	ナデ	多	多			5号住
第106図	707	6次	5号竪穴	壺	(31.3)	11.0＋α		ヨコナデ　貼付突帯　ナデ	ヨコナデ　ナデ	多	多			5号住
第106図	708	6次	5号竪穴	壺	(18.5)	8.8＋α		ヨコナデ　ナデ	ナデ	多	多			5号住
第106図	709	6次	5号竪穴	壺		4.2＋α	(7.0)	ナデ	ナデ	多	多	多	多	5号住　内溝
第106図	710	6次	5号竪穴	壺		3.0＋α	4.0	ナデ	ナデ	多	多		少	5号住　Pit
第106図	711	6次	5号竪穴	壺		4.5＋α	7.7	ナデ	ナデ	多	多		多	5号住　内溝
第106図	712	6次	5号竪穴	壺		3.0＋α	5.0	ナデ後ミガキ　ナデ	ナデ後ミガキ	多	多		多	5号住
第106図	713	6次	5号竪穴	鉢?	(27.8)	12.7＋α		ナデ→ハケ目　把手痕?　ナデ	ナデ後ミガキ	多	多			5号住　土層　15・16号住の間　東側拡張区　一括
第106図	714	6次	5号竪穴	高坏		6.3＋α	(12.4)	杂孔　ナデ	杂孔　ナデ	少	少			5号住　土坑墓
第107図	716	6次	6号竪穴	壺	(13.4)	10.2＋α		ヨコナデ　磨耗風化大　ナデ	ナデ	多	多		少	6号住南西　参溝
第107図	717	6次	6号竪穴	壺		5.0＋α		ヨコナデ　ナデ→ハケ	ヨコナデ　ナデ	多	多			6号住　Pit
第107図	718	6次	6号竪穴	壺		2.0＋α	1.0	ナデ（磨滅している）	ナデ	多	多			6号住
第107図	720	6次	7号竪穴	壺	(11.8)	8.3＋α		磨耗風化大　磨滅	ヨコナデ　指圧痕	少	少		多	7号住
第107図	721	6次	7号竪穴	壺				ヨコナデ　内側沿ナデ	ヨコナデ	少	少	少	少	7号住　住跡
第107図	722	6次	7号竪穴	壺	(27.0)			ミガキ	ミガキ	少	少	少	少	7号住
第107図	723	6次	7号竪穴	壺		14.5＋α	脚部 (17.2)	ミガキ	ミガキ　ナデ	少	少	少	少	7号住
第107図	724	6次	7号竪穴	壺		11.0＋α	(6.7)	工具ナデ	指圧痕　若干器面剥離	少	少		多	7号住
第107図	725	6次	7号竪穴	壺		10.0＋α		工具ナデ（磨滅）	ナデ　指圧痕	少	少		多	7号住
第107図	726	6次	7号竪穴	壺		7.0＋α		ナデ	ナデ	少	少	少	少	7号住
第107図	727	6次	7号竪穴	壺	(22.8)	6.3＋α		ヨコナデ　ハケ目　刷目整	ヨコナデ	少	少	少	少	7号 Pit
第107図	728	6次	7号竪穴	壺		6.8＋α		ヨコナデ　ナデ　刷目整	ヨコナデ　ナデ	少	少	少	少	7号住　一括
第107図	729	6次	7号竪穴	壺	14.3	16.0＋α		ヨコナデ　ナデ方向のハケ後ナデ	ヨコナデ　工具ナデ	少	少	少	少	7号住　一括
第107図	730	6次	7号竪穴	壺	(14.1)	5.2		磨滅に近い不明	磨滅に近い不明	少	少	少	少	7号住
第107図	731	6次	7号竪穴	壺		3.9＋α	(6.7)	ナデ	ナデ	少	少	少	少	7号住
第107図	732	6次	7号竪穴	壺		4.7＋α	6.9	ハケ目　ナデ	ハケ目　ナデ	少	少	少	少	7号住
第107図	733	6次	7号竪穴	壺		4.5＋α	6.8	ナデ	磨滅に近い不明	少	少	少	少	7号住　外縁
第107図	734	6次	7号竪穴	壺		3.4＋α	1.2	ナデ	ナデ	少	少	少	少	7号住　住跡
第107図	735	6次	7号竪穴	壺		6.2＋α	1.4	ハケ目	ナデ　指圧痕	少	少		多	7号住
第107図	736	6次	7号竪穴	壺		15.1＋α		ナデ方向のハケ後ナデ	工具ナデ	多	多		多	7号住
第107図	737	6次	7号竪穴	小型丸底壺		8.6＋α		ナデ方向のハケ（磨滅）	ナデ　指圧痕	多	多		多	7号住　北端至土坑　一括
第107図	738	6次	7号竪穴	鉢	16.8	9.2	2.0	ミガキ→ナデ	ミガキ→ナデ　指圧痕	少	少		少	7号
第107図	739	6次	7号竪穴	ミニチュア壺	(3.0)	3.9	0.7	指圧痕　ナデ	指圧痕　ナデ	少	少	少	少	7号住
第108図	748	6次	8号竪穴	壺		5.1＋α		ヨコナデ　刷目整	ヨコナデ	少	少	少	多	8号住　Pit1
第108図	749	6次	8号竪穴	壺		4.5＋α		ヨコナデ　刷目整	ヨコナデ　磨滅に近い不明	少	少	少	多	8号住　溝中
第108図	750	6次	8号竪穴	壺		6.1＋α		ヨコナデ	ヨコナデ	少	少	少	多	8号住　Pit1
第108図	751	6次	8号竪穴	壺		6.7＋α	1.8	ナデ	ナデ	少	少	少	多	8号住　Pit1
第108図	752	6次	8号竪穴	壺	(12.7)	5.0＋α		ヨコナデ	ヨコナデ　ナデ	少	少		多	8号住　Pit1
第108図	753	6次	8号竪穴	鉢??	(17.8)	21.5	10.0	ナデ→刷目整　杂孔	ナデ	少	少		多	8号住
第108図	754	6次	9号竪穴	壺		3.1＋α		ヨコナデ　刷目整	ヨコナデ	少	少	少	少	9号住
第108図	757	6次	9号竪穴	壺	(21.3)	6.4＋α		ヨコナデ	ヨコナデ	少	少	少	少	9号住
第108図	758	6次	9号竪穴	壺		3.8＋α	(3.5)	ナデ	ナデ	少	少	少	少	9号住
第108図	759	6次	9号竪穴	壺		2.8＋α	2.1	磨滅に近い不明	磨滅に近い不明	少	少	多	少	9号住
第108図	763	6次	10号竪穴	壺	(28.2)	12.4＋α		与玉状浮文　ヘラ描き入字文　ナデ（指圧痕）　ミガキ　杂孔　杂孔	磨滅　ヨコナデ	多	多		多	10号住

第 17 表　遺物一覧表土器（7）

図版番号	遺物番号	調査区	出土層	器種	口径（残存幅）	器高（残高）	底部径（推定値 実測）	外面の文様・調整	内面の文様・調整	胎土 角閃石	胎土 長石	胎土 石英	胎土 その他	遺物特記
第23図	765	6 次	10 号竪穴	壺	13.2+ α			磨滅　格子目突帯	磨滅	少		少		10 号住 10 号住　Pit 相穴
第23図	766	6 次	10 号竪穴	壺				ナデ　重弧文	磨滅	少	少		多	10 号住
第23図	767	6 次	10 号竪穴	壺				磨滅　ナデ　重弧文	磨滅	少	少		多	10 号住
第23図	768	6 次	10 号竪穴	壺	(25.2)	15.3+ α		ヨコナデ　ナデ　ハケ目？	工具ナデ　ヨコナデ	多	少		多	10 号住　土坑　一括
第23図	769	6 次	10 号竪穴	甕		29.6+ α	1.2	ナデ	ナデ　指圧痕　ミガキ　磨滅	少			多	10 号住　土坑 一括 1-2 号住跡 No.2
第23図	770	6 次	10 号竪穴	甕				磨滅　突帯貼付	磨滅	少		少	10 号住	
第23図	771	6 次	10 号竪穴	鉢		2.9+ α	6.8α	ヨコナデ　磨滅	ナデ	少		少	10 号住	
第23図	772	6 次	10 号竪穴	鉢手				工具ナデ　指圧痕	工具ナデ　指圧痕	少		少	10 号住	
第23図	773	6 次	10 号竪穴	高坏	(10.2+ α)	4.2+ α		磨滅	磨滅	少		少	10 号住	
第23図	774	6 次	10 号竪穴	壺				磨滅　ハケ目後ナデ　突帯貼付	ナデ　ハケ目	少	少	少	10 号住	
第23図	775	6 次	10 号竪穴	鉢				ナデ　磨滅	ナデ　磨滅　指圧痕	少		少	10 号住	上部
第23図	776	6 次	13 号竪穴	甕		2.9+ α	6.8α	磨滅	磨滅	少	少	少	13 号住	
第23図	777	6 次	14 号竪穴	壺				ヨコナデ　櫛描波状文	ナデ	多		多	14 号住	
第23図	778	6 次	14 号竪穴	壺				磨滅　櫛描波状文	磨滅	少	少		14 号住	
第23図	780	6 次	14 号竪穴	壺				磨滅	磨滅	少		多	14 号住	
第23図	781	6 次	14 号竪穴	甕				磨滅　ヨコナデ　回転突帯貼付	磨滅	少	少	少	14 号住	
第23図	782	6 次	14 号竪穴	甕	6.2+ α	6.6		磨滅	ナデ　磨滅	多	多	少	14 号住	
第23図	783	6 次	14 号竪穴	高坏				磨滅　ミガキ　磨滅	ナデ　ヨコナデ	少		少	14 号住	
第24図	785	6 次	15 号竪穴	壺	(11.0)	2.5+ α		ヨコナデ　磨滅	ヨコナデ　ナデ　磨滅	少	少	少	15 号住	床面
第24図	786	6 次	15 号竪穴	壺		3.5+ α	2.2	磨滅　ナデ	工具ナデ	多	多	少	15 号住	
第24図	787	6 次	15 号竪穴	壺				磨滅	磨滅	少		少	15 号住	
第24図	788	6 次	15 号竪穴	甕		5.8+ α	5.8	磨滅	磨滅	多	多	多	15 号住	
第24図	789	6 次	15 号竪穴	甕		2.5+ α	3.0	磨滅	磨滅	多	多	多	15 号住	
第24図	790	6 次	15 号竪穴	甕		3.6+ α	4.4	磨滅	ナデ　指圧痕	少	少	少	15 号住	床面
第24図	791	6 次	15 号竪穴	壺		2.4+ α	4.2	磨滅	ナデ	少	多	少	15 号住	
第24図	792	6 次	15 号竪穴	土師器鉢	11.6	4.5		ヨコナデ　ナデ	ヨコナデ　ナデ　指圧痕	少	多	多	15 号住	床面直上　一括
第24図	793	6 次	15 号竪穴	土師器鉢	16.8	6.8	10.8	ヨコナデ　ナデ	ヨコナデ　ナデ	多	多		15 号住	
第24図	796	6 次	18 号竪穴	壺	33.0+ α	最大胴径 (27.8+ α)	8.1	ヨコナデ方向のハケ目ミガキ　磨滅　易付突帯	指圧痕　磨滅	多	多	多	18 号住	18 号住　西壁 Pit　一括
第24図	797	6 次	18 号竪穴	壺				磨滅	磨滅	多	多	多	18 号	
第24図	798	6 次	18 号竪穴	壺		4.7+ α	11.0α	磨滅	磨滅	少	少	多	18 号住	
第24図	799	6 次	18 号竪穴	壺				磨滅	ナデ	多	多	多	18 号住	
第24図	800	6 次	18 号竪穴	壺	12.8	12.0+ α		磨滅　粗ハケ目　粘土紐接合痕	磨滅　粘台痕跡著	少		多	18 号住	一括
第24図	801	6 次	18 号竪穴	甕	22.0	24.4	4.9	ヨコナデ・ナデ・磨滅	ヨコナデ・ナデ・指圧痕	多	多	多	18 号住 (48 号)	
第24図	802	6 次	18 号竪穴	ハケ目壺	(5.3)	1.9		指圧痕	指圧痕			多	18 号住	
第24図	805	6 次	23 号竪穴	土師器二重口縁壺		5.7+ α	(17.2)	ヨコナデ	磨滅	少	少	多	23 号住	
第24図	806	6 次	23 号竪穴	壺	(15.6)	2.6+ α		磨滅	磨滅		多	多	23 号住	
第24図	807	6 次	23 号竪穴	甕		7.5+ α	6.5α	磨滅	ナデ	多	多	多	23 号住	
第24図	808	6 次	23 号竪穴	甕		2.4+ α	5.0	磨滅	ナデ		多	多	23 号住	
第24図	809	6 次	23 号竪穴	土師器高坏				ナデ	ナデ	多	多		23 号住	
第24図	810	6 次	21 号竪穴	壺				磨滅 (櫛描波状文)	磨滅		多		21 号住	
第24図	811	6 次	21 号竪穴	甕				ヨコナデ　回転突帯　ナデ方向のハケ目	ミガキ				21 号	21 号上部
第24図	812	6 次	21 号竪穴	甕		6.7+ α	6.0	磨滅	磨滅	多	多	多	21 号上	
第24図	813	6 次	21 号竪穴	土師器鉢				ナデ	ナデ	少	多	少	21 号上部	
第24図	814	6 次	21 号竪穴	土師器鉢	(15.6)	4.4+ α		ミガキ	ナデ				21 号上部	
第24図	815	6 次	25 号竪穴	壺	(14.0)	3.1+ α		ヨコナデ　櫛描波状文	ナデ	多	多		25 号住	
第24図	816	6 次	25 号竪穴	壺		5.1+ α		ヨコナデ　回転突帯　ナデ→ミガ	ナデ	多	多	少	25 号住	
第24図	817	6 次	25 号竪穴	甕		6.2+ α		ヨコナデ　ナデ→ハケ目	ヨコナデ　ナデ→ハケ目	多	多	少	25 号住	
第24図	818	6 次	25 号竪穴	甕		6.0+ α	(5.8)	ナデ (磨滅)	ナデ (磨滅)	多	多	多	25 号住	
第24図	819	6 次	25 号竪穴	甕		3.3+ α	(7.0)	ナデ (磨滅)	ナデ (磨滅)	多	多		25 号住	
第24図	820	6 次	一括	壺	(21.4)	24.5+ α	最大胴径 (41.0)	磨滅　ヨコ方向のハケ目ミガキ (磨滅) 沈線 (41.0) 都	磨滅			多	多	12 号住跡
第24図	821	6 次	一括	壺		7.5+ α	9.0	磨滅　ミガキ?	磨滅	少		少	12 号	
第24図	822	6 次	一括	壺				ヨコナデ　ナデ　突帯貼付	ハケ目　ヨコナデ	少	少		12 号住	貯蔵穴
第24図	823	6 次	一括	甕	(34.6)	7.9+ α		胴目　ナデ　ハケ目　磨滅　突帯貼付	ヨコナデ　ナデ	少		多	12 号	
第24図	824	6 次	一括	壺		43.0+ α	最大胴径 (43.0)	ナデ方向のハケ目ナデ　貼付突帯	指圧痕　工具ナデ	多	多		少	1・2 号住の間
第24図	825	6 次	一括	壺		10.2+ α		ナデ　ハケ目　磨滅　与玉状浮文	ナデ　指圧痕	多	少		多	
第24図	826	6 次	一括	壺		3.3+ α		手指痕による平行文風文	ナデ	多	多		少	
第24図	827	6 次	一括	壺	(16.0)	6.3+ α		ナデ (磨滅)	ナデ (磨滅)	多	多		少	27 号住
第24図	828	6 次	一括	壺		7.5+ α	(5.6)	ナデ→ハケ目　ナデ	ナデ	多	多			
第24図	829	6 次	一括	甕	(29.2)	31.3	6.7	ナデ方向のハケ目ナデ　回転突帯　磨滅	指圧痕　磨滅	多	多		多	一括
第24図	830	6 次	一括	甕	(22.2)	17.2+ α		胴部目痕跡 (磨滅)　ヨコナデ　ナデ→ハケ目 (磨滅)	ナデ (磨滅)	多	多		多	
第24図	831	6 次	一括	甕		7.2+ α		ヨコナデ　胴目痕付突帯　ナデ	ナデ	多	多		多	6 号住　西壁 Pit
第24図	832	6 次	一括	甕		5.1+ α		ナデ (磨滅)　胴目突帯	ナデ (磨滅)	多	多			東側溝区
第24図	833	6 次	一括	甕		7.1+ α		ヨコナデ　胴目突帯	ヨコナデ　ナデ	多	多			Pit11 号
第24図	834	6 次	一括	甕		16.7+ α		ヨコナデ　胴目突帯　ナデ→ハケ目	ヨコナデ　ナデ	多	多		少	1
第24図	835	6 次	一括	甕	(33.1)	8.0+ α		ヨコナデ　ナデ→ハケ目	ヨコナデ　ナデ	多	多		少	6 号住　西壁 Pit
第24図	836	6 次	一括	甕				ヨコナデ　ナデ→ハケ目	ヨコナデ　ナデ	多	多		多	
第24図	837	6 次	一括	甕		5.7+ α		ナデ	ナデ	多	多			西側
第24図	838	6 次	一括	甕		9.7+ α		ヨコナデ　ナデ	ヨコナデ　ナデ	多	多			溝 6
第24図	839	6 次	一括	甕	17.5	18.6+ α		ヨコナデ　工具ナデ	ヨコナデ　工具ナデ	多	多		少	1・2 号住間 SG6 ピット?・1　第 2 層 一括 2
第24図	840	6 次	一括	甕	(15.6)	16.7+ α		ヨコナデ　ナデ→ハケ目　ナデ	ヨコナデ　ナデ→ハケ目指圧痕　ナデ	多	多			
第24図	841	6 次	一括	甕	(22.0)	8.1+ α		ヨコナデ　ナデ	ヨコナデ　指圧痕　ナデ	多	多		多	
第24図	842	6 次	一括	甕	(15.5)	8.2+ α		ヨコナデ　ナデ→ハケ目	ヨコナデ　ナデ	多	多		少	27 号住
第24図	843	6 次	一括	甕	14.0	7.6+ α		ヨコナデ　ナデ方向のハケ目ナデ	工具ナデ　磨滅	少	少	多		
第24図	844	6 次	一括	甕	(13.3)	6.7+ α		ヨコナデ　ナデ	ヨコナデ　ナデ	多	多	少	27 号住	
第24図	845	6 次	一括	甕		10.5+ α		ナデ方向のハケ目ナデ	方向のハケ目ナデ	多	少	多	多	
第24図	846	6 次	一括	甕		6.1+ α		ナデ→ハケ目 (磨滅)　ナデ	ナデ	多	多			
第24図	847	6 次	一括	甕		7.8+ α	6.0α	磨滅 (調整痕不明瞭)	磨滅	多	多			
第24図	848	6 次	一括	甕		5.2+ α	5.6	磨滅	ナデ	多	多		多	2　溝 4
第24図	849	6 次	一括	甕		4.8+ α	7.0	ナデ (磨滅)	ナデ	多	多			東側溝区
第24図	850	6 次	一括	甕	6.0	3.9+ α		ヨコナデ　ナデ	磨滅	多	多		多	27 号住
第24図	851	6 次	一括	甕		5.8+ α	5.0	ナデ　指圧痕	ナデ	多	多		多	
第24図	852	6 次	一括	高坏		5.3+ α		ナデ	ナデ	多	多	多	溝 2	
第24図	853	6 次	一括	鉢	(7.6)	7.1+ α		ナデ	ナデ	多	多	少	溝 2　3	
第24図	854	6 次	一括	脚付鉢?		7.8+ α	(6.0)	ナデ	ナデ	多	多	少	Pit1	
第24図	855	6 次	一括	壺		10.1+ α	(7.0)	磨滅	磨滅 (指圧痕)	多	少	多		
第24図	856	6 次	一括	高坏	(19.2)	5.3+ α		ヨコナデ　ナデ	ヨコナデ　ナデ	多	多			
第24図	857	6 次	一括	高坏	(15.6)	5.5+ α		ナデ (磨滅)	ナデ (磨滅)	多	多		多	

第18表　遺物一覧表土器（8）

図版番号	遺物番号	調査区	遺構	部構	口径(残存幅)	器高(残存高)	底部径(接底底径)	外面の文様・調整	内面の文様・調整	角閃石	黒雲母	石英	長石	赤色粒	その他	遺物注記
										胎土						
第20図	858	6次	一括	高坏		7.9+α		凹字ヨコ撫縦ハケ?	シボリ痕　ナデ?	多	多		多			
第20図	870	7次	1号竪穴	壁	12.4	37.7		口ﾅﾃ・横縦流沈文 口 条ヨコ撫縦ﾅﾃ(ケズリ)	口ﾅﾃ・ﾅﾃ方向の工具ﾅﾃ	多	少					1号住内
第20図	871	7次	1号竪穴	壁		3.5+α		底状文・口ﾅﾃ	口ﾅﾃ	少	多	多	多			1号住
第20図	872	7次	1号竪穴	壁		6.4+α		口ﾅ・空押足付・横沈形足付・ﾅﾃ&ﾅ	ﾅﾃ	多	多		多			1号住
第20図	873	7次	1号竪穴	壁	28.9	21.7+α		撫縦に工不明	撫縦に工不明	多	多	少	少			1号住-北6号
第20図	874	7次	1号竪穴	壁		3.7+α		ﾅﾃ・口ﾅﾃ	口ﾅﾃ・　横沈突帯	多	多	多	多			1号住
第20図	875	7次	1号竪穴	壁		4.8+α		ﾅﾃ・横沈突帯・ﾅﾃ&口ﾅ	ﾅﾃ(撫縦)	多	多	多				第1住 上段7ヨ上
第20図	876	7次	1号竪穴	壁	(15.0)	2.7+α		口ﾅﾃ	撫縦	多	多	多	少			1号住　P32
第20図	886	7次	3号竪穴	壁		2.2+α		ﾅﾃ・浮文・口ﾅﾃ	ﾅﾃ	多	多		多			3号住
第20図	887	7次	3号竪穴	壁				ﾅﾃ	沈線　横突文		多	多	多			3号住
第20図	888	7次	3号竪穴	壁				指圧痕　ﾅﾃ	突帯　浮文　ﾅﾃ	多	多	多	多			3号住
第20図	889	7次	3号竪穴	壁				ﾅﾃ	ﾅﾃ　細沈突帯	多	多	多	多			3号住
第20図	890	7次	3号竪穴	壁				ﾅﾃ	ﾅﾃ　細沈突帯	多	多	多	多			3号住
第20図	891	7次	3号竪穴	壁		5.9+α	6.6	ﾅﾃ	ﾅﾃ方向の口ﾅﾃ・ﾅﾃ　ﾅﾃ		多	多	少			3号住
第20図	892	7次	3号竪穴	壁		3.0+α	(5.6)	ﾅﾃ	ﾅﾃ			多	多			3号住
第20図	894	7次	6号竪穴	壁				ﾅﾃ	撫縦流状文　撫縦	多	多		多			6号住
第20図	895	7次	6号竪穴	壁				ﾅﾃ	ﾅﾃ　細沈突帯　細沈		多	多	多			6号住
第20図	896	7次	6号竪穴	壁				ﾅﾃ	ﾅﾃ　細沈突帯	多	多	多	多			6号住
第20図	897	7次	6号竪穴	壁				ﾅﾃ	ﾅﾃ　細沈突帯		多	多	多			6号住
第20図	898	7次	6号竪穴	壁				ﾅﾃ	ﾅﾃ　細沈突帯　細沈	少	少					6号住
第20図	899	7次	6号竪穴	壁				ﾅﾃ	ﾅﾃ	少	多	多	多			6号住
第20図	902	7次	7号竪穴	壁	(22.6)	9.4+α		口ﾅﾃ　ﾅﾃ	口ﾅﾃ　ﾅﾃ　口ﾅﾃ 波文様	少		多	多			7号住
第20図	903	7次	7号竪穴	壁				ﾅﾃ	重弧文		多	多	多			7号住
第20図	904	7次	7号竪穴	壁		2.9+α		平行横文・重弧文	指圧痕		多	多	多			7住
第20図	905	7次	7号竪穴	壁		4.1+α		横刷	ﾅﾃ	多	多		少			7住
第20図	906	7次	7号竪穴	壁		8.3+α	9.4	ﾅﾃ	ﾅ&ﾅ　ﾅﾃ　口ﾅﾃ　指圧痕	多	多		多			7号住
第20図	907	7次	7号竪穴	壁		4.6+α	8.2	ﾅﾃ	ﾅ&　ﾅﾃ　口ﾅﾃ	多	多		多			7号住
第20図	908	7次	7号竪穴	壁	(18.6)	13.0+α		口ﾅﾃ　ﾅﾃ	細沈　細沈突帯　ﾅ&	多	多		少			7号住
第20図	909	7次	7号竪穴	壁	(25.0)	8.4+α		ﾅ&ﾅﾃ　口ﾅﾃ 面ﾅ&	口ﾅﾃ　ﾅﾃ 指圧ﾅﾃ	多	多		少			7号住
第20図	910	7次	7号竪穴	壁	(17.0)	9.2+α		ﾅﾃ	撫縦　指圧突帯	多			多			7号住
第20図	911	7次	7号竪穴	壁		4.9+α		口ﾅﾃ・細沈突帯・ﾅ方向の口ﾅ	口ﾅﾃ・ﾅﾃ	少	少	少				7住(上段11)
第20図	912	7次	7号竪穴	壁		2.2+α		細沈突帯　ﾅﾃ	ﾅﾃ	多	多		多			7住
第20図	913	7次	7号竪穴	壁		4.7+α		口ﾅﾃ　ﾅﾃ	口ﾅﾃ　細沈突帯		少	多	多			7号住内上層
第20図	914	7次	7号竪穴	壁		4.0+α		細沈線・細沈突帯・口ﾅﾃ	ﾅ方向の口ﾅ	少	少	多	多			7住(上段11)
第20図	915	7次	7号竪穴	壁		8.8+α		ﾅ	口ﾅﾃ 波線状　口ﾅﾃ　ﾅ　細沈突帯	多		少	少			7号住
第20図	916	7次	7号竪穴	壁		4.1+α		口ﾅﾃ・撫縦	口ﾅﾃ・ﾅﾃ	多	少					7号住(上段11)
第20図	917	7次	7号竪穴	壁	(31.0)	11.4+α		口ﾅﾃ　ﾅﾃ	口ﾅﾃ　ﾅ　沼状突帯	少						7号住
第20図	918	7次	7号竪穴	壁				口ﾅﾃ	ﾅ方向の工具ﾅﾃ	多	多		少			7号住
第20図	919	7次	7号竪穴	壁	(22.4)	5.2+α		口ﾅﾃ　ﾅﾃ	口ﾅﾃ　ﾅ　撫縦	多	多		少			7号住
第20図	920	7次	7号竪穴	壁		10.1+α	7.2	ﾅﾃ　穿孔	ﾅﾃ　穿孔　口ﾅﾃ	多			多			7号住
第20図	921	7次	7号竪穴	壁		6.1+α	6.2	撫縦	撫縦			多	多			7号住
第20図	922	7次	7号竪穴	壁		3.9+α	6.3	撫縦	撫縦	少	多	多				7住
第20図	923	7次	7号竪穴	壁		4.0+α		横状のもので潰した跡	ﾅﾃ	多			多			7号住
第20図	924	7次	7号竪穴	鉢		9.6	6.0	撫縦　ﾅﾃ	ﾅ　ﾅﾃ	多			少			7号住
第20図	930	7次	8号竪穴	壁		6.7+α		口ﾅﾃ　ﾅﾃ	口ﾅﾃ　撫縦流波状文	多			多			8号住
第20図	931	7次	8号竪穴	壁		3.1+α	5.8	ﾅﾃ	ﾅﾃ　口ﾅﾃ	多	多		多			8号住
第21図	933	7次	10号竪穴	壁				ﾅﾃ	ﾅﾃ　沈線	少			少			10号住
第21図	934	7次	10号竪穴	壁		2.0+α		口ﾅﾃ 指圧ﾅ　文様	口ﾅﾃ	多	多	多	多			10号住
第21図	935	7次	10号竪穴	壁				工具ﾅﾃ	沼状突帯　浮文	少	多		多			10号住
第21図	936	7次	10号竪穴	壁				ﾅﾃ	沼状突帯	少	少		多			10号住
第21図	937	7次	10号竪穴	壁	14.4	4.5+α		口ﾅﾃ	口ﾅﾃ　沈線	多	多		多			10号住
第21図	938	7次	10号竪穴	壁	(15.8)	3.3+α		ﾅﾃ	ﾅ&ﾅ　ﾅﾃ	多	少					10号住
第21図	939	7次	10号竪穴	壁		4.1+α		撫縦・細沈突帯	こぶし状突起	多	多	多	多			10号住
第21図	940	7次	10号竪穴	壁				口ﾅﾃ	工条の細沈突帯		少		少			10号住
第21図	941	7次	10号竪穴	壁		4.5+α	6.2	ﾅﾃ	ﾅ方向の口ﾅ	多	多	少	多			10号住
第21図	942	7次	10号竪穴	壁		5.5+α	6.3	撫縦	撫縦	多	多	多	多			10号住
第21図	943	7次	10号竪穴	壁		5.0+α	5.1	ﾅﾃ　指圧痕　穿孔	ﾅ方向の口ﾅ　穿孔　口ﾅﾃ	多	少	少	多			10号住
第21図	944	7次	10号竪穴	壁		2.0+α	4.7	指圧ﾅﾃ・ﾅﾃ	赤褐色～明茶褐色	多	多		多			10号住
第21図	945	7次	10号竪穴	鉢	(14.2)			ﾅﾃ	ﾅﾃ		少					10号住
第21図	946	7次	10号竪穴	高坏		2.4+α		ﾅﾃ・細縦	ﾅﾃ・細縦	多	多		少			10号住
第21図	952	7次	11号竪穴	壁		7.0+α		ﾅﾃ	M字状沼突帯　口ﾅﾃ	多	多	多	多			11号住
第21図	953	7次	11号竪穴	壁		2.7+α		ﾅﾃ　指圧痕	ﾅﾃ　指圧痕	多	多	多	少			11号住
第21図	954	7次	11号竪穴	壁		6.6+α		ﾅﾃ	口ﾅﾃ　ﾅﾃ　沼状突帯　浮文	少	多	多	多			11号住
第21図	955	7次	11号竪穴	壁				口ﾅﾃ	口ﾅﾃ　細沈突帯	多	多		多		11号住　上部帯　上段	
第21図	956	7次	11号竪穴	壁				口ﾅﾃ	細沈突帯　ﾅ方向の口ﾅ	少	多		多		11号住　上部	
第21図	957	7次	11号竪穴	壁				口ﾅﾃ	口ﾅﾃ　ﾅ方向の口ﾅ	少	少		少		11号住上部	
第21図	958	7次	11号竪穴	鉢	31.+α	2.5		指圧痕・撫縦・波線ﾅﾃ	ﾅﾃ	少	多	多			11号住上部	
第21図	959	7次	11号竪穴	高坏	(14.2)	7.8+α		口ﾅﾃ　工具ﾅﾃ	口ﾅﾃ　工具ﾅﾃ	多	多		多		11号　上部	
第21図	960	7次	11号竪穴	鉢口縁		11.4+α		撫縦	撫縦	多	多				11号住上部	
第21図	961	7次	11号竪穴	高坏	(18.2)	6.7+α		撫縦	ﾅ&ﾅ方向の口ﾅ	多	少		多		11号住	
第21図	962	7次	11号竪穴	鉢		4.8+α		ﾅﾃ	口ﾅ・口ﾅﾃ	少	多	少	少		11号住	
第21図	963	7次	11号竪穴	壁		4.2+α		口ﾅ	口ﾅ	多	少	少	多		11号住	
第21図	964	7次	11号竪穴	高坏?		4.4+α		撫縦	ﾅﾃ	少	多	少	多		11号住	
第21図	965	7次	11号竪穴	こぶし状		3.8+α		ﾅﾃ	ﾅﾃ	少			少		11号住	
第21図	966	7次	11号竪穴	須恵器杯身	(11.8)	3.3+α		ﾅﾃ	口ﾅﾃ　ﾅ方向ﾅ　ﾅ	少	少	少	多		11号住	
第21図	967	7次	11号竪穴	須恵器杯身	(12.0)	2.8+α		口ﾅﾃ	口ﾅﾃ　ﾅ方向ﾅ　ﾅ	少	多	少	多		11号住	
第21図	968	7次	11号竪穴	須恵器高坏	(12.0)	7.5+α		口ﾅﾃ　綾巾痕	口ﾅﾃ　綾巾		多	多	多		11号住	
第21図	969	7次	11号竪穴	須恵器壺		5.6+α		口ﾅﾃ	口ﾅﾃ　文様あり	多	少	多	多		11号住	
第21図	970	7次	11号竪穴	須恵器壺		6.9+α		口ﾅ&ﾅ　文様不鮮明	ﾅﾃ	多	少	多			11号住	
第21図	971	7次	11号竪穴	須恵器鉢底				ﾅﾃ	ﾅ&ﾅ	少	少	多			11号住	
第21図	977	7次	12号竪穴	壁		3.3+α		口ﾅﾃ	波状文　口ﾅﾃ	多	少	多	多		12号住	
第21図	978	7次	12号竪穴	壁		3.0+α		沼状突帯・口ﾅﾃ・ﾅ方向の口ﾅ	撫縦	多	多	多	多		12号住	
第21図	979	7次	12号竪穴	壁		4.2+α		ﾅﾃ	口ﾅﾃ　ﾅﾃ　細沈突帯	多	多	多	多		12号住	
第21図	980	7次	12号竪穴	壁		4.0+α		撫縦	撫縦　細沈突帯	多	多	多	多		12号住	
第21図	981	7次	12号竪穴	壁		4.4+α		細沈突帯・ﾅ方向の口ﾅ	こぶし状突起	多	多	多	多		12号住	
第21図	982	7次	12号竪穴	壁		3.0+α		撫縦	撫縦	多	多	多	多		12住	
第21図	983	7次	12号竪穴	壁		8.0+α		ﾅﾃ　指圧痕	ﾅﾃ　黒化している　ﾅ&ﾅﾃ	多	多	多	多		12号住　P9	
第21図	989	7次	13号竪穴	壁		2.5+α		ﾅﾃ	撫縦　ﾅﾃ　細沈突帯	少	多	多	多		13号住	
第21図	990	7次	13号竪穴	壁		3.5+α	3.4	ﾅﾃ　指圧痕	撫縦	多	少	少	多		13号住	
第21図	992	7次	14号竪穴	壁		7.1+α		ﾅﾃ	口ﾅﾃ　沼状突帯	多	少	少	少		14号住	
第21図	993	7次	14号竪穴	壁		3.7+α		ﾅﾃ	ﾅﾃ　文様	少	少	少	多		14号住	
第21図	994	7次	14号竪穴	壁		3.3+α		口ﾅﾃ	ﾅﾃ　橋脚文　口ﾅﾃ	多	少	多	多		14号住	
第21図	995	7次	14号竪穴	壁		8.0+α		ﾅﾃ	口ﾅﾃ　細沈突帯　ﾅﾃ　ﾅ&	多	多	多	多		14号住	
第21図	996	7次	14号竪穴	壁		5.0+α	3.3	撫縦	撫縦	多	少	多	多		14号住	
第21図	997	7次	14号竪穴	こぶし状壁	(4.8)	3.5		撫縦	ﾅﾃ		多	少			14号住	
第21図	1002	7次	15号竪穴	壁		1.8+α		撫縦	撫縦　橋脚文	多	少	少	多		15号住　床面	
第21図	1003	7次	15号竪穴	壁		5.5+α		撫縦	細沈突帯　口ﾅﾃ	少	多	多	多		15号住　床面	
第21図	1004	7次	15号竪穴	壁		3.7+α	4.9	撫縦	撫縦	少	少	多	多		15号住　床面	
第21図	1005	7次	15号竪穴	壁台		5.8+α		撫縦	撫縦	少	少	多	多		15号住　床面	

第19表　遺物一覧表土器（9）

図版番号	遺物番号	調査区	遺構	層種	口径(残存幅)	器高(残高)	焼成様態(備考説明)	内面の文様・調整	内面の文様・調整	胎土				遺物特記
										角閃石	長石	石英	その他	
第32図	1000	7次	16号竪穴	覆	3.0+α		ﾅﾃﾞ	ｴﾐｶﾞｷ ﾅﾃﾞ	ｴﾐｶﾞｷ 文様	少	少	少	多	16号住
第32図	1010	7次	16号竪穴	覆	2.5+α		燃減	燃減 ｺﾞｷﾞ	燃減 ｺﾞｷﾞ	多	少	多	多	16号住　埋面
第32図	1011	7次	16号竪穴	覆	5.4+α		ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ ｴﾐｶﾞｷ 組目突帯 ﾊｹ	ﾅﾃﾞ ｴﾐｶﾞｷ 組目突帯 ﾊｹ	多	多	少	多	16号住
第32図	1012	7次	16号竪穴	覆	5.0+α		ﾅﾃﾞ	ｴﾐｶﾞｷ 組目突帯 ﾊｹ	ｴﾐｶﾞｷ 組目突帯 ﾊｹ	多	多	少	少	16号住
第32図	1013	7次	16号竪穴	覆	7.8+α	(6.4)	燃減	燃減 ｴﾐｶﾞｷ ﾊｹ	燃減 ｴﾐｶﾞｷ ﾊｹ	多	少	多	少	16号住　埋面
第32図	1015	7次	17号竪穴	覆	3.7+α		ﾅﾃﾞ	ｴﾐｶﾞｷ	ｴﾐｶﾞｷ 貼付突帯 細目	少	少		多	17号住
第32図	1016	7次	17号竪穴	覆	3.0+α		ﾅﾃﾞ	ｴﾐｶﾞｷ	ｴﾐｶﾞｷ 組目突帯	少	多	多	多	17号住
第32図	1017	7次	17号竪穴	覆	2.3+α		ｴﾐｶﾞｷ	ｴﾐｶﾞｷ	ｴﾐｶﾞｷ	少		少	少	17号住　Pit
第32図	1018	7次	18号竪穴	覆	3.1+α		ｴﾐｶﾞｷ	ｴﾐｶﾞｷ	ｴﾐｶﾞｷ	少	少		少	18号住
第32図	1019	7次	18号竪穴	覆	5.7+α		ﾅﾃﾞ	ｴﾐｶﾞｷ 突帯	ｴﾐｶﾞｷ 突帯	少	少		少	18号住
第32図	1020	7次	18号竪穴	覆	4.3+α		ﾅﾃﾞ	ｴﾐｶﾞｷ ﾊｹ 組目突帯	ｴﾐｶﾞｷ ﾊｹ 組目突帯	少	少	少		18号住
第32図	1022	7次	19号竪穴	覆	3.1+α		ｴﾐｶﾞｷ	ｴﾐｶﾞｷ	ｴﾐｶﾞｷ 沈状文	多	多	多	多	19号住
第32図	1023	7次	19号竪穴	覆	3.0+α		ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ 突帯	ﾅﾃﾞ 突帯	少	少	少		19号住
第32図	1024	7次	19号竪穴	覆	(11.1)	2.8+α	ｴﾐｶﾞｷ	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ 円形貼付文	少	少		少	19号住床内　西側
第32図	1025	7次	19号竪穴	覆	(16.1)	3.1+α	ｴﾐｶﾞｷ	ｴﾐｶﾞｷ	ｴﾐｶﾞｷ	少	少	少		19号住
第32図	1026	7次	19号竪穴	覆	3.6+α		ﾅﾃﾞ	ｴﾐｶﾞｷ	ｴﾐｶﾞｷ 組目突帯	多	多	少	少	19号住
第32図	1027	7次	19号竪穴	覆	2.9+α		ｴﾐｶﾞｷ	ｴﾐｶﾞｷ	ｴﾐｶﾞｷ 突帯	少	少	少		19号住
第32図	1028	7次	19号竪穴	覆	4.7+α	(7.9)	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	多	多	多	多	19号住
第32図	1029	7次	19号竪穴	鉢	4.9+α		ﾅﾃﾞ	指圧痕	ﾅﾃﾞ	少	少		多	19号住
第32図	1035	7次	20号竪穴	覆	20.5+α		ｴﾐｶﾞｷ	組目突帯 必条	ﾅﾃﾞ	少	少	多	多	20号住ア層 Pit
第32図	1036	7次	20号竪穴	覆	3.9+α		上具痕	指圧痕	指圧痕	少	少		多	20号住
第32図	1037	7次	20号竪穴	覆	(10+α)		ｴﾐｶﾞｷ	ｴﾐｶﾞｷ	ｴﾐｶﾞｷ 組目突帯 刷目	少	少	少	少	20号住
第32図	1038	7次	20号竪穴	覆	5.1+α	(6.4)	燃減	燃減	燃減	少	少	少	少	20号住
第32図	1039	7次	20号竪穴	覆	(25.3)	4.9+α	ｴﾐｶﾞｷ	ｴﾐｶﾞｷ	ｴﾐｶﾞｷ	少	少	少	少	20号住
第32図	1041	7次	22号竪穴	覆	1.1+α		ｴﾐｶﾞｷ	ｴﾐｶﾞｷ	ｴﾐｶﾞｷ	少	少	少		23号住
第32図	1042	7次	22号竪穴	覆	3.6+α		ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	組目突帯 細目 ﾅﾃﾞ	少	少	少		23号住埋面
第32図	1043	7次	22号竪穴	覆	6.3+α		ｴﾐｶﾞｷ	ｴﾐｶﾞｷ	ｴﾐｶﾞｷ ﾊｹ 工条の組目突帯	少	少	少	少	23号住
第32図	1044	7次	22号竪穴	覆	3.5+α		ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	ｴﾐｶﾞｷ 格子目突帯	少	少	少		21号住
第32図	1045	7次	24号竪穴	覆	5.6+α		ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	ｴﾐｶﾞｷ ﾅﾃﾞ 組目突帯	少	少	少		21号住
第32図	1046	7次	24号竪穴	覆	7.2+α	5.2	上具ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ ﾅﾃﾞ 突帯	ﾅﾃﾞ ﾅﾃﾞ 突帯	少	少	少		21号住
第32図	1047	7次	24号竪穴	覆	4.3+α	5.7	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	少	少	少	少	21号住　Pit2
第32図	1048	7次	24号竪穴	覆	(14.0)	19.8	ﾅﾃﾞ方向のｹｽﾞﾒ調整・ｴﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ方向のｹｽﾞﾒ	ｴﾐｶﾞｷ・指圧痕	ｴﾐｶﾞｷ・指圧痕（円形・勾玉）ｴﾐｶﾞｷ 後の加飾文	多	多			25号住
第32図	1050	7次	25号竪穴	覆				ｴﾐｶﾞｷ ﾅﾃﾞ	ｴﾐｶﾞｷ 渦巻様波状文 ｴﾐｶﾞｷ	少	少			25号住　上層
第32図	1051	7次	25号竪穴	覆		3.9	ﾅﾃﾞ 指圧痕	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	多	多			25号住　埋面
第32図	1053	7次	25号竪穴	覆		2.8+α	ｴﾐｶﾞｷ	ｴﾐｶﾞｷ	ｴﾐｶﾞｷ	少	少	少	少	21号住　Pit
第32図	1054	7次	25号竪穴	覆	(27.6)		ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ 基材突帯 ｴﾐｶﾞｷ 渦巻目	少	少	少		25号住　埋面
第32図	1056	7次	25号竪穴	覆		(7.8)	指圧痕 横ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ+横ﾅﾃﾞ ｴﾐｶﾞｷ後ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ+横ﾅﾃﾞ ｴﾐｶﾞｷ後ﾅﾃﾞ	多	多			25号住　埋面
第32図	1057	7次	25号竪穴	覆		6.6	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ ﾅﾃﾞ	少	少			25号住　埋面
第32図	1058	7次	25号竪穴	ｴﾚﾍﾞｰﾀｰ	3.0	2.0	2.2	指圧痕	ﾅﾃﾞ	少	少			25号住　西部第上層
第32図	1059	7次	25号竪穴	鉢				ｴﾐｶﾞｷ ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ ﾅﾃﾞ方向ﾍｹﾞﾒ ｴﾐｶﾞｷ ﾅﾃﾞ	少	少			25号住　上層
第32図	1060	7次	25号竪穴	高坏				指圧痕 縦ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ ﾅﾃﾞ後ｴﾐｶﾞｷ	少	少			25号住　埋面
第32図	1067	7次	26号竪穴	覆				ﾅﾃﾞ	ｴﾐｶﾞｷ 基準文	少	少	少	少	26号住
第32図	1068	7次	26号竪穴	覆	(13.8)			ｴﾐｶﾞｷ 指圧痕後ｴﾐｶﾞｷ 上具ﾅﾃﾞ ｴﾐｶﾞｷ	ｴﾐｶﾞｷ ﾅﾃﾞ 指圧痕 基材突帯	多	多			26号住　埋面＋上層
第32図	1069	7次	26号竪穴	覆		(9.0)	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ ｴﾐｶﾞｷ ﾅﾃﾞ	多	多			26号住　埋面
第32図	1070	7次	26号竪穴	覆	(12.0)			ｴﾐｶﾞｷ 横線	ｴﾐｶﾞｷ 横線	少	多			26号住　埋面
第32図	1071	7次	26号竪穴	覆	(25.6)	5.4+α	ﾅﾃﾞ	ｴﾐｶﾞｷ ﾅﾃﾞ	ｴﾐｶﾞｷ ﾅﾃﾞ	少	少	多		26号住
第32図	1072	7次	26号竪穴	覆				ｴﾐｶﾞｷ ﾅﾃﾞ	ｴﾐｶﾞｷ ﾅﾃﾞ	少	多			26号住　埋面
第32図	1073	7次	26号竪穴	覆				ｴﾐｶﾞｷ ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ 海老型ﾍｹﾞﾒ 基材目 ﾅﾃﾞ	多	多			26号住　上層②2
第32図	1074	7次	26号竪穴	覆				ｴﾐｶﾞｷ後ｴﾐｶﾞｷ 縦ﾍｹﾞﾒ ｴﾐｶﾞｷ	ｴﾐｶﾞｷ 縦ﾍｹﾞﾒ ﾅﾃﾞ	多	多	多	多	26号住　上層
第32図	1075	7次	26号竪穴	覆	5.6+α	(7.6)	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ ｴﾐｶﾞｷ ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ ｴﾐｶﾞｷ ﾅﾃﾞ	少	少		多	26号住
第32図	1076	7次	26号竪穴	覆		(14.6)	指圧痕 ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ 指圧痕 ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ 指圧痕 ﾅﾃﾞ	多	多			26号住　埋面
第32図	1077	7次	26号竪穴	ｴﾚﾍﾞｰﾀｰ	4.5+α	3.0	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ 指圧痕	ﾅﾃﾞ 指圧痕	少	少		少	26号住
第32図	1078	7次	26号竪穴	高坏				ﾅﾃﾞ 横ｴﾐｶﾞｷ ﾅﾃﾞ	ｴﾐｶﾞｷ ﾅﾃﾞ ｴﾐｶﾞｷ ﾅﾃﾞ	多	多			26号住　上層
第32図	1080	7次	27号竪穴	覆		3.0+α	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ					27号住
第32図	1081	7次	27号竪穴	覆	(20.4)	3.7+α	ｴﾐｶﾞｷ		沈状文 ｴﾐｶﾞｷ	少			少	27号住
第32図	1082	7次	27号竪穴	覆		7.0+α	ﾅﾃﾞ 指圧痕	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ ｴﾐｶﾞｷ 突帯 沈文	少	少	少	多	27号住
第32図	1083	7次	27号竪穴	覆		5.1+α	(6.6)	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	少	少	少	多	27号住
第32図	1084	7次	27号竪穴	鉢		9.3+α	ﾅﾃﾞ4 ﾅﾃﾞ 指圧痕	ﾅﾃﾞ	上具ﾅﾃﾞ	少	少	少		27号住上層
第32図	1085	7次	27号竪穴	鉢	(11.2)	10.8+α	ﾍｹﾞﾒ4	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	少	少	少	多	27号住
第32図	1086	7次	27号竪穴	高坏		5.0+α	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	多	少			27号住
第32図	1087	7次	27号竪穴	高坏		2.3+α	9.0	ﾅﾃﾞ		少	少		多	27号住
第32図	1087	7次	29号竪穴	覆	(27.6)	4.7+α		燃減にて不明	燃減にて不明	少	多		多	29号住西側中央部
第32図	1088	7次	29号竪穴	覆				燃減にて不明	燃減にて不明	多	少	多	少	29号住西側中央部
第32図	1089	7次	29号竪穴	覆		5.0+α	(7.0)	刷毛	ﾅﾃﾞ 横ﾍｹﾞﾒ ﾅﾃﾞ	少	多			29号住
第32図	1100	7次	29号竪穴	覆		5.0+α	1.6	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	多	多		少	29号住
第32図	1101	7次	29号竪穴	覆				燃減にて不明	ｴﾐｶﾞｷ 組み目突帯 ﾅﾃﾞ+α	少	多	少	多	29号住西側中央部
第32図	1102	7次	29号竪穴	覆				指圧痕 ﾅﾃﾞ	ｴﾐｶﾞｷ 横工条の組目突帯		多		多	29号住
第32図	1103	7次	29号竪穴	鉢				ﾅﾃﾞ	燃減 基材突帯	少	多		多	29号住
第32図	1104	7次	29号竪穴	覆		3.7+α	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	ｴﾐｶﾞｷ ﾅﾃﾞ	少	少		少	29号住
第32図	1105	7次	29号竪穴	覆				燃減	燃減	多	多	多	少	29号住
第32図	1106	7次	29号竪穴	覆				燃減	燃減		多	多	多	29号住
第32図	1107	7次	29号竪穴	高坏				ｴﾐｶﾞｷ	ｴﾐｶﾞｷ	少	多			29号住西側中央部
第32図	1108	7次	29号竪穴	覆		3.5+α	(7.0)	ﾅﾃﾞ		少	多			29号住
第32図	1109	7次	29号竪穴	覆		4.9+α	5.0	ﾅﾃﾞ 指圧痕	燃減	多		多	少	29号住
第32図	1110	7次	29号竪穴	蓋の把手		4.5+α		ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	多	多		多	29号住
第32図	1111	7次	1号上層	覆		3.9+α		ｴﾐｶﾞｷ・組目突帯・ﾍｹﾞﾒ	ｴﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	少	多	多	多	上層1
第32図	1115	7次	1号上層	覆		6.4+α		ｴﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ・組目突帯	ﾅﾃﾞ・ｴﾐｶﾞｷ	多	多	多	多	上層1
第32図	1116	7次	1号上層	覆		4.8+α		ｴﾐｶﾞｷ・組目突帯・ﾍｹﾞﾒ	ﾅﾃﾞ・ｴﾐｶﾞｷ	多	多	多	多	上層1
第32図	1117	7次	1号上層	覆		5.0+α	6.0	ﾍｹﾞﾒ・ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	少	多	多	多	上層1
第32図	1118	7次	1号上層	覆		3.0+α	5.4	ｴﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	燃減		多	多	多	上層1　上層
第32図	1119	7次	2号上層	覆		9.6+α		ﾅﾃﾞ・ｴﾐｶﾞｷ	工条・ﾅﾃﾞ	多	多	多	多	上層2　第1群上器上層
第32図	1120	7次	2号上層	敲石器		7.2+α		ｴﾐｶﾞｷ・M字突帯	燃減	少	少	多	多	上層2　第1群上器上層
第32図	1121	7次	2号上層	覆	(14.0)	3.6+α		工条・ﾅﾃﾞ	ｴﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ・指圧痕	多	多	多	多	上層2　北側
第32図	1122	7次	2号上層	覆		6.3+α		燃減	ﾅﾃﾞ	多	多	多	多	上層2　第2上器群北側
第32図	1123	7次	2号上層	覆		3.8+α		ｴﾐｶﾞｷ・燃減	ｴﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	多	多	多	多	上層2　北側
第32図	1124	7次	2号上層	覆		5.9+α		ｴﾐｶﾞｷ・燃減	ｴﾐｶﾞｷ・燃減	多	多	多	多	上層2　北側
第32図	1125	7次	2号上層	覆	(22.0)			ｴﾐｶﾞｷ・基材突帯後ｴﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ+ｽﾀﾝﾌﾟ	ｴﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	多	多		多	上層2
第32図	1126	7次	2号上層	覆	(29.8)	6.6+α		ｴﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ+ｽﾀﾝﾌﾟ	ｴﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	多	多	多	多	上層2
第32図	1127	7次	2号上層	覆		7.2+α		ｴﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ+ｽﾀﾝﾌﾟ	ｴﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	少	多	少	少	上層2
第32図	1128	7次	2号上層	覆		5.2+α		ｴﾐｶﾞｷ・組目突帯・燃減	燃減	多	多	多	多	上層2　北側
第32図	1129	7次	2号上層	覆		5.9+α		ｴﾐｶﾞｷ・組目突帯・ﾅﾃﾞ	ｴﾐｶﾞｷ・指圧痕・上具ﾅﾃﾞ	多	多	多	多	上層2　北側
第32図	1131	7次	2号上層	覆		9.1+α	6.0	燃減	燃減	多	多	多	多	上層2　南側
第32図	1132	7次	2号上層	高坏		5.2+α		ｴﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ・組目突帯	ｴﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	少	多	多	多	上層2　北側
第32図	1133	7次	2号上層	舞台鉢		4.8+α	(12.3)	ﾅﾃﾞ・ｴﾐｶﾞｷ	ﾅﾃﾞ	多	多		多	上層2
第32図	1134	7次	2号上層	舞台鉢		5.9+α	5.5	上具ﾅﾃﾞ・指圧痕	上具ﾅﾃﾞ・指圧痕・ﾅﾃﾞ	多	多	少	少	上層2
第32図	1135	7次	3号上層	覆		3.9+α		基材突帯後ｴﾐｶﾞｷ・浮文貼付	ﾅﾃﾞ	多	多	多	多	上層3
第32図	1136	7次	3号上層	覆	(18.0)	21+α		ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	多	多	多	多	上層3
第32図	1137	7次	3号上層	覆		3.7+α		ｴﾐｶﾞｷ・基材突帯後ｴﾐｶﾞｷ・組目	ﾅﾃﾞ	少	少		少	上層3

第 26 表　遺物一覧表土器（10）

図版番号	遺物番号	調査区	遺構	器種	口径（残存値）	器高（残存値）	底部径（接地面大径）	外面の文様・調整	内面の文様・調整	角閃石	黒雲母	石英	長石	その他	遺物注記
										胎土					
第26図	1139	7次	3号土坑	壺	23.4	10.6		ナデ	ナデ	多	多	少	多		土坑3
第26図	1140	7次	4号土坑	壺	8.1	―		ナデ・底風文	ナデ	多	多		多		土坑11A
第26図	1141	7次	4号土坑	壺	10.6			底風文	ナデ	少	多	多			土坑4C
第26図	1142	7次	4号土坑	壺	10.6			底風文	ナデ	少	多	少			土坑4C
第26図	1143	7次	4号土坑	壺	7.4	7.2		ヘラ方向のハケ目ハケ目ナデ	ハケ目上長・ナデ	多	多	多	多		土坑4A
第26図	1144	7次	4号土坑	壺	6.8	※	※	ナデ（摩滅）	ナデ（摩滅）	多	多		多		土坑14A
第26図	1145	7次	4号土坑	壺	5.4			ヨコナデ・ヘラ方向のハケ	ヨコナデ・ナデ	少	多	少	多		土坑4C
第26図	1146	7次	4号土坑	壺	8.0	+		摩滅・細目突帯（立ち）	摩滅		多	多			土坑4C
第26図	1147	7次	4号土坑	壺	4.4	+		ヨコナデ 後細目・細目突帯・ヨコナデ 後細目	ヨコナデ・ナデ	多	多		多		土坑4A
第26図	1148	7次	4号土坑	壺	4.4	+		ヨコナデ 後ケズリ突帯・ナデ方向のハケ（摩滅）	ハケ後ナデ・指圧痕		少	多	少		土坑4A
第26図	1149	7次	4号土坑	壺	6.0	+		ヨコナデ・細目突帯・ナデハケ	ヨコナデ・ナデ・指圧痕	少	多	少			土坑4C
第26図	1150	7次	4号土坑	壺	8.7	+		ヨコナデ・粘土突帯	ヨコナデ・ナデ	少	多	少			土坑4C
第26図	1151	7次	4号土坑	壺	7.6	+	6.0	ナデ	ナデ	多	多		多		土坑4C
第26図	1152	7次	4号土坑	鉢	(17.0)	3.6	+	ヨコナデ 後風縄文 後・ヨコナデ	ヨコナデ・ヘラ方向ヨコナデ・ヨコナデ	少	多		少		土坑4B
第26図	1153	7次	4号土坑	台付鉢		8.3	+	(脚部) ナデ・ナデ方向のハケ目ナデ	ナデ・ハケ目			多	多		土坑4C
第26図	1154	7次	4号土坑	台付鉢脚部		7.0	+	(12.0) ヨコナデ・ナデ方向のハケ目ナデ	ヨコナデ	多	多	多	多		土坑4B
第26図	1155	7次	4号土坑	コップ型土器（注口）		5.0	+	ヨコナデ（摩滅）	ナデ	多	多	多	多		土坑4B
第26図	1160	7次	5号溝ロ4	壺	23.4	23.0	7.5	ヘラ・ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ・ハケ目ナデ	多	多	少			4号土坑 A 第6Pit
第26図	1161	7次	5号溝ロ4	壺		6.1	+	8.0 ナデ・ナデ・ヨ風縄	ナデ	多	多	多	多		土坑5A・第6Pit
第26図	1164	7次	5号土坑	壺		6.0	+	底付壺風文ナデ・ヨコナデ ヨ	ナデ・縦圧	少			多		土坑5
第26図	1165	7次	5号土坑	壺		(15.4)	4.9	+	ナデ	多	多	多	多		土坑5
第26図	1166	7次	5号土坑	壺	(14.6)	5.2	+	ヨコナデ・ヘラ	ヨコナデ・指圧痕のちナデ	多	多		多		土坑5
第26図	1167	7次	6号土坑	壺		5.3	+	※	ナデ方向のハケ目ナデ・ナデ	工風縄・ナデ	多		多		土坑6B
第26図	1168	7次	6号土坑	壺		11.6	+	ヨコナデ・ナデ・ナデ・ヨコナデ・細目突帯	ヨコナデ（摩滅）	少	少	少	多		土坑6A
第26図	1169	7次	6号土坑	壺		3.7	+	ヨコナデ・粘土突帯	ヨコナデ・ハケ目	ヨコナデ・ナデ	少	少			土坑6B
第26図	1170	7次	6号土坑	壺		2.5	+	ヨコナデ・粘土突帯	ヨコナデ・ハケ目	ヨコナデ	少				土坑6A
第26図	1171	7次	6号土坑	壺		5.0	+	刺目口縁・細目突帯・ヨコナデ・ナデ方向のハケ目	指圧痕・ナデ	多	少	少	多		土坑A6
第26図	1172	7次	6号土坑	壺		1.8	+	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ			少			土坑6B
第26図	1173	7次	6号土坑	小型壺	(26.0)	6.8	+	ヨコナデ・ナデ・ヨコナデ・ナデ・ヨコナデ・底風文	ヨコナデ・ナデ	少	少	少	少		土坑6A
第26図	1174	7次	6号土坑	壺		5.0	+	(5.9) ナデ	ナデ	指圧痕のちナデ	少	少	少		土坑6A
第26図	1175	7次	6号土坑	甕		3.0	+	底平風付底面中心のちナデ ふに一分元	ナデ		多	少	多		土坑6B
第26図	1176	7次	6号土坑	壺	(15.7)	12.0	+	ヨコナデ（摩滅）ヨコナデ（摩滅）ヨコナデ（風縄文）不明（摩滅）		多	少	少	多		土坑6B
第26図	1180	7次	7号土坑	壺		3.9	+	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	多	多		多		土坑7
第26図	1181	7次	7号土坑	壺		2.8	+	ヨコナデ 後細目・細目突帯 後ヨコナデ のち細目	ナデ	多	多		多		土坑7
第26図	1182	7次	7号土坑	壺		5.2	+	6.3 ヨコナデ・ナデ	ナデ	少	多		多		土坑7
第26図	1184	7次	8号土坑	壺		8.2	+	底風文	ナデ	少	少	少	少		土坑8・B4
第26図	1185	7次	8号土坑	壺		5.5	+	ヨコナデ・ハケ目ケズリ・竹管文・細目突帯	ハケ	少	少	少	少		土坑8
第26図	1186	7次	8号土坑	壺		3.6	+	ヨコナデ・細目突帯	ヨコナデ	少	少	少	少		土坑8
第26図	1187	7次	8号土坑	壺		2.1	+	ヨコナデ・ハケ・細目突帯	ヨコナデ	多	多	多	少		土坑8
第26図	1188	7次	8号土坑	壺		5.6	+	ヨコナデ・ナデ・細目突帯	ヨコナデ・ナデ	少	少	少	少		土坑8
第26図	1189	7次	8号土坑	壺		7.2	+	ヨコナデ・細目突帯	ヨコナデ・ナデ	少	少	少	少		土坑8
第26図	1190	7次	8号土坑	壺		5.2	+	ナデ・指圧痕	ナデ・指圧痕	少	少		少		土坑8
第26図	1197	7次	9号土坑	壺		1.8	+	ヨコナデ	ヨコナデ	少	少	多	少		土坑9
第26図	1198	7次	9号土坑	壺		2.2	+	ヨコナデ・竹管文	ヨコナデ・竹管文	少	少	少	少		土坑9
第26図	1199	7次	9号土坑	壺		6.0	+	ヨコナデ・粘土突帯	ヨコナデ	少	少	少	少		土坑9
第26図	1200	7次	9号土坑	壺		3.6	+	ナデ・ヨコナデ	ナデ	少	少	少	少		土坑9
第26図	1201	7次	9号土坑	壺		3.6	+	6.7 ヨコナデ・ナデ	ナデ	少	少	少	少		土坑9
第26図	1202	7次	9号土坑	壺		4.1	+	4.5 ナデ	ナデ	多	多	少	多		土坑9
第26図	1203	7次	9号土坑	壺		3.2	+	摩滅	摩滅	多	多		多		土坑9
第26図	1204	7次	9号土坑	壺		5.7	+	ヨコナデ・ナデ・細目突帯	ヨコナデ・ナデ	少	少	少	少		土坑9
第26図	1205	7次	9号土坑	壺		5.1	+	ヨコナデ・細目突帯	ナデ	少	少		少		土坑9
第26図	1206	7次	9号土坑	壺		2.9	+	6.9 ナデ・ヨコナデ	ナデ	少	少	少	少		土坑9
第26図	1207	7次	9号土坑	壺		8.1	+	ヨコナデ・竹管文	ヨコナデ	少	少	少	少		土坑9
第26図	1208	7次	9号土坑	小型壺		4.7	+	ナデ・指圧痕	ナデ・指圧痕	少	多		少		土坑9
第26図	1211	7次	11号土坑	壺		2.0	+	ヨコナデ	ヨコナデ	少	多		多		土坑11
第26図	1212	7次	11号土坑	壺		5.7	+	(11.4) ヨコナデ	粘土方向のナデ・ヨコナデ	多	少		多		土坑11
第26図	1213	7次	11号土坑	壺		6.2	+	ナデ・ヨコナデ・細目突帯	ナデ		少	多	多		土坑11
第26図	1214	7次	11号土坑	壺		4.0	+	ナデ・ヨコナデ	ヨコナデ・摩滅	少	少		多		土坑11
第26図	1215	7次	11号土坑	壺		4.8	+	(5.8) ナデ・ナデ	ナデ	多	少		多		土坑11
第26図	1216	7次	11号土坑	高坏		2.5	+	ナデ	ヨコナデ・ナデ		多	多	多		土坑11
第26図	1217	7次	12号土坑	壺		2.7	+	ナデ・ヨコナデ・細目突帯	ヨコナデ			少			土坑12
第26図	1218	7次	12号土坑	壺		3.3	+	5.6 ナデ	ナデ	少	多		多		土坑12
第26図	1220	7次	13号土坑	壺		5.2	+	ヨコナデ・ナデ・ヨコナデ・ヘラ状ナデ	工事痕ナデ・ヨコナデ・ヘラ状ナデ	多	多		多		土坑13
第26図	1221	7次	13号土坑	壺		6.0	+	ヨコナデ・ナデ・ヘラ状ナデ 後風文・ハケ目ナデ	ナデ・ヨコナデ・ヘラ状ナデ		少	少	多		土坑13
第26図	1222	7次	13号土坑	壺		5.5	+	ヨコナデ後風縄文・ヘラ状ナデ	ナデ・ヨコナデ・ヘラ状ナデ		少		多		土坑13
第26図	1223	7次	13号土坑	壺		5.3	+	ヨコナデ・細目突帯・沈線文	ヨコナデ	多	少		少		土坑13
第26図	1224	7次	13号土坑	壺		3.6	+	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	多	少		少		土坑13
第26図	1225	7次	13号土坑	壺		5.3	+	ヨコナデ	ヨコナデ	多	少		少		土坑13
第26図	1226	7次	13号土坑	壺		6.5	+	ナデ・ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	少	少		少		土坑13
第26図	1227	7次	13号土坑	壺		5.6	+	ヨコナデ	ヨコナデ	多	少		少		土坑13
第26図	1228	7次	13号土坑	壺		5.2	+	ヨコナデ・ナデ方向のハケ	ヨコナデ	多	少		多		土坑13
第26図	1229	7次	13号土坑	壺	(25.2)	6.6	+	細目突帯・ナデ方向のハケ	粘土方向のハケ		多	多	少		土坑13
第26図	1230	7次	13号土坑	壺		5.8	+	ナデ・ヨコナデ・細目突帯	ヨコナデ・ナデ・ヨコナデ		少	多	少		土坑13
第26図	1231	7次	13号土坑	壺		5.0	+	ヨコナデ・細目突帯	摩滅		多	多			土坑13B
第26図	1232	7次	13号土坑	壺		5.0	+	ナデ・ヨコナデ・細目突帯	ナデ・ヨコナデ	多	少		少		土坑13
第26図	1233	7次	13号土坑	壺		6.6	+	ナデ・ヨコナデ・細目突帯	ナデ・ヨコナデ	多	少		少		土坑13
第26図	1234	7次	13号土坑	壺		5.5	+	ナデ・ヨコナデ・細目突帯	ナデ・ヨコナデ	多	多		多		土坑13
第26図	1235	7次	13号土坑	壺		6.4	+	(7.0) ナデ 後ヘラ状ヘラ・ナデ	ナデ		少		少		土坑13
第26図	1236	7次	13号土坑	壺		2.2	+	丁寧ケズリ	ナデ	少	多		多		土坑13
第26図	1237	7次	14号土坑	壺	(21.8)	15.3	+	ナデ・ヨコナデ・細目・ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ・ヘラ状ナデ		多		多		土坑14C
第26図	1238	7次	14号土坑	壺		3.3	+	7.0 ナデ	ナデ	多	少	多	多		土坑14 第6下層
第26図	1239	7次	14号土坑	鉢(注口か)		10.4	+	ナデ方向のハケ目ナデ	ナデ	少	少	少	少		土坑14A
第26図	1241	7次	16号土坑	壺		7.5	+	ヨコナデ・細目突帯・ナデ方向のハケ	ヨコナデ・横方向のハケ目ナデ	少	少	多	多		土坑16
第26図	1242	7次	16号土坑	壺		7.7	+	細目突帯・ナデ方向のハケ	ナデ・指圧痕	多	多	多	多		土坑16Pit No.1
第26図	1243	7次	16号土坑	壺		4.2	+	ヨコナデ・細目突帯	ヨコナデ	少	多	多	多		土坑16
第26図	1244	7次	16号土坑	壺		5.0	+	7.8 ナデ	ナデ						土坑16Pit No.2
第26図	1245	7次	16号土坑	壺		4.8	+	(8.0) ナデ	ナデ	多	多	多	多		土坑16
第27図	1248	7次	17号土坑	鉢	(14.0)	9.0	+	細目・細目突帯・不定方向のハケ	粘土方向のハケ目ナデ	多	多	多	多		土坑17・ZP2
第27図	1249	7次	17号土坑	壺		7.5	+	細目突帯	縦圧	多	多	多	多		土坑17
第27図	1250	7次	17号土坑	壺		5.2	+	9.0 ナデ方向のハケ・ナデ	ナデ	多	多	多	多		土坑17
第27図	1251	7次	17号土坑	壺		10.0	+	8.0 ナデ・ナデ・ヨコナデ	ナデ	多	多		多		土坑17・ZP
第27図	1253	7次	18号土坑	壺	(16.2)	5.9	+	ナデ 後ナデ のハケ	ナデ	多	多		少		土坑18
第27図	1254	7次	18号土坑	壺	(17.1)	14.7	+	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	多	多		少		土坑18B
第27図	1255	7次	18号土坑	小型壺		6.5	+	焼成・圧痕付	ナデ	少	少	多	多		土坑18
第27図	1256	7次	18号土坑	壺	(15.6)	12.7	+	ヨコナデ・ナデ方向のハケ	ヨコナデ・ナデ方向のハケ	多	多		少		土坑18
第27図	1257	7次	18号土坑	壺		8.3	+	ヨコナデ・細目突帯・工具ナデ・ナデ方向のハケ	ヨコナデ・ナデ方向のハケ	多	多		多		土坑18
第27図	1258	7次	18号土坑	壺		5.4	+	ナデ・細目・細目突帯・焼成の為不明	指圧痕・ナデ	多	多		多		土坑18
第27図	1259	7次	18号土坑	壺		14.5	+	ナデ・細目突帯・ナデハケ	ナデ	多	多		多		土坑18

第 21 表　遺物一覧表 土器（11）

図版番号	遺物番号	調査区	遺構	層種	口径（残存幅）	器高（残存高）	底部径（残存高・厚）	外面の文様・調整	内面の文様・調整	胎土				遺物注記
										角閃石	長石	石英	その他	
第25図	1260	7 次	18 号土器	覆		9.2+α		ｽﾀﾅﾊﾞ・細目沈線・ﾅﾃﾞﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	多	多	多	少	上段 18-B
第25図	1261	7 次	18 号土器	覆		8.8+α		摩滅・細目沒線	ﾖｺﾅﾃﾞ		多		少	上段 18
第25図	1262	7 次	18 号土器	覆		9.2+α		細目沒線・ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	ｽｽﾀﾞ		多		少	上段 18
第25図	1263	7 次	18 号土器	覆		13.2+α		ｽﾀﾅﾊﾞ・細目沒線・ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	多	多		多	上段 18-B
第25図	1264	7 次	18 号土器	覆		19.0+α		ﾅﾃﾞ・細目沒線・ﾎﾞﾛﾎﾞﾛ	摩滅	多	多		多	上段 18
第25図	1266	7 次	18 号土器	覆	(27.6)	9.0+α		ｽﾀﾅﾊﾞ・細目沒線・ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	多	多		多	上段 18-A
第25図	1267	7 次	18 号土器	覆	(28.0)	8.6+α		ｽﾀﾅﾊﾞ・細目沒線・ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	多	多		多	上段 18-B・上段 18
第25図	1268	7 次	18 号土器	覆	(25.0)	11.1+α		ﾅﾃﾞ・細目沒線・ﾎﾞﾛﾎﾞﾛ	ﾅﾃﾞ		?		?	上段 18
第25図	1269	7 次	18 号土器	覆	(26.6)	10.0+α		ﾖｺ方向のﾅﾃﾞ・細目沒線・ﾎﾞﾛﾎﾞﾛ	ﾖｺｽﾀﾞ	多	多		多	上段 18
第25図	1270	7 次	18 号土器	覆	(25.8)	18.5+α		ｽﾀﾅﾊﾞ・細目沒線・ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	多	多		多	上段 18・上段 18-B
第25図	1271	7 次	18 号土器	覆	(23.5)	14.5+α		ﾅﾃﾞ・突帯貼付・ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	多	多		多	上段 18-B
第25図	1273	7 次	18 号土器	覆		6.4+α	9.0	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	多	多		多	上段 18 下段
第25図	1274	7 次	18 号土器	覆		4.9+α	6.4	摩滅の為不明・ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	多	多		多	上段 18
第25図	1275	7 次	18 号土器	覆		4.5+α	(5.0)	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾅﾃﾞ	多	多		多	上段 18
第25図	1276	7 次	18 号土器	覆		5.0+α	(5.0)	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ		?		少	上段 18-A
第25図	1277	7 次	18 号土器	覆		5.0+α	7.0	ﾅﾃﾞ、打ち欠あり	ﾅﾃﾞ	多	多		多	上段 18 下段
第25図	1278	7 次	18 号土器	板		15.0+α		ﾅﾃﾞ（摩耗）	ﾅﾃﾞ（摩耗）	多	多		多	上段 18-B
第25図	1279	7 次	18 号土器	鉢	(11.2)	9.7		ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	多	多		多	上段 18-B
第25図	1280	7 次	18 号土器	高坏		8.0+α		ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ・ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	多	多		多	上段 18 下段
第25図	1281	7 次	18 号土器	高坏		5.0+α		ｽﾀﾅﾊﾞ・屈曲・ﾎﾞﾛ	ﾅﾃﾞ・ﾍﾗ状ﾎﾞﾛ	?	多	多	多	上段 18
第25図	1286	7 次	19 号土器	壺		3.9+α		重弧文	ﾅﾃﾞ	多	多		多	上段 19
第25図	1287	7 次	19 号土器	壺		5.0+α		ｽﾀﾅﾊﾞ・細目沒線・ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	多	多		多	上段 19
第25図	1288	7 次	19 号土器	壺	(30.6)	26.0+α		ｽﾀﾅﾊﾞ・細目沒線・ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	多	多		多	上段 19・上段 19 上段
第25図	1289	7 次	19 号土器	壺		5.0+α	6.0	底部	ﾅﾃﾞ	多	多		多	上段 19
第25図	1290	7 次	19 号土器	壺		5.7+α	(7.0)	ﾅﾃﾞﾅﾃﾞ・摩滅・ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	多	多		多	上段 19
第25図	1291	7 次	19 号土器	小型壺		3.7+α		ｽﾀﾅﾊﾞ・突帯・ﾅﾃﾞ	ｽﾀﾅﾊﾞ・突帯・ﾅﾃﾞ	?	?		多	上段 19
第25図	1292	7 次	19 号土器	壺		3.2+α	(29.6)	ｽﾀﾅﾊﾞ・ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	ｽﾀﾅﾊﾞ		?		?	上段 19
第25図	1294	7 次	20 号土器	壺		7.0+α		ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ		?		?	上段 20
第25図	1295	7 次	20 号土器	壺		5.5+α		ﾅﾃﾞ・細目・細目沒線・不定方向のﾎﾞﾛ	ﾅﾃﾞ	?	?		?	上段 20
第25図	1296	7 次	20 号土器	壺		8.8+α		ｽﾀﾅﾊﾞ・細目沒線・ﾅﾃﾞ・ﾖｺのﾎﾞﾛ	ﾅﾃﾞ	多	多		?	上段 20
第25図	1297	7 次	20 号土器	壺		6.0+α		ｽﾀﾅﾊﾞ・細目沒線・ﾎﾞﾛﾎﾞﾛ・ﾎﾞﾛﾎﾞﾛ	ｽﾀﾅﾊﾞ・ﾅﾃﾞﾅﾃﾞ				?	上段 20
第25図	1298	7 次	20 号土器	壺		6.0+α	(8.8)	工具ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	?			?	上段 20
第25図	1299	7 次	20 号土器	高坏?		3.5+α		摩滅	ﾅﾃﾞ・摩滅	多	多		?	上段 20
第25図	1302	7 次	21 号土器	壺		3.3+α		重弧文	ﾖｺ方向のﾅﾃﾞ ｷ		?		多	上段 21
第25図	1303	7 次	21 号土器	壺		7.7+α		ｽﾀﾅﾊﾞ・ﾎﾞﾛﾎﾞﾛ	ｽｽﾀﾞ		?		?	上段 21
第25図	1304	7 次	21 号土器	壺		9.9+α		ｽﾀﾅﾊﾞ・ﾎﾞﾛﾎﾞﾛ	ｽﾀﾅﾊﾞ	多			?	上段 21
第25図	1305	7 次	21 号土器	壺		5.7+α		ｽﾀﾅﾊﾞ・ﾎﾞﾛﾎﾞﾛ	ｽﾀﾅﾊﾞ	多			?	上段 21
第25図	1306	7 次	21 号土器	壺		3.5+α		ｽﾀﾅﾊﾞ・ﾎﾞﾛﾎﾞﾛ	ｽﾀﾅﾊﾞ	?			?	上段 21
第25図	1307	7 次	21 号土器	壺		5.6+α		ｽﾀﾅﾊﾞ・細目沒線・ﾎﾞﾛﾎﾞﾛ	ﾅﾃﾞ・ｽﾀﾅﾊﾞ	?			?	上段 21
第25図	1308	7 次	21 号土器	壺		6.6+α		ｽﾀﾅﾊﾞ・細目沒線・工具	ｽﾀﾅﾊﾞ	多			?	上段 21
第25図	1309	7 次	21 号土器	壺		7.9+α		ｽﾀﾅﾊﾞ・細目沒線・ﾎﾞﾛ方向のﾎﾞﾛ	ｽﾀﾅﾊﾞ		多		?	上段 21
第25図	1311	7 次	22 号土器	壺		6.1+α		重弧文・ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ・ﾅｺ状ﾎﾞﾛ	多	多	多	?	上段 22
第25図	1312	7 次	22 号土器	壺		5.5+α		ｽﾀﾅﾊﾞ・細目沒線	ﾅﾃﾞ・突帯	多	?	?		上段 22
第25図	1313	7 次	22 号土器	壺		5.5+α		ｽﾀﾅﾊﾞ・細目沒線	ﾅﾃﾞ ｷ	?	?	多	多	上段 22
第25図	1314	7 次	22 号土器	壺		8.0+α		ｽﾀﾅﾊﾞ・ﾅﾃﾞ・細目沒線	ｽﾀﾅﾊﾞ・ﾅﾃﾞ	?	?	多	多	上段 22
第25図	1315	7 次	22 号土器	壺		5.5+α	6.8	ﾅﾃﾞﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	多	多	多	多	上段 22
第25図	1316	7 次	22 号土器	壺		7.0+α	8.4	ﾅﾃﾞﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	多	多	多	多	上段 22
第25図	1317	7 次	22 号土器	壺	300	3.2+α		ﾍﾗ ｷ	ﾅﾃﾞ・ﾍﾗ ｷ・浮文	多	多	多	多	上段 22
第25図	1320	7 次	23 号土器	壺		3.4+α		ﾅﾃﾞ	摩滅・ﾅﾃﾞ・浮文	多	多	多	多	上段 23
第25図	1321	7 次	23 号土器	壺	(29.3)	5.0+α		ｽﾀﾅﾊﾞ・ﾍﾗ状ﾎﾞﾛ	ｽﾀﾅﾊﾞ・ﾍﾗ状ﾎﾞﾛ	多	多		多	上段 23
第25図	1323	7 次	23 号土器	壺		4.5+α	6.0	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	多	多		多	上段 23
第25図	1325	7 次	23 号土器	壺		11.4+α		ｽﾀﾅﾊﾞ・細目沒線・ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ		?		?	上段 23
第25図	1326	7 次	23 号土器	壺		3.9+α	(5.0)	ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	?	?		?	上段 23
第25図	1329	7 次	23 号土器	壺		7.8+α	6.0	ﾅﾃﾞﾅﾃﾞ・ｽﾀﾅﾊﾞ・ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	多	?		?	上段 23
第25図	1330	7 次	23 号土器	壺		3.0+α	4.0	ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	多	多		?	上段 23
第25図	1331	7 次	23 号土器	壺		4.9+α	(5.2)	ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	多	多		?	上段 23
第25図	1332	7 次	23 号土器	高坏		4.9+α		ｽﾀ ｷ・貼付突帯・突孔	ｽﾀ ｷ・ﾅﾃﾞ	?	?	多	多	上段 23
第26図	1338	7 次	24 号土器	壺		5.1+α		ｽﾀﾅﾊﾞ・細目沒線・ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	?	多	多	?	上段 24
第26図	1339	7 次	24 号土器	壺		5.7+α	底部	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	?	多	多	?	上段 24
第26図	1340	7 次	25 号土器	壺		2.0+α		重弧文	ﾅﾃﾞ	?	多	多	?	上段 25
第26図	1341	7 次	25 号土器	壺		3.1+α		ｽﾀﾅﾊﾞ・細目沒線・ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	?	?	?	?	上段 25
第26図	1345	7 次	26 号土器	壺		12.5+α		ﾅﾃﾞ・ﾍﾗ ｷ（摩滅している）・ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ・ﾍﾗ ｷ（摩滅している）	多	多	?	?	上段 26
第26図	1346	7 次	26 号土器	鉢	(25.0)	3.0		摩滅	摩滅	多	?	多	?	上段 26
第26図	1347	7 次	26 号土器	高坏		8.0+α		ﾅﾃﾞ（摩滅している）	ﾅﾃﾞ（摩滅している）	?	多	多	?	上段 26
第26図	1349	7 次	27 号土器	壺	(20.6)	3.0+α		粗いﾍﾗｹｽﾞﾘ・細目沒線	ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ・指圧痕	多	多		?	上段 27
第26図	1350	7 次	27 号土器	壺	6.0	13.7+α	6.0	外面の調整ﾅｼ・底部文・ﾎﾞﾛ状ﾎﾞﾛ方向のﾎﾞﾛ・ﾎﾞﾛ方向のﾎﾞﾛ・底部あり	ﾅﾃﾞ・工具ﾅﾃﾞ	?	?		?	上段 27
第26図	1351	7 次	27 号土器	壺		7.0+α		ﾅﾃﾞﾅﾃﾞ・ﾍﾗ ｷ・3 条の沈線	ﾅﾃﾞ	?	?		?	上段 27
第26図	1352	7 次	27 号土器	壺	(17.8)	9.5+α		ｽﾀﾅﾊﾞ・ﾍﾗ ｷの沈線・ﾎﾞﾛ	ｽﾀﾅﾊﾞ・ﾖｺ方向のﾍﾗ ｷ	?			?	上段 27
第26図	1353	7 次	27 号土器	壺		3.0+α		ﾖｺ方向のﾍﾗ ｷ・細目沒線	ﾍﾗ ｷ	?			?	上段 27
第26図	1354	7 次	27 号土器	壺		12.8+α		ｽﾀﾅﾊﾞ・細目沒線	摩滅	?	多		?	上段 27
第26図	1355	7 次	27 号土器	壺		10.9+α	(8.0)	指圧痕・摩滅	指圧痕・摩滅	多	多		多	上段 27
第26図	1356	7 次	27 号土器	壺		5.4+α	9.0	ﾅﾃﾞﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ・指ｽｼｴﾞﾘ ｷ	?	?		?	上段 27
第26図	1357	7 次	27 号土器	壺		4.5+α	8.2	ﾅﾃﾞﾍﾗ状ﾎﾞﾛ・ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ・指圧痕	?	多		多	上段 27 ﾎﾞﾛ Pa
第26図	1358	7 次	27 号土器	壺		5.6+α	7.6	指圧痕・ﾅﾃﾞ・ﾍﾗ状ﾎﾞﾛ	ﾅﾃﾞ・ﾍﾗ状ﾎﾞﾛ	?	多	?	多	上段 27
第26図	1359	7 次	27 号土器	壺		5.2+α	8.2	工具ﾅﾃﾞ・指圧痕・ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	?	?		?	上段 27
第26図	1360	7 次	27 号土器	壺	(28.6)	11.2+α		ﾅﾃﾞ・底付突帯直下ﾖｺﾅﾃﾞの凸細目・ﾎﾞﾛ	ﾅﾃﾞ方向のﾎﾞﾛ・ﾅﾃﾞ方向のﾎﾞﾛ	多	多		多	上段 27Pa
第26図	1361	7 次	27 号土器	壺		16.5+α	(17.8)	ﾅﾃﾞ・細目沒線・ﾅﾃﾞ・細目	ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	?	?	?	?	上段 27
第26図	1362	7 次	27 号土器	壺		9.2+α	(22.0)	ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ・細目沒線	指圧痕・ﾅﾃﾞ	?	多	多	多	上段 27Pa
第26図	1363	7 次	27 号土器	壺		7.9+α		ﾅﾃﾞ・細目沒線・細目	ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	?	?	?	?	上段 27
第26図	1364	7 次	27 号土器	壺		4.7+α		ﾅﾃﾞ 底部・底付突帯直下ﾖｺﾅﾃﾞの凸細目・ﾎﾞﾛ・ﾎﾞﾛ	ﾅﾃﾞ・指圧痕のたたき ｷ	?	多		多	上段 27 ﾎﾞﾛ Pa
第26図	1365	7 次	27 号土器	壺		10.2+α		ﾅﾃﾞ・ﾍﾗ状ﾎﾞﾛ・細目沒線・細目	ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	?	?	?	?	上段 27
第26図	1366	7 次	27 号土器	壺	(34.6)	10.2+α		ﾅﾃﾞ 底部・底付突帯直下ﾖｺﾅﾃﾞの凸細目・指圧痕のたたき ｷ	ﾅﾃﾞ方向のﾅﾃﾞ	?	多		多	上段 27Pa
第26図	1367	7 次	27 号土器	壺		7.9+α	(23.0)	ﾅﾃﾞ・ﾍﾗ状ﾎﾞﾛ・細目沒線・細目	ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	?	?	?	?	上段 27
第26図	1368	7 次	27 号土器	壺		5.7+α	(24.0)	ﾅﾃﾞ・細目沒線・細目	ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	?	?	?	?	上段 27
第26図	1369	7 次	27 号土器	壺		5.7+α		ﾅﾃﾞ 底部・底付突帯直下ﾖｺﾅﾃﾞの凸細目・ﾎﾞﾛ	ﾖｺ方向のﾅﾃﾞ	?	多	多	多	上段 27
第26図	1370	7 次	27 号土器	壺		8.1+α		ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ・細目沒線・細目	ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	?	?	?	?	上段 27
第26図	1371	7 次	27 号土器	壺		7.9+α	(23.2)	ﾅﾃﾞ・細目沒線・細目・ﾎﾞﾛ ｷ	ﾅﾃﾞ	?	?	?	?	上段 27
第26図	1372	7 次	27 号土器	壺		12.2+α		ﾅﾃﾞ 底部・底付突帯直下ﾖｺﾅﾃﾞの凸細目・ﾎﾞﾛ	ﾅﾃﾞ・指圧痕のたたき・ﾅﾃﾞ	?	多		多	上段 27Pa
第26図	1373	7 次	27 号土器	壺		3.0+α		細目沒線・ﾅﾃﾞ・ﾎﾞﾛ ｷ	ﾅﾃﾞ				?	上段 27
第26図	1374	7 次	27 号土器	壺		7.0+α		ﾅﾃﾞ・細目沒線・細目・ﾎﾞﾛ	ｽﾀﾅﾊﾞ・ﾅﾃﾞ	?	?	?	?	上段 27
第26図	1375	7 次	27 号土器	壺		5.7+α		ﾅﾃﾞ・細目沒線	ｽﾀﾅﾊﾞ・ﾅﾃﾞ	?	?	?	?	上段 27
第26図	1376	7 次	27 号土器	壺		7.6+α	9.6	指圧痕・ﾎﾞﾛ・ﾎﾞﾛ・ﾎﾞﾛ	ﾍﾗ状ﾎﾞﾛ	?	多	多	多	上段 27
第26図	1377	7 次	27 号土器	壺		7.3+α	9.0	ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	ﾍﾗ状ﾎﾞﾛ	?	多	多	多	上段 27
第26図	1378	7 次	27 号土器	壺		6.0+α	6.7	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	?	?	多	多	上段 27
第26図	1379	7 次	27 号土器	壺		2.7+α	7.8	ﾅﾃﾞ方向のﾎﾞﾛ	ﾅﾃﾞ	?	?		?	上段 27
第26図	1380	7 次	27 号土器	壺		7.9+α	7.6	ﾍﾗ状 ｷ	ﾅﾃﾞ	?	?		?	上段 27

第22表　遺物一覧表土器（12）

図版番号	遺物番号	調査区名	遺構	器種	口径（残存値）	器高（残存値）	底部径（残存底径）	外面の文様・調整	内面の文様・調整	角閃石	黒石	石英	その他	備考
										胎土				
第29図	1385	7次	28号土坑	壺	20.1＋α	(19.6)		ｹﾞﾀ方向のﾅﾃﾞ・光沢・不定方向のﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	多	多	多	多	上段.28
第29図	1386	7次	28号土坑	壺	2.4＋α	8.8		ﾀﾃﾅﾃﾞ・ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	少	多		多	上段.28
第29図	1387	7次	28号土坑	壺	2.6＋α	9.0	ﾅﾃﾞ（底ｹｽﾘ）ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ（底ｹｽﾘ）ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ（底ｹｽﾘ）ﾅﾃﾞ	少	多	多	多	上段.28
第29図	1388	7次	28号土坑	壺	8.0＋α	(7.6)		摩滅	摩滅	少		多		上段.28
第29図	1389	7次	28号土坑	壺	16.3＋α	8.8		ﾅﾃ方向のﾊｹ目（摩滅）	ﾊﾃﾞ（ﾅ（摩滅）	多	多	多		上段.28-E
第29図	1390	7次	28号土坑	壺	150	150＋α		摩滅・沈線	摩滅	多	少		多	上段.28
第29図	1391	7次	28号土坑	壺	4.3＋α	6.6		摩滅・細目突帯	ﾅﾃ（底ｹｽﾘ）ﾅ	多	多	多	多	上段.28-A
第29図	1392	7次	28号土坑	壺	3.7＋α			ﾖﾅﾃﾞ・細目突帯	ﾖﾅﾃﾞ	多	多	多	多	上段.28-A
第29図	1393	7次	28号土坑	壺	5.3＋α			ﾅﾃﾞ・ﾖﾅﾃﾞ	指圧痕・ﾅﾃﾞ・ﾖﾅﾃﾞ	少	多	少	多	上段.28
第29図	1394	7次	28号土坑	壺	4.2＋α			摩滅・細目突帯	摩滅	少	多		多	上段.28-A
第29図	1397	7次	30号土坑	壺	8.2＋α			ﾀﾃﾅﾃﾞ・ﾖﾅﾃﾞ・細目突帯	ﾅﾃﾞ・ﾖﾅﾃﾞ	少	少	少	多	上段.30
第29図	1398	7次	30号土坑	壺	9.2＋α			ﾀﾃﾅﾃﾞ・ﾖﾅﾃﾞ・細目突帯	ﾅﾃﾞ	少	少		多	上段.30
第29図	1399	7次	30号土坑	壺	4.2＋α			細目・細目突帯	ﾅﾃ	多	多	多	多	上段.30
第29図	1400	7次	34号土坑	壺	(150)	9.7＋α		ﾅﾃ・ﾖﾅﾃﾞ・ﾍｽｼﾞﾅﾃ	ﾅﾃ（底部分的にﾍｽｼﾞﾅﾃ）	少	多	少	多	上段.34
第29図	1401	7次	34号土坑	壺	9.5＋α	7.0	摩滅・二次被熱	摩滅	摩滅	多	少	多	多	上段.34
第29図	1406	7次	35号土坑	壺	(250)	9.5＋α		ﾀﾃﾅﾃ・ﾖﾅﾃﾞ	ﾖﾅﾃﾞ・摩滅	多	多	多	多	上段.35
第29図	1407	7次	35号土坑	高坏		9.7＋α		摩滅	摩滅	少	少	多	多	上段.35
第29図	1408	7次	37号土坑	壺	(55)	9.0＋α		ﾖﾅﾃﾞ・ﾖｺ方向のﾊｹ（ﾅ）	ﾖﾅﾃﾞ	少			少	上段.37
第29図	1409	7次	37号土坑	壺	(186)	7.2＋α		ﾖﾅﾃﾞ・ﾅﾃ方向のﾊｹ（ﾅ）	摩滅・ﾅﾃ	少		少	少	上段.37
第29図	1410	7次	37号土坑	鉢（ミニチュア）	(10.6)	188＋α	(17.1)	ﾖﾅﾃ・ﾀﾃﾅﾃ・ﾖｺ方向のﾊｹ（ﾅ）摩滅・最終突帯	ﾖﾅﾃ・ﾖｺ方向のﾊｹ（ﾅ）・工具ｴﾅﾃ	少	少			上段.37
第29図	1411	7次	37号土坑	壺		25.1＋α		不定方向のﾊｹ（ﾅ）・ﾖｺ平突帯・ﾀﾃ方向のﾊｹ（ﾅ）	ﾀﾃ方向のﾊｹ・ﾖｺ（ﾅ）		多	少	多	上段.37
第29図	1412	7次	37号土坑	壺	(162)	16.1	5.3	ﾖﾅﾃ・ﾀﾃ方向のﾊｹ（ﾅ）・ﾖｺ方向のﾊｹ（ﾅ）・ﾅﾃ	ﾖｺ方向のﾊｹ（ﾅ）	少	少			上段.37
第29図	1413	7次	37号土坑	壺		9.6＋α		ﾖｺ方向のﾊｹ（ﾅ）・ﾖﾅﾃ・複数段突帯（2条・台部）	ﾅﾃ	少	少		少	上段.37
第29図	1414	7次	37号土坑	壺	(168)	6.8＋α		台部（ﾖｺ方向のﾊｹ（ﾅ）摩滅）	ﾖﾅﾃ・ﾅﾃ	少			少	上段.37
第29図	1415	7次	37号土坑	壺	(260)	11.7＋α		ﾖﾅﾃ・ﾀﾃﾅﾃ	ﾖﾅﾃ・ﾅﾃ	多			少	上段.37
第29図	1416	7次	37号土坑	壺	(256)	10.8＋α		ﾖﾅﾃ・ﾀﾃ方向のﾊｹ	工具ｴﾅﾃ・ﾖﾅﾃ	多	少	少		上段.37
第29図	1417	7次	37号土坑	壺	(296)	15.4＋α		ﾖﾅﾃ・ﾀﾃ方向のﾊｹ	ﾖﾅﾃ・ﾅﾃ	多	少	少		上段.37
第29図	1418	7次	37号土坑	壺	(310)	6.4＋α		ﾖﾅﾃ・突帯貼付ﾊﾅﾃ	ﾅﾃ・ﾖﾅﾃ	多	多		多	上段.37
第29図	1419	7次	37号土坑	壺	(248)	9.7＋α		ﾖﾅﾃ・ﾀﾃﾅﾃ	ﾖﾅﾃ	多			少	上段.37
第29図	1420	7次	37号土坑	壺	(246)	18.1＋α		ﾀﾃﾅﾃ・細目突帯	ﾅﾃ	少			少	上段.37
第29図	1421	7次	37号土坑	壺	16.5＋α	6.0		ﾀﾃﾅﾃ	ﾅﾃ	少	少		少	上段.37
第29図	1422	7次	37号土坑	肥手付鉢	14.6	16.9	6.5	取っﾍｽｼﾞﾅﾃ・肥手２ヶ所	工具ｴﾅﾃ	多	多	多		上段.37
第29図	1425	7次	37号土坑	鉢	(194)	2.9＋α		ﾅﾃ（ｹﾞﾀ方向ﾅﾃ・ﾖｺ方向ﾅﾃ）・摩滅が著しい	ﾅﾃ・工具ｴﾅﾃ・ﾖｺ（ﾅ）	多	多	多	少	上段.37
第29図	1424	7次	37号土坑	鉢	16.4	10.6	9.4	ﾀﾃﾅﾃ・ﾀﾃﾅﾃ・ﾖﾅﾃ・ﾌﾞﾗｼｺﾞﾅﾃ	ﾅﾃ・ﾖﾅﾃ	少	少	多	多	上段.37
第29図	1425	7次	37号土坑	台付鉢		7.8＋α		突帯・ﾍｽｼﾞﾅﾃ	ﾍｽｼﾞﾅﾃ・ﾅﾃ・工具痕	多	多		多	上段.37
第29図	1426	7次	37号土坑	高坏	(270)	5.3＋α		台部（ﾖｺ方向のﾊｹ（ﾅ）摩滅）	台部（ﾖｺ方向のﾊｹ（ﾅ）摩滅）	少	少		多	上段.37
第29図	1427	7次	37号土坑	高坏	(294)	6.8＋α		台部（ﾖｺ方向のﾊｹ）	台部（ﾖｺ方向のﾊｹ・ﾖｺ）	少	少		少	上段.37
第29図	1433	7次	39号土坑	壺	(144)	8.6＋α		ﾀﾃﾅﾃ・沈線	ﾍｽｼﾞﾅﾃ	多	多		少	上段.39
第29図	1434	7次	39号土坑	壺		5.1＋α		ﾖﾅﾃ・同方文	ﾖﾅﾃ				多	上段.39
第29図	1435	7次	39号土坑	壺		4.2＋α		ﾖﾅﾃ・ﾍｽｼﾞﾅﾃ・同方文	ﾖﾅﾃ		多	少	多	上段.39
第29図	1436	7次	39号土坑	壺		4.0＋α	(9.4)	ｹﾞﾀ	ﾅﾃ（摩滅）	多	多		多	上段.39
第29図	1437	7次	39号土坑	壺		3.8＋α	(6.0)	ﾅﾃ・ﾀﾃﾅﾃ	ﾅﾃ	多	多		多	上段.39
第29図	1438	7次	39号土坑	壺		4.3＋α	6.2	ﾅﾃ・ﾍｽｼﾞﾅﾃ・ﾖﾅﾃ	ｹﾞﾀ	多	多		多	上段.39
第29図	1439	7次	39号土坑	壺	(280)	5.5＋α		ﾖﾅﾃ・ﾀﾃﾅﾃ	ﾖﾅﾃ・ﾅﾃ	少		少	少	上段.39
第29図	1441	7次	39号土坑	壺	(368)	11.4＋α		ﾖﾅﾃ・ﾀﾃﾅﾃ	ﾖﾅﾃ・ﾅﾃ	少			少	上段.39
第29図	1442	7次	39号土坑	壺	(316)	9.5＋α		ﾖﾅﾃ・ﾀﾃﾅﾃ	ﾖﾅﾃ	少			少	上段.39
第29図	1443	7次	39号土坑	壺	(308)	11.8＋α		ﾖﾅﾃ・ﾀﾃﾅﾃ	ﾖﾅﾃ・ﾅﾃ	少			少	上段.39
第29図	1444	7次	39号土坑	壺		6.9＋α		ﾀﾃﾅﾃ・ﾖﾅﾃ・細目突帯	ﾍｽｼﾞﾅﾃ	多	多	少	少	上段.39
第29図	1445	7次	39号土坑	壺		6.8＋α		ﾀﾃﾅﾃ・ﾖﾅﾃ・細目突帯	ﾅﾃ・ﾖﾅﾃ	多	多		多	上段.39
第29図	1446	7次	39号土坑	壺	166	12.0＋α		ﾀﾃﾅﾃ・ﾖﾅﾃ・細目突帯	ﾅﾃ・ﾍｽｼﾞﾅﾃ・ﾍｽｼﾞﾅﾃ	多	多		多	上段.39
第29図	1447	7次	39号土坑	壺		9.2＋α		ﾖﾅﾃ・細目突帯・ﾀﾃﾅﾃ・ﾖﾅﾃ	指圧痕・ﾀﾃﾅﾃ・ﾍｽｼﾞﾅﾃ・ﾖﾅﾃ	少	多	多	少	上段.39
第29図	1448	7次	39号土坑	壺		6.6＋α		ﾖﾅﾃ・細目突帯	工具ｴﾅﾃ	少	多	少	多	上段.39
第29図	1449	7次	39号土坑	壺		7.2＋α		ﾀﾃﾅﾃ・ﾖﾅﾃ	指圧痕・ﾅﾃ		少		多	上段.39
第29図	1450	7次	39号土坑	壺		5.4＋α		ﾀﾃﾅﾃ・ﾖﾅﾃ・細目突帯	ﾅﾃ・ﾍｽｼﾞﾅﾃ	少	少	少	少	上段.39
第29図	1451	7次	39号土坑	壺		11.0＋α	(7.2)	ﾅﾃ	ﾅﾃ	多	多		多	上段.39
第29図	1452	7次	39号土坑	壺		9.0＋α	(7.0)	ﾅﾃ	ﾅﾃ	多	多		多	上段.39
第29図	1453	7次	39号土坑	壺		5.8＋α	(7.0)	ﾅﾃ・ﾀﾃﾅﾃ	ﾅﾃ	多	多		多	上段.39
第29図	1454	7次	39号土坑	壺		7.8＋α	(7.0)	ﾅﾃ・ﾀﾃﾅﾃ	ﾅﾃ（後被熱に伴ﾋﾞﾋﾞ）	多	多		多	上段.39
第29図	1455	7次	39号土坑	高坏		4.5＋α	(12.6)	透かし・ﾀﾃﾅﾃ・ﾖｺ（ﾅ）（要検証）	透かし・ﾖﾅﾃ・ﾅﾃ	多	多		多	上段.39
第29図	1456	7次	39号土坑	高坏		5.7＋α	(16.4)	ﾅﾃ	ﾅﾃ	多	多		多	上段.39
第29図	1459	7次	40号土坑	壺		2.4＋α		ﾖﾅﾃ・ﾀﾃﾅﾃ・細線波状文	ﾖﾅﾃ・ﾖｺﾅﾃ	少	少	多	多	上段.40
第31図	1460	7次	41号土坑	壺		5.7＋α	8.0	摩滅	摩滅	多	多		多	上段.41
第31図	1461	7次	41号土坑	壺		9.0＋α		ﾅﾃ・細目突帯・ﾀﾃ方向のﾊｹ	ﾅﾃ	少	多	少		上段.41
第31図	1463	7次	42号土坑	壺		5.4＋α		ﾅﾃ・細目突帯	ﾅﾃ・指圧痕	少	多	少		上段.42
第31図	1464	7次	42号土坑	壺		6.5＋α	7.7	摩滅	摩耗痕（摩滅）	少	多	多	多	上段.42
第31図	1466	7次	45号土坑	壺		18.6＋α		重弧文・平行文・摩滅	ﾀﾃﾅﾃ・ﾅﾃ・ﾍｽｼﾞﾅﾃ	多	多	多	多	上段.45
第31図	1467	7次	45号土坑	壺	(134)	5.6＋α		ﾖﾅﾃ・沈線	ﾖﾅﾃ	少	多	多	多	上段.45
第31図	1468	7次	45号土坑	壺		8.5＋α		ﾅﾃ・細目突帯・ﾀﾃ方向のﾊｹ	ｹﾞﾀ（底部不明）	多	多	多	多	上段.45
第31図	1469	7次	45号土坑	壺	(274)	11.0＋α		細・ﾀﾃﾅﾃ・ﾖﾅﾃ	摩滅	多	多	多	多	上段.45
第31図	1470	7次	45号土坑	壺		20.8＋α		摩滅・突帯貼付	ﾅﾃ	多	多	少	多	上段.45　実測
第31図	1471	7次	45号土坑	壺	(224)	9.0＋α		ﾀﾃﾅﾃ・ﾖﾅﾃ	ﾅﾃ・ﾖﾅﾃ		少		多	上段.45
第31図	1488	7次	68号土坑	壺		7.1＋α		ﾖﾅﾃ・細目突帯・ﾀﾃ方向のﾊｹ	ﾅﾃ・工具ｴﾅﾃ	多	多			上段.68
第31図	1489	7次	68号土坑	壺	(160)	5.4＋α		ﾖﾅﾃ・ﾅﾃ・被熱ｸﾋﾞﾋﾞ（ﾀﾃﾅﾃ文様分）・ﾖﾅﾃ	ﾅﾃ	少	多	少		上段.68
第31図	1491	7次	54号土坑	壺		5.9＋α	7.8	ﾅﾃ	摩滅	多	多	多	多	1号住　上段
第31図	1492	7次	54号土坑	壺		19.5＋α		ﾅﾃ・指圧痕	摩滅	多	多	少	多	1号住　上段
第31図	1493	7次	54号土坑	壺		7.2＋α		摩滅	ﾀﾃﾅﾃ・ﾅﾃ方向ﾅﾃ・細目突帯	多	多	多	多	1号住　北東隅上段
第31図	1494	7次	54号土坑	壺		5.2＋α		ﾀﾃﾅﾃ	細目突帯・細目・ﾀﾃﾅﾃ・ﾅﾃ	少	少	多	少	1号住　北東隅上段
第31図	1496	7次	54号土坑	壺		7.2＋α		摩滅	ﾀﾃﾅﾃ・ﾅﾃ方向ﾅﾃ・細目突帯	多	多	多	多	1号住　北東隅上段
第31図	1497	7次	55号土坑	壺		8.5＋α	1.8	ﾅﾃ	ﾅﾃ方向ﾅﾃ・ﾅﾃ	少	多	少	多	1号住内　北東隅上段
第31図	1498	7次	55号土坑	壺		4.7＋α	6.6	摩滅	ﾅﾃ	多	多		多	上段.55 南
第31図	1497	7次	55号土坑	壺		3.6＋α	6.1	ﾅﾃ	ﾅﾃ	多	多		多	上段.55 南
第31図	1498	7次	55号土坑	壺		6.2＋α		ﾅﾃ・細目突帯・摩滅	ﾅﾃ・指圧痕	多	少	多	多	上段.55　南
第31図	1499	7次	55号土坑	台付鉢		11.0＋α		ﾍｽｼﾞﾅﾃ・ﾖﾅﾃ・突帯	ﾍｽｼﾞﾅﾃ・工具ｴﾅﾃ	多	多	多	多	上段.55
第31図	1500	7次	60号土坑	壺		18.7＋α	7.0	ﾅﾃ方向のﾊｹ（摩滅）	ﾅﾃ・ﾍｽﾞﾅﾃ・工具ｴﾅﾃ	多	多	多	多	上段.60　北ﾌﾟﾄ1
第31図	1501	7次	60号土坑	壺		8.0＋α	6.2	摩滅・ﾅﾃ	工具ｴﾅﾃ・指圧痕	多	多	多	多	上段.60　北ﾌﾟﾄ1
第31図	1505	7次	9号竪穴住居	壺					ﾖﾅﾃ・細目突帯・ﾀﾃ方向のﾅ	多			多	9号住　東南部覆土段
第31図	1506	7次	9号竪穴住居	壺		7.6＋α	6.1	ﾅﾃ	摩滅・ﾅﾃ	多	少	少	多	9号住　東南上段
第31図	1507	7次	9号竪穴住居	壺		4.6	5.3	ﾅﾃ	摩滅	多	少	多	多	9号住　上段
第31図	1508	7次	9号竪穴住居	蓋		2.9＋α	5.5	工具ｴﾅﾃ	ﾅﾃ	多	少		多	9号住　上段
第31図	1509	7次	2号溝	壺	(124)	8.8＋α		ﾖﾅﾃ・ﾅﾃ	摩滅	少	多	多	多	2号溝　北
第31図	1510	7次	2号溝	壺		6.2＋α		ﾖﾅﾃ・ﾍｽｼﾞﾅﾃ	ﾅﾃ	多	多		多	2号溝
第31図	1511	7次	2号溝	壺		2.5＋α		ﾖﾅﾃ・ﾍｽｼﾞﾅﾃ	ﾖﾅﾃ		多		多	2号溝
第31図	1512	7次	2号溝	壺		6.5＋α	9.8	ﾀﾃﾅﾃ・ﾍｽｼﾞﾅﾃ	ﾍｽｼﾞﾅﾃ		多		多	2号溝
第31図	1513	7次	2号溝	小壺	(196)	2.0＋α		ﾖﾅﾃ	ﾖﾅﾃ	多	多	少	多	2号溝
第31図	1514	7次	2号溝	壺		3.3＋α	3.4	指圧痕・ﾅﾃ	ﾅﾃ・ﾖﾅﾃ	多	多		多	2号溝
第31図	1515	7次	2号溝	高坏		4.0＋α		摩滅	ﾅﾃ	少	多		多	2号溝
第31図	1516	7次	2号溝	鉢（ミニチュア）		5.6＋α		ﾅﾃ・ﾖﾅﾃ	工具ｴﾅﾃ	多	多		多	2号溝

第 23 表　遺物一覧表土器（13）

図版番号	遺物番号	調査区名	遺構	層種	口径（胴径・幅）	器高（底径）	残存度（開閉度・厚さ）	外面の文様・調整	内面の文様・調整	胎土					遺物出記
										角閃石	長石	石英	雲母	その他	
第33図	1525	7 次	2 号溝	覆				ﾅﾃﾞ	沈線	多	多	多	多		2 号住
第33図	1526	7 次	2 号溝	覆				ﾅﾃﾞ	ﾅﾅ方向ﾅﾅ　平行沈線文	多	多				2 号住
第33図	1527	7 次	2 号溝	覆				ﾅﾃﾞ	貼付突帯　ﾅﾃﾞ	多	多	多			2 号住
第33図	1528	7 次	2 号溝	覆				ﾅﾃﾞ	横位突帯　刻目		多	多	多		2 号住
第33図	1529	7 次	2 号溝	覆				ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ　横位突帯		多	多	多		2 号住
第33図	1530	7 次	2 号溝	底部布目跡		1.5+α		ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ　穿孔	多	多	多	多		2 号住
第33図	1532	7 次	一括	覆		3.0+α		3ﾅ'ｲ（単位不明）・沈線文・斜位文	ﾅﾃﾞ（摩滅）	多					2 層上
第33図	1533	7 次	一括	覆	17.0	13.0+α		3ﾅﾅ'ｲ・突帯	3ﾅﾅ'	多	多		少		Pit98
第33図	1534	7 次	一括	覆		6.4+α		3ﾅﾅ'ｲ・突帯（3 条）	ﾅﾅ'		多		少		Pit12
第33図	1535	7 次	一括	覆		2.5+α		横位沈線文・円形切り	摩滅	少	少				2 層上
第33図	1536	7 次	一括	覆		28.0+α		3ﾅ'ｲ・刻目突帯	ﾊﾅ目	少	少	少	少		遺構不明
第33図	1537	7 次	一括	覆		3.0+α		ﾅﾅ' 横位沈線文	3ﾅﾅ'・3ﾅﾅ	多	少		少		中間出跡陥内
第33図	1538	7 次	一括	覆		4.9+α		3ﾅﾅ' 縦位沈線文（ﾅﾅ 本単 2 条）	3ﾅﾅ'・ﾅ方向の工具ﾅﾅ	少	少		少		中間出跡陥内
第33図	1539	7 次	一括	覆		2.0+α		3ﾅﾅ' 縦横沈線文	3ﾅﾅ'	多	多		少		中間出跡陥内
第33図	1540	7 次	一括	覆		5.3+α		重弧文	ﾅﾅ'	多	多	多	多		上馬 A 区1
第33図	1541	7 次	一括	覆		3.1+α		三角交叉貼付け長楕円ﾋﾟｱｯﾌﾟ	指圧ﾅﾅ'	少	多	少	多		北側小
第33図	1542	7 次	一括	覆		3.8+α		ﾅﾃﾞ・貼付け突帯ｰ1 ﾅﾅ三角縦位Pit9	指圧ﾅﾅ・ﾅﾅ3ﾅ	少	少		少		中間出跡陥内
第33図	1543	7 次	一括	覆		6.6+α		三角突帯貼付け長3ﾅﾅ'	ﾅﾅ'	少	少	多	多		北側小
第33図	1544	7 次	一括	覆	(38.0)	10.3+α		3ﾅﾅ'・突帯貼付・ﾅﾅ3ﾅ	ﾅﾅ'	多	多		多		6 区
第33図	1545	7 次	一括	覆	(19.2)	8.8+α		3ﾅﾅ'・刻目突帯	3ﾅﾅ'・ﾅﾅ'	少	少	少	多		遺構不明
第33図	1546	7 次	一括	覆		10.3+α		3ﾅﾅ'・刻目突帯・摩滅	ﾅﾅ'	少	多		多		2 層上
第33図	1548	7 次	一括	覆		6.5+α		3ﾅﾅ'（摩滅）・刻目突帯・ﾅﾅ3ﾅ（摩滅）	ﾅﾅ'（摩滅）	多	多		多		2 層上
第33図	1549	7 次	一括	覆		7.5+α		刻目1列・刻目突帯・摩滅	ﾅﾅ'（摩滅）	多	多	多	多		上馬 53 南
第33図	1550	7 次	一括	覆		3.4+α		ﾅﾅ'・刻目突帯	ﾅﾅ'・刻目突帯	少	少	多	多		遺構面上（7 次上）
第33図	1551	7 次	一括	覆		3.1+α		刻目1列・刻目突帯・ﾅﾅ方向のﾊﾗ	刻目1列・ﾅﾅ方向のﾊﾗ	少	少		少		上馬 32 付近
第33図	1552	7 次	一括	覆		4.5		刻目1列・刻目突帯・ﾅﾅ方向のﾊﾗ	ﾅﾅ'	少	多		多		上馬 32 付近
第33図	1554	7 次	一括	覆		11.3+α	1.0	摩滅	摩滅	多	多	多	多		2 層上
第33図	1555	7 次	一括	蓋	摘部 7.0	14.5	2.0	ﾅﾅ3ﾅ・ﾅﾅ'・摩滅	ﾅﾅ方向のﾊﾗ3ﾅ' ﾅﾅ'	少	少		多		7 層上面　鉄鉄 Pit
第33図	1556	7 次	一括	覆	(11.2)	3.6+α		3ﾅ'ｲ・突孔	3ﾅ'ｲ・ﾅﾅ'	多	少		多		上馬 32 付近
第33図	1557	7 次	一括	縄文土器胴		3.6+α		3ﾅ>3ﾅ'4 ﾅ凹線文とﾅﾅ3ﾅ	3ﾅ>3ﾅ'4	少	少		少		中間出跡陥内
第33図	1558	7 次	一括	覆		1.1+α		摩滅・円孔	摩滅・円孔	少	少		少		遺構面上（7 次上）
第33図	1559	7 次	一括	覆		1.9+α	(2.7)	ﾅﾅ'・指圧痕	ﾅﾅ'	多	多		多		上馬 A 区1
第33図	1560	7 次	一括	鉢	(9.3)	8.9	(4.2)	ﾅﾅ'・ﾅﾅ3	ﾅﾅ'				少		上馬7
第33図	1561	7 次	一括	鉢		4.5+α		3ﾅ'ｲ（単位不明）	ﾅﾅ'	少	少	少	多		2 層上
第33図	1562	7 次	一括	覆		3.1+α		ﾅﾅ'	ﾅﾅ'	多	多	多	多		2 層上
第33図	1563	7 次	一括	覆		3.6+α	2.0	ﾅﾅ'	ﾅﾅ'	多	多		多		2 層上
第33図	1564	7 次	一括	覆		2.8+α	3.0	ﾅﾅ'・ﾅﾅ3ﾅ	ﾅﾅ'	多	多		多		2 層上
第33図	1565	7 次	一括	縄文土器胴		5.7+α		3>3ﾅ'4	3>3ﾅ'	多	少		少		中間出跡陥内
第33図	1566	7 次	一括	縄文土器胴		6.7+α		縄文	ﾅﾅ'	多	多		多		2 層上
第33図	1567	7 次	一括	須恵器坏蓋	(8.8)6	3.15+α		回転ﾅﾅ3ﾅ'ｲ・3ﾅﾅ'	3ﾅﾅ'				少		遺構不明
第33図	1568	7 次	一括	須恵器坏蓋	(9.3)	3.7		3ﾅﾅ'・回転ﾅﾅ3ﾅ'ｲ	3ﾅﾅ'				少		遺構不明
第33図	1569	7 次	一括	須恵器蓋	(22.5)	5.2+α		3ﾅﾅ'	3ﾅﾅ'				少		遺構不明
第33図	1570	7 次	一括	須恵器蓋		1.6+α		3ﾅﾅ'・沈線・ハ記号	3ﾅﾅ'				少		遺構不明
第33図	1571	7 次	一括	須恵器蓋		7.0+α		3ﾅﾅ'・沈線・鋸線	3ﾅﾅ'				多		遺構不明
第34図	1608	8 次	1 号溝	覆	18.0	41.2	1.6	鋸歯文帯・ﾅﾅ'（摩滅）・突帯・ﾅﾅ3ﾅ・摩滅	ﾅﾅ'（摩滅）	少	少		多		1 号溝 37
第34図	1609	8 次	1 号溝	覆	(14.8)	43.8	26.2	3ﾅﾅ' 鋸歯縦沈文・指圧ﾅﾅ'・ﾅﾅ工具・ﾅﾅ'・貼付突帯・ﾅﾅ3ﾅ'・摩滅	3ﾅﾅ'・指圧ﾅﾅ3ﾅ'	多	多	少	多		1 号溝 43
第34図	1610	8 次	1 号溝	覆	(15.9)	30.7		鋸歯縦沈文・縦方向ﾅﾅ'・突帯・ﾅﾅ3ﾅ（3 条）	指圧痕・工具ﾅﾅ'	多	多	多	多		1 号溝 55
第34図	1611	8 次	1 号溝	覆	17.9	13.8+α		横位沈線文・ﾅﾅ>ﾅﾅ'・ﾅﾅ3ﾅ	3ﾅﾅ'	多	多	多	多		1 号溝
第34図	1612	8 次	1 号溝	覆	11.5	15.5+α		指押ﾅ・ﾅﾅ'・3ﾅﾅ'	指押ﾅ・ﾅﾅ'				少		1 号溝7
第34図	1613	8 次	1 号溝	覆		17.5		細ﾅﾅ>ﾅﾅ'・横方向ﾅﾅ3ﾅ 三角刻み	3ﾅﾅ'	少	多		多		1 号溝 11
第34図	1614	8 次	1 号溝	覆	12.8	11.9+α		横位沈線文・ﾅﾅ'・3ﾅ1ﾅ'・ﾅﾅ'・ﾅﾅ3ﾅ・ﾅﾅ'（摩滅）・ﾅﾅ3ﾅ'ｲ	ﾅﾅ'・縦方向の工具ﾅﾅ'・ﾅﾅ'（ﾅﾅ?）	少	多				1 号溝 22
第34図	1615	8 次	1 号溝	覆	17.0	16.5+α		横位沈線文・縦方向のﾅﾅ・突帯・ﾅﾅ3ﾅ（摩滅）・ﾅﾅ3ﾅ（摩滅）	ﾅﾅ'（ﾅﾅ?）・ﾅﾅ>ﾅﾅ3ﾅ（ﾅﾅ?）・工具ﾅﾅ'	少	多	多	多		1 号溝 Y
第34図	1616	8 次	1 号溝	覆	15.4	11.6+α		ﾅﾅ>ﾅ凹線文>ﾅ・ﾅﾅ3ﾅ・突帯	3ﾅﾅ>ﾅ・工具ﾅﾅ'	多	多	多	多		1 号溝 28
第34図	1617	8 次	1 号溝	覆	15.2	10.3+α		鋸歯縦沈文2条（ﾅﾅ?）・ﾅﾅ3ﾅ'不明	3ﾅﾅ'（ﾅﾅ?）・ﾅﾅ3ﾅ'不明	少	多	多	多		1 号溝 20
第34図	1618	8 次	1 号溝	覆	11.8	11.7+α		縦方向のﾅ・ﾅﾅ'・突帯	縦方向のﾅ・ﾅﾅ'・工具ﾅﾅ'	多	多	多	多		1 号溝 20
第34図	1619	8 次	1 号溝	覆	(12.2)	20.5+α		3ﾅﾅ'・ﾅﾅ3ﾅ'・突帯・貼付け	3ﾅﾅ'・ﾅﾅ3ﾅ'ｲ・指圧痕	多	多		多		1 号溝 56
第34図	1620	8 次	1 号溝	覆		26.3	4.0	摩滅・ﾅﾅ'	ﾅﾅ'・指圧痕	ﾅﾅ'	多		多		1 号溝 58
第34図	1621	8 次	1 号溝	覆	(19.0)	33.0	1.6	3ﾅﾅ'・ﾅﾅ3・摩滅	摩滅	少	少	少	少		1 号溝 42
第34図	1622	8 次	1 号溝	覆	(15.7)	30.7	2.0	3ﾅﾅ'・ﾅﾅ'・黒鉛あり	3ﾅﾅ'・ﾅﾅ'・工具痕	多	多		多		1 号溝7
第34図	1623	8 次	1 号溝	覆	(20.2)	37.0	1.5	ﾅﾅ>ﾅ'・ﾅﾅ'・ﾅﾅ3ﾅ'	ﾅﾅ'・縦方向ﾅﾅ・3ﾅﾅ'・ﾅﾅ3ﾅ'（ﾅﾅ?）・ﾅﾅ3ﾅ'	少	多		多		1 号溝 22
第34図	1624	8 次	1 号溝	覆	(15.2)	26.7		ﾅﾅ>ﾅ・3ﾅﾅ'	3ﾅﾅ'・ﾅﾅ'	少	少		多		1 号溝 14
第34図	1625	8 次	1 号溝	覆	(15.0)	26.0		ﾅﾅ'・3ﾅﾅ'	ﾅﾅ'・3ﾅﾅ'	少	多	少	多		1 号溝7
第34図	1626	8 次	1 号溝	覆	(17.6)	36.6		ﾅﾅ>ﾅ・ﾅﾅ'・3ﾅﾅ'	3>ﾅ>ﾅ・ﾅﾅ'	少	少		多		1 号溝 11
第34図	1627	8 次	1 号溝	覆	(14.5)	30.5		ﾅﾅ>ﾅ・ﾅﾅ'・3ﾅﾅ'	ﾅﾅ'・3ﾅﾅ'	少	多		多		1 号溝 18
第34図	1628	8 次	1 号溝	覆	(14.4)	28.0		ﾅﾅ'・3ﾅﾅ'	ﾅﾅ>ﾅ'・ﾅﾅ'・3ﾅﾅ'	少	多				1 号溝 35
第34図	1629	8 次	1 号溝	覆	13.1	20.6		3ﾅﾅ'・指圧痕・ﾅﾅ>ﾅ'（ﾅﾅ?）・指圧痕	縦方向のﾅ工具ﾅﾅ'（3ﾅﾅ?）	少	多		少		1 号溝 40
第34図	1630	8 次	1 号溝	覆	(21.0)	29.9		3ﾅﾅ'・ﾅﾅ>3・4 条／1cm ﾅ凹ﾅﾅ>ﾅ・ﾅﾅ'・摩滅、二次焼成	3ﾅﾅ'・指圧のちﾅﾅ方向のﾅﾅ'	少	多		多		1 号溝 60
第34図	1631	8 次	1 号溝	覆	(13.0)	31.0		ﾅﾅ'・摩滅	摩滅	少	多		多		1 号溝 9
第34図	1632	8 次	1 号溝	覆	20.3	27.5+α		3ﾅﾅ'・ﾅﾅ方向ﾅﾅ>ﾅ方向のﾅ	3ﾅﾅ'・ﾅﾅ'・縦分離	少			少		1 号溝 32
第34図	1633	8 次	1 号溝	覆	(16.6)	20.0+α		3ﾅﾅ'・縦方向のﾅ>ﾅ（ﾅﾅ?）	3ﾅﾅ'・工具ﾅﾅ'（ﾅﾅ?）	多	多	少			1 号溝 42
第34図	1634	8 次	1 号溝	覆	15.6	35.3+α		ﾅﾅ'・3ﾅﾅ'・黒鉛あり	ﾅﾅ'・3ﾅﾅ'		少		少		1 号溝 32
第34図	1635	8 次	1 号溝	鉢	16.5	14.8		摩滅	摩滅	少	少	少	多		1 号溝 4
第34図	1636	8 次	1 号溝	台	15.0	17.9	16.8	3ﾅﾅ'・ﾅﾅ>縦鋸歯3ﾅﾅ'・縦分離・ﾅﾅ>ﾅ7 条／1cm 横ﾅﾅ>ﾅ3ﾅ'ｲ・ﾅﾅ'ｲ	3ﾅﾅ'・ﾅﾅ'・潰化物付着か・ﾅﾅ>ﾅ3ﾅ'ｲ・ﾅﾅ'ｲ	多	多				1 号溝 54
第34図	1637	8 次	1 号溝	焼塩壺		5.2+α		ﾅ>3ﾅ'4・刻目突帯	ﾅ'	少	多				1 号溝 31
第34図	1638	8 次	1 号溝	小型壺	(9.4)	16.1		摩滅	指圧痕・ﾅﾅ'	少	多	少	多		1 号溝7
第34図	1639	8 次	1 号溝	鉢		8.8+α		ﾅﾅ>ﾅ・3ﾅﾅ'・黒鉛あり	3>ﾅ>3ﾅ・ﾅ>ﾅ'	少	多		多		1 号溝 26
第34図	1640	8 次	1 号溝	鉢	(20.6)	11.3		摩滅・ﾅﾅ'・3ﾅﾅ'	摩滅・ﾅﾅ'	少	多		多		1 号溝 56
第34図	1641	8 次	1 号溝	壺	17.4	120+α		3ﾅﾅ'・縦方向ﾅﾅ>ﾅ	3ﾅﾅ'・工具ﾅﾅ'	少	多	多	多		1 号溝 65 1 号溝 X
第34図	1642	8 次	1 号溝	高坏	(24.2)	11.3+α		ﾅﾅ'	ﾅﾅ'	少	多	多	多		1 号溝 25
第34図	1643	8 次	1 号溝	台付鉢	(17.8)	13.5	8.2	摩滅、黒鉛あり	摩滅・ﾅﾅ'		少		多		1 号溝 12
第34図	1644	8 次	1 号溝	高坏	(26.7)	16.1	17.4	ﾅﾅ'・摩滅・ﾅ方向ﾅ孔	ﾅﾅ'・摩滅・孔孔	少	多		多		1 号溝 25
第34図	1645	8 次	1 号溝	高坏	(25.4)	17.2	(18.5)	ﾅ'ｲ・3ﾅﾅ'・ハ記ﾅ	ﾅﾅ'・3ﾅﾅ'	多	少		多		1 号溝 48
第34図	1646	8 次	1 号溝	鉢	11.0	10.0		摩滅	摩滅	少	多		多		1 号溝 15
第34図	1647	8 次	1 号溝	台付鉢	(12.2)	11.1	6.2	摩滅、黒鉛あり	指圧痕・摩滅	多	多	少			1 号溝 54
第34図	1648	8 次	1 号溝	高坏	(31.8)	14.1+α		縦方向のﾅ3ﾅ孔孔ﾅ（ﾅﾅ?）・ﾅﾅ'指圧痕（ﾅﾅ?）・3ﾅﾅ'・工具ﾅﾅ'	縦方向のﾅ3ﾅ孔孔ﾅ（ﾅﾅ?）・3ﾅﾅ'・工具ﾅﾅ'		少		少		1 号溝
第34図	1650	8 次	一括	壺	23.0	21.6		3ﾅﾅ'・摩滅、黒鉛あり	指押ﾅ・ﾅﾅ'	多	多		少		遺構不明

第24表　遺物一覧表土器（14）

図版番号	遺物番号	調査区名	遺構	器種	口径（残存値）	器高（残存値）	底部径（接地面大径）	外面の文様・調整	内面の文様・調整	胎土 角閃石	胎土 長石	胎土 石英	胎土 その他	遺物注記
第32図	1654	8 次	一括	甕	(19.6)	21.9	23.3	①ナデ→ヘラ状工具ナデ？②ヘ：横ミガキ→ナデ 体：①ヨコ ②ヘラ状工具（ヘラ状工具ナデ？）ナデ	①ナデ→ナデ→指圧のち ナデ	多	多	少		遺構不明
第32図	1655	8 次	一括	高坏	(25.2)	16.4＋α		杯：①ヨコ ②ヨコ（ヘラ状工具ナデ？）ヘラ状工具ナデ 脚：横ミガキ	杯：①ヨコ ②ヨコ（ヘラ状工具ナデ？）ヘラ状工具ナデ 脚					73
第37図	1656	9 次	2 号竪穴	壺		11＋α		磨滅	磨滅		多	多		2 号竪穴 2
第37図	1657	9 次	2 号竪穴	甕		5.7＋α	6.0	ナデ→ナデ	ナデ		少	少		2 号竪穴 2
第37図	1658	9 次	3 号竪穴	甕		5.2＋α		磨滅 / 胎ハは赤	ナデ		少	少		3 号竪穴 1
第37図	1659	9 次	3 号竪穴	中段上部器台脚	6.7	2.0	5.3	磨滅 / 胎動赤切焼板状圧痕	磨滅		少	少	多	3 号住 pit1 No.1
第37図	1660	9 次	4 号竪穴	壺		1.8＋α		②ナデ	②ナデ			多		4 号住
第37図	1662	9 次	6 号竪穴	壺		4.9＋α		磨滅	磨滅		少		多	6 号住 No.38
第37図	1663	9 次	6 号竪穴	甕		5.1＋α		ナデ→②ヨコ / 胎ハは	ナデ 後ヘラ状ミガ				多	6 号住一括
第37図	1664	9 次	6 号竪穴	甕		4.0＋α		磨滅 / 胎ハは	②ナデ		少	多	少	6 号住
第37図	1665	9 次	6 号竪穴	壺		3.1＋α		②ナデ	②ナデ		少	多	少	6 号住
第37図	1666	9 次	6 号竪穴	壺		2.0＋α		②ナデ	②ナデ				多	6 号住 落ち A 8
第37図	1667	9 次	6 号竪穴	甕		2.8＋α	6.3	ナデ→ナデ 磨滅	磨滅		少	多	多	6 号住 No.122
第37図	1668	9 次	6 号竪穴	甕		4.0＋α	6.2	磨滅	磨滅			少	多	6 号住 No.91
第37図	1673	9 次	7 号竪穴	壺		3.8＋α		②ナデ 指圧痕	磨滅		多	少	少	7 号住 No.10
第37図	1674	9 次	7 号竪穴	壺		2.5＋α		ナデ→②ナデ	ナデ→②ナデ			少	多	7 号住 No.12
第37図	1675	9 次	7 号竪穴	甕		3.5＋α	7.2	磨滅	磨滅		少	多	少	7 号住 No.2
第37図	1676	9 次	6 号竪穴	中段上脚台	(13.0)		9.0	磨滅 / 胎動に黒灰圧痕が残る	磨滅		多	多	多	7 号竪穴No.11・15
第37図	1677	9 次	7 号竪穴	中段上脚台部	7.2	1.3	5.5	②ナデ / 胎動赤切焼	②ナデ			多		7 号住 3 PIットの埋土 No.16
第37図	1678	9 次	8 号竪穴	壺	(18.0)	6.3＋α		②ナデ→ナデ	②ナデ→ナデ→ナデ / 指圧痕ガ		多	多	多	9 号竪穴 63
第37図	1679	9 次	8 号竪穴	壺		3.9＋α		ナデ→指圧けが密接ガナデ	ナデ		多	多	多	9 号竪穴 147
第37図	1680	9 次	8 号竪穴	壺		6.0＋α		磨滅→ナデ→胴部あり	磨滅		多	多		8 号住 柱穴 1
第37図	1681	9 次	8 号竪穴	甕?		5.7＋α		②ナデ→ナデ / 指圧けが密接ガ②ナデ 胴部ヨコ	②ナデ→ナデ		多	多	多	9 号竪穴 8
第37図	1684	9 次	8 号竪穴	甕	(29.6)	13.5＋α		②ナデ 底部ヨコ / 指圧けが密接ガナデ 底部ヨコ / ナデ→ナデ→ナデ	指圧えナデ		少	多	多	9 号竪穴 34
第37図	1686	9 次	8 号竪穴	甕		4.5＋α		「角型閉」表型けが強ナデ 底部ヨコ ナデ	ナデ		少	少		9 号竪穴 115
第37図	1687	9 次	8 号竪穴	甕		3.2＋α		②ナデ→ナデ→調整	②ナデ→指圧痕ナデ		多	多	多	9 号竪穴 15
第37図	1688	9 次	8 号竪穴	甕		2.5＋α		指圧密度ガナデ→ナデ→胴部以上磨滅か	②ナデ→ナデ→指圧痕		少	少	少	9 号竪穴 55
第38図	1689	9 次	8 号竪穴	甕		6.9＋α	7.0＋α	ナデ→ナデ	ナデ		多	多	多	9 号竪穴 48
第38図	1690	9 次	8 号竪穴	高坏		6.5＋α	(8.3)	ナデ→底ヘラ状ケズリ→②ナデ	ナデ方向のナデ→ナデ		多	多		9 号竪穴 10
第38図	1692	9 次	4 号土坑	甕		5.3＋α		焼文	磨滅		多	多		4 号住 4
第38図	1693	9 次	4 号土坑	壺		28.3＋α	8.0	重弧文・平行線文・ナデ	磨滅		多	多	多	4 号住 43 No.15・16・17・19・88・2 No.2・18
第38図	1694	9 次	4 号土坑	壺		13.0＋α	7.0	重弧文・平行線文・ナデ（磨滅）	器面剥落		多	多	多	4 号住 No.39 No.127・281・333・516
第38図	1695	9 次	4 号土坑	壺	(19.6)	9.6＋α		②ナデ→磨滅	ナデ→磨滅		少	少		4 号住 No.13・96
第38図	1696	9 次	4 号土坑	壺	(16.2)	10.4＋α		②ナデ（磨滅）→胴部下半（磨滅）/ 胴付突帯、焼成あり	②ナデ→ナデ→指圧痕		少	少	多	4 号住 No.21・55・69
第38図	1697	9 次	4 号土坑	甕	(21.8)	10.0＋α		②ナデ→胴付突帯・磨滅	②ナデ→ナデ		少	少		4 号住 No.23
第38図	1698	9 次	4 号土坑	壺		12.1＋α 8.6＋α		重弧文・平行線文・ナデ（磨滅）	ハケ目＋器面剥落		多	多	多	4 号住 No.35・34・26
第38図	1699	9 次	4 号土坑	甕		23.9＋α	(8.1)	胴付突帯・ナデ→底ヘラ＋ナデ	ナデ（磨滅）/ 器面剥落		多	多	多	4 号住 No.54・93
第38図	1700	9 次	4 号土坑	壺		26.2＋α	5.1	①方向のハケ＋ナデ 方向のミガキ→ナデ、焼成あり	ナデ（磨滅）/ 器面剥落		少	多	少	4 号住 No.21・52・68・68・30・52・18・102
第38図	1701	9 次	4 号土坑	甕	28.4	30.4	5.6	胴石突帯・ナデ＋ミガキ（磨滅）	ナデ（磨滅）		多	多		4 号住 No.15・45・54・79
第38図	1701	9 次	4 号土坑	壺		12.7＋α		①方向のハケ＋胴付突帯 ②ヘ：ナデ方向のハケ	①方向のハケ			多	少	4 号住 No.50
第38図	1702	9 次	4 号土坑	甕		12.4＋α	7.2	磨滅	ナデ方向の工具ナデ（磨滅）		少	少	少	4 号住 No.15
第38図	1703	9 次	4 号土坑	甕		8.8＋α		胴石突帯・磨滅	磨滅		少	多	少	4 号住 No.35
第38図	1705	9 次	4 号土坑	壺	27.0	13.8＋α		胴口縁・胴石突帯・ナデ（磨滅）	磨滅		多	多	多	4 号住 No.23・24・35・48・52・59・63
第38図	1706	9 次	4 号土坑	壺	28.0	13.2＋α		磨滅	磨滅		少	多		4 号住 No.15・30・35・54・92
第38図	1707	9 次	4 号土坑	壺	34.3	25.3＋α		胴口縁・胴石突帯・ナデ（磨滅）	ナデ→ナデ（磨滅）		少	少	少	4 号住 No.21・22・28・35・40・48・49・54・59・60・71・77・79・80・81・91・96
第38図	1708	9 次	4 号土坑	壺	(32.4)	14.4＋α		②ナデ（磨滅）/ 胴石突帯・磨滅	②ナデ→磨滅		少	少	多	4 号住 No.41
第38図	1709	9 次	4 号土坑	甕		12.1＋α	6.2	磨滅 / 凸状不明瞭・穿孔・ナデ	磨滅 / 凸状不明瞭・穿孔・ナデ		少	少	多	4 号住 No.19・30・54・58・59
第38図	1710	9 次	4 号土坑	甕		10.0＋α	6.3	ナデ→ナデ（磨滅）/ ナデ	磨滅			多	多	4 号住 4
第38図	1711	9 次	4 号土坑	壺		9.1＋α	(5.3)	ナデ→磨滅	ナデ			多	多	4 号住 No.34
第38図	1712	9 次	4 号土坑	壺		8.5＋α	6.7	磨滅	②ナデ→ヨコ＋		少	多	多	4 号住 No.36
第38図	1713	9 次	4 号土坑	壺		9.1＋α	8.6	ナデ→（磨滅）/ ナデ	指圧痕・ナデ→磨滅			多	多	4 号住 No.54
第38図	1714	9 次	4 号土坑	壺		4.7＋α	6.4	ナデ→（磨滅）/ ナデ	磨滅			多	多	4 号住 No.52
第38図	1715	9 次	4 号土坑	鉢口縁	21.6	22.5	14.0	磨滅 / 凸状不明瞭	磨滅 / 凸状不明瞭		多	多		4 号住 No.22・23・91
第38図	1716	9 次	4 号土坑	高坏	20.1＋α	(13.0)		①方向のハケ→指圧けが強ナデ 方向のハケ→ナデ→磨滅 / 磨滅	ナデ→磨滅		少	少	少	4 号住 No.35・58・78・96
第38図	1717	9 次	4 号土坑	高坏	(32.0)	7.2＋α		①方向のハケ＋	磨滅			多	多	4 号住 No.18・21
第38図	1718	9 次	4 号土坑	高坏	26.8	8.9＋α		磨滅→ナデ 指圧痕ガ＋	磨滅		多	多	多	4 号住 No.20・68・76
第38図	1719	9 次	4 号土坑	高坏		5.7＋α		脚石突帯 ②ヘ：磨滅	②ヘ：ヨコ→ナデ→磨滅			多	多	4 号住 No.38
第38図	1720	9 次	4 号土坑	高坏		11.1＋α	(15.0)	磨滅 / 凸状不明瞭・ナデ→ケズリ	ナデ		多	多		4 号住 No.56
第38図	1723	9 次	5 号土坑	壺		13.0＋α		ナデ→ヨコ（磨滅）・重弧文	磨滅			多	多	4 号住 L5 No.2530
第38図	1724	9 次	5 号土坑	壺		5.3＋α		胴石突帯・磨滅	磨滅		少	多	多	4 号住 No.25
第38図	1725	9 次	5 号土坑	壺		24.7＋α	7.7	ナデ→（磨滅）・②ナデ→ナデ	ナデ方向の工具ナデ		少	多		4 号住 No.20・9・11・12
第38図	1726	9 次	5 号土坑	壺		8.2＋α		ナデ→胴石突帯・磨滅	ナデ→指圧痕		少	多		4 号住 5 No.3
第38図	1727	9 次	5 号土坑	壺		5.2＋α		ナデ→胴石突帯	ナデ			多		4 号住 No.9
第38図	1729	9 次	7 号土坑	壺		3.4＋α		重弧文	ナデ		少	少	少	3 号住 7 No.9
第38図	1730	9 次	7 号土坑	壺		3.5＋α		胴石突帯・ナデ	ナデ		多	多	多	3 号住 7 No.8
第38図	1731	9 次	8 号土坑	壺	13.2	13.6＋α		ナデ→磨滅・胴石	指圧痕・磨滅		多	多	多	3 号住 8 22 No.22
第38図	1732	9 次	8 号土坑	壺		6.1＋α		ナデ→平行線文・重弧文	胴部・突帯・磨滅		多	多	多	3 号住 8 No.18
第38図	1733	9 次	8 号土坑	壺	(11.1)	17.4＋α	6.0	ナデ→平行線文	ナデ→工具ナデ		少	多		3 号住 8 No.23・23
第38図	1734	9 次	8 号土坑	壺		7.2＋α		②ヘ：ナデ→平行線文	工具ナデ		少	多		3 号住 8 No.23
第38図	1736	9 次	8 号土坑	壺		8.6＋α	(15.0)	ナデ	ナデ		少	少	多	3 号住 8 No.22
第38図	1737	9 次	8 号土坑	壺	(22.6)	21.7	5.2	ナデ→胴石・胴石突帯・ナデ＋ケズリ（磨滅）	②ナデ→指圧痕→ナデ（磨滅）/ 最大径の工具ナデ	少	多	多	多	3 号住 8 No.20
第38図	1738	9 次	8 号土坑	壺	(25.6)	25.8＋α		ハケ＋ナデ→②ナデ→胴石突帯	ナデ	少	少	少	少	3 号住 8 No.22・23
第38図	1739	9 次	8 号土坑	壺	14.6	17.0	6.0	ナデ→ナデ→②ナデ→胴石	②ハケ→ナデ	多	多	多		3 号住 8 1 No.1・一括No.23
第38図	1740	9 次	8 号土坑	壺	(39.6)	16.6＋α		胴石突帯 ②ヘ：磨滅	磨滅→ナデ		少	少	少	3 号住 8 No.21
第38図	1741	9 次	8 号土坑	壺	(26.8)	8.3＋α		②ナデ→ナデ＋	②ナデ→磨滅		多	多	多	3 号住 8 一括
第38図	1742	9 次	8 号土坑	壺		12.3＋α	(6.1)	ハケ＋ナデ	ナデ		多	多	多	3 号住 8 一括No.18
第38図	1743	9 次	8 号土坑	壺		4.1＋α	5.7	磨滅	磨滅		少	多	多	3 号住 8 No.18
第38図	1744	9 次	8 号土坑	壺		6.1＋α	6.3	ナデ→	工具ナデ		多	多	多	3 号住 8 No.22
第38図	1745	9 次	8 号土坑	高坏	(25.6)	8.5＋α		ナデ→（磨滅）	多方向のナデ→ナデ		少	多	多	3 号住 8 No.11
第38図	1746	9 次	8 号土坑	鉢	(20.8)	7.1＋α		ナデ→ナデ	ナデ→指圧痕		少	少	少	3 号住 8 No.23
第38図	1747	9 次	8 号土坑	台付壺 脚部		6.6＋α		ナデ→突帯・透孔	ナデ		多	多		3 号住 8 No.23
第38図	1748	9 次	8 号土坑	台付壺 脚部		3.9＋α		胴石突帯・ハケ	ナデ		少	少	多	3 号住 8 No.13
第38図	1749	9 次	9 号土坑	壺	(18.6)	6.0		②ナデ→重弧文	②ナデ					2 号住 9 No.30
第38図	1750	9 次	9 号土坑	壺		6.5＋α	(7.3)	ハケ＋ヨコ→ヨコ＋ナデ→ハケ	磨滅		多	多	多	2 号住 9 No.1
第38図	1751	9 次	9 号土坑	甕		5.8＋α	6.9	ナデ	磨滅		少	少		2 号住 9 No.11
第38図	1752	9 次	9 号土坑	壺	(22.8)	6.7＋α		②ナデ→ヨコ 胴石突帯→ハケ	②ナデ→ナデ		少	少	少	2 号住 9 No.17
第38図	1753	9 次	9 号土坑	壺	(25.7)	14.1＋α		②ナデ→胴石突帯→ハケ	②ナデ→ナデ		少	少	少	2 号住 9 No.17

第 25 表　遺物一覧表土器（15）

図版番号	遺物番号	調査区	遺構	器種	口径(残存幅)	器高(残存高)	焼成状態(胎土色 ※))	外面の文様・調整	内面の文様・調整	胎土				遺物特記
										角閃石	長石	石英	その他	
第36図	1755	9 次	10 号土坑	壺		21+α	水石	ｴﾋﾟｶﾞ、黒雲あり	ﾅﾃﾞ	少	多	多		土坑 10 号 1
第36図	1756	9 次	11 号土坑	壺		6.6+α		ﾅﾃﾞ&ﾊﾅﾋﾞ・ﾎﾀﾙ石	磨滅	多	多	多		土坑 11 号 15
第36図	1757	9 次	12 号土坑	壺		4.6+α		磨滅・文様	磨滅		多	少		土坑 12
第36図	1758	9 次	12 号土坑	壺		4.0+α		ﾅﾃﾞ・ﾋﾟｶﾞ	指圧痕・ﾅﾃﾞ	少	多			土坑 12
第36図	1759	9 次	12 号土坑	壺		2.2+α		ﾅﾃﾞ 底側福底状文	ﾅﾃﾞ		多			土坑 12
第36図	1760	9 次	12 号土坑	高坏		5.5+α		ﾅﾃﾞ	不明	少	多	少	多	土坑 12
第36図	1761	9 次	12 号土坑	鉢		3.2+α		ﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ		多			土坑 12
第36図	1763	9 次	落ち込み 3	壺	(31.0)	17.9+α		磨滅・一部ﾋﾟｶﾞ残る	磨滅	多	多		多	落ち込み 3
第36図	1764	9 次	落ち込み 3	壺		3.3+α		磨滅	磨滅	少	少		少	落ち込み 3
第36図	1765	9 次	落ち込み 3	縄文土器鉢		6.1+α		押型文	ﾅﾃﾞ		少		少	落ち込み 3 付近遺物集中範囲
第36図	1769	9 次	新ふき上屋	壺		2.6+α		ﾋﾟｶﾞ・ﾎﾀﾙ石・ﾅﾃﾞ&ﾋﾟｶﾞ	ﾅﾃﾞ	少	少	少	少	落ち込み 3 付近遺物集中範囲
第36図	1770	9 次	新ふき上屋	壺	15.0	6.9+α		磨滅	指圧痕・磨滅	多	多			落ち込み 3 遺物集中範囲 土坑 11 号 6
第36図	1771	9 次	新ふき上屋	壺		4.6+α	7.0	ﾅﾃﾞ・ﾍﾗﾅﾃﾞ 4、黒雲あり	磨滅	少	多	少		落ち込み 3 周辺一括
第36図	1773	9 次	新ふき上屋	壺	(28.0)	13.3+α		磨滅（部分的にﾋﾟｶﾞ残る）	磨滅	多	多		多	落ち込み 3 周辺一括
第36図	1774	9 次	新ふき上屋	壺	(29.0)	6.7+α		ﾋﾟｶﾞ・ﾅﾃﾞ（磨滅）	ﾋﾟｶﾞ・ﾅﾃﾞ	多	少		少	落ち込み 3 周辺一括
第36図	1775	9 次	新ふき上屋	壺		16.0+α		ﾋﾟｶﾞ・ﾅﾃﾞ（磨滅）	ﾅﾃﾞ（磨滅）	多	少		少	落ち込み 3 周辺一括
第36図	1776	9 次	新ふき上屋	壺		5.9+α	6.2	磨滅	ﾅﾃﾞ	少	多	多		落ち込み 3
第36図	1777	9 次	新ふき上屋	壺		4.7+α	7.0	磨滅	ﾅﾃﾞ	少	多	多	少	落ち込み 3 付近遺物集中範囲
第36図	1778	9 次	新ふき上屋	壺		4.7+α	6.0	磨滅・ﾅﾃﾞ（磨滅）	ﾋﾟｶﾞ・ﾅﾃﾞ	少		少	多	落ち込み 3 周辺一括
第36図	1779	9 次	新ふき上屋	壺		8.0	7.4	磨滅	磨滅	多	多		多	落ち込み 3 周辺一括
第36図	1780	9 次	新ふき上屋	有台鉢		8.6+α	7.8	磨滅・ﾅﾃﾞ・ﾋﾟｶﾞ	磨滅・ﾋﾟｶﾞ	少		少	少	落ち込み 3 付近遺物集中範囲
第36図	1781	9 次	溝 1	壺		6.2+α		ﾅﾃﾞ・ﾎﾀﾙ石&ﾋﾟｶﾞ 3	ﾋﾟｶﾞ・一部ﾍﾗ・ﾅﾃﾞ	少		少	少	第 1 ｼｽﾃﾑ 溝 1
第36図	1782	9 次	溝 1	壺		7.1+α	6.5	ﾅﾃﾞ・磨滅	磨滅	多	多	多	多	第 2 ｼｽﾃﾑ 溝 1
第36図	1783	9 次	溝 1	壺		6.8+α	6.0	磨滅	磨滅		多	多	多	溝 1
第36図	1784	9 次	溝 1	壺	(25.8)	13.8+α		ﾋﾟｶﾞ・ﾎﾀﾙ石&突帯・ﾅﾃﾞ	多方向のﾍﾗﾅﾃﾞ 8	多	少		少	第 1 ｼｽﾃﾑ 溝 1
第36図	1785	9 次	溝 1	壺	(30.0)	19.0+α		ﾅﾃﾞ・ﾎﾀﾙ石&突帯・ﾅﾃﾞ&ﾋﾟｶﾞ	ﾅﾃﾞ	多	少	少	少	第 1 ｼｽﾃﾑ 溝 1
第36図	1786	9 次	溝 1	壺		9.9+α		刻目突帯・ﾅﾃﾞ・ﾋﾟｶﾞ	ﾅﾃﾞ（磨滅）	少	多	多	多	第 2 ｼｽﾃﾑ 溝 1
第36図	1787	9 次	溝 1	壺		3.9+α	6.5	ﾅﾃﾞ	工具ﾅﾃﾞ		多	多	多	第 1 ｼｽﾃﾑ 溝 2
第36図	1788	9 次	溝 1	有台鉢		4.7+α	(12.0)	ﾅﾃﾞ（磨滅）・透孔	ﾅﾃﾞ（磨滅）・透孔	多	多		多	第 2 ｼｽﾃﾑ 溝 1
第36図	1789	9 次	溝 1	縄文土器鉢		5.8+α		押型文	沈線文・ﾅﾃﾞ	少	少	少	多	第 1 ｼｽﾃﾑ 溝 1
第36図	1796	9 次	一括	壺	(16.6)	1.8+α		ﾅﾃﾞ・ﾋﾟｶﾞ	ﾅﾃﾞ	少	少		少	第 2 ｼｽﾃﾑ
第36図	1797	9 次	一括	壺		4.5+α		ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ・指圧痕		少	少		第 2 ｼｽﾃﾑ 3 区
第36図	1798	9 次	一括	壺		3.8+α		ﾅﾃﾞ・突帯・浮文(磨滅)	ﾅﾃﾞ	少	少			第 2 ｼｽﾃﾑ
第36図	1799	9 次	一括	壺		7.2+α	(6.5)	ﾅﾃﾞ方向のﾍﾗ工具ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	少	多	少	多	第 2 ｼｽﾃﾑ ﾋｶﾞｼ 202
第36図	1800	9 次	一括	壺		3.2+α		沈線文・刻突文	磨滅		多	少		第 2 ｼｽﾃﾑ 一括
第36図	1801	9 次	一括	壺	(14.6)	4.0+α		ﾋﾟｶﾞ・磨滅・丹塗り	ﾋﾟｶﾞ・磨滅・丹塗り	少	少		少	第 2 ｼｽﾃﾑ ﾋｶﾞｼ 202
第36図	1802	9 次	一括	鉢		5.1+α		ﾅﾃﾞ&突帯	ﾅﾃﾞ・沈線 2 条		少	少		第 1 ｼｽﾃﾑ
第36図	1803	9 次	一括	壺		7.1+α		ﾅﾃﾞ・ﾋﾟｶﾞ・ﾎﾀﾙ石	指圧痕・ﾅﾃﾞ	多	多	少		西区西端遺物集中範囲
第36図	1804	9 次	一括	壺		6.1+α	5.2	ﾅﾃﾞ方向のﾍﾗ 1・ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ方向の工具ﾅﾃﾞ	少	少	少	少	第 2 ｼｽﾃﾑ ﾋｶﾞｼ 202
第36図	1805	9 次	一括	鉢部		2.6+α	6.0	ﾅﾃﾞ・沈線・刻突文	ﾅﾃﾞ	少	少	多	多	西区一括
第36図	1806	9 次	一括	鉢部		5.9+α	6.5	貼付突帯・ﾅﾃﾞ&ﾋﾟｶﾞ(磨滅)	ﾍﾗ・ﾋﾟｶﾞ・ﾅﾃﾞ	少	少		少	第 1 ｼｽﾃﾑ
第36図	1807	9 次	一括	壺		5.3+α	7.3	磨滅・指圧痕	磨滅	少	少	少	少	第 2 ｼｽﾃﾑ (25)
第36図	1818	不明	一括	壺	(30.6)	25.2+α		ﾅﾃﾞ方向のﾍﾗ 1・ﾋﾟｶﾞ・ﾅﾃﾞ方向のﾍﾗ 1	ﾅﾃﾞ方向のﾍﾗ 1・ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ方向のﾍﾗ 1	多	少	少	多	
第36図	1819	不明	一括	壺	18.2	32.8	7.4	ﾅﾃﾞ&ﾋﾟｶﾞ・ﾅﾃﾞ・沈線	磨滅	少	多		多	
第36図	1820	不明	一括	壺	16.0	32.1		不定方向のﾅﾃﾞ	磨滅(2)不明		多		多	
第36図	1821	不明	一括	壺	(23.0)	21.0	7.15	ﾅﾃﾞ・ﾎﾀﾙ石&ﾋﾟｶﾞ	ﾅﾃﾞ&方向のﾍﾗ&ﾅﾃﾞ	少	多	多	多	
第36図	1822	不明	一括	壺	26.1	21.7+α		刻目工具・沈線・刻目突帯・磨滅	磨滅	多	多		多	
第36図	1823	不明	一括	壺	19.2	20.4	6.6	刻目工具・突帯・ﾅﾃﾞ方向のﾍﾗ(磨滅)・円孔 (+穴)	指圧痕・ﾅﾃﾞ(磨滅)、晩成前半孔	多		多	少	
第36図	1824	不明	一括	壺	31.5	31.7	7.2	ﾋﾟｶﾞ&刻目・貼付突帯2ﾋﾟｶﾞ・沈線刻・ﾅﾃﾞ&ﾋﾟｶﾞ・ﾅﾃﾞ・磨滅	後分孔・指圧痕とﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ方向のﾋﾟｶﾞ・指圧とﾅﾃﾞ	多	多	多		
第36図	1825	不明	一括	鉢	27.0 ~ 28.4	20.9+α		ﾅﾃﾞ&ﾋﾟｶﾞ・ﾎﾀﾙ石・ﾅﾃﾞ	磨滅	多	多	多		
第36図	1826	不明	一括	壺	(25.7)	31.1		ﾅﾃﾞ・ﾋﾟｶﾞ・ﾍﾗﾅﾃﾞ 9	ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	少	少	少	少	
第36図	1827	不明	一括	有台鉢	(18.3)	12.8+α	9.5	ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ方向のﾍﾗ・指圧とﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ・工具ﾅﾃﾞ	多	多		多	
第36図	1828	不明	一括	壺	(12.6)	13.5	(17.0)	ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ・孔	ﾅﾃﾞ・磨滅、晩成前半孔	多	少		多	
第36図	1829	不明	一括	高坏	(21.2)	15.5+α		ﾅﾃﾞ&ﾋﾟｶﾞ(磨滅)、ﾅﾃﾞ&ﾋﾟｶﾞ(磨滅)	ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ・磨滅・円盤充填	少	多	少	多	

第26表　遺物一覧表石器（1）

図版番号	遺物番号	調査次数	遺構	種類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	遺物注記
第12図	37	1次	5号竪穴	磨製石鏃	結晶片岩	3.0	1.4	0.2	1.3		5号住居跡埋土
第12図	38	1次	5号竪穴	石石	安山岩	15.0	24.7	5.0	3300		5号住　上層
第13図	50	1次	7号竪穴	砥石	砂岩	9.2	3.1	2.3	92.3		7C　7号住（土起上面）
第17図	58	1次	3号土坑	磨製石鏃	蛇紋質結晶片岩	2.2+α	1.9	0.3	2.0		7C　3号住
第20図	74	1次	10号土坑	打製石鏃	鹿島産黒曜石	1.9	1.6	0.3	0.7		6A　10号墓
第20図	75	1次	10号土坑	凹石	安山岩	10.2	10.6	6.1	1100.7		10号住
第22図	80	1次	12号土坑	敲石	安山岩	10.0	4.8	6.4	512.9		13号竪穴　6D
第29図	151	1次	一括	扁平打製石斧	安山岩	15.2	7.7	2.3	347.2		表採
第29図	152	1次	一括	扁平打製石斧	赤紫凝灰岩	10.7	6.4	1.4	107.8		表採
第29図	153	1次	一括	扁平打製石斧	頁岩片岩	7.6	4.7	0.9	53.1		表採
第29図	154	1次	一括	扁平打製石斧	頁岩片岩	8.7	5.0	1.3	84.1		表採
第30図	155	1次	一括	磨製石鏃	蛇紋岩	3.0	1.4	0.2	1.5		6B
第30図	156	1次	一括	敲石	頁岩片岩	26.4+α	9.5+α	1.8	3000		1-盟群下
第30図	159	1次	一括	敲石	輝石安山岩	12.1	9.2	5.6	1708.0		14号ピット
第30図	158	1次	一括	磨石	流紋岩(?)	9.7	3.9	6.2	195.3		
第30図	160	1次	一括	凹石	輝石安山岩	8.3	9.3	5.7	590.0		6D
第31図	162	1次	一括	敲石・磨石		11.1	10.3	6.2	1010		
第31図	163	1次	一括	敲石		11.1	9.1	5.3	700		
第34図	171	2次	3号竪穴	磨製石鏃	結晶片岩	3.4	1.6	0.3	2.2		3・4号住
第34図	172	2次	3号竪穴	石鏃	ｻﾇｶﾅ	3	2	0.4	2.2	縄文草期	3号住
第34図	173	2次	3号竪穴	石鏃	ｻﾇｶﾅ	2.1	1.5	0.4	1		3号住
第41図	216	2次	上盟群	磨製石鏃	結晶片岩	2.2	1.3	0.15	1.0		南北下中央土盟群上部
第43図	236	2次	一括	扁平打製石斧	安山岩	4.6	5.7	1.4	48.7		南北下　中央土盟群
第43図	237	2次	一括	磨製石斧	緑色結晶片岩	8.6	4.9	0.8	38.1		
第43図	238	2次	一括	磨製石鏃	結晶片岩	3.15	1.4	0.1	1.5		
第43図	241	2次	一括	磨石	角閃輝石安山岩	8.0+α	10.6	6.4	808.6		II L2　第1ピット
第46図	250	3次	A1 9号竪穴	打製石鏃	ﾁｬｰﾄ	1.55	1.1	0.3	0.4	中期前まで	1号住床上
第46図	251	3次	A1 9号竪穴	石鏃	蛇紋岩	2.9	5.2	1.95	102.3		1・2号住床
第48図	253	3次	A2 9号竪穴	石鏃	ｻﾇｶﾅ	1.9	1.4	0.3	1.3		2号住　床上
第48図	254	3次	A2 9号竪穴	石鏃	鹿島産黒曜石	3	1.7	0.6	2.4	未成品	2号住　トレンチ3
第48図	255	3次	A2 9号竪穴	敲石	角閃安山岩	7.2+α	7.9+α	4.7	410		2号住
第48図	256	3次	A2 9号竪穴	石鏃	泥岩	5.3	6.3	1	38.7		2号住　床上
第50図	263	3次	A3 9号竪穴	磨製石鏃	結晶片岩	1.3	1.1	0.15	0.4		3号住床
第50図	264	3次	A3 9号竪穴	打製石鏃	金山産ｻﾇｶﾅ	2.2	1.1	0.3	0.7		3号住
第50図	265	3次	A3 9号竪穴	敲石	泥岩	5.9+α	2.7	0.9	19.1		3号住
第50図	266	3次	A3 9号竪穴	敲石	砂岩	5.9+α	5.9+α	3.0	103.3		3号住床
第53図	270	3次	A5 9号竪穴	石鏃	泥岩	2.2	1.2	0.4	1.3		5号住
第53図	271	3次	A5 9号竪穴	石皿丁	泥岩	27	3.5	0.5	5.3		5号住
第55図	275	3次	A6 9号竪穴	石鏃	黒曜石	2.9	1.9	0.6	2.6		6号住　NWコーナー外
第59図	293	3次	B1 9号竪穴	磨製石鏃	緑色片岩	3.75	3.2	0.3	3.1	未成品	1号住床
第61図	308	3次	B12 9号竪穴	打製石鏃	鹿島産黒曜石	1.3	1.3	0.25	0.4		円形住
第61図	309	3次	B2 9号竪穴	磨製石鏃	結晶片岩	2.55	1.3	0.25	0.9		円形住上部
第61図	310	3次	B2 9号竪穴	磨製石鏃	結晶片岩	3.6	1.7	0.35	2.3	未成品	円形住
第61図	311	3次	B2 9号竪穴	磨製石鏃	結晶片岩	3.2	1.7	0.35	2.2		円形住　中央ピット外
第61図	312	3次	B2 9号竪穴	磨製石鏃	結晶片岩	2.7	1.4	0.25	1.2		円形住
第61図	313	3次	B2 9号竪穴	スクレイパー	鹿島産黒曜石	4.0	2.5	0.8	8.6		円形住
第61図	314	3次	B2 9号竪穴	磨製石鏃	蛇紋岩	3.0	3.1	1.1	48.3	未成品	円形住
第65図	332	3次	B4 9号竪穴	打製石鏃	鹿島産黒曜石	1.2+α	1.6+α	0.3	0.5		4号住
第65図	333	3次	B4 9号竪穴	打製石鏃	鹿島産黒曜石	2.6+α	1.1+α	0.4	0.8		4号住
第65図	334	3次	B4 9号竪穴	磨製石鏃	蛇紋岩	2.7+α	1.4	0.25	1.5		4号住
第67図	343	3次	A1 A2 9号竪穴	敲石	泥岩	7.9+α	4.4	1.9	72.4		1・2号住
第68図	361	3次	一括	石鏃	ｻﾇｶﾅ	5.3	3.3	0.4	6.6		8号住
第69図	368	3次	一括	敲石 or 磨	泥岩	4.2+α	1.5+α	1.6	18.1		
第69図	369	3次	一括	敲石 or 磨	泥岩	4.9+α	1.4	1.2	13.8		表採
第69図	370	3次	一括	石皿丁	泥岩	4.2+α	6.6+α	0.6	20.8		表採
第69図	371	3次	一括	打製石鏃	ﾎﾟﾂﾌﾟ質安山岩	2.1	1.8	0.35	1.0		1・2号住　トレンチ3内
第69図	372	3次	一括	打製石鏃	ｻﾇｶﾅ	1.7+α	1.6	0.25	0.8		表採
第69図	373	3次	一括	打製石鏃	ｻﾇｶﾅ	2.1	1.8+α	0.4	1.3		表採
第69図	374	3次	一括	打製石鏃	ｻﾇｶﾅ	2.6	1.6	0.4	2.0		表採
第69図	375	3次	一括	打製石鏃	鹿島産黒曜石	2.7	1.6	0.5	1.8		表採
第72図	378	4次	1号竪穴	打製石鏃	ﾁｬｰﾄ	1.8	1.8	0.3	0.8		1号住
第72図	379	4次	1号竪穴	磨製石鏃	蛇紋岩	5.2	4.3	1.6	63.1		1号住
第74図	381	4次	2号竪穴	打製石鏃	石英	2.8	1.6	0.4	1.8		2号住
第76図	387	4次	3号竪穴	磨製石鏃	結晶片岩	2.9	1.4	0.2	1.4		3号住　5pit
第76図	388	4次	3号竪穴	敲石	ﾌﾟﾗｲﾄ	6.4	3.8	7.5	738.7		3号住　4pit
第84図	395	4次	8号竪穴	打製石鏃	ﾁｬｰﾄ	2.2	1.6	0.4	0.9		8号住　19pit
第85図	400	4次	10号竪穴	磨製石鏃	結晶片岩	3.0	1.7	0.2	2.2		10号住床1
第85図	401	4次	10号竪穴	磨製石鏃	蛇紋岩	3.9	1.3	0.3	2.5		10号住床3
第85図	402	4次	10号竪穴	打製石鏃	鹿島産黒曜石	1.9	1.3	0.3	0.7		10号住床2
第86図	403	4次	11号竪穴	石石	輝石安山岩	11.7	11.7	5.3	930.0	被熱し赤変	11号住
第90図	421	4次	20号竪穴	磨製石鏃	結晶片岩	2.25	2.1	0.2	1.8		20号住
第92図	424	4次	21号竪穴	打製石鏃	ｻﾇｶﾅ	2.65	1.9	0.5	2.2		21号住
第94図	426	4次	22号竪穴	打製石鏃	ｻﾇｶﾅ	2.1	1.7	0.2	0.9	再加工品	22号住
第98図	432	4次	25号竪穴	打製石鏃	黒曜石	1.4	1.3	0.3	0.7		25号住
第98図	433	4次	25号竪穴	磨製石鏃	蛇紋岩	1.5	1.3	0.1	0.6		25号住
第101図	437	4次	28号竪穴	打製石鏃	鹿島産黒曜石	2.4	1.4	0.3	1.2		28号住　6pit
第103図	456	4次	29号竪穴	打製石鏃	結晶片岩	2.2+α	1.9+α	0.5+α	3.4		29号住 2
第103図	457	4次	29号竪穴	打製石鏃	鹿島産黒曜石	2.3	1.7	0.3	0.9		29号住
第103図	458	4次	29号竪穴	磨製石鏃	結晶片岩	2.8+α	1.5+α	0.2	1.4		29号住
第103図	459	4次	29号竪穴	磨製石鏃	蛇紋岩	1.5	1.8+α	0.25	0.8		29号住
第103図	460	4次	29号竪穴	敲石	砂岩	9.4+α	4.8+α	5.85	344.5		29号住
第104図	461	4次	30号竪穴	磨製石鏃	頁岩	1.5+α	0.9	0.2	0.7		30号住
第104図	462	4次	30号竪穴	磨製石鏃	蛇紋岩	1.5+α	0.9	0.25	0.6		30号住
第118図	493	4次	一括	打製石鏃	鹿島産黒曜石	2.5+α	1.4	0.5	1.3		表採
第118図	494	4次	一括	打製石鏃	ｻﾇｶﾅ	1.6	1.4	1.35	0.6		
第118図	495	4次	一括	打製石鏃	鹿島産黒曜石	1.4	1.3	0.2	0.5		18号墓
第118図	496	4次	一括	打製石鏃	鹿島産黒曜石	2.0+α	1.9	0.6	1.9		
第118図	497	4次	一括	打製石鏃	ﾁｬｰﾄ	2.3+α	1.6+α	0.4	1.4		
第118図	498	4次	一括	磨製石鏃	結晶片岩	3.3	1.4	0.2	1.3		14号墓
第118図	499	4次	一括	剥片	黒曜石	2.3	3.0	0.8	3.3		

第 27 表　遺物一覧表石器（2）

図版番号	遺物番号	調査次数	遺構	種類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	遺物注記
第 118 図	500	4 次	一括	石錐?	片岩	6.5+ α	9.3+ α	0.5	63.0		表土
第 118 図	501	4 次	一括	石斧	泥岩	23.8	20.5	4.5 ～ 7.6		中世以降か?	第 4 表土層
第 121 図	509	5 次	1 号竪穴	打製石鏃	チャート	2.2	1.5	0.3	0.9		1 号住
第 121 図	510	5 次	1 号竪穴	石鏃	安山岩	10.6+ α	20.2+ α	7.9	2450		1 号ピット
第 123 図	520	5 次	3 号竪穴	磨製石鏃	泥岩	2.3+ α	1.1	0.2	0.8		3 号
第 123 図	521	5 次	3 号竪穴	磨製石鏃	泥岩	3.0	1.5	0.3	1.8		3 号 7
第 123 図	522	5 次	3 号竪穴	磨製石鏃	泥岩	2.8	1.6	0.25	1.4		3 号
第 123 図	523	5 次	3 号竪穴	磨製石鏃	泥岩	1.2	1.2	0.25	0.4		3 号
第 123 図	524	5 次	3 号竪穴	打製石鏃	鹿島産黒曜石	1.3	1.3	0.3	0.3		3 号　幾土中
第 123 図	525	5 次	3 号竪穴	打製石鏃	鹿島産黒曜石	1.6	1.5	0.3	0.7		3 号
第 123 図	526	5 次	3 号竪穴	打製石鏃	鹿島産黒曜石	1.9	1.9	0.3	1.1		3 号 17
第 123 図	527	5 次	3 号竪穴	打製石鏃	泥岩	2.1	1.7	0.3	0.8		3 号住
第 123 図	528	5 次	3 号竪穴	打製石鏃	鹿島産黒曜石	2.3	1.5	0.5	1.3		3 号
第 123 図	529	5 次	3 号竪穴	打製石鏃	鹿島産黒曜石	2.7	1.8	0.7	2.7		3 号住　上部
第 123 図	530	5 次	3 号竪穴	打製石鏃	鹿島産黒曜石	2.3	2.1	0.4	1.6		3 号 7
第 125 図	539	5 次	4 号竪穴	敲石	泥岩	8.1	2.05	1.2	33.6		4 号
第 125 図	540	5 次	4 号竪穴	磨製石斧	泥岩	10.3	3.8	1.5	90.8		4 号 19
第 125 図	541	5 次	4 号竪穴	打製石鏃	鹿島産黒曜石	1.9	1.8	0.3	1.0		4 号 22
第 125 図	542	5 次	4 号竪穴	磨製石鏃	泥岩	1.2	1.3	0.2	0.4		4 号 21
第 127 図	545	5 次	10 号竪穴	磨製石鏃	泥岩	2.3	2.2	0.15	0.6		10 号 1
第 127 図	546	5 次	10 号竪穴	打製石鏃	鹿島産黒曜石	1.8	1.1	0.3	0.5		10 号 2
第 129 図	552	5 次	12 号竪穴	打製石鏃	金山産チャート	1.1	1.5	0.2	0.3		12 号
第 129 図	553	5 次	12 号竪穴		安山岩	90+ α	5.0+ α	6.6	2538		12 号
第 129 図	554	5 次	12 号竪穴	敲石	安山岩	7.9	6.9	4.9	436.7		12 号
第 129 図	555	5 次	12 号竪穴	敲石	花崗質岩	9.4+ α	5.5+ α	4.75	327.9		12 号
第 131 図	560	5 次	13 号竪穴	磨製石鏃	緑泥片岩	1.9+ α	1.3+ α	0.15	0.8		13 号
第 131 図	561	5 次	13 号竪穴	打製石鏃	チャート	1.7	1.5	0.3	0.6		13 号床
第 135 図	571	5 次	16 号竪穴	打製石鏃	ガラス?	2.2	1.4	0.3	1.1		16 号
第 135 図	572	5 次	16 号竪穴	敲石	泥岩	4.9	3.6	0.7 ～ 1.3	35.3		16 号
第 135 図	573	5 次	16 号竪穴	磨製石斧	緑泥片岩	5.0	2.6	0.5	10.1	未成品	16 号
第 135 図	574	5 次	16 号竪穴	磨製石鏃	泥岩	3.15+ α	1.3	0.5	3.1		16 号
第 135 図	575	5 次	16 号竪穴	磨製石鏃	結晶片岩	1.7+ α	1.3	0.2	0.9		16 号
第 141 図	593	5 次	5 号土坑	敲石	安山岩	9.2 +α	8.0 +α	4.0	593.3		5 号壁（貯）
第 147 図	612	5 次	8 号土坑	ｽﾗｲﾄﾞ	チャート	2.4	2.5	1.2	7.2		8 号　穴
第 153 図	628	5 次	20 号土坑	石鏃	鹿島産黒曜石	1.9	1.4	0.5	1.0		20 号住　上部
第 156 図	634	5 次	一括	磨製石鏃	緑泥片岩	2.7	1.2	0.1	0.6		S 223
第 156 図	635	5 次	一括	磨製石鏃	緑泥片岩	2.4	1.1	0.15	0.7		北側
第 156 図	636	5 次	一括	打製石鏃	堆積土 泥岩	2.0	1.8	0.5	2.3		西側紙張区　表土
第 156 図	637	5 次	一括	打製石鏃	鹿島産黒曜石	2.4	0.9	0.4	1.0		18 号　南穴南上
第 156 図	638	5 次	一括	円石	安山岩	90+ α	10.1+ α	5.8	793.5		西側紙張区
第 159 図	647	6 次	1 号竪穴	磨製石鏃	緑泥片岩	3.0	1.4	0.2	1.4		1 号住　ヶ面
第 159 図	648	6 次	1 号竪穴	磨石	蛇紋岩	12.2	10.1	5.0	950		1 号住
第 161 図	657	6 次	2 号竪穴	石版?	片岩	6.2	10.9	0.55	468		2 号住
第 161 図	658	6 次	2 号竪穴	敲石	安山岩	5.5	5.1	4.6	144.5		2 号住　A 面
第 161 図	659	6 次	2 号竪穴	磨製石鏃未成品	結晶片岩	4.2	2.1	0.35	4.9		2 号住床内
第 161 図	660	6 次	2 号竪穴	石錐	サヌカイト	2.0	1.8	0.4	1.4		2 号住床内
第 161 図	661	6 次	2 号竪穴	打製石鏃	軟質岩	3.2	0.6	0.2	1.4		2 号住　柱穴
第 161 図	662	6 次	2 号竪穴	磨製石鏃	緑泥片岩	3.2	1.4	0.25	1.5		2 号住
第 162 図	663	6 次	2 号竪穴	石柱	ホルンフェルス	5.5	4.8	3.3	139.9		2 号住
第 164 図	671	6 次	3 号竪穴	台石	砂岩	20.2+ α	22.2	5.5	4000		3 号住
第 164 図	672	6 次	3 号竪穴	石柱	鹿島産黒曜石	5.9	3.9	2.35	48.5		3 号住床
第 167 図	694	6 次	4 号竪穴	石錐	サヌカイト	1.3	1.8	0.25	0.5		4 号住
第 167 図	695	6 次	4 号竪穴	石錐	鹿島産黒曜石	1.5	1.25	0.1	0.3		4 号住床堆
第 167 図	696	6 次	4 号竪穴	磨製石鏃	緑泥片岩	3.25	1.4	0.25	1.7		4 号住
第 167 図	697	6 次	4 号竪穴	研磨?小礫	蛇紋岩	1.9	1.2	0.8	3.5		4 号住
第 167 図	698	6 次	4 号竪穴	打製石斧	緑泥片岩	8.4	5.8	1.3	115.5		4 号住
第 167 図	699	6 次	4 号竪穴	磨石	砂岩	14.8+ α	17.4+ α	8.5	2570		4 号住
第 169 図	715	6 次	5 号竪穴	石錐	鹿島産黒曜石	1.95	2.05	0.5	1.8		5 号住床
第 174 図	740	6 次	7 号竪穴	敲石?研石	ホルンフェルス	4.2	2.8	0.8	29.1		7 号住
第 174 図	741	6 次	7 号竪穴	石?凹,凸?研石	ホルンフェルス	4.7	1.2	1.0	10.6		7 号住　A 面
第 174 図	742	6 次	7 号竪穴	磨製石鏃未成品		4.9	3.0	0.6	20.7		7 号住
第 174 図	743	6 次	7 号竪穴	磨石　敲石		10.4	8.6	6.6	820		7 号住　上底
第 174 図	744	6 次	7 号竪穴	敲石	安山岩	12.4	4.35	3.2	258		7 号住
第 174 図	745	6 次	7 号竪穴	浮子	軽石	10.8	7.2	4.4	65.5		7 号住
第 174 図	746	6 次	7 号竪穴	錘?	鹿島産黒曜石	3.5	5.6	2.1	30.4		7 号住床
第 174 図	747	6 次	7 号竪穴	石斧	鹿島産黒曜石	2.3	2.5	3.0	17.9		7 号住床　B 面
第 175 図	755	6 次	8 号竪穴	磨製石鏃未成品	頁岩?	5.0	2.75	0.8	15.5		8 号住床内　北側出土
第 177 図	760	6 次	8 号竪穴	石錐	鹿島産黒曜石	1.6	1.5	0.8	0.8	風化著しい	9 号住床　A 面
第 177 図	761	6 次	9 号竪穴	磨?研?製石斧	凝灰質岩	5.0	6.9	1.0	40.1		9 号住床堆
第 177 図	762	6 次	9 号竪穴	磨製石斧	軟質岩	8.7	6.0	1.3	108.8		9 号住床堆
第 181 図	776	6 次	13 号竪穴	石錐	鹿島産黒曜石	2.4	1.5	4.0	1.4		13 号住床
第 181 図	777	6 次	13 号竪穴	穿孔具?石錘?	砂岩	8.2	1.8	1.9	31.2		13 号
第 182 図	784	6 次	14 号竪穴	石錐	チャート	1.3	2.0	0.35	0.8		14 号住床
第 184 図	794	6 次	15 号竪穴	磨製石鏃未成品	軟質岩	5.75	2.4	0.4	8.5		15 号住
第 184 図	795	6 次	15 号竪穴	打製石斧		20	5.9	1.8	225.9		15 号住床内　床面より
第 186 図	803	6 次	18 号竪穴	石剣	緑色片岩	4.7	2.7	0.3	6.0		18 号住
第 186 図	804	6 次	18 号竪穴	敲石	砂岩	4.8	4.8	2.0	65.0		18 住床内
第 196 図	859	6 次	一括	磨製石鏃	緑泥片岩	1.95	1.2	0.15	0.7		東側紙張部
第 196 図	860	6 次	一括	磨製石鏃	緑泥片岩	2.6	1.2	0.2	1.4		E 柵南西部
第 196 図	861	6 次	一括	敲石	砂岩	5.8	3.6	1.9	40.3		
第 196 図	862	6 次	一括	石錐	チャート	2.7	1.6	0.55	2.0		表採
第 196 図	863	6 次	一括	石錐未成品	鹿島産黒曜石	2.3	1.75	0.6	2.0		東側紙張区
第 196 図	864	6 次	一括	石錐	鹿島産黒曜石	2.0	1.9	0.25	0.9		東側紙張区
第 196 図	865	6 次	一括	スクレイパー	サヌカイト	6.8	3.4	1.2	56.4		表採
第 196 図	866	6 次	一括	楔形石器	鹿島産黒曜石	2.9	2.0	1.1	6.8		東側紙張区
第 196 図	867	6 次	一括	楔形石器	鹿島産黒曜石	3.4	3.7	1.1	15.2		東側紙張区
第 197 図	868	6 次	一括	敲石		12.0+ α	9.6	4.5	710		一括
第 197 図	869	6 次	一括	敲石　磨石		9.9+ α	11.1	6.7	750		一括
第 200 図	879	7 次	1 号竪穴	磨製石鏃	緑泥片岩	3.1	1.4	0.2	1.6		1 号住床排内
第 200 図	880	7 次	1 号竪穴	磨製石鏃	結晶片岩	5.7	3.4	0.7	24.8	未成品	1 号住床内土層

第 28 表　遺物一覧表石器（3）

図版番号	遺物番号	調査次数	遺構	種類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	遺物注記
第 200 図	881	7 次	1 号竪穴	紡石	砂岩	7.0	2.1	1.7	34.7		1 号住
第 200 図	882	7 次	1 号竪穴	二次加工剥片	鹿島産黒曜石	3.9	1.7	0.9	5.3		第 1 号住居内
第 201 図	883	7 次	1 号竪穴	石皿	安山岩	10.9	10.9	8.4	936.8		1 号住炉脇内
第 201 図	884	7 次	1 号竪穴	凹み石	安山岩	5.4+α	8.0	3.6	195.6		1 号住　炉脇付近
第 201 図	885	7 次	1 号竪穴	紡石	安山岩	8.8	7.7	5.7	569.1		1 号住居内土壌
第 203 図	893	7 次	3 号竪穴	磨製石鏃	緑泥片岩	2.4	1.6	0.2	0.9		3 号住居住跡
第 207 図	900	7 次	6 号竪穴	使用痕ある剥片	鹿島産黒曜石	1.7	2.5	0.5	2.3		6 号住
第 207 図	901	7 次	6 号竪穴	研磨された小礫	蛇紋岩	1.3	0.9	0.6	0.9		6 号住
第 207 図	925	7 次	7 号竪穴	石鏃	鹿島産黒曜石	1.6	1.1	0.3	0.6	未成品	7 号住
第 207 図	926	7 次	7 号竪穴	磨製石鏃	結晶片岩	4.8	3.0	0.6	13.1	未成品	7 号住
第 207 図	927	7 次	7 号竪穴	磨製石鏃	結晶片岩	4.6	2.4	0.4	6.4	未成品	7 号住
第 207 図	928	7 次	7 号竪穴	磨製石鏃	結晶片岩	4.4	2.6	0.7	8.8	未成品	7 号住
第 207 図	929	7 次	7 号竪穴	磨製石鏃	結晶片岩	3.9	2.1	0.2	2.5	未成品	7 号住
第 208 図	932	7 次	8 号住	磨製石鏃	結晶片岩	2.2+α	1.6	0.2	1.4		8 号住
第 211 図	947	10 号竪穴	磨製石鏃	結晶片岩	砂岩	3.0	1.4	0.2	1.7		10 号住　床面
第 211 図	948	7 次	10 号竪穴	磨製石鏃	立石産輝緑凝灰岩	1.9	1.0	0.2	0.5		第 10 住埋土部
第 211 図	949	7 次	10 号竪穴	磨製石鏃	結晶片岩	3.5	2.4	0.5	5.2	未成品	10 号住
第 211 図	950	7 次	10 号竪穴	石皿?	立石産輝緑凝灰岩	2.9	5.3	0.6	13.5		10 号住
第 211 図	951	7 次	10 号竪穴	加工痕のある礫	安山岩	9.2	5.6	2.2	118.3		10 号住
第 212 図	972	7 次	11 号竪穴	磨製石鏃	結晶片岩	2.0	1.7	0.2	0.8		11 号住　炉脇付近
第 212 図	973	7 次	11 号竪穴	磨製石鏃	結晶片岩	3.7	1.7	0.3	3.7	未成品	11 号住
第 212 図	974	7 次	11 号竪穴	磨製石鏃	結晶片岩	3.6	3.7	0.4	9.1	未成品	11 号住
第 212 図	975	7 次	11 号竪穴	紡石	砂岩	9.1	5.1	3.7	169.7		11 号住内
第 214 図	986	7 次	12 号竪穴	磨製石鏃	立石産輝緑凝灰岩	2.2	1.4	0.2	1.0		12 号住　土壌
第 214 図	987	7 次	12 号竪穴	研磨された小礫	蛇紋岩	2.3	1.8	0.4	2.7		12 号住
第 214 図	988	7 次	12 号竪穴	二次加工剥片	鹿島産黒曜石	2.9	2.5	1.0	7.6		12 号住床跡遺構直上
第 215 図	991	7 次	13 号竪穴	石鏃	鹿島産黒曜石	1.8	1.9	0.5	1.4		6-D　13 号竪穴
第 217 図	998	7 次	14 号竪穴	磨製石鏃	立石産輝緑凝灰岩	5.5	1.4	0.2	3.9		14 号住（3 回目）
第 217 図	999	7 次	14 号竪穴	石鏃	ｷﾅｺ小	3.3	1.6	0.5	2.2		14 号住（3 回目）
第 217 図	1000	7 次	14 号竪穴	磨製石鏃	結晶片岩	2.1	1.1	0.3	0.7	未成品	14 号住　Pit1
第 219 図	1006	7 次	15 号竪穴	磨製石鏃	緑泥片岩	3.7	1.5	0.5	3.3	未成品	15 号住　床面
第 219 図	1007	7 次	15 号竪穴	尖頭状石器	鹿島産黒曜石	2.0	1.7	0.4	1.3		15 号住　炉跡
第 219 図	1008	7 次	15 号竪穴	ｷﾅｺ	安山岩	2.1	1.7	0.3	0.5		15 号住（床面）
第 227 図	1030	7 次	19 号竪穴	磨製石鏃	結晶片岩	2.8	0.9	0.2	1.0		19 号住床
第 227 図	1031	7 次	19 号竪穴	磨製石鏃	緑泥片岩	2.9	1.6	0.2	1.3		19 号住床　埋土
第 227 図	1032	7 次	19 号竪穴	磨製石鏃	結晶片岩	1.4	1.5	0.2	0.6		19 号住床
第 227 図	1033	7 次	19 号竪穴	磨製石鏃	結晶片岩	1.6	1.3	0.15	0.6		第 19 住床　西半分 2 層目
第 231 図	1048	7 次	24 号竪穴	磨製石鏃	結晶片岩	3.6	2.0	0.3	3.6	未成品	24 号住
第 231 図	1049	7 次	24 号竪穴	石鏃	鹿島産黒曜石	3.2	1.2	0.6	2.4		24 号住　Pit2
第 232 図	1062	7 次	25 号竪穴	磨製石鏃	粘板岩	2.3	1.7	0.3	1.6		25 号住
第 232 図	1063	7 次	25 号竪穴	紡石	砂岩	4.5	2.65	1.7	28.9		25 号住　西側土坑
第 232 図	1064	7 次	25 号竪穴	紡石	粘板岩	16.8	4.8	2.8	327.4		第 25 号住　床面
第 232 図	1065	7 次	25 号竪穴	敲石磨石	安山岩	8.8+α	10.0	4.2	481.0		25 号住　西南部土坑
第 232 図	1066	7 次	25 号竪穴	台石	角閃石安山岩	30.5	18.1	9.5	6110		25 号住　中央部土坑
第 234 図	1079	7 次	26 号竪穴	紡石	泥岩	3.8	2.4	2.2	29.5		26 号住　床面
第 237 図	1088	7 次	27 号竪穴	磨製石鏃	立石産輝緑凝灰岩	5.7	1.7	0.3	4.1		27 号住　床面
第 237 図	1089	7 次	27 号竪穴	磨製石鏃	結晶片岩	1.8	1.6	0.2	0.8		27 号住
第 237 図	1090	7 次	27 号竪穴	磨製石鏃	立石産輝緑凝灰岩	2.2	1.7	0.3	1.6		27 号住
第 237 図	1091	7 次	27 号竪穴	磨製石鏃	頁岩	3.5	1.9	0.2	2.5		27 号住
第 237 図	1092	7 次	27 号竪穴	磨製石鏃	結晶片岩	4.8	2.5	0.5	8.0	未成品	27 号住　床面
第 237 図	1093	7 次	27 号竪穴	磨製石鏃	ｷﾅｺ小	3.3	2.0	0.5	4.4	未成品	27 号住床　上部
第 237 図	1094	7 次	27 号竪穴	尖頭状石器	鹿島産黒曜石	4.2	3.2	1.0	13.5		27 号住
第 237 図	1095	7 次	27 号竪穴	石皿	小国産黒曜石	2.5	4.1	1.0	7.8		27 号住
第 237 図	1096	7 次	27 号竪穴	使用痕ある剥片	鹿島産黒曜石	2.5	1.3	0.6	1.7		27 号住
第 238 図	1111	7 次	29 号竪穴	石皿	安山岩	18.4	22.1	8.8	5380.0		29 号住
第 238 図	1112	7 次	29 号竪穴	錘石	安山岩	13.9	6.5	3.3	456.6		29 号住　中央部西側
第 238 図	1113	7 次	29 号竪穴	石鏃	鹿島産黒曜石	1.8	2.4	0.4	1.4		29 号
第 245 図	1139	7 次	3 号土坑	扁平打製石斧	安山岩	6.3+α	5.4	1.4	65.5		上壌 3 上部
第 248 図	1156	7 次	4 号土坑	抉入柱状片刃石斧	泥岩	7.0	3.6	1.0	34.6		4-C
第 248 図	1157	7 次	4 号土坑	石鏃	結晶片岩	4.0	1.5	0.6	3.7	未成品	土壌　4-B
第 248 図	1158	7 次	4 号土坑	扁平打製石斧	頁岩	15.1	7.4	1.5	230.0		土壌 4B-a
第 248 図	1159	7 次	4 号土坑	錘石	砂岩	5.5	4.6	4.0	75.9		土壌　4-C
第 250 図	1162	7 次	4 号袋状ピット	敲石・磨石	砂岩	10.5+α	8.1+α	5.0+α	460		土坑 4-A　袋状 Pit
第 250 図	1163	7 次	4 号袋状ピット	石鏃	凝灰岩	8.9+α	9.2+α	3.5	270		土坑 4-A　袋状 Pit
第 253 図	1178	7 次	6 号土坑	石斧	砂岩	24	3.9	0.7	11.8		土壌　6-B
第 253 図	1179	7 次	6 号土坑	ノ状片刃石斧	粘板岩	5.6	2.7	1.6	29.4		土壌　6-A
第 255 図	1183	7 次	7 号土坑	紡石	凝灰岩	6.6+α	7.8+α	4.6+α	290		土坑 7-C
第 257 図	1191	7 次	8 号土坑	磨製石鏃	結晶片岩	2.6	1.2	0.3	1.2		土壌　C8-B
第 257 図	1192	7 次	8 号土坑	石鏃	鹿島産黒曜石	1.2	0.6	7.0	1.1		土坑 8-
第 257 図	1193	7 次	8 号土坑	太型蛤刃石斧	緑泥片岩	9.9+α	5.9	3.7	349.3		土坑 8
第 257 図	1194	7 次	8 号土坑	台石	安山岩	23.7	22.4	5.5	4.45		土坑 8
第 258 図	1196	7 次	8 号土坑	紡石	凝灰岩	19.8	6.8	7.2	1.0		土坑 8
第 258 図	1196	7 次	8 号土坑	石棒	緑泥片岩	15.5	8.6	6.9	1.15		土坑 8
第 260 図	1209	7 次	9 号土坑	磨製石鏃	結晶片岩	2.0	3.2	0.3	2.7		土壌 9
第 260 図	1210	7 次	9 号土坑	紡石	砂岩	7.9+α	7.0+α	4.1	307.5	厚さ：2.1 ～ 4.1	土坑 9
第 263 図	1219	7 次	12 号土坑	紡石	凝灰岩	7.5	6.2+α	2.5	114.9		土坑 12
第 266 図	1240	7 次	14 号土坑	石鏃	金山産ｹﾞﾙﾏｲﾄ	1.8+α	1.2	0.3	0.9		土坑 14-B
第 268 図	1246	7 次	16 号土坑	投弾	安山岩	6.6	5.3	4.9	221.4		土坑 16
第 268 図	1247	7 次	16 号土坑	台石	砂岩	14.5+α	16.6	5.3	2100.0		土坑 16
第 272 図	1282	7 次	18 号土坑	磨製石斧	結晶片岩	2.6	2.8	0.3	4.4		土壌 18
第 272 図	1283	7 次	18 号土坑	磨石器	鹿島産黒曜石	3.1	1.3	0.9	3.7		土壌 18
第 273 図	1284	7 次	18 号土坑	敲石	角閃石安山岩	7.8+α	10.3	5.4	502.0		土坑 18
第 273 図	1285	7 次	18 号土坑	台石	角閃石安山岩	21.9	29.4	7.8	8750		18 号土坑 C
第 275 図	1293	7 次	19 号土坑	石鏃	鹿島産黒曜石	1.3	1.4	0.3	0.6		土坑 19
第 276 図	1300	7 次	20 号土坑	磨製石鏃	結晶片岩	2.8	2.1	0.3	2.5	未成品	土壌 20
第 276 図	1301	7 次	20 号土坑	石鏃	鹿島産黒曜石	2.7	1.4	0.5	1.8		土坑 20
第 277 図	1310	7 次	21 号土坑	二次加工剥片	鹿島産黒曜石	1.6	2.3	0.7	2.6		土壌 21
第 279 図	1318	7 次	22 号土坑	石鏃	鹿島産黒曜石	2.2	1.1	0.3	0.9		土坑 22
第 279 図	1319	7 次	22 号土坑	石皿	安山岩	11.0+α	8.7+α	9.1	1350.0		土坑 22
第 281 図	1333	7 次	23 号土坑	石鏃	鹿島産黒曜石	2.0	1.6	0.4	1.1		土坑 23

第 29 表　遺物一覧表石器（4）

図版番号	遺物番号	調査次数	遺構	種類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	遺物注記
第 281 図	1335	7 次	23 号土坑	磨製石鏃	結晶片岩	3.8	1.5	0.3	1.8	未成品	土壙 23
第 281 図	1335	7 次	23 号土坑	凹み石	安山岩	96	8.0	6.5	5310		土坑 23
第 281 図	1336	7 次	23 号土坑	投弾	安山岩	6.5	5.6	4.8	239.8		土坑 23
第 281 図	1337	7 次	23 号土坑	台石	角閃石安山岩	229	36.7+	10.5	8820		土坑 23 の直上 (+9cm)
第 285 図	1342	7 次	25 号土坑	磨製石鏃	結晶片岩	2.2	1.2	0.3	1.0		土壙 25
第 285 図	1343	7 次	25 号土坑	砥石	砂岩	5.3	4.3	1.4	50.8		土坑 25
第 285 図	1344	7 次	25 号土坑	石鏃	鞍馬産黒曜石	2.4	2.9	0.8	5.0		土壙 25
第 287 図	1348	7 次	26 号土坑	石皿	安山岩	29.9	19.5	10.8	16000.0		土坑 26
第 291 図	1381	7 次	27 号土坑	石鏃	鞍馬産黒曜石	2.1	1.4	0.3	0.7		土坑 27
第 291 図	1382	7 次	27 号土坑	石鏃	鞍馬産黒曜石	1.6	2.4	0.75	2.4		土坑 27
第 291 図	1383	7 次	27 号土坑	二次加工剥片	鞍馬産黒曜石	3.2	2.3	1.0	6.4		土壙 27
第 291 図	1384	7 次	27 号土坑	不明品	軟質岩	16.6	14.6	10.25	1143	研磨面あり	土坑 27 敲状 Pit
第 293 図	1395	7 次	28 号土坑	凹み石	安山岩	12.7	8.6	5.2	840.0		土坑 28
第 293 図	1396	7 次	28 号土坑	敲石	安山岩	16.0	7.4	5.5	870.0		土坑 28
第 296 図	1400	7 次	30 号土坑	石鏃	鞍馬産黒曜石	1.5+	g	0.3	1.0		土坑 30
第 296 図	1401	7 次	30 号土坑	磨製石鏃	結晶片岩	6.0	3.0	0.3	8.7	未成品	土壙 30
第 296 図	1402	7 次	30 号土坑	剥片	結晶片岩	3.6	5.8	0.4	12.3		土壙 30
第 299 図	1405	7 次	34 号土坑	敲石	砂岩	12.7	6.0	4.6	530		土坑 34
第 303 図	1428	7 次	37 号土坑	磨製石鏃	結晶片岩	1.0	1.3	0.2	0.6		土壙 37
第 303 図	1429	7 次	37 号土坑	石鏃	鞍馬産黒曜石	1.5	1.4+	0.4	0.5		土坑 37
第 303 図	1430	7 次	37 号土坑	石鏃	鞍馬産黒曜石	2.3	2.0	0.35	1.4		土坑 37
第 303 図	1431	7 次	37 号土坑	石鏃	鞍馬産黒曜石	2.3+	g	0.6	2.6		土坑 37
第 303 図	1432	7 次	37 号土坑	石鏃	鞍馬産黒曜石	2.8+	g	1.7+	0.6	20	土坑 37
第 307 図	1457	7 次	39 号土坑	石斧	安山岩	7.5+	g	6.9+	g	1.2	118.4	土坑 39
第 307 図	1458	7 次	39 号土坑	凹石	安山岩	11.3	9.4	5.7	830		土坑 39
第 311 図	1462	7 次	41 号土坑	石鏃	鞍馬産黒曜石	2.1+	g	1.5	0.4	1.1	土坑 41
第 313 図	1465	7 次	43 号土坑	敲石・磨石	安山岩	10.3	9.2	6.2	870		土坑 43
第 314 図	1472	7 次	45 号土坑	石鏃	鞍馬産黒曜石	2.6+	g	1.7	0.5	1.5	土坑 45
第 315 図	1473	7 次	46 号土坑	磨製石鏃	安山岩	2.5	1.7	0.5	2.4	未成品	土壙 46
第 315 図	1474	7 次	46 号土坑	磨製石鏃	結晶片岩	3.8	2.4	0.4	4.7	未成品	土壙 46
第 315 図	1475	7 次	46 号土坑	石鏃	安山岩	12.0	2.2	0.4	13.1		土壙 46
第 315 図	1476	7 次	46 号土坑	石鏃	安山岩	3.8	1.0	0.2	1.0		土壙 46
第 315 図	1477	7 次	46 号土坑	石鏃	安山岩	6.0	2.9	0.4	7.4		土壙 46
第 315 図	1478	7 次	46 号土坑	石鏃	安山岩	8.2	3.4	0.4	18.4		土壙 46
第 315 図	1479	7 次	46 号土坑	石鏃	安山岩	7.4	3.2	0.4	12.8		土壙 46
第 315 図	1480	7 次	46 号土坑	石鏃	安山岩	4.7	2.6	0.4	6.2		土壙 46
第 315 図	1481	7 次	46 号土坑	石鏃	安山岩	6.5	2.4	0.6	8.8		土壙 46
第 315 図	1482	7 次	46 号土坑	石鏃	安山岩	8.8	3.3	0.5	12.5		土壙 46
第 315 図	1483	7 次	46 号土坑	石鏃	安山岩	4.4	2.2	0.4	4.7		土壙 46
第 316 図	1484	7 次	46 号土坑	石鏃	安山岩	3.1	1.9	0.3	1.9		土壙 46
第 316 図	1485	7 次	46 号土坑	石鏃	安山岩	3.0	2.3	0.4	3.9		土壙 46
第 316 図	1486	7 次	46 号土坑	石鏃	安山岩	2.9	2.8	0.2	2.3		土壙 46
第 318 図	1487	7 次	47 号土坑	火打石	鉄石英	4.8	3.0	2.1	33.4		土坑 47
第 331 図	1502	7 次	60 号土坑	石錘	軟質岩	9.1	4.3	1.6	88.0		土壙 60
第 331 図	1503	7 次	60 号土坑	敲石	安山岩	11.5	10.9	6.4	1040		土坑 60
第 331 図	1504	7 次	60 号土坑	敲石・磨石	安山岩	12.65	10.0	6.0	1120		土坑 60
第 334 図	1517	7 次	2 号溝	敲石・磨石	安山岩	10.6	8.5	5.65	770		2 号溝
第 334 図	1518	7 次	2 号溝	磨石	安山岩	12.4	10.3	6.4	1220		2 号溝
第 334 図	1519	7 次	2 号溝	磨製石鏃	結晶片岩	4.4	2.1	0.4	4.1	未成品	溝中
第 334 図	1520	7 次	2 号溝	石鏃	ﾁｬｰﾄ質安山岩	2.7	1.6	0.3	1.2	未成品	発掘区西南部溝中より
第 334 図	1521	7 次	2 号溝	石斧	スレート	7.3+	g	5.3	1.2	48.0	2 号溝
第 334 図	1522	7 次	2 号溝	二次加工剥片	鞍馬産黒曜石	3.0	1.5	0.7	3.2		溝中
第 334 図	1523	7 次	2 号溝	二次加工剥片	鞍馬産黒曜石	2.6	1.7	0.6	2.4		発掘区西南部溝中　主部
第 334 図	1524	7 次	2 号溝	石鏃	鞍馬産黒曜石	4.3	6.9	2.5	22.1		西南部　溝中
第 335 図	1531	7 次	2 号溝	石皿	凝灰岩	9.1	5.4	3.1	117.4		2 号住
第 337 図	1579	7 次	一括	柱状片刃鉄入石斧	頁岩	7.9+	g	3.8	1.4	71.7	表採
第 337 図	1580	7 次	一括	柱状片刃石斧	頁岩	6.8	1.6	1.2	23.9		表採
第 338 図	1581	7 次	一括	曲入柱状片刃石斧	頁岩	6.8	3.8	2.9	139.0		表採
第 338 図	1582	7 次	一括	石皿?	安山岩	6.1	6.3	1.0	51.3		遺構面上（覆土）
第 338 図	1583	7 次	一括	磨製石鏃	安山岩	2.0	1.0	0.2	0.5		発掘区東北部覆土
第 338 図	1584	7 次	一括	磨製石鏃	安山岩	2.8	1.3	0.3	1.4		発掘区北西部覆土
第 338 図	1585	7 次	一括	磨製石鏃	結晶片岩	7.6	3.3	0.7	21.3	未成品	北側覆土
第 338 図	1586	7 次	一括	石錘	ﾎﾙﾝﾌｪﾙｽ	2.9	1.9	0.4	1.7		6 号土壙付近
第 338 図	1587	7 次	一括	石鏃	鞍馬産黒曜石	2.4	1.6	0.4	1.6		表採
第 338 図	1588	7 次	一括	石鏃	鞍馬産黒曜石	2.4	2.0	0.6	2.1		Pit90
第 338 図	1589	7 次	一括	石鏃	ﾁｬｰﾄ	2.5+	g	1.8	0.6	2.8	Pit110
第 338 図	1590	7 次	一括	石鏃	鞍馬産黒曜石	1.5+	g	0.9+	g	0.2	0.2	Pit93
第 338 図	1591	7 次	一括	火打ち石	鞍馬産黒曜石	5.7	2.75	1.3	17.0		覆土
第 338 図	1592	7 次	一括	磨製石鏃	結晶片岩	3.5	2.0	0.6	5.5	未成品	発掘区西部覆土
第 338 図	1593	7 次	一括	砥石	凝灰岩	5.5+	g	4.4+	g	3.9	83.2	覆土
第 338 図	1594	7 次	一括	砥石	砂岩	7.6	5.1	4.4	185.1		表採
第 338 図	1595	7 次	一括	砥石	軟質岩	8.1+	g	3.2	25	100	遺構面上（??土）
第 339 図	1596	7 次	一括	二次加工剥片	鞍馬産黒曜石	2.3	2.5	1.0	4.8		西南部　溝中　床面
第 339 図	1597	7 次	一括	石鏃	鞍馬産黒曜石	3.4	4.3	3.4	50.1		覆土
第 339 図	1598	7 次	一括	台石	角閃石安山岩	11.6	10.4	5.1	1050		遺構不明
第 339 図	1599	7 次	一括	磨石	角閃石安山岩	11.4	10.5	6.8	1040		Pit51　付近遺構上
第 339 図	1600	7 次	一括	砥石	凝灰岩	13.1	10.7	4.1	470		発掘区??土
第 340 図	1601	7 次	一括	台石	角閃石安山岩	12.5+	g	17.0+	g	6.9	2260	Pit42
第 340 図	1602	7 次	一括	敲石	角閃石安山岩	10.5	6.3	4.9	420		Pit44
第 340 図	1603	7 次	一括	磨石	軟質岩	9.0+	g	4.4	2.1	948	中央部に黒付着か	中央部?土
第 340 図	1604	7 次	一括	石錘か	凝灰岩	3.6	3.1	0.9	9.6		中央部?土
第 340 図	1605	7 次	一括	敲石	角閃石安山岩	9.8	6.2	4.2	364.1		遺構不明
第 340 図	1606	7 次	一括	敲石と磨石	砂岩	10.0	9.4	6.0	840		西側?土
第 340 図	1607	7 次	一括	台石	角閃石安山岩	17.9	16.7	7.1	2690		北側?土
第 349 図	1649	8 次	1 号溝	石鏃	鞍馬産黒曜石	2.6	1.6	0.4	2.2		1 号溝 40 中層
第 349 図	1650	8 次	1 号溝	磨製石斧		8.3	5.35	3.2	202.5		1 号溝 U
第 349 図	1651	8 次	1 号溝	台石	安山岩	37.0	23.7	8.6	11.0		SG　42
第 379 図	1669	9 次	6 号墓穴	石鏃	鞍馬産黒曜石	1.8	1.65	0.4	0.8		6 号住

第 30 表　遺物一覧表 石器（5）

図版番号	遺物番号	調査次数	遺構	種類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	遺物注記
第 379 図	1670	9 次	6 号竪穴	石鏃	姫島産黒曜石	2.35	1.8+α	0.6	1.4		6 号住
第 379 図	1671	9 次	8 号竪穴	石鏃	ｻｰﾄｰﾙ	2.6	2.75	0.6	3.6		8 号住
第 379 図	1672	9 次	6 号竪穴	扁平打製石斧	緑泥片岩	7.1	5.3	1.0	64.8		6 号竪穴表採
第 380 図	1691	9 次	9 号竪穴	不明	ｻﾅﾀｲﾄ	2.4	1.7+α	0.4	1.5		9 号住
第 383 図	1721	9 次	4 号土坑	磨製石鏃	結晶岩	3.4	1.3	0.2	1.8		土坑 498
第 383 図	1722	9 次	4 号土坑	台石	凝灰岩	12.5	8.5	3.6	430.0		土坑 4 No.65
第 384 図	1728	9 次	5 号土坑	磨製石鏃	結晶岩	1.9+α	1.3	0.25	0.9		土坑 5　一括
第 386 図	1754	9 次	9 号土坑	石鏃	姫島産黒曜石	1.9	0.8	0.4	0.9		土坑 9 No.21
第 386 図	1762	9 次	12 号土坑	磨製石鏃	結晶岩	3.05	1.9	0.15	1.5		土坑 12 No.4
第 386 図	1766	9 次	落込み 3	磨製石鏃	結晶岩	2.6+α	1.3	0.4	2.2		落込み 3
第 386 図	1767	9 次	落込み 3	敲石・魔石	砂岩	5.2	5.1	2.0	66.3		落込み 3　ふくと
第 387 図	1768	9 次	落込み 3	台石		16.4	10.4	5.55	1110		落込み 3　ふくと
第 388 図	1790	9 次	溝 2	石鏃	ｻﾅﾀｲﾄ	2.0+α	1.55	0.25	0.6		溝 2
第 388 図	1791	9 次	溝 2	石鏃	牟田黒曜石	2.25	1.4	0.4	0.9		溝 2
第 388 図	1792	9 次	溝 2	石鏃	ｻｰﾄﾙｶﾞﾗ	2.5	1.6	0.5	1.5		溝 2
第 388 図	1793	9 次	溝 2	石鏃	姫島産黒曜石	3.3	2.4	0.75	3.1		第 2 ﾚﾍﾞﾙ　4 区
第 388 図	1794	9 次	溝 2	砥石	砂岩	7.8	5.7	1.3	75.2		第 1 ﾚﾍﾞﾙ　3 区
第 388 図	1795	9 次	溝 2	錐状		3.1	2.8	1.85	11.0		第 1 ﾚﾍﾞﾙ
第 389 図	1806	9 次	一括	磨製石鏃	結晶岩	3.5	1.3	0.2	1.7		西部ﾚﾍﾞﾙ内
第 389 図	1809	9 次	一括	石鏃未成品	姫島産黒曜石	2.75	1.95	0.75	3.0		西部一括
第 389 図	1810	9 次	一括	石鏃	姫島産黒曜石	2.6	1.65	4.5	1.29		4 ｸﾞﾘｯﾄﾞ
第 389 図	1811	9 次	一括	石鏃	姫島産黒曜石	7.6	2.0	0.5	1.5		第 3 ｸﾞﾘｯﾄﾞ 188
第 389 図	1812	9 次	一括	石鏃	ｻﾅﾀｲﾄ	2.3	2.05	0.5	1.8		表土（南部斜面下二次堆積土中）
第 389 図	1813	9 次	一括	敲石・魔石	砂岩	7.0	6.2	3.5	204.6		ｸﾞﾘｯﾄﾞ 363
第 390 図	1814	9 次	一括	敲石	角閃石安山岩	7.3	6.6	6.7	227.9		表採
第 390 図	1815	9 次	一括	台石	安山岩	25.7	13.7	7.3	4030.0		第 3 ｸﾞﾘｯﾄﾞ 215
第 392 図	1830	一括	遺構不明	結晶率	凝灰岩	4.5		0.3～0.4	10.7	穿孔径：0.7cm	遺構不明
第 392 図	1831	一括	遺構不明	結晶者	凝灰岩	4.9		0.8	15.8	穿孔径：0.65cm	遺構不明

第 31 表　遺物一覧表 金属器

図版番号	遺物番号	調査次数	遺構	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	遺物注記
第 17 図	59	1 次	3 号土坑	鉄鏃	3.7	1.6	0.5	5.2		3 号住
第 36 図	177	2 次	4 号竪穴 6	鉇	11.7	1.6	0.5	19.7		Ⅱ L4　4 号住
第 46 図	248	3 次	A1 号竪穴	不明	5.1+α	1.5	0.15	12.5		1 号住　ﾋﾟｯﾄ内
第 46 図	249	3 次	A1 号竪穴	不明	5.1+α	1.7	0.15	14.2		1 号住　ﾋﾟｯﾄ内
第 76 図	386	4 次	3 号竪穴＋11 号竪穴	鑿	11.9+α	3.3+α	0.2～0.3	54.4		3 号　11 号住
第 103 図	455	4 次	29 号竪穴	鑿?	7.6	11.8	1.5	43.7		29 号住
第 123 図	519	5 次	3 号竪穴	鉄鏃	4.9+α	2.0	0.4	8.0		3 号　№15
第 125 図	538	5 次	4 号竪穴	刀子	6.1+α	1.5	0.5	5.4		4 号
第 131 図	559	5 次	13 号竪穴	鉄鏃	4.6+α	1.3	0.6	5.7		13 号床面
第 176 図	754	6 次	8 号竪穴	蛸鍛鏡片	3.6+α	4.3+α	0.4	19.3	推定径：6.3cm 孔周　内行花文鏡	8 号住跡
第 200 図	877	7 次	1 号竪穴	蛸鍛鏡片	2.2	2.6	0.4	16.6	孔周・方格規矩鏡	1 号住跡
第 200 図	878	7 次	1 号竪穴	鉄鏃	8.8				頭部刀部幅：1.8cm　刀部厚み 0.15cm	第 1 住跡掘削埋土中
第 212 図	976	7 次	11 号竪穴	刀子	4.9+α	2.6	0.2	11.7		11 号住
第 217 図	1001	7 次	14 号竪穴	鋼鏃	2.3	0.8	0.4	0.6		14 号住
第 221 図	1014	7 次	16 号竪穴	鉇	13.1+α				刀幅：1.4cm　頭厚み：0.3cm	第 16 号住床面分
第 226 図	1034	7 次	19 号竪穴	鉇	7.6+α				頭部刀部幅：1.7cm　刀部厚み 0.2cm	第 19 号住
第 253 図	1177	7 次	6 号土坑	刀子か	6.5	2.6	1.4	34.7		土坑 6A 頂
第 337 図	1572	7 次	一括	板状鉄剣?	4.6	4.2	1.3	59.0		発掘区北縁辺中央部ｱｾﾞ土
第 337 図	1573	7 次	一括	刀子	7.8		0.3			西南部埋土
第 337 図	1574	7 次	一括	鉄鏃	6.5+α				頭部刀部幅：1.9cm　刀部厚み 0.2cm	発掘区北縁辺中央部
第 337 図	1575	7 次	一括	鉄鏃	4.8+α				頭部刀部幅：1.4cm　刀部厚み 0.2cm	西北部ｱｾﾞ土⑦
第 337 図	1576	7 次	一括	鉄鏃	7.0				頭部刀部幅：2.2cm　刀部厚み 0.2cm	北西部ﾎﾞﾘｯﾄ土
第 337 図	1577	7 次	一括	鉇?	9.6+α				刀幅：1.2+α cm　頭厚み：0.5cm	遺構面上ｾﾞﾘｯﾄ
第 354 図	1652	8 次	4 号土坑	鉄鏃	4.6	1.8	0.85	8.6		4 号土坑
第 379 図	1661	9 次	4 号竪穴	刀子か	8.4+α		0.5	22.7		4 号竪穴 6
第 390 図	1817	9 次	理納土坑	巴形銅器	5.5		0.9			

第 32 表　遺物一覧表 玉類

図版番号	遺物番号	調査次数	遺構	種類	材質	長さ(cm)	幅(cm)	孔径(cm)	重さ(g)	備考	遺物注記
第 38 図	183	2 次	5 号墳穴	管玉	碧玉?	0.4+α	0.3	0.3	計測不能	孔径：0.2	5 号住
第 43 図	239	2 次	一括	管玉	碧玉	0.8	0.3	0.3	0.1		B L3　第 6 ピット
第 43 図	240	2 次	一括	管玉	碧玉	0.8	0.3	0.3	0.1		B L3　第 6 ピット
第 55 図	274	3 次	A6 号墳穴	勾玉	土製	7.0	5.0	2.3	62.2	孔径：0.5 ～ 0.7	6 号住
第 118 図	492	4 次	一括	管玉	碧石	0.9+α	0.4	孔径：0.2	0.2	色調：青緑色	表土
第 121 図	508	5 次	1 号墳穴	管玉	碧玉	1.7	0.35		0.3		1 号住
第 123 図	531	5 次	3 号墳穴	管玉	碧玉	1.35	0.4	孔径：0.15	0.4		3 号　柱穴
第 125 図	543	5 次	4 号墳穴	小玉	ガラス	0.5	0.5	0.4	計測不能	色調：青	4 号
第 171 図	719	6 次	6 号墳穴	管玉	碧玉	2.7	0.95		1.7	径 0.9	6 号住　B 面
第 214 図	984	7 次	12 号墳穴	管玉	碧玉	1.6	0.4	0.2	0.4		12 号住 竈跡東部覆土
第 214 図	985	7 次	12 号墳穴	小玉	ガラス	0.4	0.2	0.1	0.1	色調：青色	12 号住
第 232 図	1061	7 次	25 号墳穴	小玉	クロム白雲母	0.8	0.2	0.1	0.1		25 号住
第 270 図	1252	7 次	17 号土坑	管玉	クロム白雲母	0.9	0.1	0.2	0.2		土坑 17
第 337 図	1578	7 次	一括	小玉	クロム白雲母	0.5	0.2	0.1	0.1		土坑
第 390 図	1816	9 次	一括	管玉	碧玉	1.4	0.3	0.15	0.3		表採

第 33 表　遺物一覧表 土製品

図版番号	遺物番号	調査次数	遺構	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	遺物注記
第 12 図	35	1 次	5 号墳穴	ノシ	2.0	5.1	0.6	7.1	調整:外）ハケ目(内）ナデ　色調:外）暗褐色・内）明褐色	5 号住
第 12 図	36	1 次	5 号墳穴	ノシ	4.6	4.5	1.2	32.1	調整：外）ハケ目・内）ナデ　色調：外）茶褐色～暗褐色・内）茶褐色	5 号住
第 30 図	161	1 次	一括	ノシ	5.8	5.8	0.9		全体に磨滅　使用によるものか不明	6B5
第 42 図	234	2 次	一括	ノシ	3.8	5.1	0.8			B L2
第 55 図	274	2 次	6 号墳穴	勾玉	7.0	5.0	2.3	62.2	孔径：0.5 ～ 0.7	6 号住上面
第 69 図	367	4 次	一括	紡錘車	4.4	4.4	1.2	29.8	孔径：0.6	
第 123 図	517	5 次	3 号墳穴	ノシ	7.5	4.3	0.8			3 号住中層
第 123 図	518	5 次	3 号墳穴	ノシ	6.4	6.3	1.1			3 号住床
第 224 図	1021	7 次	18 号墳穴	土錘	2.1	3.25		23.7		18 号住
第 322 図	1490	7 次	49 号土坑	ノシ	5.6	5.3	0.9	33.8	外面：丹彩か	土坑 49